



義太夫節「市菊」
森 陸 人

明治二十三年十月十二日生
東京市京橋區大船町一三

三重縣は南國的情緒の豊かな處である。紀伊山脈や、鈴鹿山脈の重疊たる翠嶺を背負つて、澎湃たる太平洋や、藍を流したやうな伊勢海にのぞんでゐる。鈴鹿川や、雲出川、榑田川や宮川が流れて、其の流域には幾多由緒ある古蹟が散在してゐる。海岸線は灣曲して、また名勝古蹟も少なくない、そして白砂青松の風光も穏かで、繪の様な風景境であると共に、君みずや南の國の歌を偲ばしめるやうな溫柔郷である。こうした風光が、この土地で育つた人々の永遠の思ひ出であるやうに、この土地から醸されるムードは、またこの土地の人々の心に、胸にいつもひそんでゐる。三重縣に呱呱の聲をあげた我が森陸人氏の義太夫が、さうした南國的な熱情と懐しさを多分にもつてゐるのも、争はれない事實だらう。氏は大正四年青雲の志を抱いて帝都に出で、實社會の荒波と闘ひつゝ、精進した甲斐あつて、今では京橋に居を構へ、硝子卸小賣店として頗る隆盛を極めてゐる。氏が義太夫に手を染めたのは、大正九年で最初竹本幸昇師に就て手解きを受け、更に同十一年から鶴澤重太郎師に就て血の出るやうな修業を積んだものだ。大正十三年からは新に野澤吉郎師に就て其長を學び、現在では鶴澤重太郎師を師と仰ぎ、藝道に精進して倦む處がない。藝名を市菊と稱えて、五十義會に屬し、寺小屋、大廣間、忠六、下屋敷、辨慶等に豊かな榮光を見せられてゐる。謙讓の美德と創始の才とを有する温厚の君子人で、芝居、旅行等に趣味を持ち、利子夫人との間に夫佐榮嬢がある。

薩摩琵琶、國尊流

小田原國尊

明治二十四年二月十日生
東京市麹町區五番町一八

邦樂界の各部門は正に行き詰まらんとしてその新生面を拓くに汲々たる時、夙にその傾向を察知した氏は先づ自ら一派を創案して琵琶界に一大衝動を與へた。即ち國尊流薩摩琵琶はそれである。而も最近ラヂオにもよく放送して其の名を現はし、今や邦樂壇の一角に強固な基礎を築いて華々しい活動を續けてゐる。氏は舊島津藩士田原源之丞氏の三男として鹿兒島縣加世田町に生れた。幼少の頃、令兄が斯流の研究に没頭してゐたとき、それを聴き覚えてから興味を持ち、琵琶を手にするやうになつた。明治四十年上京の節、故吉水錦翁の門に入つて勵んだが、師亡き後は郷里に歸り、名人として名の高い兒玉天南師に師事して刻苦勉勵してゐた。而も頭腦の明晰な氏は、よくその奥技にまで窺知して、兩師の鞭達と、自己の發憤とは遂に一派を創案して、特異の藝風を現はし、薩摩華人の眞髓をこゝにも發揮したかの感があつた。聽て東京に上り、その盛華を公表したとき氏の藝風を慕ふものも多く、現在内務省に職を奉ずる傍ら、同生會、正絃會等の同人として重きをなしてゐるが、その他、北は奥州、南は遠く臺灣にまで演奏旅行を試み、何れの土地、何れの時にも、才氣煥發な氏の性格と藝風とを仰ぎ迎へられてゐる。其の後放送局からは、金剛石、橋大隊長、廣瀬中佐等勇壯な曲を獨特の彈法を以つて放送し、滿都のファンを熱狂せしめてゐる。斯くて氏の半世の努力が認められ、酬ひられたものと云つてよい。繪畫、園林に興味を持つ氏は家庭に錦子夫人の内助を受けて温い幸福に浸つてゐる。

長唄、唄「吉住小桃次」

相澤桃太郎

明治二十二年四月四日生
東京市本郷區西片町一〇

永久に感激に没り得る者こそ眞に幸福であらふ。而もそこに向上があり、進展があり、そして玉の如き藝術が産み出されるのである。我が吉住小桃次氏も長唄に感激を以つて精進してゐる一人である。従つて聲のみを傳ふるラヂオにも氏の放送は、ファンをして心から感動せしめずんば已まざる強い迫眞力を持つてゐる。長唄研精會の幹部として確乎たる地歩を有する氏は現住の地に生れたが、家事の都合上、斯道に入ることが出来ないで、惱ましい日を送つてゐた。然るに十六歳のとき漸く植木店派十三代目家元杵屋六左衛門師即ち現在の杵屋寒玉師の門弟となるに及んで、初めて茲に多年の宿望を達するに至つた。そして永い間押えられてゐた氏の藝才は却つて之に反撥して向上の一路を辿り鮮やかな進境を見せたことは云ふ迄もない。こうした氏の熱心な態度に師も心から感動して懇切な薫陶を惜しまなかつたので氏も之に感激して益々勵み、茲に兩々相俟つて技倆も一段の上達を示し、遂に杵屋六良治の名を許されるに至つた。斯くて獨立して斯界に活躍の第一歩を雄々しく踏み出した氏は歌舞伎座にある初舞臺を勤めて名聲を博し爾後中村六良治と改名して歌舞伎座、帝劇等に出演しながら、家元吉住小三郎師に就いて益々勵んでゐる。そして傍らラヂオ界にも進出し、努力健闘を續けて來た。趣味は古い長唄稽古本の蒐集に求めてそこにも亦氏の斯藝に對する熱誠を示してゐるが、其の他俳句にも思ひを寄せて風雅な趣をみせることもある。熱の人、努力の人、小桃次氏の至誠は體て天に通ずるときも、遠くはあるまい。

新内節、本派家元代理

「富士松富士太夫」

井上金太郎

明治三年六月九日生
東京市麻布區山元町五七

今年三月捻曲石童丸をラヂオに放送して、世の人の袖を絞らしめた富士松富士太夫氏は新内に本派家元代理として重きをなしてゐることはよく人の知るところである。父君は井上嘉藏と云ひ、横濱に在つて生糸運搬を業としてゐた。氏はその長男に生れたが早くから音曲を好み、十七歳の時から清元延志女師に就いて手解きを受け、又常磐津を文字網女史に親しく學んでゐた。明治二十五年頃當時横濱に居住してゐた富士松加賀太夫師に新内の稽古を奨められたのが動機で斯道に入ることになり、鶴賀鋪造氏に就いて稽古を始め、其の後鶴賀若美太夫師に就いて専ら稽古を勵んでゐた。若美太夫師は淨瑠璃物にも唄物にも名人を以つて稱せられてゐた程で、従つて氏の今日に至つたのも全くこの兩名人に負ふところが多くない。體て技の上進とともに山田貞一座に出演し、恩師加賀太夫師の正夢に勤めたのを初舞臺として、文樂、青柳を始め市内各寄席に出では趣のある藝を示し、その特異性を認められて非常な好評を博してゐた。大正六年四代目富士松富士太夫を襲名し、同十三年の十代目富士松加賀江師の歿後は本派家元代理頭取となり、一統の總帥として今日に至つてゐる。現在は研成社の同人として、燕枝、小南等と共に各所に出演しては奥深い藝を示して感銘を與へてゐるが又ラヂオにも數回放送して、いつも乍らファンを感動せしめてゐる。因に氏は書道繪畫等高尚な趣味に生き、折に觸れては優雅な筆を揮ふと云ふ。その家庭にあるしま子夫人は三代目加賀登女を名乗り共に斯道の達人である。



義太夫節『さくら』

問宮 與吉

明治十五年六月十五日生
東京市外千住中組一八九

義太夫は、筋合や内容と共に人情を語るものであるから、日本音楽のうちでも、最も人の心を掴む力が強い、事に、近松門左衛門の出現によつて、其の語りも一段と洗練され、義理と人情のもつれ、性格がもたらす悲惨な運命の末路、而もそれが愛によつて畫がかれてゐる語りは、義太夫でなければ味へない獨特の境地である。趣味として、長唄や清元を學び、意氣な、いなせな、乙なムードを味ふのも、決して悪いことではないが、滲い、穿つてゐる、義太夫の世界に入ること、入つた人ばかり許されることである。我が問宮與吉氏は、生命保険會社に勤務して、忙しい生活をつづけてゐるが、其の傍ら義太夫を趣味として求め、五人會々長として、素義界に君臨してゐる。氏は明治十五年六月十五日をもつて、東京市外の千住町に生れ、十八歳の時、鶴澤勇三氏について、義太夫の手解をうけたのであるが、其の後、前名豊竹巴太夫、富士太夫について研究し、精勵今日に及んでゐる。其の間三十年間を藝道の精進につとめ、人情物に、世話物に、時代ものに、いづれも達者な語りぶりをみせてゐる。十八番とも云ふべきものは、忠四、志度寺、城木屋、清玄、庵室、三日太平記等であつて、斯界の好評を博してゐる。氏はこの外、芝居、團扇等も好愛し、夫人瑞枝子さんは茶の湯、生花の師匠で、地之坊の自宅教授をしてゐる。また令嬢與枝さんは、両親の血を受けてまた藝術的才分が極めて豊かで、箏曲の教授をなしてゐる。一家學つて音曲に親しみ、家庭は圓滿を極めてゐる。

洋樂

中村 慶子

明治三十四年三月十一日生
東京市小石川區林町六四

我が樂壇稀に見る容姿端麗マドンナを想はせる樂人、中村女史は、ラヂオ樂壇にも無くてはならない存在である。夢の世、詩の國として世人から羨望視されてゐる北海道に、小樽の素封家中村慶三郎氏の次女に生れ、小樽高等小學校の二年まであの雄大な自然の風景に育まれてゐた。この間、藝才の赴くまゝに四歳のころから萩岡松韻師の直門福浦園枝女史に就いて山田流箏曲を習つてゐた。小樽高女二年修了後上京して麹町高等女學校に入學し、傍ら松韻師の直門となり、奥傳を許されるに至つた。大正六年女學校を卒業するや邦樂から洋樂へと急角度の展開を試み、立松房子女史に師事して聲樂の研究を始め、研鑽五ヶ年を経て、その腕大いに進み、大正十一年帝國劇場に於て第一回獨唱會を開いてその樂才を認められ、次いで更にベッオールド女史に就いて練習してゐたが、兼てから憧れの園米岡に富む米國樂界に接して自己修養の資に供し、幾多の新事實を得て歸朝したのは翌年五月であつた。爾來露西亞音樂家モージュン氏並に同夫人に就いて發聲法の研究を積み、傍ら山田耕作、近衛秀麿の兩氏から批判、指導を受けて倦まず勵んでゐる。斯くて永久に精進して行く女史の雄々しい姿をながめたとき、我が樂壇に今は誇りやかに咲いてゐる幾多の名花も體ては年とともに萎んで行くであらふことを考へ合せて、女史の如き眞摯な學徒の今少し多からんことを希望し、併せてこうした女史の努力に、より多くの酬と光とを捧げたい。

洋樂、ピアノ

納所 辨次郎

慶應元年九月二十五日生
東京市麻布區筈町一〇

明治から大正へと日本人の誰もが「桃太郎」「鶴龜」等を口にしながら大きくなつたと云つても過言ではない。そして廣く人口に膾炙されてゐる所謂唱歌の作曲をなし、我國音樂史に永久に燦としてその光を放つてゐる納所辨次郎氏を忘れることは出来ない。氏は明治の以前に江戸築地は舊幕臣納所重兵衛氏の四男に生れ、明治維新に依つて世は天震動地の大革命を加えられたと共に氏も亦新しい人として世に立たなければならなかつた。そこで明治の初期設立された音樂取調所に入り、唱歌を上眞行氏に、ピアノを瓜生しげ子女史に、そして管絃樂をソープレ氏に授けられて明治二十年卒業し、爾來學院に教鞭を取り傍ら作歌、作曲の研究に没頭して幾多の機軸を産み出すことに努めた。そして氏の勞作になる小學唱歌、大捷軍歌、雪河の勇士、もし〜龜よ等は就中著名なもので人のよく知るところであらふ。斯くて學院に在職中に二十有餘年、大正元年退職してからは森村男爵經營の森村小學校に講師を勤め、傍ら明治音樂會を創立して廣く音樂情操の扶植に盡して來た。今は樂壇へ送られた幾多の名士は何れも直接或は間接氏によつて音樂の手解きを受けたものと云つても過言ではなからふ。斯くて黎明期に在つた我が國音樂界に齎らした功績は實に偉大なものがあつた。これが聽て天聽に達し畏くも從六位勳六等を賜つたものである。近時氏は老體をも顧みず東京放送局に現はれ、自ら作曲した童謡を愛孫文子さん米子さん達に唱はせ自らはこれに伴奏して世の人達に昔にも劣らない感銘を與へてゐる。

義太夫節『竹本津賀太夫』

米谷 安藏

慶應元年四月二十四日生
東京市京橋區出雲町二



ラヂオに依つて産み出される文明は吾々に何を與え、何を教へんとするかは知らない。だが幾多放送する中でも日本人が作り出して、日本人に依つて發達した純日本藝術は流石に我々の心を捕えるものがある。就中竹本津賀太夫の義太夫節の放送にはフアンは齊しく傾聴して感激させられる。氏は大阪市西區久左衛門町に生れ、父母の誘導に依つて七歳のときから義太夫界に身を投げ入れた。即ち二代目竹本和佐太夫師（後の五代目竹本津賀太夫）の許に弟子入りして名門の流を汲まんことを期して故々として勵み、多くの儕輩にその才腕を誇る程になつた。斯くて十九歳の時、師に従つて上京し、二十一歳のとき初代鶴澤勇造師の門に就いて三味線の稽古をし、二十二歳のとき師が五代目竹本和佐太夫と稱へた。而も名聲は日師の名を承け繼ぐことになり三代目竹本和佐太夫と稱へた。而も名聲は日に高まり殊に吉原品川樓主人の愛顧を受けて品造と號し、四代目幡磨太夫一座に加はつてゐたこともあつた。病弱であつた氏は其の後三味線に變つて五代目鶴澤仲助を襲名し、下阪して文樂座に出たり、或は大隅太夫の預り弟子となつて浅六座にも出演して浪速の地に於いて斯界に有名を轟かせてゐたが三十五年恩師津賀太夫師の歿するや再び東京に歸つて六代目を襲名し、豊竹猿之助、鶴澤蟻風の兩師に合三味線を勤めて東都義太夫界を風靡してしまつた。尙氏の得意とする寺小屋、夕霧、仙臺萩、二十四孝、布引瀧等はラヂオにも舞臺でも演出して聽衆を熱狂させてゐる。



中井徳太郎

安政二年一月十日生
東京市京橋區築地三ノ一

凡ゆる方面に藝才を發揮してゐる徳壽氏は他藝をも會得して自らの筆曲に及ぼし優雅な音を放つて四圍にその名を知られてゐる。そして同好の士のために舞臺に立ち、或はラヂオに出演してファンに潤を與へ、後進の爲めには熱の人、情の人として渴仰されてゐる。氏は大阪市安堂寺町に生れ、昔曲に依つて人の世の恵光に浴して進まんと考へ、十歳の時から三絃を八橋流島田勾當師に就いて學び、翌年からは更に筆曲の稽古をも始めた。そして又十七歳の時から生田流を津山檢校師に師事して學び、傍ら山田流をも修めて勵んで行つたが體て技能の向上するに及んで大阪道頓堀に在つて門弟の養成に當つた。越えて五十五歳の時上京して東都筆曲界にその雄歩を進めることになつた。當時廣く人口に膾炙されて有名であつた「えんかいな節」は氏の特藝とするものだと、兩國立花亭に於てそれを演出して空前絶後の盛況を極めて熱狂する大衆から激賞された徳永里朝こそ實に氏であつた。氏は又その得習した技藝を廣く大衆化せんと苦心し、如何にせば斯藝の眞髓が民衆の手に把握されるか、そして如何にせば大衆がこうした純藝の裡に生き得るかを研究してゐる。こうして七十有餘歳の今日、尙勇氣あり勇氣ある氏の意氣に幾多の門弟が發憤して師の爲めに一門の名を擧げるべく努めてゐるが、以つて氏の人格を知るべきである。尙氏は長唄清元、常磐津、歌澤、義太夫、八雲等をも愛好して何れも一家をなし、多才多藝を示すものであるが、その斯界に寄與した貢獻は蓋し量り知れないものがあらふ。



平野峯三

明治二年八月六日生
東京市京橋區銀座二ノ三

由來利に敏ければ趣味に疎きが人の當である。手腕家として世に認められ、相當な成功を博した人の中にも一面人間味を缺いた冷たい性格を持つた者が多い。然るに東京で目抜き商店街銀座二丁目、人目をそそる堂々たる平野時計店の主人公は腕の人であると同時に、趣味の嗜み多い粹人實業家で評判の高い人である。氏は本名平野峯三、古い時計商で、正確低廉をモットーとする商業道徳を以つて店員一同の守るべき家憲とし、着實に發展の歩みを續けて來た信用篤い商店である。氏は國技の華と云はれる歌舞伎劇には從來深い趣味を持ち、各一流劇場の出し物の觀賞から購つた建識の芝居通で、若い時代には相當な犠牲をいとわず藝術の研究に没頭し、従つて芝居道の批評等にも、一朝一夕に文演書から受け入れた藝術批評家と異つて眞髓を穿つた一家の見を持つて居る。其當時修養して俳句にも達者な腕があり、淨瑠璃は今から十八九年前野澤語左衛門師に手解きを受け現在に至るまで同一師匠のもとに指導を受け、師匠の人格から表現される特技を學んで終始一貫、而もくせのない藝風に、氏が所屬する語樂會では侮るべからざる腕前を持つて居る。藝名は一弘、共十八番に數へる語り物は、布四、油屋、沼津、香掛、阿漕、安達等である。出身地は本郷區、美術の觀賞、圍碁、將棋、旅行等にも嗜みが多い、多才な實業家と云ふべきである。家庭はうた子夫人との間に一女があり、至極穩かなホームを營んで居る。

尺八、都山流『竹琳軒、玲山』
小池光義

明治二十六年七月十六日生
兵庫縣阪神沿線西灘村河原村

優雅な音に大きいアンピションを含ませて堅實な途を辿つてゐる意思の人、小池玲山氏は、大阪市東區北新町に生れ、將來建築界に飛躍せんと大阪市立都島工業學校に入學した。そしてその第一回の卒業生として世に出た氏は若いエンジニアとして幾多の工夫に伍して働く裡、いつからか心的にある不満を感じ初め、何かに依つてこの精神的慰藉を求めんとする折柄、日頃愛好してゐた尺八に思を馳せ餘暇を得ては精進するに怠らなかつた。明治四十二年一月、宗悅流尺八に入門して勵んでゐたが、二ヶ年餘りで都山流に轉じ、宗家都山師に就いて親しくその薫陶を受けることになつた。斯くて今迄陰閉されてゐた天稟の才が勃々として表はれ出て、大正二年六月には指南免狀を受けるに至つた。こゝに於て、陽春の光に浴した萌芽の如くに著しい成長速進を示し、五年三月法傳免許を受け、同七月準師範試験に、更に八年六月には師範試験にまで合格してしまつた。そして同十二年三月には大師範の列に連り、竹琳軒の冠稱を贈られたものであつた。その間にも大阪府警察部建築課長の要職に在つてよく奉公の誠を致し名課長として長上の信任を受け部下の敬慕の的となつてゐる。而も技に益々光を添え、師の恩に感激しては全國に演奏し、又ラヂオ等にも普及に努めてゐるがその藝風は殊に昨冬放送した「陽炎」の中にも窺はれてファンの歡呼に浴してゐる。激職に在つて尙こうした趣味に浸つてゐる氏は蓋し人生の最高峯に在るの幸福を味ひ、座談に妙を得て會ふ人をして快い感を抱かせてゐる。

筑前琵琶、吉田流『瑞蘭』
岡部静子

明治三十三年九月十六日生
東京市牛込區津久土町一二

鶴越、辨内侍、本能寺等と數度にわたつてラヂオに放送してゐる瑞蘭女史は、あの朗かな聲と錆びた藝とを以つて出演の度に人氣を呼び起し、今やラヂオ界に於ける女流琵琶師としては無くてはならない人となつてしまつた。女史は幼時から三絃、筆曲、清元、長唄、踊等と女藝一般に就いて親しんでゐたが、吉田流筑前琵琶の宗家源千秋師の彈奏を聞いて大に感動し、直ちにこれに手を染めることになつた。斯くて千秋師の令姉中村瑞章女史の門に入つて懸命に研鑽を積んでゐたが、其の後師の都合により、吉田流初代宗家吉田竹子師に弟子となり、懇篤な薫陶を受けるに及んで藝大いに進み、大正六年八月には瑞蘭の雅號を授けられるに至つた。而も尙奥技を極めるに専念し、傍ら同流の人々と共に斯道のために雄々しい氣を吐き、舞臺やラヂオに再三出演してゐるが、愈々技が深えて妙味を漂はし、讀賣新聞社の人氣投票には大多數で當選したものである。尙自ら瑞蘭會を興して之を主宰し、その創立披露會を大正十五年に報知講堂に開催して萬來の拍手を以つて終始し得た盛會を極めたもので、爾來同會の活躍は目覺しいものがあり、常に斯界の第一線に立つて其の發展の爲めに努力を續けて來てゐる。女藝一般に通ずる女史は漸く三十路の齡を重ねんとする若さを以つて、而もこうして男にも劣らない活躍は、蓋し同流に多大の功績を齎らすものとしてその前途を期待されてゐる。斯くて天才女流琵琶彈奏家としての女史の前途には燦然たる光輝が待ち受けてゐるものと云ふべきである。

東京中央放送局名譽技藝員
『尾上菊五郎』

寺島幸三

明治十八年九月二十六日生
東京市外淀橋町柏木八九六

氏は名花絢爛たる現代歌舞伎劇壇の王座を占めて居る人である。本名を寺島幸三と云ひ、一代の名優五代目尾上菊五郎丈の長男として、東京市京橋區新富町に呱呱の聲を揚げた。父君の血を汲んで、先天的に秀れたる藝術を備へ、而も幼時から父君の膝下に於いて其の薫陶を受けた。幼名を丑之助と呼び、當時早くも父と共に舞臺に出演して居たが、長ずるに及んで其天才的萌芽は愈々發揮されて早くも五代目に髣髴たる演技を示し、人をして驚嘆せしめたものだ。而も性來藝術的良心の熾烈なる氏は、其全魂を藝道に打ち込んで懸命の努力を勵んだ。明治十六年父君の歿後歌舞伎座に於て曾我の對面に令兄梅幸丈の十郎と共に五郎時致に扮して啼れて六代目を相續披露した。當時出藍の技を以て既に劇壇を風靡し、爾來愈々進境を示して遂に今日の地位を獲得するに至つた。就中其の所作事は古今獨歩を以て稱せられ、爲に其の風を慕ふて門下に教を受くる者が極めて多い。演技の自由無礙なる行くとして不可なきうちに、最も人氣を博した當り藝としては土蜘蛛、鼠小僧、め組辰五郎、身替座禪、道成寺、鏡獅子、棒縛り、髮結新三、保名等がある。曩に東京中央放送局名譽技藝員に推され、今や音羽屋の名は所謂三歳の童子も之を知る程に人口に膾炙し、先頃其藝術上の貢獻を認められて勳五等綵綬章を賜り、藝園の人として空前の名譽を擡つた。氏はスポーツに興味多く、野球をよくし、狩獵を好む事は人の知る所で、長男誠三君は藝名を尾上井之助と云ひ出藍の譽が高い。

義太夫節『喜樂』

駒井伊之助

明治八年五月十三日生
大阪市東區内安堂寺町二ノ三四

喜樂の藝名は大坂義太夫界に在つては燦として輝き渡り、堅實な藝風を以つて謳はれてゐる。世は封建の時代から帝政の明治新政府に變り我が國民は幸福の光に歡喜して未だその餘韻の醒めやらぬ時に大阪に生れ、當時嚴父は養物製造業を営んでゐたが氏もそうした弊氣の裡に人となつた。斯くて人の世に種々の事變に遭遇し乍らも其の度毎に意思がより堅固味を加ふるばかりであつた。斯くて二十五歳の時、即ち明治三十三年に舶來皮革毛織物の輸入商を創業して雄々しく大阪財界に飛躍することになつた。こゝに於て氏の剛直なる意思と熱誠なる希望は一退二進、二退五進の繁榮を示して着實なる進展を遂げるに至つた。斯くて今や内地は勿論、遠く滿鮮にまで手を延ばして取引を營みその一ヶ年の輸入總額實に三十餘萬圓の高きにのぼると云ふ。蓋し氏の努力の結晶たるや偉大なものがある。こうした前半世の實に血のにじむやうな努力は老後の氏を自ら好む義太夫道に悠々自適せしめるに至つた。即ち二十歳の頃濱右衛門氏に就いて斯藝の手解きを受けたが其の後家業の繁榮に致す努力の餘暇を利しては司大夫、富太夫、品太夫、叶太夫等の諸師に師事して研鑽を重ねて行つた。家業は既以後顧の憂のなくなつてより更に氣の悠長たるものがあり従つて、その藝は高速度の進境を示し、今や北聲會、東滿會、日本素人義太夫大會、土佐會等に關係し幹事として重きを加えてゐる。蓋し幸運を贏ち得た人と云へやう。家庭には三味線の名手ゆき子令夫人との間に愛嬢まさ子女史がある。



大塚潤一郎

洋樂、ハルモニカ
明治三十六年六月四日生
神奈川県東田町一

現代文明人士の生活上必要缺く可からざるものとされて居るもの、一である音樂の中に、ハルモニカ位使用法簡便にして且複雑な妙音を出し得るものは他に無いであらう。從來娯樂用の樂器として一般に愛好されて居たが、近來其の藝術的價値を認められて頓に聲價を高め、純然たる音樂の一派を形成して次第に躍進的發達を遂げて居る。従つて斯道に依つて一家を成して居る人々も甚だ尠く無い。大塚潤一郎氏も其の一人として擧げらる可き名手である。百花綵爛の春の野に翻翾として胡蝶の戯れる姿を彷彿たらしめるが如き演奏曲に、將た輕快なる行進曲に其の妙技を現はす時は聴く者皆恍惚たらしめられるのである。氏は大東京の中心地日本橋の一角に生れた。此地は四六時中間斷無く自然の焦燥曲を奏じて居る繁華な處である。斯る環境裡に育つた氏が同調律を有するハルモニカに天才的技能を有するに至つたのも誠に宜なる哉とされるのである。夙に赤坂中學を経て明治法科専門學校に入學し、卒業後更に樂學專攻を志し目下明治藥學校に在學中である。ハルモニカ界への進出は赤坂中學在學中以來で、當時既に生徒會合の折々には推されてハルモニカを吹奏し大喝采を博して自ら得意となつて居たものだ。明治法科専門學校在學當時は明治大學在校生中同好の志を以つて組織された、明治大學ハルモニカ部に入つて研究を積み、卒業後は専ら明治ハルモニカオーケストラ顧問として重きをなして居る。先頃來ラヂオ放送を試みた事も東京四回名古屋五回其他各一回の多數に上り、其都度多大な好評を博して居る將來有爲の青年である。



吉田三平

義太夫節『三芳』
明治十八年一月十四日生
東京市京橋區采女町六

北上山脈と奥羽山脈につままれた盛岡市は、平民宰相原敬を生んだところである。そして南部富士の岩手山や、北上川、雫石川の清流を背景としたこの土地に、かの薄命の詩人啄木も産聲を擧げたのであつた。由来盛岡の人は、この二人の上に見るやうに、燃ゆるが如き熱情に理智を盛つた通有性を持つてゐる。我が吉田三平氏も亦盛岡に呱呱の聲を擧げた人で、盛岡人の性格が躍如としてゐる。性來血の氣の多い氏が、こうした土地に永く止まることは、到底氏の忍び得る處ではなかつた。遂に年少十八歳の時、前途に輝く希望を抱いて遙々帝都に出で、義兄の許に寄寓して土木建築界に最初の一步を踏出したのであつた。かくて業績の見るべきものもあつたが、大正九年翻然として悟る處あり、新に仕出し料理業を営み、日夜奮闘の結果、今日では一路幸運を辿つてゐる。氏が義太夫に興味を持つやうになつたのは、十六歳の時で、初め郷里に於て指導を受けぬが、後竹本都賀大夫師を師と仰ぎ、日夜之が研究に心を砕いてゐる。氏は現に五十歳の年月、義太夫に精進した丈けあつて、その藝は頗る堂に入つたものだ。辨慶、寺小屋、安達ヶ原、合邦、岸姫等に獨特の樂才を見せ、旅行に興味を持つてゐる。家庭にはこまつ子夫人との間に、錦城商業在學中の長男政男君外四女があり、長女は大妻高女出身である。

東京中央放送局名譽技藝員
清元節「清元喜久太夫」

狩野駒之助

明治十五年六月二日生
東京市麴町區平河町五ノ二

現に清元界の香宿として又東京中央放送局名譽技藝員として重きを加えてゐる喜久太夫氏は、技藝盛な聲團氣の裡に名古屋市西區八坂町三六〇の袋物商に生れた。その十六歳の頃から藝道にわけ入り、初め常磐津を岸澤式右の門弟式代に就いて學び、後常磐津宇加太夫の妻岸澤佐登和女史に師事し乍ら、公開の席にも出てゐた。更にその二十歳のころから清元の名入齊兵衛師の門弟齊八に就いて「明島」夕立」の二段を極めたものだ。越えて明治三十六年樺太の雄圖を抱いて上京し、富士松忠進師に就いて新内をも習得するに至つた。そして富士松露太夫と名のつて淺草國華座に「蘭蝶」を演じて初舞臺を踏み、頗る人氣を博してゐたが、幾許もなくして再び清元道に復歸して清元彌生太夫に學び、更に家元延壽太夫に師事して苦學な修業を積んでいつた。そして技の上達すると共に「三番叟」を始めとして吉野山、三千歳等を歌舞伎座其の他に演じて異數の人氣を博し、年と共に次第にその名を高めて行つた。かくて大正十一年十二月梅吉師とともに先き氏は全國各地に演奏旅行を試み、後進の指導誘掖に力むると共に、家元梅吉師の爲にも忠勤を披んで、斯道の發達に貢獻する處が尠くない。稀に見る温厚の君子人で、一面感激の涙を惜しまぬ情の人でもある。趣味には繪畫、袋物、網打等を數え閑日月を樂んでゐる。家庭に在る令夫人は四代目延壽太夫師の令孫で斯界にその有名を譲はれてゐる。

東京中央放送局名譽技藝員

「中村歌右衛門」

山本榮次郎

慶應元年十二月二十九日生
東京府下千駄ヶ谷町八九一

劇界の黄金時代と謳はれた團菊左鼎立の時代去つて後は、我が中村歌右衛門氏が獨り明星の如き輝きを以て明かな存在を示してゐる。氏は本名を山本榮次郎と云ひ、慶應元年東京市向島請地に生れた。純情の人である。梅檀は雙葉より香しく、持つて生れた不世出の藝才は、幼にして早くも頭脱の閃きを見せ、名優四世中村芝翫氏の認むる所となり入つて、その養嗣子となつた。爾來養父の許に修養を勵み、十一歳の時兒太郎と稱して甲州三井座に於て初舞臺を踏み、期せずして驚異的となつた。次いで十六歳の時福助と改め亦二十二歳にして名題に昇進した。其後氏の藝風は次第に進境を見せ、明治三十四年歌舞伎座に於いて芝翫を襲名披露した。其獨自の神技に福助芝翫時代を通じて天下の人氣は殆んど一身に蒐つた。明治四十四年五世中村歌右衛門を襲名し、歌舞伎座に據つて遂に同座の技藝委員長に擧げられた。其後不幸鉛毒に冒され、舞臺に於ける演技に尠からぬ不自由を感じたが、而も年來圓熟し來つた至藝は依然藝界の第一人者を以て稱され、其の當り役に淀君、先代萩の政岡、春日局、八重垣姫、勾當内侍、入國の家康等がある。就中淀君は丈の最も得意とする所である。成駒屋の名を稱し、定紋は祇園守、俳名を魁玉と呼んで居る。氏は演技の上に於て卓出するのみならず、よく頭梁の器を備へ、夙に東京俳優組合の頭取に擧げられて聲望を聚めて居る。亦東京中央放送局名譽技藝員に推され、盡瘁する處が極めて多い、趣味は書畫骨董盆裁等である。



民謡

三上久子

明治四年五月生
東京市神田區北神保町九

民謡程多くの人々に對し可及的な親しみを感ぜしむるものは誠に尠いであらふ。近來民謡の普及は實に素晴らしいもので、全國如何なる山間僻地に於ても之を耳にする事が出来る程である。新舊の相違こそあれ何れも人世の機微を穿ち甚だ捨て難いもので、中でも民謡の代表的なものとしては、最も人口に膾炙された追分節に止を指す。これは元仲仙道海間山籠追分宿を中心として發達したもので、當時街道を上下する客を馬の背に乗せた馬子達に依つて吹ひ出されたを濫觴とすると云ふが、現在は各地に追分節と稱するものがあつて其真相は詳で無い。然しながら各時代を通じて一般人士に愛唱された點は他に比類が無い。現代に於て追分節の人名手と稱する人々も多いが、中でも三上久子氏は其中の第一人者であらふ。氏は露と美人とおぼこ節に依つて名高い秋田縣の産である。幼少の頃より藝才豊かで當時既に周囲の人々に其天分を認められ、折々は得意の玉盤に玉を轉がす如き妙調を以つて數々の民謡を歌ひ聴者を感嘆せしめたものだ。正式に師に就いたのは四十二歳の時で、其師は北海道の人前川新月氏であつた。斯の如く後年の入門の事として一度我流に固められた藝道は容易に正道に戻らなかつたが、困苦十年の努力は遂に報ひられて明治四十三年教師の免許を得るに至つた。目下は現住所に在つて子弟を養成する傍時折ラヂオ放送も試み、其妙調にファンを恍惚たらしめて居る。家庭は長男國太郎君と長女ひで子さんの二子でひで子さんは目下氏の後繼たるべく折角追分節を練習中である。

長唄、唄「松島庄三郎」

小野義次郎

明治二十二年九月十九日生
東京市下谷區龍泉寺町五二

長唄界一方の名門の後を承けて嚴然とその勢力を持つ松島庄三郎師は、杵屋、望月の名流に伍してラヂオの世界に進出してゐる。今年七月にも汐波を放送して磯の風勢に思を寄せファンの好評を博したものであつた。日本橋區松島町に生れた氏は、斯藝の上品な奥床しさに魅せられて長唄の世界へ身を投じたのは、氏が二十六歳の壯年の頃である。大正三年十月芳村孝次郎師の門に入つて正規の習練を勵むだが、不斷の努力と忍苦の精進とで體て氏を次第に上達へと導いて行つたことは云ふ迄もない。加之、氏は天性の美聲により一層藝に光彩を添へるものとして師の賞讃を博し、入門の翌四年四月には早くも師に技能を認められて孝一郎の雅號を授けられた。究めても尙ほ倦くことを知らない氏は益々藝道に魂を打ち込んで琢磨の功を勵み、更に同七年四月より新に松島庄十郎師に師事して同時に松島庄三郎の名を許さるゝに至つた。斯くて業を勵む傍ら、市川左團次の座附となつて新橋演舞場、本郷座、松竹座等に出演して大衆の人氣を博し、現に松竹座に勤め、傍ら芙蓉會、紫好會、松島會、新星會等に屬して相互研磨に怠りなく、兼て斯流の普及及發達に努めてゐる。氏は古曲を最も愛好し、唄は堂に入つた魅力を持つてゐると云ふ。寫眞、盆裁、鳥類の飼育等の豊かな趣味に玲瓏たる玉の如き資質を偲ばしめ、又好んで小唄を口ずさるゝでゐる。家庭ではたか子令夫人と共に琴瑟相和して幸福な生活を営んでゐる。

生田流、中島

中島利之

明治二十九年三月二十一日生 東京市麹町區富士見町四ノ一

麗しの都、京都に生を享けた氏は、その天才をよく箏曲道に進めたこと... 蓋し應はしいものがある。幼時から藝能に長けてゐた氏は、京都御所の...

東京中央放送局名譽技藝員 守田勘彌

守田好作

明治十八年十月十八日生 東京市下谷區上根岸一八九

劇界の先覺者として將亦梨園の名優として、夙に盛名を轟はれて居る守田勘彌氏は、本名を守田好作と云ひ、先代守田勘彌氏の三男である。...

能樂、實生流仕手方

野口政吉

明治十二年十一月七日生 東京市下谷區西黒門町二三

今年九月、謡曲蟬丸をラヂオに放送してその逆髪を演出した野口氏は至るところに大衆の支持を受け、非常な人気を博してゐる。氏の祖先は代々名古屋に在つて尾張藩に能役者として仕えて来た家柄で初代を大野時太郎と云ひ、祖父の時から野口姓に改めた。幼時既に父を喪ひ、五六歳の頃から祖父正兵衛師に能樂の手解きを受け、後十四歳のときから宗家實生九郎師の門弟として厳格な教授を受けることになつた。...

常磐津師「常磐津松尾太夫」

福田兼吉

明治八年九月七日生 東京府下瀧野川町西ヶ原二三

常磐津林中師門下の逸足として斯界にその名聲を馳せてゐる松尾太夫氏は、最近東京から「子寶三番叟」を放送して非常な名聲を高めてゐる。斯くてラヂオの世界にも活躍する氏は神奈川縣逗子に生れて、幼少の頃東京市京橋區具足町の金箔業、福田家の養嗣子となつた。性来蒲柳の質であつた氏は何か唄をやれば保健の一助にもなるものと考へて常磐津道に入つたが、波めども盡きない興味を覚え初める頃二十一歳の時から家業に従事しなればならぬ斯道を一時断念するを餘儀なくされた。...



尺八、琴古流「琴童」
三浦純一

明治八年十二月十八日生
東京市小石川區鶴籠町二三六

尺八界の元勳として普ねくその名を稱えられてゐる琴童師は、琴古流に重鎮として尊崇されてゐるが、又同時にその奥床しいそして錆びた齒をラヂオにも放送して尺八大衆を熱狂せしめてゐる。嚴父は當時陸軍第二病院長として知られた三浦義雄氏でその長男として東京市神田區末廣町に生れた。長じて海城中學に入り、卒えて帝大に進まんとし準備してゐたが偶々病魔の襲ふところとなり、醫師の奨めにより断然學業を捨て、尺八界に入り、日頃憧憬してゐたものを實現せしむるに力を致すことになつた。明治三十年先代荒木古童師に師事して本曲の研究に没頭してゐたがやがて琴童の雅號を授けられて技の進展を示したものだ。傍ら上原六四郎師に就いて譜點法の研究をなし、琴古流の奥技にまで通じて愈々斯界にその頭角を現はして來た。斯くて門弟を抱えて指導に當り、幾多の有材を出してゐるが、水野呂童師などは氏の高弟である。尙氏の主宰する琴古會は大正元年創立してより日に増し優勢を加えて來てゐるが又レツロ會をも興した等、斯界に齎した貢獻は實に大なるものがある。氏の初舞臺は明治四十二年のころ東京音楽學校に於て尺八本曲「青柳」「夕ぐれ」等を荒木竹翁師と共に演じた時に始まり、爾來大喝采の裡に各所に演奏してゐる。明治初年琴古流尺八の一時衰頹に傾かんとしてゐたとき断然それを挽回して偉業を完成した氏は蓋し千載に列して尙消えるものではない。趣味としては團扇をよくし、大弓にも師範の免狀を持つてゐる。尙製管にもたづさわつてゐる。

高峰琵琶「筑瑠」

唐澤なを子

明治三十八年十二月十三日生
東京市本郷區湯島町一ノ二

高峰筑瑠師の女流門下の雄として、將又女流琵琶界での新進演奏家として噴々たる有名を馳せてゐる筑瑠女史は、時々マイクrohンの前にも端麗な容姿を現はして勇壯な悲曲を放送して世人に感激を興えてゐる。群馬縣に生を享けた女史は、小學校卒業後縣立高崎女學校に入學したが家庭の都合で中途退學して上京し、以後は専ら斯道に精進すべく宗家筑瑠師の門下にその薰陶を受けることになつた。而も小學校在學中に早くも琵琶一般に通じてゐた程の天才を以つて益々才腕を磨いて行つたから、忽ちその名を認められ、師の信託を受けて入門後僅か一ケ年餘りで教師免許狀を授けられ、神田區松住町に教授所を設けて門弟の指導に當つた。時に大正十一年、女史餘僅かに十七歳、將に開かんとする蕾は内に絶大の生氣を蓄えて徐ろに開花の期を待つた貌であつた。而も期忽ち熟して同年七月明治座に於て栗島すみ子其の他の映畫女優が演じた「法の唄」に請はれて處女演奏を試み、鮮やかな片鱗をみせて廣く賞讃されたものであつた。こうして大成功を収めて以來各地に出演し又著音機レコードも吹きこみ、或はラヂオにと目覺ましい活躍を續けてゐる。今やレコードになつたもの、主なるものは「夜討曾我」「南部坂」「扇的」「川中島」「常陸丸」等で、又ラヂオには「南部坂」「兒島高德」「吉野山」他數曲で、その藝風はあまねく人口に膾炙されてゐる。尙こうした悲曲の裡に女史の趣味性を窺はれるものと云つてよい。而も未だ幾多の春秋に富む女史の前途は蓋し刮目さるべきであらふ。



義太夫節「むつみ」
星操

明治二十八年八月十日生
東京市下谷區初音町三ノ一八

どんな語り物でも、愛の心を失つてはならないと、豊澤廣助が云つてゐる言葉は、淨瑠璃の眞實の精神を表したものである。即ちこの心持が腹にないと、泣くことも、笑ふことも、怒ることも、また喜ぶことも、口先の眞似事となつてしまつて、語物が情合の乏しい、冷たいものになつてしまふからである。そして、折角作者が愛の心をこめて作り上げたものが、語手が其の氣持にならないために、人情の美はしい處が表現されないでしまふのである。だから義太夫は技巧を捨て、ほんとの心で意味を語り、筋道を語ると共に、情合を語るものである。女のセンチブルな情が、ここに觸れて、呂昇の様な名人が女義太夫のために萬丈の氣焔を吐くのも、こうしたことではあるまいか。とまれ、むつみの藝名をもつて知られてゐる我が星操女史は、おこん貢油屋十人斬の段とか、おその半七酒屋の段とかの人情物、艶物を得意としてゐるのである。なほ十八番とも云ふべきものに太十、寺小屋、柳、松玉屋敷等もある。女史は東京市芝區に生れ、十年前故竹本播糸太夫に義太夫の手解をうけ、其の後昭和三年竹本播子氏について精勵今日に及んでゐる。これより先即ち大正九年、辯護士、法學士の星襄氏の許に嫁ぎ、才色兼備の夫人として、其の名を譲はれてゐる。女史はまた長唄をよくし、これにも、洗練された腕をみせてゐるが、殊に琵琶には並ならぬ進境で、水鏡をえてゐると云ふ。かうして、琵琶に、長唄に、いそしんでゐる女史の努力は、また義太夫に一段の冴を加へて益々むつみの名を高めてゐる。

洋樂

奥山貞吉

明治二十年三月二十五日生
東京府大井町瀧王寺四五五

東京放送局の名物としてJ.O.A.K.オーケストラがあることは周知のことであるが、その指揮者としての奥山貞吉氏はこの一團を率い、よくファンを意を汲んで、好評を博してゐる。刺激の多い東京に生れた氏は、早くから音楽を好み、ヴァイオリン其他の樂器を嗜んでゐた。氏十七歳のとき日本樂器協會に入つてバイオリンの積古を始めたが、更に明治四十年、東京音楽學校分教場に入つて専ら音楽研究に没頭した。其の後、日本には珍らしい管絃樂に着眼して四十五年東京音楽學校に入り、オーケストラの研究を始めたが、これが氏の今日の大をなす所以のものだつた。其の後帝國ホテル音楽部に入つた氏は、東洋汽船會社に於て客船に音楽部を設置することになり、この珍奇な企てに參劃して地洋丸に乗込むことになつた。そして勤続すること約七年、この間航海中偶々大音楽家の乗船したときは努めて教を請ひ、新智識の吸収に細心の注意を拂つてゐた。其の後奥山昌平氏の名代として帝國劇場、淺草等に於て歌劇に出演してゐたが、暫らくしてから帝國ホテル音楽部に選つてピアノを擔當してゐた。次いでラヂオが輸入されて、放送局にオーケストラが設置されるや、入つてタクトを揮ふことになつて今日に至つてゐる。今や氏は名指揮者として、オーケストラの各部門に通じ、斯界の元老として世に名を馳せてゐる。そして主に古典的な、莊嚴味を負つた曲を愛好し、殊にインディアン哀傷曲等をその最たるものとし、昨夏もラヂオに放送した程である。

義太夫節『豊竹駒太夫』

辻田 萬藏

明治十五年二月二十日生
大阪市南区西清水町四八

大阪義太夫界にその重鎮として赫々たる藝名を馳せてゐる駒太夫師は、「近頃河原達引」其の他をラヂオに放送して、より多くの人にその藝風を敬慕されてゐる。氏は大阪島之内に生れたが、二歳のころ不幸失明して、義太夫界に身を投げ入れた。而も僅か六歳のときには三代目富太夫、後の六代目駒太夫師の門に入り、小富太夫と名乗つて稽古を始めたが、翌年師が上京したため野澤多八師に預けられて業を勵んでゐた。そして九歳のとき初めて旅興行の途に上り、津島太夫、い太夫の兩氏等と共に出張地方に赴き、非常な天才兒の名を轟はれたものである。斯くて麒麟兒辻田氏は愈々奥技を極めて行くべく、十歳の時豊澤松太郎師に就て教を受けることになつたが、十五歳の時駒太夫師に呼び寄せられて上京し、看板で興行すること一年餘り、體て又大阪に歸り文樂座に入り、同時に豊竹呂太夫の預弟子となつて血の出る思ひで研究した。明治三十四年五月努力は酬ひられて四代目富太夫を名乗り、藝の進境を認められてゐたが、其の後竹本津太夫、越路太夫等の師匠に轉々しなければならなかつた氏の勞苦は想像に餘りあることであらふ。だが反面各師匠の特徴をばつきりと掴んで自己の藝にと咀嚼することが出来たもので、従つて氏の藝風は、斯道の奥妙をも極めたものとして幾多の賞讃を博してゐる。七代目駒太夫と改名したのは大正三年六月「鈴ヶ森」を語つたときで、爾來文樂座の花形として出勤して今日に及んでゐる。氏は艶物を得意とし、「三勝酒屋」「紙治」「明鳥」等は最も愛好する曲である。

尺八、都山流『歌山』

小竹 作次郎

明治二十六年六月一日生
東京市本郷區湯島新花町六八

座敷にゐながら、月夜的美觀をよく彷彿せしめるものは、ラヂオの世界にのみ限られてゐやう。而もあの神秘的な靜寂な湖上の月を、幽玄な尺八の音に漂はせて巧みに放送したのは小竹歌山氏である。氏は福井縣足羽郡麻生津村に伍作氏の長男として生れ、早くから音曲に大なる趣味を持ち、十四五歳のころには尺八の獨習を始めたもので、大正二年の頃から廣島市の中村晃山師の門に入つて正則に修業することにした。斯くてその技藝の上に見るべきものがあり、三年の後鴻號と稱したが、京都の大蟬鴻山師に師事し研精に怠ることなく、その技を磨いて行つた。體て努力が酬ひられて漸次上昇し、大正十年二月準師範試験に合格して歌山の雅號を授けられるに至つた。兼てから宗家の門に入らんと願つてゐたが、こゝに至つて年來の宿望容れられ、宗家中尾都山師に親しく教を受けることを得て、大正十四年九月に師範に昇格した。斯くて、完全に尺八界の人となつて廻れ出た氏は、當時東歌會を組織して自ら其の主筆者となり、自己の樂才を磨くと共に、門人子弟の指導に當つてゐる。氏の處女吹奏は、大正九年京都岡崎公園公會堂に於て、明治松竹梅及びさむしろの二曲を吹奏したときで、以來各所の舞臺や、ラヂオに出演しては名聲を博してゐる。尙大正十一年春に、東京都山流幹部會が組織せられるや、推されて幹事となり、同流のため獻身の努力を續けて來た。體て錦を着て、郷里福井の僻村に赴く氏の得意は蓋し半生の苦の賜であらふ。因に趣味として撞球をよくし、奇才を謳はれてゐる。

東京中央放送局名譽技藝員
長唄、唄『吉住小三藏』

足立 勝藏

明治十年十月三十日生
東京市四谷區新宿一ノ三九

吉住小三郎門下の逸材で而も吉住派の重鎮として知られてゐる人に吉住小三藏氏がある。氏は本名を足立勝藏と云ひ、東京市赤坂區一ツ木町に生れた生粹の江戸ッ兒である。氏は夙に將來國家の干城として君國に奉公せんとし、弱かに雄心勃勃たるものがあつたが、或る事情のために自己の宿志を離へすべく餘儀なくせられた。そして近親の奨めにより長唄界に雄飛すべく堅く決心し、吉住小三郎師の門に學んだのは、氏が年少十五歳の時であつた。當時師は十六歳、氏と一つ違ひの年上であつたが、而も四代目小三郎を襲名してから僅かに二年、燃えるやうな意氣を以て雄々しくも斯道にその第一歩を進めた初期であつた。年を同じうし、而かも目的を一にする此の可憐な師弟は互に相導き、相扶けて、藝道の堂奥に研進し、年と共に著しい進境を見るに至つた。そして二ヶ年後には早くも小三藏の名を許されて門弟の指導に當ると共に、恩師の勲業を扶けて行つた。かくて明治三十五年長唄研精會を興すに及んで直にその帷幕に參じ、現にその幹部として、又勝精會の長として、將又長唄協會の常任評議員として斯道の普及と大和藝術の鼓吹に向つて健全なる歩みを續けてゐる。曩に放送局の設置せらるゝや東京中央放送局の名譽技藝員に推薦せられ、屢々マイクrophonの前にその妙技を揮ひ、その深い造詣を垂れて幾多の同好の士に深い印象と感銘を與へてゐる。そして今日の聲望は蓋しその勞に酬ひられたものと云ふべきである。園芸、盆栽の趣味に生きる氏の家庭には藝名吉住はる夫人がある。

河東節、家元『山彦小文治』

伊東 竹男

東京市日本橋區品川町八

嘗て河東節と一中節との掛合をラヂオに放送して人氣を博した山彦小文治氏は、河東節に家元として斯界に重きをなしてゐる。そしてあまりに頽廢してゐた斯界の現状をみたとき奮然立つてその興隆に努めて止まない氏は、第十一世の家元として有名を馳せてゐた山彦秀翁師の實子として生れ、嚴父の薫陶を受け乍ら、傍ら漢學、茶道、書道を淺草三社神社宮司矢野氏に學び、更に鈴木華邦畫伯に師事して繪畫及び俳諧の指導を受けた。こうして人格の教養を積み、將來の飛躍の基礎を作り、體て二十三歳のとき「常陸帯花の柵」を初演奏して天稟の才を認められたが、其の後一時實業界に活動し始めた。だが矢張り本道の幽遠なのに感激して復び斯道に歸つて藝才を磨くことになつた。大正八年四月秀翁師他界の後を繼いで第十二世家元として山彦小文治を名乗り、その襲名披露會を翌大正九年五月五日日本橋俱樂部に開き「翁三番叟」及び河東一中合調掛合源氏十二段を演奏して天晴れ家元の權威貫録を現はしたものだ。元來この河東節は江戸半太夫の高弟十寸見河東が心血を注いで創始したもので、享保實曆の頃に隆盛を極めたが爾來年を逐ふて衰運に傾き維新後は僅かにその餘息を保つに過ぎなかつた。而も光輝ある斯流を失ふは獨り河東節のみならず邦樂史上の痛嘆事である。このとき氏は専ら祖業を守つて其の復活を期し目覺しい活動を續けたのであつた。その勞が報ひられ今やよく悲運を挽回し、ラヂオに舞臺にその隆盛な姿を現はして來たことは、我が邦藝術の爲めに祝福すべきことである。

義太夫節

鹽田 佐一

明治九年五月七日生
大阪 驛前

大阪中央放送局から義太夫舞子を放送して素人義太夫界に萬丈の氣をはいた鹽田氏は、その鮮かな藝味に同好の士から驚歎されてゐる。氏の生れた廣島縣御調郡三原町西町は、瀬戸内海をひかえた絶景の地とて點在する幾多の島嶼の間を縫つて波の間に、白帆を漂はす詩情に幼い心を温め乍ら氏は人となつた。饒て十一歳のとき慈父に作はれて出郷し、遠大の雄圖を大阪の空に馳せて上り、梅田驛前に足を止めてすし屋を開業し柳屋の暖簾をかけた。斯くて堅い信念と熱誠な努力とは、日に榮え、月に隆り、遂に家運を磐石の堅き基礎の上に置くことが出来た。柔剣道の達人を父に持つ氏の祖先はその昔地方の豪族であつたとか、そして未だに嚴格な古風な趣はその家風にも傳えられてゐるが、氏は實にこうした山積ある豪家を再興したものとて永く立志傳中に生きるものと云ふべきである。この間に氏は義太夫道にわけ入り、明治三十年頃手解かれてより専ら竹本大島太夫師に師事して荊蕀の途を辿つて勵んで来た。そして現在は遠州について研究して技の見るべきものがあり、世人に幾多の感動を興えて止まない。斯くて素人義太夫界に一方の驍將として公の舞臺にも立つてゐる。明日のラヂオ界には更に目覚ましい活躍をなすものであらふ。家庭には夫人せい子女史があり一男三女を興えられて長男龍太郎氏は神戸高商出身の俊才で日下日本生命の幹部であり、長女幸子女史は發明家前鐵道技師井本氏に嫁し、三女千代子女史は竹原株式會社支配人に嫁して何れも社會の第一線に活躍してゐる。



能樂、觀世流仕手方

稲田 貞治

明治十九年六月九日生
大阪市南區大和町九

藝術と云へども時を無視する時には、やがてアナクロニズムの淵に投げ込まなければならぬ。保存主義の鐵城に立籠る演能藝術も、其の明日を欲するならば、今日の時潮を知り明日ある新人の支持をまたなければならぬ。新人のナンパーワンと云はれる我が稲田貞治氏の歩みゆく一歩こそ明日への道であらう。氏は大阪島之内大寶寺町仲の町の紙商稲田市之助氏の長男に生れ、祖父も父君も能樂を好み亦た上手であつた。されば氏も亦幼時より斯道に興味を覺え、嚴父の師新西市兵衛氏に觀世流能樂の手解きをうけたのは氏が八歳の時であつた。後同門の先代神戸治助氏に教授され更に二十一歳の時生一左兵衛氏の直門となつて、専心斯道に精進し、遂に認められて生一氏より職分に取立てられ、舞臺に勤める傍ら門下生の指導に當る様になつたのは氏が二十六歳の時であつた。爾來健闘して遂に生一會の幹部、錦風會の同人、三春會の主宰者となり、斯界に堅實な歩みを續けてゐる。其の間、大正六年上京して七年より八年の春にかけて梅若萬三郎氏に指導を受けた事は氏が今日に大なる影響をもたらしてゐる。氏が仕手としての初舞臺は明治四十二年七月靜岡縣三保の松原舞臺開きの際「羽衣」の仕手を勤めた時で爾來「鉢の木」「俊寛」「翁」「安宅」「望月」「石橋」等を勤めて其技は斯界に定評がある。「井筒」「阿清」「山姥」「神法師」は能として「迎小町」「盛久」「俊寛」は謡として好んでゐる趣味は繪畫、演劇、雅樂で、家庭には八重子夫人との間に晴子嬢、澄子君等があり圓滿である。

音樂講座

田邊 尙雄

明治十六年八月十六日生
東京府下落合町下落合五四六

廣汎多岐に涉つて音樂の才能を練磨し、深い造詣と學殖を以つて樂界のため廣く活躍してゐる田邊氏は、堅い信念の下にその理想とする東洋音樂の統一と世界化との實現に力を致してゐる。東京市四谷に生れ、第一高等學校から東京帝國大學理學部物理學科に學び更に文學部心理學科を卒業して、醫學及び理學を聽講して凡そ社會の全面に通じた。爾來音樂理論とその妙微を研めるべく意を決し、更に東京音樂學校選科に入つてヴァイオリンを學んだのを端緒として常に理論と實際とを綜合すべく究めて行つた。即ち東京音樂學校選科に六ヶ年、佛人ノエルベリ氏に就き和聲、作曲學研究に二ヶ年、田中正平理學博士に音樂理論を三ヶ年、三味線音樂實習十餘ヶ年、山村流、花柳流、西川流舞踊實習十ヶ年、雅樂及び舞樂實習五ヶ年、其の他大原重朝伯爵に歌舞講義習を、上海の歐陽予倩氏に支那樂研究を、更に和洋各樂器に就いても親しく手を染めて其の概念の獲得に努力した。その間にも宮内省式部職雅樂練習所囑託、國學院大學講師、文部省邦樂教育調査委員、同省社會教育調査委員、支那北京大學研究所國學門通信教師等の要職に就いて、研究と指導とを著作にと多忙な日を送つてゐる。その結果は「西洋音樂案内」を初め無慮數十冊の著作を出し、又有名な玲瓏を註明してラヂオにも放送してゐる。其の他作曲に多くの新味を抽出し就中新日本音樂幻想曲瀧口入道は有名であるが、尙皇后陛下を始め奉り各宮殿下に家庭舞踊を御教え申上げたこともある。斯くて斯界に齎らした幾多の功績は蓋し枚舉に暇がない。

長唄「澤井宗太郎」

伊澤 晴太郎

明治二十七年一月八日生
東京府下目黒四二二

廣汎なる藝才を具えて各部門にまで頭角を延ばし、凡そ藝に關する凡ゆる習練を積まんとしてゐる氏は東京市に人となつたが、繁雜な中に年を積ね、而も年とともに愈々自然味を害ひ、喧騒の都は更に亂雜な街と化して行くのを眺めたとき、氏の體軀の裡に豊かに興えられた藝才は、こうした情景に反動化され或は刺激されて人生の機微に觸れた藝術を編み出さんことに努めるに至つた。こうした自己を見出した氏は先づ美術の府美術學校に入つて圖案科に學生となり、上野の杜に閉ぢ籠つて只管勵むことになつた。そして大正八年には幾多の收穫を齎らして芽出度く卒業し、その進むべき道を求めたとき長くも九重の奥深き邊に美術の司として宮内省に奉職することになり、爾來典雅なそして崇高な寮圍氣に抱かれて今日に至つてゐる。この間にも氏は無形の藝術、喉の藝に憧憬を抱き美術學校に在る頃から長唄に手を染め大正六年に松島庄十郎師に手解かれ、翌年からは吉住小真次師に師事して熱心に研精したもので斯界の大家の藝風を受けて上進著しく大家を想はしめるの風がある。尙最近是小唄にも興味を覺えて一昨年十月から田村派の家元田村てる師に就いて不斷の習練を續けて今や専門家も及ばない程の藝腕を示すものと云はれてゐる。斯くて奥床しい氏の趣味は聽て我々の前に展開されるの目も遠くはないであらふ。そして舞臺やラヂオに出演してファンに彗星の感と興へるであらふことを期して疑はない。因に家庭に在つてはすみ子令夫人と共に温い生活を營んでゐる。



洋楽、ピアノ

田中ゆき子

明治三十六年八月一日生
東京市小石川區大門町二六

田中女史のあの嬌かな指端が一度ピアノのキーに觸れたなら、其處から實になごやかな妙音の漂ひ出ることを知つたとき、女史とその愛器ピアノとの合奏曲が一日も早く一時も長く我々のレシーバーの中に在ることを希望する。そして最近こうした慾が多少なりとも満たれるやうになつたことは愉快なことである。茨城縣龍ヶ崎町の素封家の二女に生れた女史は深窓に在つて幼時から山田流箏曲に手を染めてゐた。こうして自ら樂才の培養に努めてゐた女史は日に日に延び行く自分に深く興味を抱き、將來音樂を以つて世に出んことを堅く心に誓つたものであつた。聽て大正十年東京淑徳高等女學校を卒業し、宿志を實現せしむべく東京音樂學校器樂科にピアノを學ぶことになり、橋本重、コハンスキーの兩教授に就いて親しく習練を積み、技藝の進展すると共に感激に滿ち溢れた青春を更に意義あらしむべく努力した。斯くて麗はしい光に身を包んで卒業したが更に聴講科に在籍して傍ら、同期生の組織するチエチリヤ會の同人としてコーラスの研究を續けて居る。もと邦樂に造詣の深い女史はシューマン、ショパン等の古典曲を愛好してゐるが、そこに女史の趣味性や藝風が窺はれるものと云へやう。そして又女史の日本婦人としての教養に深い嗜が読み出されて、兎角爽快情緒の濃かな中に氣強い感と與へてゐる。更に淑やかな女史は手藝生花に堪能であるが箏曲、園藝、旅行、歌舞伎等をも愛好し、尙餘暇には讀書に親しんで常に新知識の吸収に努めてゐる。

哥澤、芝勢以派「哥澤芝愛」

立原ジャウ

明治六年一月十二日生
東京市淺草區新片町一

哥澤芝勢以派に重きをなす芝愛女史は、家元芝勢以女史に三味線を勤めてマイクローホンの前に現はれること一再ではない。そして今やラヂオファンの心算にまで入り込んでゐる程の達藝家である。中京名古屋は女史の橋籠の地であるが、幼時から諸藝に通じてゐる女史は、三代目哥澤芝金師が大坂出張教授の際名古屋に時折立寄るのでその都度同師に就いて修業すること數年、明治四十四年帝都に移り住むに至つて、充分にその藝風に接することが出来るやうになつた。斯くて技大いに進み大正元年、哥澤芝愛の名を授けられるに至り、教授所を開いて門弟の教養に當つてゐる。而も女史の偉大な藝風を慕つて集るもの日に多く、今や名師匠として數ある門弟から敬慕されてゐる。そしてよく家元を扶けてその隆盛に貢獻し、基礎の愈々堅きを願つて努力を續けてゐる。哥澤、殊に芝勢以派にとつては無くてはならない大黒柱となつて、多くの信頼がかけられ、従つて女史も鶴て老境に入らんとし尙且つ斯流のためを思つて勵んでゐる。こうした女史の偉大な風貌に接するとき、その敬虔な態度に感激させられるものがある。尙、多趣味に生きてゐる女史は幼少のころから鍛え上げた常磐津、清元、長唄及び義太夫等をよくして、何れも相當の域に達してゐるが、常磐津は七歳のときから故岸澤式壽滿師に就いて手解きを受け、長唄は先代岡安喜三郎師に師事して熱心に勵んだと云ふ、その誠實なそして練達妙巧なのに女史の豊かな藝才が窺はれて氣強いものがある。

東京中央放送局名譽技藝員

長唄、唄「吉住小四郎」

島津友雪

明治十八年六月二十日生
東京市日本橋區濱町一ノ二

放送局の設立されるや推されて東京放送局の名譽技藝員となり、玉の如き藝才と明るい資質とを以て長唄界に重きをなしてゐる人に吉住小四郎氏がある。氏の家柄は吉住派宗家の譜代の高弟として知られ、初代以來代々唄を以つて立つてゐたが、氏の嚴父は三味線を能くした爲、一時柁屋小四郎と名乗り、後柁屋悅翁と改めた。氏はその長男として日本橋區濱町一丁目の現住地に生を受けた。生來豊かな樂才を具まれ、父君より長唄の手解きを受けたが、日を追ふて次第に興味が加はると共に、益々その特異性を發揮し、爲に慈父を始め近親者から大に其前途を囑望せられたものだ。かくて技の上達すると共に明治三十三年、氏が十六歳のとき澤草三代目の後を襲ふて四代目小四郎を名乗り、その舞臺は十二歳のとき澤草に出演したのに初まつたが爾來引續いて稽古出演をし、一回より二回と度々を重ねる毎に益々人氣を博し次第に名を高めて行つた。其の後長唄の家庭化を標榜して立つた長唄研究會が創設せらるゝや、入會して同會の發展に寄與する處が極めて多かつた。其後大正十五年長唄協會が創立せらるゝと共に之が評議員となりても目覚しい活躍を續けて今日に及んでゐる。廣大なる雅量を持つ氏は斯くて一小派に偏することなく廣く斯界のために、且つ世の人の爲に麗しい情操の涵養扶植をその信念として藝術の堂奥に研進してゐる。更に作曲をもよくする氏は、有名な「芳流閣」其の他數曲の傑作を發表して斯界に新傾向を示すものと云はれてゐる。

箏曲、山田流

廣岡福子

明治三十八年六月二十日生
東京市赤坂區丹後町四四

山田流に若い天才女流箏曲家の名を志してゐる廣岡女史は前田白秋女史等と共にマイクローホンの前に立つ事一再ではない。そして悠揚迫らぬ長閑な音を響かせて多くの聴衆を魅了してゐる。七歳のとき既に父を亡ひ、その恩人加藤女史の許に預けられて圓滿に人となることが出来た女史は、八歳の時から女藝の一として、雅やかな箏曲を教えられて山田流の手解きを受けたが凡庸ならぬ天才が恵まれて著しい進境を示し傍人を感歎せしめた。云ふその後は更に三絃の研究にも及び、小出とい子竝に長谷行輝の兩師に師事して勵んで行つた。斯くて小學校の過程を終る頃は既に大家として將來の飛躍を思はしめるものがあつたと云ふ。斯くて早くも十二歳の時奧傳を授けられるに至り、現に加藤師に代稽古の勞をとり乍ら研磨を續けてゐる。尙その初舞臺は女史九歳のいたけ盛りの時で、南明俱樂部に於て「夕顔」を弾奏しい大いに人氣を博して斯界への第一歩を華々しく踏み出して、雄々しい門出を祝福されたものであつた。爾來深窓にその妙音を響かせて自ら想を磨り、技を磨つては舞臺に立つてより完璧を期して愈々猛進してゐる。最近では又ラヂオにも放送して「千代の鶯」其の他を出演し、いつも乍らの非常な好評を博してゐる。常に大衆の意を洞察しよく時流をみつめて新味を出し、ファンに導かれ導いて新進の名を日に／＼あげて來たが、資性濃厚なそして篤實な女史は、又日本婦人としての教養を積むに怠ることなく、門弟にも純情を以つて當り性情人格ともに慕はれてゐる。

新内節、「鶴賀吉之助」

鹽井 豊

明治二十三年生
東京市日本橋區數寄屋橋町六

あの軽い滋味を負びた新内がラヂオに放送されることは一再ではない。就中吉之助女史のそれは光彩陸離たるの感があつて、聴衆から非常な期待を以つて迎へられてゐる。女史は豊かな藝才を具えて、日本橋馬喰町に生れ、十二歳の頃には既に三味線、唄、義太夫、舞踊に等一廉の技倆を持つてゐた程である。殊に得意とする義太夫は、その師から將來の進路であることを示されて推奨を受けたものだつた。而し女史はその頃から新内を先代鶴賀吉翁師に就いて精進し、師の恩寵を受けて進境著しく、遂に鶴賀吉之助の名のりを許されるに至つた。新内に在つて女流門人の裡、その奥技を極め得ても未だ嘗つて男名を許されなかつたに拘らず、女史はその先驅をなしたことは一門にとつての偉大な驚異であつた。爾來日本橋花柳界を中心に新内藝術の妙趣を普及することに努めてゐる。「まさ夢」「明島」「三勝半七」等を最も得意とし、放送局設立以來、屢々その十八番を聴くことが出来る。昨年五月にも、義太夫にも清元にもある「傾城三度笠」を新内で放送して、他のどれにも劣らない妙趣を漂はして感動を興えたものだ。女史は亦常磐津を家元から習得して、常磐津文字島の名とりとなつてゐる。斯く女史のよく今日に至つたことは勿論その天稟の然らしめるところもあらふが、血の出るやうな忍苦の勉強が蔭にあることを思はなければならぬ。そして女史はその尊い努力の結晶を後進に傳へるべく努めてゐるのである。

東京中央放送局名譽技藝員「市川中車」

橋尾 龜 治 郎

萬延元年二月二十七日生
東京市麻布區狸穴町五

梨園の名花として盛名かくれたき人に我が市川中車氏がある。氏は本名を橋尾龜治郎と呼び、情緒の町京都市宮川町に橋尾久兵衛氏の長男として呱呱の聲を揚げた。嚴父は質商を營んで居たが、早くも幼い我が子の藝才を認め、幼くない頃から師に就かして伸び行く方を充分に培つた。そして元治元年には僅か五歳にして伏見町の稻荷座に於て尾上當次郎と名乗つて晴の初舞臺を踏んだ。其後其の傑出したる才能は鍛練の功と相俟つて愈々磨き出され、次いで中山喜樂の門に入り藝名を鶴五郎と改めた。亦二十一歳の年名優九代目團十郎丈に認められて市川八百藏と名乗つて之に師事した。藝風愈々熟し既に獨特の境地をさへ窺はせ同年名題に昇進淺草猿若座に於て昇進披露に大入を取つた。次いで歌舞伎座に於て、團十郎の景清に右幕下頼朝の役を勤めて人氣を博したが之實に氏の出世狂言であつた。爾來技藝入神の境に入り、今や歌舞伎座幹部技藝委員として重きをなし、東京俳優組合評議員長の要職に就いて梨園の人々より重望を擔ふ等歌舞伎界の大建物と目されるに至つた。曩に故市川段四郎氏の二男尾松丈を養子に迎へ八百藏の名を譲り、茲に於て氏は中車を名乗るに至つた。當り役は安宅關の辨慶、寺小屋の松王、血屋敷の鐵山、眉間割の光秀、湯殿の長兵衛等である。一方氏は放送局設置以來東京中央放送局の技藝員を囑せられ常に演藝方面の放送に參割して居る。七代目立花屋で、定紋は三升に中、老來其聲望は愈々高きを加へて居る。

常磐津節、「常磐津文字兵衛」

鈴木 廣 太郎

明治二十一年十月三十日生
東京市京橋區木挽町九ノ九

常磐津三味線を以つてその腕の冴を示して名人の名を志してゐる文字兵衛氏は、同時にラヂオのレシーバーの中にもその名が響き渡つてゐる故林中師二代目豊後大様の三味線弾きとして有名な故松壽齋を父として京橋區水谷町に生れた。従つて早くも六歳の頃から三味線に手を染め、嚴父の規則正しい指導を受けて腕を磨き、十三才の時には父君の前名三代目八百八を名のつて赤坂演技座に、當時の市川麗藏今の幸四郎一座の「關原」に出演して父松壽齋の上調子を勤めた。この初舞臺には天晴れ神童の譽を高くし、嚴父の賞讃を受けたものだ。越えて四十三年家元文字太夫（現豊後大榎）師大阪に出演の時立三味線に昇格し共に勤めて大いに腕に確信を持ち翌年から帝國劇場の専屬となつた。斯くて檜舞臺に在つて更に技藝の練達を圖つてゐたが、大正七年父君が松壽齋と改めるに及んで、その襲名をして文字兵衛と改め、令弟が四代も八百八を名のることになつた。斯くて名人の學に達した氏は益々その光を放ち、襲名記念にいろは會を組織し、大正十二年には松見會、赤文會、翠年には常精會を興して、多くの門弟と共に斯道の向上發達に資すべく努めて、愈々その勢力を加えて來た。現に歌舞伎座に勤め乍らラヂオの前に出ては鮮やかな演技をみせてゐるが、中にも初放送の乗合船や最近の子寶三番叟等はフアンの頭に最もよく印象付けたものと云つてよい。資性濃厚篤實な氏は敬神の念篤く常に謹嚴な態度を持って貴公子の風彩を保ち、名人として、その偉大な人格を慕はれてゐる。

長唄、「松野若斗」

黒 崎 幹 男

明治三十年一月二十二日生
東京市下谷區池の端茅町二ノ三〇

凡そ生きたし生けるもの生存場裡は日を経るにつれて愈々激甚を加へて來た。そして誰もが自ら神經衰弱症を誘引するかのやうに神經を過勞せしめてゐる。このとき豊かな情操に浸り得るもの程そこに沈着さと堅實さとを加へるものではなからふか。黒崎氏は實にこうした妙諦を歩む人として麗しい人格を示すものがある。奥州仙臺の青葉城下に呱呱の聲を揚げた氏は、その昔六十萬石を擁して「乃待扶搖萬里風」遂に驥足を伸ばし得なかつたと雖も絶大の雄圖を抱いて一世に名を轟かせた英雄伊達侯の氣風を受けて人となり、嚮て青春の志を抱いて上京し東京帝國大學工學部建築科に學び大正九年工學士の榮冠を頂いて世に出た。そして建築事務所に入り帝都の復興に幾多の寄與するところがあつた。斯くて大くの工夫に伍して物の世と情の世との錯綜した像を見るにつけても大きく情に生きる痛感し、嘗つて大學に入学の當初から藝に浸つてゐた悦を切に深くするものがあつた。即ち稀音家六郎、徳田いよ子の兩師に就いて長唄を修め、大學卒業の頃には早くも素人の域を脱してゐたと云はれる。現に長唄銀鈴會の幹事として、又雜誌銀鈴の主幹として口と筆を通じて廣く世に呼びかけてゐる。其の他小唄にも堪能で一昨年より家元田村てる師に師事してその藝風に私淑し、ラヂオにも奏藝家としてより以上の奥技を見せて一世を風靡してゐることは人のよく知るところであるが、氏の豊かな情操は更に美術の上にも窺ふことが出来る。因に家庭には才色兼備の譽あるあい子令夫人があつて琴瑟相和してゐる。



荻江節、「緑風」

柳原康

明治二十二年四月十八日生
東京市麻布區我善坊町一〇

所謂時代に即したものが真によく世人の心に融合するものであるか否かは疑問である。そして恐らく如何なるものと雖もその道に精通すればそこに始めて無限の泉の湧出してゐるのも知り、又は鐵岩をもよく通ずるものがあるのではなからふか。こゝに荻江節は時代のものであらふかなからふか人を得れば最新流行のジャズ以上に隆えるであらふ。この意味に於て緑風氏は實に人なき世に人を得た歡を與えるものである。氏は荻江節を伯母に當る宗家ひさ女史と母堂に就いて嚴格な教導を受け傍ら長唄にも手を染めて松島庄十郎師夫妻に手解きを受け更に吉住小兼師同小三藏師に師事して何れも奥技を極めることが出来た。斯くて氏の演技の時は出演者と聴衆とが心的融合をみ何れも熱狂してゐると云はれる。近時ラヂオに放送して好評を博してゐるのも蓋し宜なる事である。東京市樂地に生れた氏は藝と共に長ずるに及んで大正三年東京帝國大學を卒えて文學士の榮冠を受けて世に出た。そしてそこにはジャーナリストとしての氏を待つてゐた。即ち報知新聞社に入り主に角力記事を擔當して名記者の名を馳せたものだ。其の後自ら柳原ビルブローカーを開業したが都合により昭和二年廢業して目下雄辯會講談社に顧問として重きをなしてゐる。斯く内に外に活動し、著述に従事してゐる氏は、書畫を愛好したま鮮かな筆を揮ふと云ふ。そして多忙な氏は各所にその俊才を發揮して頭角を顯はし明日の目覺ましい飛躍を期待してゐる。尙家庭には婦志子令夫人があつて忠實に氏を扶けて賢婦の名が高い。

能樂、梅若流仕手方

梅若六郎

明治十一年四月十九日生
東京市淺草區南元町二九

重くるしいもの程そこに深い趣を見出すもので、謡曲に於て特にその感に切に深くするものである。去る日の夕、東京放送局から梅若六郎氏が巧みに深い情趣を浮び出して放送した謡曲通小町を忘れることが出来ないうであらふ。六郎氏は梅若實師の次男として東京市既橋に名流の門に生を受けた幼時から人に秀れた剛腹な氣象を持ち、父君から能樂の手解きを受けたが勝氣な氏はその積古にも熱と力とを以つて努力を重ね、急速度の進展を示して漸次斯界に藝能を認められて行つた。尙梅若流が觀世流から分難して獨立するに當り、其の後を承けて氏等は同流の發達に盡力するところがあつてよく今日の大をなすに至らしたものである。氏は又斯道後進の啓發に専念し、綠議會、綠門會等を組織して門下の研究と發展に資し、又、演能會を催しては有村を斯界に紹介するに努めてゐる。舞臺には數知れず出でゐるが、就中、大正四年大正天皇御即位の大典に際しては宮中御舞臺に於て、令兄萬三郎氏とともに「猩々」を御前に演技して一世の光榮に浴したもので、その藝風は令兄梅若萬三郎氏とともに日本能樂界に於ける俊傑を以つて謳はれてゐる。資性豪快で江戸兒特風の直情的な義侠心に富み謹嚴な藝術家としてその人格を慕はれてゐる。氏の趣味としては先づ第一に能樂に關する裝束並に面の蒐集に熱中し、傍ら斯界の參考に資すること尠くない。又書畫を愛好して、特異の鑑識眼を持つてゐる。家庭には、光子令夫人との間に龜之、貞之、泰男の三君を恵まれて、一家五人打ちつて觀劇に出掛けることもよくあると云ふ。

長唄、「藤村紫郎」

江村保

明治二十三年十一月二十三日生
東京市麻布區狸穴町一五

素人長唄界の雄としてその名を恣にしてゐる江村氏は近時藤村紫郎の藝名を以つてラヂオに放送し、自他共に熱狂の境に浸つてゐる。濃尾大平原の中に雄々しく聳える饒城を以つて名高い名古屋大都市に生れた氏は、幼時近親に「れられては滔々と流れる木曾の清流に遊び、或は磯遊に戯れる小浪に舟を漂はしは自然の情趣に浸つて獨り心を養つてゐたものである。而も大八島の統べらせ給ふ英帝の膝下に強い刺激を求めて上京し、雄々しい男性的飛躍を試み、目下芝區吉村商會に勤務して電氣事業に精勵し、文明の進むにつれて益々多事なる斯業に忙殺されてゐると云ふ。そして高雅な情操に富む氏は尙心的餘裕を見せ邦樂に手を染めて忍を練り、美はしい趣味に浸ることを忘れない。即ち二十四五歳の頃から長唄に興味を持ち初め、斯界の名人岡安喜三、稀音家六久、同和喜次郎の諸氏に師事して只管その深境に向つて精進するに怠らない。體て技の上達するに及んで藤村紫郎の藝名に依つて廣く趣藝の人としても世に出、ラヂオ等にも放送して殊に「勸進帳」「娘道成寺」等は齊しくファンとの感興をそよつたものであつた。現に銀鈴會の幹事として祖流の爲めにも篤實な心を以つて盡心し、その普及にも獻身してゐる。斯くて實業家としての江木保氏の前途は更に社會から多くの期待をかけられるであらふし、又演藝家として藤村紫郎氏は藝界、趣味の上にも尙氏に俟つ多くの事象がまち設けられてゐるものと云ふべきである。因に靜子夫人はこうした多忙の氏を扶けて後顧の憂なからんことに努めてゐる。

尺八、琴古流、「樂堂」

飯倉儀作

明治二十年七月一日生
東京市四谷區南町二五

尺八界の英傑荒木古童師門下の逸材として令名を馳せてゐる樂堂氏は先年尺八本曲秋田菅垣をラヂオに放送してファンの熱狂を呼び起したものだ氏は青森縣東津輕郡道村濱館に生を受け、明治四十二年青森師範學校を卒業し、第二國民の養成に大なる感激を覺えて教育界に堅い地歩を築いて行つた。而も尙進取の氣は五尺の體軀に満ち漲れてゐた。そして大正四年に文部省中學校教員檢定試験に合格して一時福島縣立安積中學校に教鞭をとつてゐるが、感ずるところあり、文化の發祥地であり中心である帝都に上つて現に市立京華尋常小學校に圖畫科の訓導を奉職してゐる。生來藝才に富む氏は音曲にも深く興味を抱き、尺八の吹奏を獨唱してゐる。體て自己の技藝にあき足らなくなり良師匠を求めて琴古流の宗家荒木古童師の門下生となり一心に精進して行つたが遂に大正十三年斯流の奥技を極めて師範免許狀を與えられた。爾來舞臺に立ち乍らも樂風會を興して門弟の指導に當つて今日に至つてゐる。氏は又荒木十敏氏の門人として日本畫道に造詣が深いと云ふ。尙家庭には良妻賢母の譽高いせい夫人との間に一男君と千重子さんイツ子さんを恵まれて和氣に満ちた温い生活に浸つてゐる。因に長男一男君は目下麻布中學に學ぶ俊才で、幼時から父君の感化を受けて尺八に親しみ古童師に師事して奥技を極め神童の名を轟はれたもので、弱冠の身を以つてラヂオにも數回の放送を試みファンの賞讃を浴びてゐる。斯くて親子相携えて今後の斯界に目覺ましい飛躍をなすであらふことを期待されてゐる。

義太夫節、「い京」

小西威恭

元治元年生

大阪市北區曾根崎新地三

淨瑠璃熱の旺んな大阪で、素養界で最も光つて居るのは何と言つても我が「い京」川西威恭氏であらう。氏は大阪市東區の生え抜き、家は祖先幾代藥種商として舊い暖簾を持つて居る、其の昔から武家ならぬ身を以て帯刀御免で、武家同様の勢威を持つて居たものである。父君の代には與力に擧げられ、無私公正の名與力の譽あり、功績亦數ふべきものが多かつた。其當時も引き続き父祖の事業業種及繪具商を營み、益々固い礎石を築いて居たが、氏の代に至つて一時之を繼承して、間もなく時代の變遷を看取して此の由緒多い家業も遂に現在の待合茶屋愛助の經營に更ふることになつた。氏は明晰果敢な達見の士で、確い信念の前に父祖の事業を新な事業に乗り替へたのも、さうした氏の達識の一の現れに外ならない。先年來其の識見人格を町民より信頼されて區會議員に推され、次いで市會議員に擧げられる等公共の爲めには貢獻を勵んで來た事を以て令名を博して居る。氏の義太夫趣味も舊いことで、大家豐澤廣助師の手解きを受けたのは實に十七歳の時である。それ以來修業の苦心を経て久しく稽古を續け、夙夜の奔命に勞かれた身で、時に閑を得れば澁い喉の妙味に酔ひ、各温習會などにも得意の語り口に人氣を呼び、素人義太夫の普及にも貢獻を致して來た素養大會、東滿會、宇壽女會、土佐會、男和女會等には審査員として重きをなし、此の他北聲會、養精會、玉藻會、徳島大會別府全國素養大會等にも同様審査員となつた。夫人は愛助と云ひ、父君に劣らぬ義太夫の大家で、巖に石古屋で放送好評があつた。

箏曲、生田流「白秋」

前田壽美惠

明治三十三年八月七日生

東京府下浦田町御園二五〇

箏曲「千代の鶯」其他をラヂオに放送して斯道の愛好家を謹聴せしめてゐる前田白秋女史は、東京府下砂町に生れた。八歳のときから女藝の心得として箏曲の稽古を故吉田しん子女史に就いて始めた。そして小學校を卒えて岐阜縣立金山高等女學校に學ぶに及んで良師匠に就くことを得ず専ら獨唱して淑やかな練習を續けてゐた。大正七年卒業と同時に再び東京に歸り、東京音樂學校箏曲科に入り、傍ら山口巖師に師事して愈々斯藝の奥妙を發揮することに精進して行つた。斯くて藝進み、術上り多大の收獲を得て大正十四年卒業し自ら教授所を設けて門弟の指導に當つてゐる。そして山口師から薫嚴の雅號を贈られたが、獨立してからは白秋と號して世に出た。女史は又、作曲をもよくし、女學校に在るときも之が研究に努めてゐたが卒業後の長い研究の結果は生田流、柳川流の箏曲樂譜八十幾種の發表となつて現はれ、殊に山口師と共作の「箏曲のかゞみ」は非常な好評を受けてゐる。其の後大正十四年十一月琴葉落會研究會を創立して自ら主宰者となり多数會員の指導に當つてゐるが、又他前倫明音樂會々員としても町田博三氏等を扶けて活動を續けて來た。斯くて若い女流箏曲演奏家として凡ゆる方面に新味を出して男子にも劣らない着想と技藝とを以つて愈々その名を高めてゐる。尙家庭に在つては、夫君定一氏を扶けて、多忙の中にも内助の功を顯はし、一女を恵まれて非常に幸福な生活を營み、長閑なその日々を送つてゐる。



義太夫節、「靜」

戒能靜雄

明治二十五年五月十日生

大阪市東區住吉町二六

強固な意思を把持して克苦勤勵しあくまでも初志を貫徹せんとする戒能氏は實に熱の人であり實行の士である。氏は愛媛縣温泉郡三内村に生れ、一方には緑樹生ひ繁る山を受け、片方に美はしい野をひかへて、山水の妙を盡す瀬戸内海に連り、長閑な氣風にその藝才が育まれてのびやかに成長して行つた。やがて松山中學校を卒業し、未だ二十にもならない少年が荒波を乗り越えてよく人の世に處して行かんとするには大なる意思と熱とが必要だつた。が幾多のエピソードを残して眞ちに世に出ることを決意した。明治四十一年三月に大阪に上り、玩具問屋池川商店に奉職して意義あつた。斯くて日毎に主の信任を受けて重用されてゐる人生への第一歩を飾つたのである。斯くて日夜を分たず、主の爲は己の爲とのモットーの下に精勤したが忽ち店主の信任を受けて重用されてゐたが昭和二年店主の死亡するや獨力を以つて銳意之れが經營に當り愈々隆盛を極めてゐる。こうした緊張の裡にも英雄閑日月の趣味を持つて、日頃憧憬してゐた義太夫界に手を染め、その二十二歳の頃から浪花、吉榮、富太夫の諸師に就いて勵む事になつたが、豊かな天才は忽ち認められて靜と號し、斯界に現はれ出た。行くとして可ならざるなき氏は、斯くて現に男加女會、喜糸女會、別聲會、東滿會、淨進會等に幹事として活躍してゐる氏の營業の隆盛と共にこうした餘技も益々上進を示すものであらう。野球を趣味とする氏はその家庭にふら子夫人との間に二男一女を恵まれて温い家庭生活に浸つてゐる。

長唄、「幸村京之助」

長澤宏和

明治十八年七月五日生

東京府下谷區工根岸一一一

世が進むにつれて幾多の新事象が齎らされる。そしてあるものは必要に應じて、又他のものは必要に先立つて現はれて來る。近時女子の生活意識に眼覺めて來るや昔の高い足駄から急轉して輕快な草履の必要が之に伴はれるのは當然であらふ。而もこの時、我が長澤氏はよく時流を洞察して斯業に先鞭をつけたことは蓋し時宜に適したものならん。氏は靜岡縣沼津市に生れ朝夕靈峰富士の雄姿に感を打たれ、又高貴の別邸の同市に在るところから之等名士の偉風に接しては青雲に乗じた志もだし難く長ずるに及んで横濱商業に學んだ。卒業後は一時横濱第二銀行に勤務してゐたが、常に世の異動に着想し、いつかは社會に飛躍せんとの期してゐた。斯くて好機到來し、一ナ勇猛心を振起して我が國フェルト業の先驅者となり之が開拓をなして大いに活動することになり、大正三年東京市京橋區五郎兵衛町五に宏壯な店舗を設けてその卸業を始めた。尙人心に迎合したこの新しい企は忽ち人氣を呼び需要は日に増し家業は彌が上にも繁榮して今日に至つた。斯くて事業の基礎漸く堅實味を加ふるに及んで餘暇には藝趣味に生き得るに至つたもので大正五年に四代目稱音家太郎師に長唄の手解きを授け翌年より同小三郎師に師事してゐたが芳村幸次郎氏の流を汲んで今日に至つた。現に銀鈴會の幹事として重用されてゐる程その藝も進んで勸進帳や娘道成寺等をラヂオにも放送し人氣を博してゐる。尙小唄にも堪能で田村てる女史に就いて温習を續けて來た。家庭には久子夫人との間に愛兒壽子嬢がある。

洋樂、バイオリン

鈴木 鎮一

明治三十年十一月二十四日生
東京市赤坂區高樹町八

洋樂器殊にバイオリン、マンドリンの製造家として世界的權威者に名古屋の鈴木政吉氏がある。その令息四人に依つて組織されてゐる鈴木クワラルテットは、我が洋樂壇では餘りに有名すぎる。そして近時ラヂオにも屢々放送して自家製産にかゝる純國産品を以つて實に天來の妙音かとまごふばかりの精巧な響を傳へて内外人を感歎せしめてゐる。この樂團を主宰する鎮一氏は幼時父の膝下に在る頃、山田ホテル管絃樂團の指揮者藤井氏からヴァイオリン彈法の初歩を教えられ安藤幸子女史の指導を受けてその樂才を培つた。大正十年末ヴァイオリン研究のため獨逸に渡り當時歐洲に有名を馳せてゐたカール・クリングラ氏に師事して、研精を積み大正十四年春歸朝した。その第一回リサイタルを邦樂座に催して大喝采を博したものだ。因にこの歸朝に際して、ホフマン女史が五十年來の秘藏に係るグワリネリ・ユース氏作のヴァイオリンを譲り受けて父君への土産とした。父君はこの名器を參考にして更に優秀なものを作り出したので氏はその他日本産のものも携えて再び渡獨した。恩師のクリングラ師の下に更に教を請ひ、併せて樂器の批評を受けて賞讃の辭を贈られ、昨年歸朝した。そして三人の令弟と共に鈴木クワラルテットの更に隆盛に努め、舞臺にも、ラヂオにも非常な活動を續けてゐる。氏の次兄二三雄君はチェロを、次の梅雄君はヴァイオリンを、更に次の喜久雄君はヴァイオリンをよくし、兄弟揃つて豊かな樂才に恵まれてゐる。鈴木クワラルテットの隆盛も將に昇天の勢である。



高橋 源太郎

明治元年四月二十三日生
東京市四谷區左門町一〇八

高橋清師は多年山田流に人となつて今や山田流管絃協會の副會長として噴々たる偉名を走せてゐる。東京市本所區相生町に生れた氏は幼いとき不幸にもその明を奪はれ、近親に養はれて七歳のとき松永熊次郎師に就いて長唄の練習を始めた。斯くて藝能の進展と共に十七歳になつた時更に箏曲の研究を始め、山田木松調師に師事して致々として勵む裡、僅か四ヶ年ばかりの間に早くも斯藝を習得して二十一歳の時與計を授けられて榮松と號すに至つた。斯くて愈々深境に入つて行つたが二十五歳のとき山田木師が本姓楠田榮清を名乗つたので氏も亦清章と改號して世に現はれて出た。その後恩師の歿するや後を繼いで榮清と號し、愈々斯界に一方の驍將として琴曲界に頭をもたげて來た。そしてその襲名披露會を兩國いぶむらに開催して一躍有名を馳せたものである。爾來各所に出演し、或は家に在つて自己の教養を積むに怠ることなく、又は門弟の指導にも實に至れり盡せり。懇切なそして細心なものがあつて師弟相共に感動して勵んでゐる。現に氏の藝風を慕ひ、人格を敬慕してその門に馳せ參じて來るもの日に多く、奥何を授けられたものは二十有餘名に及ぶ。震災後現住所に移り、老境に入つて益々閑熟味を加えて來た。尙氏の家庭にある長女松子女史は梓屋六四郎に長唄を、三絃及び箏曲を父君に各々勵んで現在父君の代積古を勤めるに至つて特異の藝風を耀如たらしめて幾多の人に感銘を與へてゐる。將來父君榮清師の後繼者に疑せられてゐるのも亦宜なることであらふ。

箏曲、山田流

落合 康 惠

東京市麻布區霞町一

我國音樂界に於ける奇傑として知られてゐる理學博士田中正平氏の許に終始してよくその理論を尊重して名を揚げて來た康惠女史は、未來への理論と現在の事實とを融和し綜合してラヂオ藝術界にも名を轟はれて來た明晰な頭腦を持つて幼時から音曲に親しみ深い理解を持つてゐた女史は、最初長唄を習つてゐたが後箏曲に轉じ、作曲家として有名な山登萬松師に師事することになつた。斯くて藝界に對して深く興味を覺えるとともに、理論に即した堅實な道を歩まんと心に決し、更に田中博士に就いた。同博士は日本古典音樂が時勢の變化と共に善處する所を知らず、只徒らに古い因襲の形骸に固着してその精神を滅却し去り、一部好事家の手に委ねられて沈倫せんとするを觀て誠に遺憾とし、斷然立つてその甦生を圖るべく腐心して研究の結果、洋式五線譜を三絃樂に應用して効あり、更に邦樂に及ぼさんと圖つてゐる。この時女史は博士の指導に依り、先づ箏曲に應用せんとその薰陶を受けて研究に餘念がない、蓋し女史のこころした研究は體て斯界に偉大な功績を齎すことであらふ。而も斯藝を愛好する幾多の後進の便を思ふのとき、博士、竝に女史に感謝するもの尠くない。大正八年より成蹊高等女學校に於て女史多年研究の結晶なる樂譜で教練して好評を博してゐる尙最近はラヂオにその樂才を發揮し、「神風」學を放送して深遠さをみせて世人をうなづかせてゐる。現在は東明會を組織して幾多の後進の指導研究に資しその發展に努力してゐて止まない。

尺八、琴古流『呂童』

水野 榮之輔

明治十三年十月二十七日生
東京市小石川區大和町二〇

ラヂオによつて近代文化を宣傳すると云ふよりも寧ろ、ラヂオに依る最新のラヂオ文化が産み出されるのではなからふか。而もラヂオ文化の中にラヂオ藝術の存在は實事となつて來る。こうして時代の尖端を切る藝界に於ける尺八部野に水野呂童氏を見出し得たことは、兎角浮薄な我が藝壇には堅實な存在に違ない藝術は獨り技の練磨上達のみを以つては價値付けられるものではなく、そこに人格の反映がなければならぬ。而もそうした兩方面からの綜合に眞の崇高な藝術を求め得るのではなからふ。資性濃厚な氏は藝に浸つて雅氣なく、天真爛漫の世に放浪し得るところに眞に藝術家の人格が窺はれるのではなからふか、氏は神田區東紺屋町に生れ、明治二十八年に至つて氏十五歳のときから正則教授を受けて松本師に入門したが、後三浦琴童師に師事して研究することになつた。そして大正五年に水野派を編み出すに至つたがその間二十有餘年の長年月、若き青春を全く尺八に捧げて其の中に精進し、苦に苦を重ねてその密林にわけ入り或るときは藤道をものともせず、又ときには深溝をも意に介せず往進を續けた。今や水野流の分野は日々に廣く、朝野の貴顯紳商の讃同するところとなり、雅風豊かな氏の藝に欣慕するものが多いと云ふ。昨秋、三曲俊寛とラヂオに放送したときも、三絃と共に演奏して鬼界ヶ島に残された僧都俊寛の悲哀を彷彿せしめてファンを心をもつたものた。尙大正十年九月には琴古流樂譜解説及び本曲樂譜を著作して斯道の指針とし併せて後進の便に供へてゐる。

洋楽、ピアノ

小倉末子

東京市赤坂區榎坂五

我が樂壇に多くの若い樂徒から慈母の如く慕はれてゐる。樂人、小倉末子女史は、獨り音樂教育家としてばかりでなく、ラジオの社會にも熱情の彈奏家として知られてゐる。女史は最初、東京女子音樂學校にピアノを學んだが、中途退學をして獨乙へ音樂修業に旅立つた。若い身を以つて遠く異郷に在る女史は、只一筋に音樂道にいそしんで勵んで行つた。そして鮮やかな腕の冴えをみせて歸朝し、上野の杜に籠つて研鑽を積み、傍ら東京音樂學校に教鞭を執り乍ら、今日に至つてゐる。その教養の深いのと、人格の氣高いのとは、永遠の處女を思はしめる崇高な教育者であつて、正六位に叙せられてゐる。飽くまで篤實な學者肌の人である女史は、従つてステージに立つて好まず、ためにあまり公の席には出ないが、先に、徳川頼貞侯の主宰する音樂獎勵會の演奏會には、パツハよりベートーヴェン、ショパン等の歴史的作品を數度に涉つて弾き、その美事な演奏振りは、聴衆に深い印象を残したもので、兩來ラヂオにも時たま出演放送してファンを熱狂せしめてゐる。殊に、昭和二年春にはベトーエーのソナタ、ワルドシュタイン等を獨奏し、又今春正月には、歐劇アナクレオン、ピアノ協奏曲二長調冠式等の曲趣を傳えて、異彩ある崇高な藝味に聴衆を陶醉せしめたものだ。尚、ピアノ教科本を著作して斯界に志すものの便に査し同種類幾多の文獻の間に好箇な存在として異彩を放つてゐる。而も我が國音樂界に謹嚴な教育家として、女史は更により深く蘊奥を極めるに努めてゐる。

常磐津節「常磐津若太夫」

萩原喜久次郎

明治四年四月十七日生
東京市淺草區旅籠町二ノ五

自ら斯道の名門に生れ乍ら幾多の困難を経て漸くに常磐津道に入り得た氏は、ラヂオの社會にまで乗り出して嚇々たる名聲を馳せてゐるの今日、過ぎて来た途を顧みて感慨の至り知れないものがあるであらふ。氏は麹町區平河町に菊菱派家元に生れた。嚴父は本田銀次郎氏と云ふ常磐津妻太郎の藝名を以つて世に知られた人であり、令兄金太郎氏も岸澤忠造と稱して一方に覇を稱えてゐた何れも斯界の名人であつた。氏は、何故か斯道に入ることを父君から嚴禁されて商人となることを奨められ、尙嚴父はこれを遺言にまでして逝つた程だから、父君亡き後も勿論令兄は頑として氏の意思を聞き入れるべくもなかつた。其の後、叔父に當る五世若太夫師に引き立てられんとして阻止され切齒の目を送つてゐたが後更に先代若太夫師の門弟常磐津都太夫師に氏の秀出た藝才を認められて遂にその門弟に取立てられるに至つたのである。多年の宿望今や容れられて愈々感激に滿ちた血の出るやうな研精を勵んで行つたが、明治四十四年令兄歿して初めて公然斯界に身を乗り出すことが出来た大正十一年若太夫を襲名し、文字太夫、古式部の門に在つて技を磨き、帝劇等に出演し乍ら調正會の顧問にまでなつた。斯くて日一日とその名聲を揚げ、今や菊五郎一座の専屬となり操太夫師の脇を勤めて、内に多くの門弟を抱え、六代目として歌調に由緒のある菊菱派を擁護してその普及發達に力を致してゐる。氏は今夏放送した辰橋を始め忠臣蔵、日蓮記等の曲を好み、盆栽、茶の湯等を趣味としてゐる。

義太夫節「公木」

仁熊松太郎

明治元年生
大阪府北區天滿橋筋一ノ四〇

股賑を誇る大阪天滿橋筋天滿橋北詰に一際人目を惹く合資會社弘英社がある。これぞ我が仁熊松太郎氏の牙城で、大阪活版事業界に知られた一陣營である。池田氏三十五萬石の繁榮の跡を物語る久松山の麓鳥取市に生れた氏は、千代川の清流に養へて明治二十七年大志に馳らるゝまゝに大阪に出たが、其頃は腕一つで闘ひ抜く奮闘史に飾られたもので、始め帝國海上保險會社に一社員として勤務し、其後十年の忍苦時代を過ぎて獨立で印刷業を開始したのは明治三十五年である。當時の營業所は東區南通りで、逐年の發展に大正十二年には現地に擴張新築編が上にも信用を高めて来た。活版石版に於ては既に定評あり、現時は職工六十名に達し、三井物産、南海電車其他各鐵道會社を始めとして實業界に多數の得意を持つて居る。かく氏は立志奮闘の勇者であると共に一面には風懐拘すに餘る趣味の所有者で事業緒に就いた明治四十三年始めて義太夫に手を染め、豊澤廣七氏に就いて手解きを受けたが、上達につれて益々道に志すの熱意を深め、多忙な事業のあい間を利用しては今日まで稽古の日を續けて来た。氏の素養界に於ける存在は頗る異彩に滿ちたもので、其の堂に入った語り口には玄人も遠く及ばぬ好者な味さへ見せ、殊に十八番物に至つては洗練の妙流石苦心の跡を偲ばせるものがある。曩に卒先奔走して同好家を糾合、五十義會を組織し今日まで指導して来た。氏は本年六十三歳、よし子夫人との間には一男亮太郎君と、他家に嫁した二女がある。

謡曲

細野道三郎

明治三年七月三日生
兵庫縣川邊郡立花村(塚口イの二號)



困苦に耐えることは殆んど不可能に近い程に苦痛のものであり、又常に社會の止まることなく異動極らない時勢に同事を永続することも又大なる努力の必要であることであらふ。而もこの何れもを具さに背め盡しよく忍従の誠意を披瀝して今日の大をなしたものが細野氏である。今日電氣事業界の勃興と共に益々多事を極めて来たがこのとき日本電氣株式會社が三吉工場を買収して京橋區西紺屋町に日電商會を創立した明治三十年の頃入社して計算部、販賣部、倉庫係等に從事してゐた。其の後會社の發展するに及んで大阪に支店が設置されるや大阪詰となり、其の後果進して會計課長の重職に就き、今日同社内にその前進を囑望されてゐる。生れ乍らに濃厚な裡にも剛氣果斷な性格を持ち氏は事に當つて迷ふことなく、よく考慮して大過なく、事業會社に在つてはなくてはならない人である。聽て近き將來必ずや大阪財界を中心として全國的に大きい飛躍を試みるであらふことを何人も期待してゐる。蓋しこうした氏が益々疲弊せんとする今日明日の財界には實に好適の存在たるを失はない、こうした氏が反面豊かな情操の持主で尺八や謡曲には殊に造詣深く、何れも名人の譽をも摩さんとするの概がある。そしてラヂオの設備されるやマイクrohンの前に謡曲を出演放送したのは氏を以つて嚆矢するもので技藝の人としての氏の名も亦廣く世に知られたものであつた。其の他書畫の趣味にも生きてゐる。家庭には山田流箏曲に堪能な千代子夫人があつて、趣味を共に持つて恵まれた家庭愛に浸つてゐる。

錦心流琵琶『賞水』

小山田鐵三郎

明治三十四年五月八日生
東京府下巢鴨町宮下一八五七

武士道の精神を吐露した白虎隊を自ら琵琶に節付けして、今春ラヂオに放送したのは賞水氏である。千葉縣佐原町の素封家に生れた氏は幼時から人の肺腑を抉らんとする悲壯な琵琶の曲を聴くことを非常に好み、長ずるに及んで、一層深く斯道に心を傾き、一時は家業を捨てんとまで決心した位があつた。遂に氏は意を決して琵琶の密林にわけ入ることにして、大正七年一月川尻都水師の門を叩いて教を請ひ、翌年には早くも初傳を授けられた六月中傳を受けるに及んで家業彌が上にも多忙を極め、ために一時その鋭鋒を収めなければならなかつたことは、氏にとつて脾肉の嘆を禁ずることが出来なかつたことであらふ。だが間もなく、再び斯道に復歸して藝道に専念し得るに至つて、氏は愈々倍奮の努力をなし、進足著しく、八年十一月には奥傳を受けて賞水の雅號を授けられ、斯道に入つてより僅かに二ケ年にして、教師免狀をも與へらるに至つた。其の後、教授所を開いてゐるが、傍ら研鑽を怠ることなく、歌調、彈法を榎本芝水師に學び、又正派の巨星永江鶴嶺師の門を叩いては彈法の妙諦を極めて自ら特異の藝風を編出したのである。爾來斯道の隆運の爲めには勞を惜まず、一水會幹事として各地に演奏し、又大正十三年、大阪に於ける報知新聞主催のラヂオ博覽會には白虎隊を放送して錦心流に先鞭をつけた。次いで翌年には錦峯、暉水の兩氏と舟辨慶を掛合で東京より放送して天下のファンを熱狂せしめたものだ。今やその特異の彈法を用ひて、斯界に稀に見る新進の逸材として令名を馳せてゐる。

洋樂、ヴァイオリン

戸田 早苗

明治三十七年七月二日生
東京市麻布區霞町二六

我が國文化の關門横濱市の本牧に生れた女史は、朗かな太陽の光を受けて靜かに喘えいでゐるあの廣大な大海原を眺めては條々たる黒煙をなびかせて錯綜してゐる幾多の巨船の往來する風情に美的情緒を浮ばせ、自然的情操を養つて人となつた。その雄大な背景から築き上げられた樂藝はヴァイオリンの上に引き出されてラヂオの裡に響き傳へ世の熱叫を呼び起してゐる事は周知の事實である。女史は東京精華高等女學校に在る頃から音曲に心をひかれ初め、近き將來音樂學校に入學の準備のため下居茂子女史に就て教を受けてゐたが聽て卒業と共に大正十一年四月東洋音樂學校器樂部に入り多忠亮氏に師事して主にヴァイオリンを専攻して行つた。斯くて洋樂一般に通じヴァイオリンの妙趣を習得して卒業したが、更に引き續き多氏に於いて自宅に於て薰陶を受けて研鑽に努めてゐた。生來指頭繊細なりズミカルな顫動を傳えて手藝物にも堪能な女史は斯くて著しい進歩の跡をのこして向上し各所に好評を博してゐる。初めてステージに立つたのは大正十三年冬に樂友會の演奏會に出演したときで、爾來東都を始め或は北海道に弘前に高崎にと演奏旅行を試み近時は又ラヂオにも出演放送を試み、名聲を馳せて來た。又女史の好む曲はリヨツターのコンセルト、ヘンデルのソナタ等で常に反復練習し、作者の意表にまで出てゐると云はれてゐる。斯くて堅實な進歩の途を辿りつゝある女史は尙明日に雄々しい飛躍を期するところ尠くない。趣味には手藝を始めとし、琴や琵琶にも造詣深く、演劇、映畫に興味を持つが更にテニスにも秀でてゐる。

箏曲、生田流『出井清琴』

水口 きよ

安政三年六月十一日生
東京市四谷區麹町一ノ一〇

明治初年に於ては女藝として先づ指を折らなければならなかつたものは何としても純日本藝術で、而もピツタリと我々の心を捕える箏曲であらふそして夫に献身して技の練磨に當つて來た清琴女史は、今や深遠な奥妙さを斯藝に現はして、古い調べにもいつまでも新鮮味を示し、老いて益々盛にラヂオの世界にまで活歩を進めて來てゐる。女史は僅か七歳のときから斯藝を仕込まれ、伊藤たま子女史に就いて正則的訓練を施された。そして十三歳のときには名古屋市に於て處女出演するに至り、その天才を謳はれたものである。斯くて將來に於て恐るべき躍進を示すであらふことを囑望され十六歳のころから早くも女史の藝風を慕ふものが出て來て、教授所を開いて之れに當ることになつた。尙十歳のときには小松景一師にも師事してその秘界を極めたものである。明治三十七年には上京して現住に居をなし引き續き内弟の指導に當り、傍ら東京女子大學に箏曲の講師を囑託してゐる。この間舞臺にも立ち、或はラヂオにも出て、至るところに好評を博してゐるが、生來質實なところに典雅な趣をみせて、自らその藝風も愈々崇高さを示してゐるものと云はれてゐる。従つて上流家庭にも女史の藝風が浸潤して令嬢、貴婦人が女史の門に教を請ふものが尠くない。名利を好まない女史は今や老境に入つて只管門弟の指導に趣味をもつて、その人格にまで私淑されてゐると云ふ。斯界の元老であり、元勳である女史は、斯くて日本婦人として篤い教養を重ね、幾多輕薄の徒の出る折柄蓋しよい鑑とすべきであらふ。

尺八、琴古流

神 久 雄

明治二十四年三月十八日生
東京市本郷區本郷六ノ一〇

都下大學専門學校の尺八愛好者に指導してその名を若い學徒にまで知られてゐる氏は、常に學生氣分を脱脚することなく生新に當んだ元氣で滿ち溢れてゐる。近時ラヂオの發達をみるや請はれるまゝに數曲の放送を試み氏の最も愛好する園の秋、浮き舟、末の契、四季の遊等常に朗なそして長閑な自然味を負びた歌調を放送して柔らかない氣持を聴衆に與へてゐる。斯くて今やその特異の藝風は全國に約三千の一統を擁して尺八智温會を組織し、目覚ましい活躍を續けて今日に至つた。氏は青森縣弘前市茂森郡町に生れ中學に進んだが、生來蒲柳の質で重病に冒されること前後二回、に於て保健の必要を痛感して、運動か又は音曲藝術に親しんで内臓の強健に資せんと考へ、腹式呼吸に最大の關係を持ち、而も尙人心の機微に關した、深刻味を帯ぶと云ふ尺八に身を打ちこむことにした。在學中は森庸三新谷六郎の兩師に教えられたが卒業後上京して愈々専門家として立たんこと決心し、琴古流の名人三浦琴童師に弟子入りしたのは明治四十四年二十一歳のときであつた。又川瀬順輔師にも本曲を教えられてその代稽古をも勤めるまでに技が上達した。大檢校長谷幸輝師の上京に當りて外曲をも研究して奥技を極め得たものもある。斯くて益々大をなし以つて今日に至つた趣味には書道を愛好しその方面にも不斷の意を注いでゐるが、又旅行をも好み殊に神佛に參詣する敬神の念に厚い人である。家庭には彌生令夫人があつて二女を恵まれて幸多き日を迎へてゐる。

筑前琵琶、大塔流、宗家『大塔日城』

蛭川武吉

明治五年十月生

東京市外淀橋町柏木一四七

宇宙の森羅萬象悉く皆止まることを知らない。そして何れもが或は退歩し、或は進歩する。而も樂藝その何れであるかは別として兎に角常に新鮮味を加へて行かなければならないことは事實だ。そして邦樂壇殊に琵琶界に在つてこうした先端を開拓して行く大塔日城氏の存在はこの意味に於て實に氣強いものがある。小倉市外豊津に生を享けた氏は琵琶の開祖藤原貞敏卿をその祖先に持ち生れ乍らに斯界と因縁淺からぬものがある。だが早くから醫學に志し、遠く海外にまで研究に赴いた程で、誠實なる刀圭家として名を知られ、維新の元老松方公爵に顧問醫として永年公の身邊に侍してゐた。そして傍ら四絃の道に動しんでゐたが體て身を去き餘生を悠々自適して只管琵琶に遊ぶことになり、大正十一年四月には周囲の推めによつて敢然と立ち大塔宗家の再興宣言を公表して老後の花を咲かすことに決意した。而も尙舊法に新味を添はし、殊にその指導精神に於ては實に嚴格な志操の涵養をモットーとして立つたもので、宗家規範第一條にも「琵琶をして家庭音樂たらしむべく、就中忠孝仁義勇武の精華を發揮せしめ、教育宗教思潮の調和等廣風の有意義の樂たらしむるを以つて目的とす」と明記されてゐる。斯くて模範國民に依つて始めて高尚な琵琶の妙趣に浸り得ることを仄かして誠忠の意を表明してゐる。今や大塔會を組織して自ら會長となり普及向上に盡瘁し、舞臺にもラヂオにも出演してその神秘的な妙音を漂はせては世人に感動を與えてゐる。斯く斯界の爲め、邦家の爲めを希ふ氏の美志は永久に存続されるであらふ。

荻江節『荻江とく』

小堀トク

明治四年七月七日生

東京市本郷區湯島同朋町一

邦樂にお座敷藝術の一として長唄から分派した荻江節にその第一人者として艶名を謳はれたとく女史は斯流のために齡正に六十路にならんとして尙街頭に呼びかけて世の注視の中心に立つてゐる。女史は東京市下谷區上根岸町の素封家白根やま子邸にその長女として生を享けた。而も才色兼備のきこえ高い女史は若いときからよく女藝一般に通じてゐた。即ち、清元は宗家延壽太夫師に就いて清元千壽の名を許され、河東節にも山彦とくの名となり、長唄にも通じ、就中荻江節は荻江ひさ師に師事して最も熱誠に勵み、師の藝に私淑して忽ち斯藝の蘊奥を極めて名となり荻江とくと號して世に出づるに至つたものである。こうして多藝多才の女史は各れも大家の域に進んで他藝の短を捨て、長を採り、萎微して再昔日の面影の薄くなつてゐる荻江節に敢然と止まり、その挽回には凡ゆる努力を續けて來てゐる。内に在つては門弟の指導に特に細心の意を注いで當り、外にあつては或は舞臺に立ち、又近時ラヂオの創設以來はマイクロホンの前にも現はれて精力のあらんかぎりの活躍に忙殺されてゐると云つても過言ではない。従つて側のみる目にも血のにじむやうな精勵は、體て女史の技藝の上にも一層の光りを増して、昨秋十月に東京から放送した「紅葉狩」にもよく演出されてゐたものでフアンの時ならぬ絶叫を呼び起したものであつた。今や斯道は日に月に進んで益々隆盛に赴いて行つたことは、約五十年間風雪暖雨をも厭はず、孜々として盡して來た女史の誠意が酬ひられたものと云ひ得やう。

洋樂

天野喜久代

明治三十年八月二十四日生

東京市外大森不入斗三四一

輓近洋樂の普遍化さるゝに隨つて、『トスカ』『ラ・ボエーム』其他が順次放送されて、再び歌劇隆盛の機運に向ひつゝあるは、定に喜ぶべき現象である。斯る秋に際して、當時歌劇壇の先驅者として、帝國劇場に、赤坂ロイヤル館に、ロシー氏を輔け、清水金太郎氏等と共に、第一に立つて異彩を放ち、具さに創始時代の苦闘を續けた女史を懐しむ者も亦尠くないと思ふ。女史は明治三十年八月、千葉縣佐倉町の出生、水郷に近い靜寂な環境に、その豊かなる樂才は培はれた。日本橋高等女學卒業の後、帝國歌劇部に入り、第二期出身、専らロシー氏の薫陶と、ベッオールド夫人の指導を受けて、研鑽するに孜々として倦むところがなかつた。後年歌劇の大勢淺草に移るや、止まる事僅かにして、独自の道を開拓し、新生面を『お伽歌劇』に見出し、日蓄會社、日本ビクター等の招聘を入れて、レコードの吹込み數十種に及び、幼きものの情操教育に資する所が多い。東京放送局に於ても、田谷力三氏等と共に『アイダ』『アタゴオーケストラの伴奏で』『ヴァレンシア』『サロメ』及び歌劇カルメンの中より、『ハバネラ』『ジプシーの唄』等數種を獨唱して、多大の好評を博した。そして盛衰、變遷の多い斯界に確固たる歩みを續くる女史の存在を力強く思はしめる。而もラヂオ科學の目覚ましい躍進と相俟つてそれに依る刺激は就中洋樂壇に著しい啓蒙を與へて廣く普及されて來た今日、その堅實な藝風を豊かな樂才とを持つて斯界の第一線に立つ女史の明日により大きい期待を持つものである。

洋樂

木下保

明治三十六年十月十四日生

東京市小石川區竹早町二五

東京大阪兩放送局から再三放送してその樂殖の偉大さを謳はれてゐる木下保氏は、兵庫縣豐三町に生れた。そしてその樂才は幼少の頃から芽生えてゐたと云はれる。兵庫縣豐岡中學に在學の當時、既にヴォーカルに於て優秀なものがあつた。澤崎氏にみとめられて斯道に精進することにした。斯くて卒業後直ちに東京音樂學校に聲樂科學生として入學し、ベッオールド、レーベ、舟橋の諸教授に指導を受けて大正十五年卒業し、更に師の推薦に依つて研究科に進んだ。一方慶應大學ワグネルソサイターの指導講師となり、又東京女子音樂學校にも教鞭をとつて今日に至つてゐる。氏の處女演奏トラバトールのミゼレイは、音樂家として、斯界に乗り出す第一歩を堅實に踏みしめたものと云つてよい。其の後壇上にもラヂオにも出演して、見事な樂才を發揮してゐることは世人熟知の事である。氏はシューマン、ハインク氏のヴォーカルに憧憬し、ボルフ、フーボの作曲、シーベルトの作曲等を愛好してゐる。飽くまでも研究的に大きく展開せしめんとする氏の藝術的襟度は、その恵まれた樂才と相俟つて、明日に輝かしい世界を見出すであらふ。氏はスポーツ趣味に生きる快活な青年で、野球、庭球は得意である。而もこうした反面墓地の幽寂な空氣の裡に、靜かな反省を試み、心ゆくばかり、夢幻の境に浸つて藝術的精魂の清淨に努めると云ふ。斯くて得た感覺が又詩となつて創作することもある。こうした方面にその餘蘊を求めてゐることは氏が如何に樂の眞髓を極めるに、眞摯であり、哲學的であるかと窮はれて氣強い。

尺八、琴古流『蓉堂』

石井梅次郎

明治二十二年一月七日生
東京市赤坂區北町六ノ四七

兎角世に名をなすものは既に幼時から、それに手を染めて神童の譽の高いものである。小石川竹早町に人となつた氏はまだ二十歳の時琴古流の達人水野呂童師に師事して尺八を研究し初め二十五歳の時斯界の巨星三浦琴堂師の門に入つて更にその奥技を極めんとし傍ら名人の藝風に接した。而もよく斯界に於ける神童をも凌いで早くもその才腕を認められるに至り、大正四年には自ら蓉風會を興して主宰し、多くの門弟に師事されるに至つた。勿論この間の氏の努力も蓋し筆舌に盡し得ないものがある。師に仕へてよく練達した氏は今や師となつて後進に當るに實に誠と熱とを以つてし、極力その向上を願ひ、加之、濃厚な性質と相俟つて後進からは慈父の如くに慕はれてゐる。又その藝風をみると、明治四十三年、小石川傳通院に開催された洞風會の演奏會に「八千代獅子」を吹奏してその才腕を認められて以來、報知講堂、青山會館、美術學校等に開催して、場を踏む毎にその名聲を博し、時を経るに従つて益々その牙をを示して來た。現に恩師三浦琴堂師を首班とする琴古會を興しその幹事に推されて活躍を續けてゐる。生來着實な、そして何事にも徹底を期する氏は常に古曲の研究に努め、琴古流の本曲を基本として現代人の要求する曲を創造せんことを期してゐるが、今春も氏の研究にかゝる尺八本曲「下り葉の曲」「鹿の遠音」等の古典的な難物をラヂオに放送して、不斷の努力を思はしめるものがあつた。斯くて氏の藝風は妙境に入り替く樂界の渴仰を受けてゐる。尚趣味は撞球、將棋等であるといふ。

義太夫節『豊竹昇之助』

玄 番 米 子

明治二十二年十一月八日生
大阪市南區南炭屋町三二

關西義太夫界の中堅となり、その振興には一段の力を致してゐる昇之助女史は、同時にラヂオの社會に於ても中堅演藝家として、その名を轟はれてゐる。大阪市東區北久寶寺町に木谷菊次郎氏の息女として生れ、その十四歳のとき一家を揚げて東都に居を移した。幼いときから多少義太夫に手を染めてゐた女史はこゝに於て立派な師匠を得て精進することになつた。即ち先代竹本相生太夫、富助、壽太郎の諸師について永年教を受け、體て技の上達するに及んで有樂座、明治座、新富座等に出演してはその藝才に驚歎せしめてゐた。而も娘義太夫師としての非常な人氣を一身に集める頃、即ち大正七年東京を去つて大阪に歸ることになつたが、女史なき後の寂寥さを思ひ至るとき非常に帝都の斯界から惜しまれたものであつた。歸阪後は更に道八、友次郎、津太夫、土佐太夫、三代吉兵衛の諸氏に就いて愈々勵む傍ら、東京に於けるより以上の人氣の中に斯界に活躍してゐる。そして今や女史は松竹合名の請により松竹座専屬となつてその牙えた藝才を發揮してゐるが傍らラヂオにも放送して同好の士を狂喜させてゐる。殊に東京に於ける女史のファンはどんなに歡喜してゐることだらふか、今夏も義大夫御難先代萩を大阪から中繼放送して、昔に劣らぬ人氣をその身に浴びせかけられたものだ。女史は藝術家には稀にみる藝の高尙優美と品性の純潔さを持つものでその人格をも慕はれてゐる。尙長唄や清元等にも造詣深く、その秀れた藝才を遺憾なく發揮してゐるものと云つてよい。

筑前琵琶、橋流『法嬉山、旭劍』

鎌原かつ子

明治二十年六月生
東京市芝區櫻川町四

帝都女流琵琶界の中堅として普く知られてゐる旭劍女史は、昭和三年十二月、哀傷極まりない悲曲伏見の吹雪なる題下に筑前琵琶の處女放送をしてラヂオ界にも名を轟はれたものである。女史は日本の關門下關市の砂糖問屋に生れ、幼い時から婦人としての教養を積むに怠りなく、茶の湯を表千家流に、生花を池の坊流に學び、又箏曲、長唄、清元等の道をも修めるべく勵んでゐた。小學校を卒業後裁縫女學校に通ひ、幾許もなく上京して東京女學校に通學する身となつたが、藝道を忘れ兼ねて大正元年四月から宗家橋旭翁師に就いて専心研精することにし、三年五月には旭劍の雅號を授けられ、越えて五年三月奥傳並に教師免狀を許された。こうして健やかにかに延びて行つた樂才が體て圓熟の域に達したとき、旭劍會を組織して門弟指導の機關を興した。其の後同十年十月皆傳に進み、更に五絃をも研修し、法嬉山の雅號を許され、現在は總傳に列し、五絃の研究と後進の指導とに専念してゐる。其の後は舞臺にも、ラヂオにも出演し、競演會にも優秀な成績を収めてゐる。大正十五年十月九日名古屋に於ける旭會全國大會に東京を代表して項羽を演奏し萬來の喝采を受けた。なほ女史の生家は歌舞音曲の愛好者を多く出し、令兄春雄氏は旭潮、令弟貞吉氏は旭彌と各々號して何れも琵琶界に於ける意氣ある新人として知られてゐる。尙女史の家庭には斯道の達人で旭鶴としてその名を轟はれてゐる夫君良三氏との間に妙子嬢を恵まれてゐる。斯くの如く達人の多くを出して斯界に盡してゐるのは稀らしい。

箏曲、山田流『富佐治』

仁木ふき子

寛永六年十二月二十日生
東京市芝區西久保巴町三四

山田流箏曲界での元勳として幾多の後進に慈母の懐しみを抱かせて慕はれてゐる富佐治女史は、古い身に新しい氣風を受け容れて、最近新科學によるラヂオに放送して、新人をも躍若たらしめてゐる。越後の地藏堂町に生れた女史は、叔母君が生田流箏曲を教授してゐた關係上、幼時から斯道に接觸してゐたが、偶々山田流箏曲の名手として知られた佐藤佐久子女史が、女史の住家の近くに移住されたのでその門下となつて研究を續けることになつた。そして日夜孜々として勵んで著しい技の上達を示し、十七歳のとき與許を授けられるに至つた。而も尙意ることなく努めてゐる裡、師佐久子女史の上京するに當り、女史も亦同道を願ひ、共に東都に上つて更にその藝を磨かんことを懇願し漸く許されて出京したのは女史四十五歳の時であつた。其の後は専ら斯道の蘊奥を究めるべく研鑽し、傍ら師を扶けて門人の指導と、斯道の普及とに努め乍ら老の身を養つてゐる。五十路の坂を越してより早や幾星霜、だのに尙壯年にも増す意氣と希望を持つて目覺しい活躍を續けてゐる。今年の八月にも盛夏の酷暑を物ともせず、東京放送局から「小夜碁」「茶の湯おんど」等を鏗びた澄い聲で唄ひ、鮮やかな撥の捌きをみせてゐたことは流石に世人を驚歎せしめたものだ。現に山田流箏曲協會の評議員として宗家を扶けてその樞機に參劃してゐる。女史は多事な過去を顧みたとときその歩んで來た幾多の難道は流石思ひ出の種となり、後進への語り草として、よい教訓を垂れてゐる。

常磐津節『常磐津賦之助』

田中正夫

明治三十四年五月十二日生
東京市四谷區舟町四〇

年少氣鋭の新人田中氏も齡未だ三十にならずして早くも一流の大家に伍し、各地の舞臺に立ち、最近はやラヂオにも放送してファンに感銘を與えてゐる。今年三月にも有名な「お染久松」を東京から全國に中継放送するに際して三味線を勤めて一段と光彩を添えたことは世の人の記憶に新たなことである。氏の嚴父が桐座を経営してゐた關係からか、四谷に生れた氏は幼時から三味線に興味を覺え、十二三歳の頃には早くも素人の域を脱してゐたと云はれる。従つて隣人、近親の褒めに遂心動かされて、十八歳のとき當時麒麟大夫を名のつてゐた現在の兼太夫師の門に入り、愈々専門家として斯道に精進することになつた。その二十一歳のとき横濱劇場に於ける「京人形」に文字太夫師とともに出勤して上調子を弾いて榮ある處女出演をするまで約三年、青年に與へられた唯一の悦樂をも顧みず只管藝の上達、洗練を期して勵んだ。而もその秀れた撥磨き、床しい藝味は氏の苦練の修業に酬ひられて齎され、齊しく聴衆の熱狂するところとなつてゐる。其の後大正十四年、麒麟會を創立して其の主宰者となり、二十四歳の頃から多くの門弟に師となつて導いて來た。そして元氣に滿ち、覇氣に富んだその藝風に慕ひ集るもの日に増してその數を加え、今や千葉縣木更津町、東京市麹町區富士見町の二ヶ所にも教授所を開設して愈々斯界のために廣く活躍してゐる。氏は又餘暇を得ては古典の研究に没頭し、未だ世に知れない秘曲の眞髓を究めては、廣く世に紹介せんと企てゐる。壯年なる氏の名は今後益々我々の前に現はれて愈々牙を示すであらふ。

尺八、琴古流

中山徳三

明治十一年八月十二日生
東京市牛込區若松町一三三

尺八界に中山徳三氏を見出し得たことは、斯界の一つの誇であらふ。だが同時にラヂオ演藝界に氏を求め得たことはファンにとつても大きい愉快に違ない。熊本市松橋町の素封家に生れた氏は、代議士を實家から出し、又竹友社宗家川瀬順輔師を義兄に持つことは大なる誇であらふ。氏の出生地松橋町は由來遊藝の段盛を極めてゐる地であるだけに、亡き父君も能樂に興味を持ち、従つてその家庭には諸種の藝人の出入も多かつたと云ふ。こうした環境に育つた氏には矢張り藝術の血が流れてゐたのは争れぬ事實で、尙理解ある父の下に庇護され乍ら、温かくその才能を培ふのには充分であつた。斯くて氏は尺八界に乗り出すことになり、偶々令姉の關係から明治三十五年川瀬順輔師の巡遊に隨行することになり、全国各地に渡つて益々藝を磨いて行つた。これが體て氏を完全に斯界に誘引する動機となつたのである。明治四十年に朝鮮京城に旅行して國風音樂會を組織し、荒蕪たる朝鮮の原野に幽遠な琴古流の雅風を鼓吹し、記念に音樂堂を寄附したもので、今も尙南山の一角にその典雅な委は氏の鴻業を誇るかのやうに巍然と聳え立つてゐる。其の四十五年から東京に居を移し、爾來斯道の啓發に努めて止まない。斯くて尺八界の權威者として名實共に揚り、ラヂオにも時折出演して興を添へてゐる。先にも川瀬、井村兩女史の華曲殘月に伴奏して一層その趣を添えたものだ。尙氏は家庭に在つては、琴、三絃をよくなるたい子令夫人と共に恵まれたそして平和な日を送つてゐる。

錦心流琵琶『畑 秀水』

篠崎金太郎

明治二十四年五月三十日生
東京市本郷區千駄木町六〇

錦心流琵琶師匠三千名の中、その最高幹部として錦號を持つてゐるものが八名あるがその一人は錦成の雅號を授けられた畑秀水師その人である。氏は東京市下谷區上野山下町に生れ、少年時代から、琵琶演奏大會には欠かさず傾聴してその妙趣に浸つてゐた。斯くて日を経るに従つて益々興味津々たるものがあり、遂に十六歳の時錦光流の名人伊丹葉津彦師に入門し、僅か二年の裡に著しい藝の進境をみせた。明治四十三年に錦城中學校を卒業するや更に永田錦心師に師事して愈々斯道の密林にわけ入つたが、而も俊敏な氏はよく機微を捕えてはその眞髓を知悉するに努め、忽ち儕輩を抜いてしまつた。即ち大正二年九月には奥傳を、八年二月には皆傳を授けられて特に師からその藝才を賞讃されたもので、越えて昭和二年四月には總傳を與えられて斯流の最高榮冠を贏ち得て錦號をまで贈られた。そしてこの間大正二年に秀水會を興して自ら主宰し、後進の指導と同門生の相互研究に資し、又十五年には錦心門下の秀才を以つて組織する錦星會を興して普及と練磨の一助とする等凡ゆる努力を續けて來てゐる。現に本部に事務長格として師家を扶け幾多同流の士からその人格藝風を慕はれてゐる。氏は亦作曲をも能くし、悲曲佐渡丸等はその秀逸なものである。因に氏の藝風は今夏ラヂオに放送した新曲茨木に依つても窺はれる如く實にその奥妙を極めたものである。資性温好そのもの、氏はその藝と相俟つて日に増す門弟の指導にも寧日なきの多忙を極めてゐることである。

義太夫節『竹本都太夫』

安藤鶴吉

明治十一年十月十七日生
東京市四谷區麹町一三ノ一

義太夫節界の權威として舞臺にその名を轟はれてゐる都太夫師は更にラヂオ界にも活躍し、「茜染野中隠井」を放送した時等は義太夫は氏に依つて代表されたかのやうな人氣を一身に集めたものであつた。東京市淺草區向柳原町に生れた氏は十八歳のとき義太夫の手解きを受け、翌年早くも初舞臺を踏んでその天才を轟はれたものだ。爾來東京に松本亭其の他の寄席に出演し乍ら技藝の練達に努めてゐた。明治三十二年、氏二十三歳の時朝太夫師の門に入つて親しく教を請ひ、朝路太夫と名乗つて地方巡業に旅立ち更に豊竹生駒太夫一座に加つて再び地方に遊んだものだ。歸京後は竹本二見太夫や、竹本大島太夫一座に加つて或は寄席に、或は再三地方への巡業にと、自己の藝能を磨き、又斯道の普及等に最善の努力を續けて來た。其の後偶々斯界の權威と稱されてゐる杉山茂丸師にその天才を認められてより、竹本羽太夫の藝名を授けられて益々その名を轟はれるに至つたものだ。こうした藝の進展と、そして氏の高潔な人格とは體て、明治三十九年八月目都太夫を襲名して朝太夫一座に加はつて世に出たが越えて大正五年九月愈々獨立して斯界の一角に巍然とその勇姿を聳やかし又他面氏の藝風を慕ふ多くの門弟の指導にも懇切を極めて日に月に勢を増して斯界に重きをなして來た。尙放送局の設置されるや幾度も出演してはファンの好評を博してゐる。因に氏は日蓮宗に歸依して敬信の念篤く、又撞球を趣味とし、その家庭には京子夫人、鶴夫君がある。

日本ラヂオ總覽

後卷(B)



日本放送協會關東支部理事

松代松之助

慶應三年九月二十四日生
東京市外下濠谷一二四

無線電話の事實上の作用を世界的に知らしめたのは、彼のマルコニーが始めて火星との通信を試みんとして発見したものが、偶々ダーダネルス海峡を越えて佛國に到達した事に因を發して居る。然るに其れに魁すること數年、我が海軍が日本海々戦に於て其偉力を發揮したことは、假令それが軍機の秘密上外部に發せられなかつたとは云へ、我國として大いに世界に誇るべきであらう。當時の無線電機の設計は、我が國無電技術界の權威者たる、松代松之助氏の功績に外ならなかつた。氏は京都市本派本願寺待寮の家に永秀氏の長男として生れ、夙に英學を學び、東京郵便電信學校を卒へて選信省海軍省等の囑託となつた。専ら電氣書類の翻譯に従事して居たが、明治二十一年選信省技手として電氣試驗所に勤務し傍ら電波式無線電信法の研究に没頭して同三十七年冬月島臺場間に於て我國最初の通信實驗に成功した。越えて同三十三年海軍無線電話調査會委員となり、氏の設計にかゝる機械を基礎として調査の結果三十五年遂に海軍器に採用せらるゝに至つた。日露役の際目覺しい働きを見せた無線電信機は即ち是で、世界に於ける無線電信の實用化は實に之が嚆矢である。氏は功に依り勳五等双光旭日章を授けられた。三十八年辭して日本電氣株式會社に入り、大阪支店を興し、大正六年本社販賣部長に擧げられた。現時同社取締役を兼ね、守谷商店監査役で、東京電氣業組合副頭取に推されて居る。放送局設立當初より功勞多く、目下關東支部理事として令名を馳せて居る。武術、茶の湯の趣味が深い。

講演

一木喜徳郎

慶應三年四月生
東京市麹町區一番町四官舎

昭和三年十一月四日御大禮記念講演を、東京中央放送局より全國に放送して居る一木喜徳郎氏は、靜岡縣が産んだ近代の人傑である。家は同縣岩田郡袋井町川井に住する舊家で、先代は喜三司氏、氏は同縣岡田良一郎の二男に生れ、迎へられて一木家の養嗣子となつた。前文部大臣岡田良平氏の令弟に當り、共に知名の士として謳はれ兄弟揃つた麒麟兒を以て夙に世人の儀表とされて居る。氏は明治二十二年東京帝國大學法政科政治科を優等を以て卒業し、翌二十三年宮内書記官に任ぜられた。志す所あつて同年休職し、自費を以て獨逸に留學し、滯留三年法學政治學等の研究を遂げて明治二十六年歸朝した。復職して東京帝國大學法政科大學教授に任ぜられ、内務書記官を兼ねた。同三十一年兼官を辭し、更に内務省参事官を兼ね、次いで内務省参事官を兼務した。明治三十三年法學博士の學位を受け、同三十三年には貴族院議員に勅選せられた。かくて同三十五年法制局長官兼恩給局長に任じ更に帝大教授を兼ねるに至つた。同四十一年七月内務次官に擧げられ、降つて大正三年大隈内閣組織せらるゝや文部大臣として專断に連り、更に轉じて内務大臣となつた。大正六年樞密顧問官に親任せられ、次いで樞密院副議長となつた。同時宮内省御用掛を兼務して居たが、大正十四年牧野伸顯氏の後を享けて宮内大臣となり精勵今日に至つて居る。現に尙ほ賞勳局議定官を兼任して居る。昭和元年大喪使長官、同二年大禮準備委員長被仰付、從二位勳一等である。人格識見學殖共に兼備した氏の如きは蓋し稀に見る處であらう。

講演

永田成美

明治六年九月十一日生
東京市芝區白金今里町八九

東京中央放送局の趣味講座に於て、日本刀に就いて放送を試みた氏は、深い刀劍趣味を持つて居る人である。氏は福岡縣の出身で、士族永田磐之助氏の長男に生れ、霸氣に富んだ九州魂を恵れ、弱年青雲の志を抱いて東上した。當時唯一の學府たる慶應義塾大學に學び、砥礪數年刻苦修養に努むる所があつた。明治二十八年之を卒業するや直に中外商業新報記者として操縦界に入り、その高邁なる識見を以て次第に椅子を進め早くも一社に重きをなしてゐた。在る事十有餘年にして明治四十年三越呉服店に招聘せられ一躍其庶務課長として實業に轉ずるに至つた。其の益々天稟の才能を揮つて、眞骨頂を現はし、遂に日本瓦斯株式會社の理事に就任した。天馬空を行くが如き其の飛躍を以てしても氏が如何に非凡の才能を有するかを察するに難くない。其後再び操縦界に轉じて帝國新報社主幹となり、雄渾自由なる筆を揮つて克く一社の聲譽を興した。降つて大正元年更に中外商業新報社に復歸し、營業部長として重きをなし、同九年取締役となり、營業部廣告部の主幹理事に任じて經營の第一線に立つて活躍してゐる。其不羈高邁なる志操識見を以て雄飛する所將に操縦界の一權威となすに足らう氏の刀劍研究は、時代人物刀劍の關係を歴史的に明かにしたもので、亦所藏の名刀も多く、其の造詣に就いては眞の放送を以て片鱗を窺ふことが出来やう。氏は其性皎潔謙遜で、腕の入趣味の人として、將亦人格の人として八面玲瓏たる人材である。家庭には種子夫人あり貞節の譽が高い。



日本放送協會關東支部理事

大倉發身

明治七年十一月三十日生
小石川區關口臺町

環境は人を造るとか、峨々たる秀嶺と、潺々たる清流に恵まる、信州は由來政界に財界に學界に幾多の逸材を送り出して居る。本邦實業界の耆宿として自他共に許されて居る大倉發身氏も又信州の人、舊飯田藩の家老職石澤謹吾氏の次男として呱呱の聲を擧げ後乞はれて大倉家の養子となつたのである。明治三十三年東京帝國大學文科大學史學科を卒業後實業界に身を投じた。時恰も日露戰役の勃發と共に捲き起つた財界未曾有の風雲に乗じ、天稟の敏腕を縦横に揮つて一大活躍をなし、事毎に大成功を収め噴々たる名を馳するに至つた。氏は曩に大倉組、城東電氣、日本電氣黒鉛、日本電氣冶金、月島機械、鹿島炭礦、木村鑛業、日本耐火煉瓦株式會社及び大島製鋼所等の取締役、日本自動車、大倉鑛業株式會社の監査役として實業界に貢獻する處極めて多く、現に大發事務所を設立して輸出入商を營み、傍城東電氣軌道、安中電機、月島機械、東京建鐵等の取締役として重きをなして居る。此外氏は現に日本放送協會關東支部理事等に推されラチ才發達史上にも又隠れない功績を遺して居る。即ち大正十三年東京市三十二團體、大阪市十七團體の放送事業經營の出願に主務省の躊躇せる折柄、氏は東京無線放送株式會社を代表して時の選相藤村義郎男を説破し、一方各團體を合同せしめて公益を目的とする法人組織となし、漸く許可の運となるに至らしめ東京放送局の創立となつたのであつた。此の間勳もすれば營利に走らんとする各團體の間を奔走馳驅した氏の超人的努力は我國ラチ才發達史上特筆すべきものである。

講演

片岡彌六

明治十六年九月二日生
大阪市住吉區北田邊町八七五

資本主義爛熟期の一の現れとして、デパートの隆盛は近年殊に著しく、之に對して小賣商は逆比例的に衰頹の悲惨な經路を辿つて居る。是近年の社會問題中一個の難問として喧々たる論議の中に横つて居るが、氏は自家の職責上及び久しき研究の結果、前後三回に互つて大阪中央放送局マイク・ロホンの前に立ち、之が理論より各國現狀に説き及ぼし、進んで之が對策に就いて大なる斷案を下した。氏は大阪目抜き會根崎町に生れ、若くして私立奈良中學校に學び、明治三十六年優秀な成績を以て卒業した。洋々たる希望を前に、直に米國に渡つて更にコロンビヤ大學に入學して再び研鑽を積み、主として教育學の研究に身を委ねた。學成つて後は彼の地に留り、在留邦人中の有識者として共存共榮の爲に目ざましい活躍を續けてゐた。大正十一年新知識を齎らして歸朝するや直に通商部貿易事務囑託として大阪府に奉職した。今日引き続き商品陳列所に於て精勵して居るが、流石に生え抜きの土地兒として心から商工業の中心地たる大阪の發展を希ひ、眞摯な態度で常に職務に執掌して居る。氏は實にデパート對小賣商の都市政策に關しては一見識を有するばかりでなく、殊に商品學等に關する造詣が頗る深い。其の性格篤實温厚で、人に接して圭角なく一見宛かも舊知の感と與へる所流石に米國仕込みの深い素養を感ぜしめるものがある。八重子夫人は貞淑の譽高くよく夫を扶け、其の間に伶俐な二令嬢を儲け家庭は極めて圓滿である。

講演

近藤和作

明治十二年十月生
東京市本郷區駒込西片町一

東京中央放送局婦人講座に於て、昭和四年二月二十二日「高等女學校卒業期に直面して」の題下に多年の尊い經驗に立脚して女子教育機關の缺陷を痛論した近藤和作氏は、現時女子高等學園長として女子教育に於ける功勞者である。氏は長野縣の出身で、故近藤新太郎氏の二男、夙に高等學校を卒へ、東京帝國大學工學科に入り採鑛冶金科に於て研鑽の功を積んだ。明治三十八年之を卒業するや古河鑛業會社の招聘を受け技師として入社し、同社に勤務すること十有八年、次第に累進して重きをなした。大正十一年退社して同四月豫て着眼した女子教育機關の設立に従事し、遂に現時經營せる女子高等學園を興すに至つた。爾來殆んど心血を盡いで同園の經營及女子教育の爲に獻身的努力を續けてゐる。曩に推されて兒童科學教育會理事長に擧げられ引續き在任中である。氏は從來の女學校卒業生の進んで修養に就く傾向を、第一は職業婦人たらんとして専門校に進む者、第二は教養のため漫然専門校に進む者、第三は從來の女學校卒業後家庭に就いて所謂「お稽古」に暮す者に三大別し、然して大學專門學校等を卒へた男性の配偶者として善良なる女子教育機關の未だ備はらざるを指摘し、高女卒業生にしてより良き結婚を望む者のために家族主義的で、而かも専門に偏しない即ち近代婦人として必要な學科を自由に選擇せしめんとする新教育機關の必要をマイクの前に力説したが、聽て氏の手によつて之等の新教育機關の生れるのも、近い將來にあるだらう。



日本放送協會關東支部理事
新名直和

明治十三年三月生
神奈川県鎌倉大町蔵屋敷七二七

日本放送協會關東支部理事として令名ある新名直和氏が、其卓抜なる技術と高邁なる識見とを以て多年我國ラヂオ界に盡せる功績は洵に没すべからざる者がある。瑠璃色の空と水面、青い松、白い砂、そうした美しい瀬戸内海に面したところの愛媛縣西條こそは氏の夢寐にだも忘るべからざる懐しい搖籃の地である。幼にして穎悟夙に青雲の志を抱いて上京し、早稲田大學法科に學び専ら筆雪の功を積み、優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直ちに職を通信省に奉じた。之れ實に氏が實社會に乘出した最初の第一歩で、榮ある官界生活の一頁は此時から開かれたのである。後幾何も無く其非凡の才能と熱心なる精進振を認められ、拔擢せられて横須賀郵便局長と爲り、複雑なる通信事務を執掌して完全にその使命を果し、その明哲なる頭腦と事務的才能に當事者を一喫せしめたものだ。而も高潔なる人格、火をも踏む俠氣と溢るゝ許りの温情とは上下共に絶大なる信望を得て尙餘りあるものがあつた。後歐米視察を命ぜられ歸朝後東京中央電話局長となり、其得たる處の新知識を應用して幾多の改善を行ひ大なる功績を残しつつも、大正十三年感ずる所あつて自ら官界を去るに至つた。偶々東京放送局の設立に際し、總裁故後藤新平伯に懇懇せられて之が常務理事となり、爾來多年の蘊蓄と尊い經驗とを以て超凡の才能を發揮し、黎明期にあつた我ラヂオ界に一大光明を齎した事は普く人の知る處である。後病を得て職を退き現に日本放送協會關東支部理事として斯界に重きをなして居る。

講演

藤田謙一

明治六年一月五日生
東京府下荏原町下蛇窪下村通五七五

多年實業界に令名を馳せて來た東京商業會議所會頭藤田謙一氏は、昭和四年度國際労働會議に資本家側代表として出席し、歸朝後九月二十一日中央放送局に於てジュネーヴ會議の内容其他に就いて講演を試みた。氏は青森縣の出身で、明石永吉氏の二男として生れ、後先代藤田正三郎氏の養嗣子となり前姓を改むるに至つた。同二十七年明治法律學校を優秀な成績を以て卒業するや、職を大藏省に奉じて居たが、後辭して岩谷商店の支配人となり、身を實業界に投じた。是即ち氏が後年實業界に大をなすに至つた第一歩である。其後各會社に關係して次第に實業界に堅實なる地歩を占め、遂に朝鮮印刷株式會社社長に擧げられ、更に臺灣鹽業株式會社專務取締役等の職に就くに至つた。後更に驥足を伸ばして、富士水力電氣、箱根土地日本活動寫眞、東京護謄、明治漁業、長門起業炭礦各株式會社に社長として采配を揮ひ、藤田合名會社を興して代表社員となり、東京毛織專務取締役となつた。此の外旭石油、東洋海園地、秋田鐵道、日本フェルト、東京瓦斯電氣工業、福島炭礦、富士見延鐵道、クロード式窒素工業、香掛海園地、信越電力各株式會社等の取締役に就き、北海道拓殖株式會社監査役をも兼ねて居る。從來公職に就いて貢獻する處極めて多く、目下人口食糧問題調査會臨時委員、商工審議會委員等に擧げられ又東京商業會議所議員たること久しく、大正十五年七月推されて會頭の重責に就いた。氏は當代實業界の第一人者で明日の發展を期待されてゐる。蓋し稀に見る人傑であらう。

講演

安達謙藏

元治元年十月二十三日生
東京市麻布區廣尾町二

伊勢大廟式年遷宮祭に當る昭和四年十月二日時の内務大臣安達謙藏氏は、御遷宮當日伊勢山田神宮司廳より中繼放送を以て全國に式年遷宮を中心として國民精神作興の講演を試みた。即ち此の光輝に満ちた日を期して天壤無窮の國體精神を高潮し、敬神尊王の大義を喚起して國民の自覺を促したのである。氏は熊本藩士安達二平氏の長男で、天資聰敏幼少より漢學を修め、進んで熊本濟々費に入つて高等學を修め、笈を東京に負つて法政及諸學科を修めて多年螢雪の功を積んだ。若くして政界に志し、偶々、昨半島の風雲急を告ぐるや氏は彼の地に渡つて朝鮮時報、漢城新報を創立して卓見を揮ひ、當時大いに輿論の喚起に努めたが、遂に王妃殺害事件に座して公使三浦梧樓氏と共に廣島に引致された。後熊本に歸り故佐々友房氏と計つて國權黨を興し、明治三十五年衆議院議員に當選し、爾來中央政界に馳驅して後中央俱樂部を組織した。之が立憲同志會と合併成るや同會幹部に擧げられたが大正四年憲政會と改稱するに及んで其總務に擧げられた。衆議院議員に當選すること前後九回、曩には外務省參政官に任ぜられ、大正十四年五月選信大臣に親任せられ、同十五年十二月内務大臣臨時代理を被仰付れ、昭和二年六月立憲民政黨成るや其總務となり、降つて同四年濱口内閣に列して内務大臣となつた。從三位勳二等である。之より先き氏は九州移民會社理事長、池田金山會社社長として實業方面にも活躍して居る。氏は實に現内閣の柱石で、政界の香宿として一世に景仰せられて居る國家的の人材である。

前日本放送協會關東支部常任理事

小田部胤康

明治十三年二月生
東京市牛込區白銀町二〇

我國の放送事業は創始以來日向淺きに不拘、恰も燎原の火の如く凄じい勢を以て進展し、新興ラヂオの一新紀元を畫せんとして居る、之れ一面ラヂオの文化的機能によるとは云へ我が黎明期にあるラヂオ界に一の曙光を齎した當事者の獻身的努力と大なる苦心を外にして其發達を物語ることは出来ない。元日本放送協會關東支部常任理事の榮職に在つた小田部胤康氏が、從來我ラヂオ界に致した其功績は特筆大書すべきものが在る。嚴父は小田部助左衛門氏と云ひ茨城縣の人、氏は其長男として牛込白銀町に生れた。幼にして穎悟、夙に優秀なる成績を以て開成中學を卒業するや、直に秀才の府を以て稱さるゝ第一高等學校に入學し後進んで東京帝國大學法科大學に學び、斯界の蘊奥を極め首尾よく卒業したのは明治四十年陽春三月の事であつた。次で文官の登龍門たる高等文官試験に應じ見事合格し、直ちに職を通信省に奉じた。以來燃ゆるが如き熱と意氣を以て事務に精進したが、後幾何も無く屬より拔擢せられて通信事務官に進み、更に臨時調査局事務官を始め、監察官臨時電信建設局書記官等を経て京都及新潟の各郵便局長等に歴任し、大正二年遂に選信大臣官房監察課長の榮職に就き次いで仙臺選信局長に擧げられた。偶々東京放送局が日本放送協會となるや、選ばれて理事となり、人間味豊かな性格と、理智的才能を遺憾なく發揮したのである。昭和三年、おしまれて、其の職を辭したが、ダイナミックな發達をどけたラヂオのためには、名理事の名と共に忘れてはならない恩人である。

講演

武者小路 公共

明治十五年八月二十九日生
東京市牛込區市ヶ谷仲町三〇

前後十一ヶ年の間黒海及び北海の諸邦に外交官として在動したる子爵武者小路公共氏は、曩に久々で歸朝し、其滯歐中の職務上の關係より各國皇帝との歡談其他珍らしい外交官生活をARKで放送し、ラヂオファンに深い印象を與へた。武者小路家は家門舊い名家で、其の遠祖は大職冠藤原鎌足公より發し、從四位侍從公種に至つて分家して武者小路家を興し、それより連綿九代を経て子爵實世氏に至つてゐる。我が公共氏は其三男に當り、彼の文藝家武者小路實篤氏の令兄で明治三十年家督を繼いで襲爵を仰付けられた。夙に第一高等學校を優秀なる成績で卒業し、進んで東京帝國大學法科獨法科に學んだ。そして出色の成績を以て明治四十年之を卒業するや直に外交官試験に合格した。後外交官補に任ぜられて、間もなく上海駐劄領事官となり、次第に累進して明治四十三年七月大使官三等書記官に任ぜられ、獨逸に駐在を命ぜられた。次いで大正五年外務省書記官に任じ、同七年外務省政務局第二課長に補せられた。大正十年大使官一等書記官となり、翌十二年大使官參事に進み、白耳義國に駐在を命ぜられた。亦特命全權公使に任じて羅馬尼亞國駐劄被仰付、亦同年七月セルブクロアトスロヴエーヌ國割在兼動を命ぜられた。此の間敏腕の外交官として大にその前途を囑目されてゐたが、今や謙見愈々高く、思慮圓熟、圓轉滑脱の才腕を以て外交官中に異彩を放つてゐる。正四位勳四等、不二子夫人は男爵伊藤藤義節氏の姉君にして、實光、公久、實秋等の有望な子息がある。

講演

米山 梅吉

明治九年二月生
東京市赤坂區青山南町六ノ二六

人種と國境とを超越し、政治宗教等を離れて、人類の相愛提携を眼目として生れたロタリククラブは、國際的俱樂部中最も理想的なる發達を告げて居るものである。我が米山梅吉氏は同俱樂部の一員として久しく奉仕して來た人で、之に就いて昭和四年二月二十三日ARKに於て放送を試みた。サーヴィスを理想とする會則六項目を説明し、更に之を要約したる一、自我に先だつてサーヴィス。一、最も善くサーヴィスをなす者は最も多く利益の二モットーの高遠なる理想を説き、此の人道的なる理想團體の發達を期し以て人類福祉の増進に資せんとする趣旨を縷説した。氏は東京府士族和田竹造氏の三男で、先代米山藤三郎氏の養嗣子となつて前姓を改むるに至つた。夙に青山學院を卒業し、米國に留學して法律及び文學を研究し、滯在八年に亙つて普く造詣を得て歸朝した。其後日本鐵道會社に勤務し、三井銀行に轉じ、累進して同行横濱及び大阪支店長に擧げられた。明治四十二年選ばれて取締役となつて今日に及び、現に三井信託に取締役社長たるの外日本電氣證券株式會社取締役、三井合名會社參與の諸重役である。亦曩には帝國政府特派財政經濟委員として米國に差遣せられ、現時東京商業會議所特別議員、信託協會々長等の職をも兼ねて居る。贅するまでもなく氏は實に我國資本家を代表する有力實業家で、近時勞資愈々反目し、思想益々狂激に趨らんとするに當つて、あくまでも崇高なる人類奉仕の大理想のために氏が率先して盡瘁して居ることは大なる尊敬に値ひする。



北村 政治郎

明治十四年四月十四日生
東京市外濠谷町榮通二ノ一五

我が國無線電界殊にラヂオ界のオーソリテイとして令名噴々たる東京中央放送局技術部長北村政治郎氏は滋賀縣大津市の産、前に激澗たる名湖琵琶を控へ、後に翠濃き山嶺を背負ひ、恰もベニスに麗府を偲ばしむるやうた山紫水明の地が其の懐しい搖籃の地である。そして氏の崇高なる人格は、こうした明媚な大自然の裡に育まれたのであつた。氏は幼にして穎悟夙に秀才の譽が高かつたが、家計不如意の爲十五歳の時縁故を辿つて單身新潟に赴き同地の郵便局に奉職の傍、電信學を専攻した。かくて忍苦の裡に五春秋を重ねたが遂に輝く希望を抱いて上京するに至り、東京郵便電信學校に學んで同校を卒業したのは明治三十七年であつた。直ちに逓信省電氣試験所に奉職して實社會最初の一步を踏み出したのであるが、爾來斯學の研究に精進し我國電氣界の先覺者たる故島鴻博士を助けて斯界に貢獻した處が極めて多かつた。後苦心の結果振動無電開閉を發明して其天才的技を稱へられ大正三年勳七等に叙せられた。而も氏の研究は年と共に無電の神秘境を開拓し、遂に同年七月無線起動裝置即ち逓信省式無線電話機の發明を完成して、世界的に其名を轟かせたものだ。是等の發明は何れも悉く氏の尊い血潮を以つて彩られたもので、其苦心と努力とは實に涙ぐましいものがあつた。後年逓信省第一級功績章を授與せらるゝの榮譽を擔つたのも誠に宜なる哉である。大正八年六月拔擢されて逓信省技師に任ぜられ益々令名を馳せたが同十二年官を辭し、大正十三年東京放送局の設立と共に聘せられ、技術部長となり今日に至つたのである。

講演

望月 圭介

慶應三年二月二十七日生
東京府下南品川町一ノ四

前内務大臣望月圭介氏は、曾て逓信大臣の當時、偶々放送開始滿三ヶ年記念に際し、マイクの前で「放送事業の發達に就いて」の題下に一場の講演を試みた。氏は廣島縣の出身で、望月東之助氏の二男に生れ、明治三十一年一月先代令兄俊吉氏の養嗣子となつた。夙に學習のため上京して攻玉令共立學校に學び、更に明治英語學校で學究に努めた。そして傍ら政治法律經濟學を修めて専ら登雪の苦を積んだ。學成つて後は身を政界に投じ、漸く頭角を顯すに至つた。嘗つて鑛山事業に關係し、亦其卓抜な識見と、高邁なる人格を以て郷黨より推されて衆議院議員となり、克く重任を完了して政治家としての名譽愈々擧るや、累選茲に八回に及んだ。此の間久しく政友會に屬して次第に重きをなし、永く幹事長として一黨の發達に盡瘁し、原内閣成立するや擧げられて農商務省參事官となつた。其後亦政友會總務となり、昭和二年四月大命政友會總裁田中男に降るに及んで遂に逓信大臣の重職に就いた。同黨の信任極めて篤く、亦臺閣中名政治家として國民の聲望頗る高く、鈴木内相其職を辭するに至つて氏は推されて内務大臣として九鼎の重きをなした。丹誠以て任に當り、理解に富む人情大臣として聲譽愈々加はつた。同四年春田中内閣挂冠するや、袖を連ねて野に下り目下閑地に就いて悠游してある。曩に多年の勳功に依つて、勳一等に叙された。亦氏は幼少時代より清元を稽古し、一藝の奥技を極めた名取りで、政界稀に見る粹人である。

講演 大河内正敏

明治十一年十二月六日生 東京市本郷區駒込富士前町三一

理化學研究所長として有名な子爵工學博士大河内正敏氏は、曩に東京中央放送局國產獎勵講座に於て「國產振興と研究發明」の講演を試み、國產振興に對する卓見を披瀝して大に國民を啓發する處があつた。當家は舊三州豊橋藩主で、其の始は鎮守府將軍源經基で、後五代從三位源賴政二男從五位左衛門尉重綱の後胤である。其子顯綱氏は大河内源太と稱し、後十三代の主は有名な伊豆守信綱公で、徳川家に仕へて武州川越城主となり、七萬五千石を賜つたが、寛永二年三州吉田城に移り、豊橋と改稱し六萬石を領した。それより十代を経て子爵信好氏に至り、氏は子爵大河内正倫氏の令兄にして先代信好氏の養子となり、明治四十年を以て襲爵を仰付られた。明治三十六年東京帝國大學工造兵學科を卒業し、更に大學院に留つて研究し、後亦獨逸兩國に留學した。かくて多年の研鑽成つて歸朝するや母校助教に任命せられ、進んで教授となつた。在職實に二十年に餘り、其間専ら研究と學徒の養成とに没頭し、亦臨時産業調査局技師、海軍技師等を兼任した。大正三年工學博士の學位を受け、同四年以來貴族院議員に互選せらるゝ事數回に及んで居る。現に肥料調査委員會委員で、大正十四年大學教授を辭し専ら理化學研究所長として我國化學の進歩發達を期する大理想に向つて著々實績を擧げてゐる。氏は實に國家國民の平和的發展の開拓者嚮導者で、逸すべからざる國家の重寶である。尙亦其政界に於ける飛躍も豫て人の知る所である。功に依り正三位勳三等に叙せられて居る。



講演 長濱宗信

明治九年四月七日生 大阪市東區淡路町三ノ一

大阪中央放送局マイクホンを通じて管内聴取者の前に遺語を傾け多大なる好評を博した我が醫學博士長濱宗信氏は、大阪府立醫學校出身の人材として關西醫界に噴々たる令名を轟はれて居る人である。氏は兵庫縣川邊郡立花村七松の出身で、若くして刀圭家を志し、夙に大阪に出て、勉學し、了つて現大阪醫科大學の前身たる府立醫學校に學んだ。同校を卒へたは明治二十九年で、直に須磨津療養院に奉職して患家に見えた。然し向上心の篤い氏は毫も小成に安んずることなく、更に進んで醫學の堂奥を究めんとし、在勤二ヶ年にして職を辭するや、直に東上して東京帝國大學醫科大學小兒科選科に學び、再び學窓生活に入つた。かくて登雪の功成なるや母校に當る大阪醫科大學に聘せられ小兒科醫長の重任を擔ふに至つた。降つて明治三十八年大阪市今橋四丁目醫院を開業したが、日を逐ふて漸次隆盛に赴き、遂に狹隘を感ずるに至つたので、現地に擴張移轉し、以て今日に及んで居る。先年「蛋白質食餌と含水炭素性食餌の結核感染に及ぼす影響」に就いて論文を提出して醫學博士の學位を授けられ、乳兒腦膜炎の病理に大貢獻を齎した。氏は實に小兒科醫として獨歩の大家と斷ずるに足る人で其著「小兒養育の心得」は曩に丸善書店より發行せられ、既に十一版を累ねて頗る好評を博して居る。夫人との間に大阪醫大在學中の長男宗彦君、同光彦君、北野中學在學中の金吾君外二嬢があり、共に將來を囑望されて居る秀才である。

講演 黒田長禮

明治二十二年十一月二十四日生 東京市赤坂區福吉町一

赤い大きな太陽がスルリと地平線に沈むと、きまつた様に涼しい月が、棕櫚の葉の上にボツカリと浮んでくる常夏の國南洋は、此の世の樂園として我々の百パーセントの憧憬をもつてゐる。それだけに我が黒田長禮氏が、南洋ジャワで開催された第七回太平洋會議に出席しての土産話をAKで放送した事は、我々を最も喜ばしめた講演であつて、氏は鳥の博士として令名あるだけに其の土産話も主として鳥の話であつたが、未知の憧憬の國を彷彿せしめるものがあつた。氏は正二位勳一等侯爵貴族院議員樞密顧問官宗秩寮議官舊福岡藩主黒田長成の御曹子で、從四位理學博士の殿めしい肩書の持主、年少の頃から動物學を好み夙に東京帝國大學理學部動物科に學んで卒業後も大學院に五年間鳥類の研究を續けた。大正五年四月聘せられて海峽總督府動物調査事務囑託となり、翌年四月朝鮮總督府鳥類調査事務囑託を兼ね、更らに同九年二月史蹟調査名勝天然記念物調査會考査員等となり、同年四月米國哺乳動物學會設立委員に推薦された。また十年十一月主獵官、十一年四月東京平和博覽會審査官となり翌十二年從四位に敘せられた。斯る間にも鳥類の研究を怠らず大正十三年「琉球諸島内の鳥類に關する私見」の論文を提出して理學博士の學位をえた。氏は欣求と思慕の裡に鳥類研究を續け、學界に續々と新研究を發表して居る。著書には英文「日本産雜類圖説」富士山鳥界一班「臺灣島の鳥界」朝鮮鳥類の一班」等がよく知られてゐる。因に氏の母君は閑院宮殿下第二王女である。

講演 徳川義親

明治十九年十月五日生 東京市麻布區富士見町三三

華胄界の新人、また狩獵家として有名な徳川義親氏は昭和四年四月南洋ジャワで開催された萬國學術會議生物學研究會議に我國を代表して參列し、夫人令息同伴で約四ヶ月間チガタラ地方に滞在して、種々な熱帯植物や珍稀な動物類を採取し、更に奥地へ這入つて得意の猛獸狩に其腕の牙を見せ、八月十五日歸朝したのである。JOKから放送した講演は實に其の時の御土産話であつて、學術的にも、また趣味的にも興味津々たるものであつた。氏は人も知る舊尾張藩の當主として、廣く令名を馳せてゐるが、明治十九年十月五日松平慶永の五男として呱呱の聲をあげたのであつた。幼名を錦之丞と稱へ、徳川家先代義親の養子となり明治四十二年襲爵仰付けられたのである。是より先氏は夙に學習院に學び進んで同院高等科を卒業し、更に東京帝國大學文學科に學び史學を専攻し明治四十四年同科を卒業して文學士となり同年歐米各國視察の爲出發した。後歸朝と共に研究心の旺盛な氏は再び帝國大學理學科大學植物科に入つて専心植物學の研究を積み、遂に其蘊奥を極めて大正三年卒業し理學士の肩書を得るに至つた。大正九年學習院講師を囑託され翌十年には主獵官に任ぜられ現に貴族院議員である。大正十年再度の外遊をなし同十四年には馬來半島を周遊する等常に豪壯な事を好み、傍ら市外平塚町に生物研究所を設け専ら生物學の研究に没頭して居る。殊に植物の研究には他の追従を許さぬ該博なる知識を持つて居る。米子夫人は養父義親の長女にして貞淑の譽高く長男五郎太君も秀才として知られてゐる。



日本放送協會關西支部出資會員
小杉 佐太郎
明治十三年七月二十五日生
大阪市東區本町二丁目

放送局開設以來報道機關の發達は一朝にして隔世の觀があつたが、中に就いて寸刻を争ふ經濟市況報道には日毎の變動を大切り直後に全國に向つて放送するため其の効果は最も該切なるものがある。先年無電開設に當つて各地取引員の擧つて此の事業に賛助したのもかうした密切な關係を有するからであらう。小杉氏も出資會員の一人として功勞者に數へられる人。氏は現在大阪取引市場の花形關士として其手腕は定評づけられて居り、殊に三品取引界に於ては堂々たる一陣營として認められてゐるばかりでなく、その思慮の周密にして果斷に富み、行動の俊速にして而かも男性的なことは、知人の齊しく驚嘆してゐる處である。亦織物問屋としての小杉佐商店の名は、先々代の頃から普く世に知られてゐた。其後時代の變遷に於て之を合資組織に改め、茲に播るべき富の礎を築くに至つた。現在では店員三十名を使用し、各國綿布毛織物麻織物等の現物を取扱つて斯界に雄飛し、目を追ふて益々小杉佐商店の名を高からしめて居る。目下代表社員は令兄小杉佐兵衛氏は病褥にあつて只管療養につとめて居るので支配の重任は自然氏の脊に負はされて居る。氏は滋賀縣愛知郡八木庄村の出身で、本年々齡五十、明るい資質に純情を盛つた活動家である。趣味も豊かだがことに旅行を好んで、多忙な商賣の間を數日の閑暇を偷んでは車窓に東西異郷の風物を受つると云ふ。温和な榮子夫人との間には二男があり長男佐二男君は目下中學四年に在學中で、兩親の資質を享けて共に伶俐である。

講演

血 脇 守 之 助

明治三年二月一日生
東京市外代々木山谷九一

東京齒科醫學專門學校校長血脇守之助氏のJ.O.A.Kに於けるラヂオ放送は齋齋豫防デーを記念する講演であつた。むし歯は文明生活に依つて起る病氣であつて、現在の如く國民の殆んど全部がこの病氣に罹り之が爲に漸次體質が弱くなりつゝあるのは實に國家の重大問題である。殊にむし歯の恐ろしいのは齋齋の在る處に必ず存在する連鎖狀菌が齒や口の範圍を越へて遠く身體の他部に感染して病氣を起さしむることである。稱して之を中心感染説と云ふが、多くの人は之を等閑視する傾がある。極く輕い中に治療し其進行を防ぎ危險を根絶せねばならぬ。尙一般豫防法としては、(一)常に齒を清潔にすること、(二)食物をよく嚼むこと、(三)子供の間食を制限すること、(四)時々齒の健康診斷を受けること、云ふのであつた。氏は我國新界に於ける最高權威者で遠く海外に迄其名を知られて居る有名な人である。氏は千葉縣我孫子町の人、明治二十二年四月慶應義塾を卒業し直に東京新報社に入社したが、幾何も無く辭し新潟中學校に教諭として教鞭を執ること數年、後感ずる處あつて二十六年三月辭し高山齒科醫學院に學び二十八年四月卒業し、越えて三十一年七月支那に渡り芝罘、天津、北京、上海等の樞要地を巡遊し其に施術研究狀態を調査し翌七年歸朝し、直ちに母校を繼承して東京齒科醫學院を創設した。時に明治三十三年二月であつた。爾來專心同校の發展隆盛を企圖し明治四十一年九月遂に當局より昇格的の許を得て東京齒科醫學專門學校と改稱し今日に至つたのである。氏の斯界に貢獻する事實に三十九年其功績は實に偉大なものがある。

講演

市 川 源 三

明治七年二月十一日生
東京市小石川區宮下町

源三として熾きない清流の千曲川、犀川又は峡谷を縫つて奔流する木曾川、そして四時雪を頂く高山高山の長野縣は優絶たな風光と共に由來教育の普及をもつて斷然全國のトップを切つてゐる。従つてあらゆる方面に偉材を輩出してゐるが殊に教育界では名聲を馳せて居る人々は極めて多く、東京府立第一高等女學校校長市川源三氏の如きは正に其の一人である。明治三十四年東京高等師範學校文科を卒業し、引續き研究科に残り心理學を専攻し終つて現校に一教諭として赴任した。爾來子女を薰陶して春風秋雨幾星霜、大正七年特に拊擲されて校長の椅子を占むるに至つた。氏の教育方針は在來の劃一主義を廢し同人的教育を以て之に更へ、然して女性を解放し完全なる母性愛を發揮せしむるにありとし、専心其の持論の徹底に努力した。目下擡頭しつゝある本問題が著々實績を擧げつゝあるのは氏の力に負ふ處が少く無い。又氏は大正二三年頃より優生學の研究に將亦宗教の研究に其明敏な頭腦と該博なる知識とを傾けて居る。大正九年命ぜられて歐米先進國の女子教育狀態の視察を遂げ歸朝して益々其研究に没頭してゐる。而して學理と實際との融合を計る可く女子體育の向上を叫び、校内に女子體育館を設け先づ自校生徒の體育を計り以て優生學上の學說を價値づけんと努力して居る。又自説の一般普及を計るべく口筆に寸暇を割く傍ら、ラヂオに依つて、女性問題の一般に關し行きつまる現代女性の進路に一大光明を齎らしてゐる。混沌として其歸する處を知らない現世に氏の如き偉大な先驅者の在るを知る時異常な心強さを感じざるを得ない。

講演

阪 東 舜 一

明治二十五年六月三十日生
兵庫縣武庫郡今津町字高潮十三



輓近世界の科學的智囊は、擧つて航空機の發達のために聚められつゝあるの觀がある。然るに我國に於ては之が研究に従事するもの極めて寥寥たる中に獨り我が阪東舜一氏が中島飛行機製作所に立て籠つて此の遠大の指命のために奮闘に努めて居ることは些か意を強ふるに足るものがある。氏は曩に大阪放送局マイクの前に、之が世界の大勢を説き、大いに世人の奮起を促したことは、人の知る處であらう。氏は通ふ千鳥の鳴く音聞く佳境淡路島に幼時を培ひ、若少の頃修養のため上京し、次いで慶應義塾大學に入り、進んで理材料に學んだ。學窓を辭したのは大正五年で、當時我が國の海運界は好況に恵まれてたので、直に日本船舶株式會社に入つた。然るに慧眼の氏は在勤二年にして早くも斯界の將來を看取し、轉じて川西氏の日本飛行機製作所に入つた。氏は川西氏とは同窓知己の間柄で、此の國家的大專業の企劃に對しては、同窓知人後藤豊吉氏等と共に率先戮力して大正七年遂に之を合資會社と改め、次いで大正十二年六月、氏は自ら旗を擧げて一大理想のもとに日本航空株式會社を興し其支配人となつた。現中島飛行機製作所は實に其の改稱したものに外ならない。爾來氏は我が國の國情及經濟狀態等あらゆる方面より考察して、此國家的事業たる航空輸送事業の發達を期し、凡ゆる萬難を排して健闘を怠らない。近く鳴尾に六萬坪の飛行機製作所を建設して其所信實現に努めて居るのも床しい限りである。氏は識見高き人格者で、はな子夫人は閨秀畫家として輝子の號を以て知られて居る。

講演

石坂養平

明治十八年十一月生
埼玉縣大里郡奈良村

東京中央放送局に於て昭和三年管内各府縣の夕を催し、各地の特徴を放
送したが、其の際埼玉縣の夕に選ばれて郷里の誇りを紹介する大役を擔つ
たのは我が石坂養平氏であつた。氏は縣の財政、治水、地味、人口、民情
等に關して得意な識見を披瀝し、生産、風土、名稱等に至るまで詳細な説
明を加へて餘蘊なきまでに要を盡し、殊に是等の間に於ける重要な關係
を卓越した觀察を以て説述した。氏は縣の豪農石坂金一郎氏の長男で、夙
に學に志し、郷校を卒業し、學序を追ふて高等學校に學び、更に進んで東京
帝國大學に入り、文科哲學科に於て最高專門學を討究した。祇屬三ヶ年の
功を積んで大正二年卒業、あまねく學修成るや郷に歸つて父業に携り、傍
ら豊かな文藻を養つてゐた。嚴父は早くから同縣下に於て事業其他の方面
に重きを爲して居たので、氏は若くして武州銀行等に關係して地方金融に
携り、大に快刀亂麻の手腕を揮つたものだ。而かもその明哲なる頭腦と偉
大なる抱擁力とは郷黨の間に次第に信望を加へ、遂に推されて縣會議員に
擧げられた。此外縣農會に幹部として盡瘁する等地方自治に貢獻する所多
く、次いで縣會議員に就き、更に大多數を以て國會に於ける議政壇
上の人となり、現に其の大任を擔つて居る。尙埼玉縣多額納稅者で現在縣
農會長其他の公職に就き、其の經綸の才と人格の力とは近時愈々衆望を聚
めて居る。一方氏は評論家として夙に中央文壇に其名を馳せ、文學に關す
る著書としては『藝術と哲學との間』其他數種がある。家庭は母堂その刀
自、ふみ子夫人、長男金衛君其他である。

講演

菊地謙二郎

慶應三年一月生
東京市牛込區市ヶ谷富久町一四

昭和三年東京中央放送局の茨城縣の夕に、縣の歴史的人物として最も著
名な水戸義公の人物事績に就いて『水戸黃門の事業と性格』の題下に興趣多
い講演を試みた氏は、今東湖の異稱さへ贈られて居る水戸出身の碩學であ
る。義公以來澎薄せる武士道的精神は、遂に凝つて誇るべき水戸魂を生ん
だ。氏は同藩士菊地慎七郎氏の次男として典型的な水戸魂を持つて生れた
人であつた。幼少から郷里の塾に學び、若くして帝都に出て東京帝國大
學國文科史學科に研究し、積年研鑽の功成つて明治二十六年之を卒業した。
直に身を育英事業に投じ、山口高等學校教授に任じた。後轉じて津山中學
校長となり、子弟の薰陶に全力を傾注し、名校長の名を恣にしてゐた。後
更に東亞同文書院に教頭として重きをなしてゐたが、幾何もなく拔擢せら
れて第二高等學校長に榮轉するに至つた。爾來高潔なる人格と、深遠なる
學殖とを以て、聲望を益々高からしめてゐたが、後郷里の子弟を養成すべ
く職を辭し、水戸中學校長に就任した。そして多年教育界にあつて育英事
業に力めた尊い經驗と、熾烈なる愛郷心とを以て子弟の教養に心血を注ぎ
功績の大に見るべきものがあつた。さうした氏の美はしい犠牲的精神と、
獻身的努力とは、體て感激となつて現はれ、大正十三年には遂に郷里から
擁立せられて衆議院議員に當選し、政界に第一步を叩するに至つた。之よ
り先き氏は教育觀察の爲め歐米を遍歴し、亦功により正六位を賜ひ、家庭
には吳一君、陽二君、かゝる嬢等がある。

講演

橋本信一

明治十二年十二月十三日生
兵庫縣芦屋西之坊一六九四



氏は日本海運界關西の雄である。風光明媚の郷に年少時代を培つて、學
習を了るや更に修養を期して上京した。若年の頃の氏は明敏の兒として名
があつた。氏の實業界への飛躍は最初からの素志で、東京高等商業學校に
入學し、其に専門學理の蘊奥を窮めた。明治三十七年優秀な成績で之を卒
業して、當時漸く勃興せんとする機運に逢着せる大阪商船會社に入社、始
めて實社會へ第一步を印した。そして直に大阪本社詰となり、次第に頭脫
の才腕を認められて位置を進めた。後マルセイユ支店勤務を命ぜられて佛
蘭西に渡り、次いでロンドン詰めとなつた。以來各國の船舶を吞吐する世
界の檣舞臺に於て、大に天稟の才能を發揮して益々その眞價を認められ遂
に北米タコマ支店長に擧げられるに至つた。かうして各國の重要な支店
に在任して諸國の海運事情に精通するや、更に拔擢せられて本社參事とな
り、帷幕に入つて經營に參劃すると共に、昭和三年神戸支店長の重責を荷
ふことになつた。斯の如く氏は實に名もなき一社員から身を起し、徹頭徹
尾實力主義を以て押し通し、燦たる今日の地位を贏ち得た努力家である。歩
み來つた過去の道程は、正に現代青年の生きた教訓として推稱するに足ら
であらう。此外氏は神戸海運集會所取締役、日本船主協會理事等に擧げら
れ亦神戸商工會議所顧問、オリエンタルホテル監査役、日伯協會常務理事
等にも推されて居る。學者肌の敦厚な一面を備へ、光子夫人は英語に好み
で、二人の間に二男一女がある。

日本放送協會關東支部出資會員

原義一良

明治二十三年五月十三日生
東京市芝區白金塚町三二

東京中央放送局の出資會員たる原義一良氏は先代原彦三郎氏の長男で、
明治二十三年五月を以て生れ、夙に學修に就いて螢雪の苦を積み、次いで
東京郵便電信學校に入學し、大いに専門學の討究に努めた。明治四十二年
同校を好成績で卒業するや、更に進んで東京外國語學校專修科に學び、支
那語科を選んで専ら語學の研究に身を委ね、大正三年之を卒業して直に遞
信技手に任命された。是より先き氏は大正元年八月ヒールンク商會に入り
總務部に勤務した。從つて其學修は實に寸陰を偷んで續けられたもので其
の向上努力の態度は當時既に他日の飛躍を暗示するものがあつた。大正四
年三月退いて日本國產株式會社を創立するや、衆望の歸する處推されて之
が取締役社長に就任するに至つた。爾來天賦の才能を發揮して大に奮闘し
た結果、次第に幸運に恵まれ、社運は隆々として一路繁榮を辿つてゐる。
而かも絶倫の精力を有する氏は此の外株式會社藤田工務所に常務取締役と
しても采配を揮ひ、亦合資會社富士見商會の代表社員として之が經營の衝
に當る等、次第に實業界に重きをなして行つた。現在では之等諸會社の外
安中電氣製作所、弘電社株式會社等の常任監査役として縦横の才を揮つて
ゐる。氏は流石に世路風霜を経た苦勞人丈けに、人一倍思ひ遣りも深く、
温かい涙を有する反面に於て、鞏固なる意志と、負けじ魂を持つてゐる。
スポーツに興味を有する外、大弓、謡曲、圍碁、釣魚等にも長じ、貞淑な
る八重子夫人との間に弘君、淳君等がある。

講座

中戸川秀一

明治二十年九月生
東京府巢鴨町宮下一八七九

東京中央放送局は 三伏の暑中を如何にして聴衆者の満足を買はんかと苦心の結果、夏に相應しい銷夏的な趣味講座を設けて、それ／＼大家を選んで海と山の講演を催した。其際水に因んで「海底活動寫眞の話」を放送し、聴衆からさる興味をそ／＼つて好評を博した人に我が中戸川秀一氏がある。氏は我國に於ける科學映畫の第一人者で、現在文部省の囑託を受けて幾多有益な撮影に従事して居る。一派の作風を以て彼の文壇に名を知られた作家中戸川吉二氏の令兄に當り、父君は中戸川平太郎氏、氏は其長男として白樺とアカシヤの國北海道に呱呱の聲を揚げた。夙に彼の地で學を修め、進んで北海道帝國大學農科大學に入學して水産科に學び卒業後職を農商務省に奉じ工業試験所に勤務した。降つて大正十一年鶴程萬里の獨逸に留學し、ベルリン工科大学に入學して油脂化學の研究に没頭した。同地に在ること二ケ年にして歸朝したが、其後寫眞及映畫の研究する爲め再び獨逸に渡つた。爾來心血を注いで寫眞術の研究に耽けることに實に七星霜、遂に斯界に於ける一權威者となつて故國に錦を飾つた。世人は海底撮影に對して簡單容易なる解釋を附して居るが、實際は水中の光線の屈折、及水深等の關係から殆んど門外者の想像以外な難事で、陸上の撮影の比較とは到底同日に語れない。其の詳しい装置は氏の講演の中に悉く説明されて居たことは今尙記憶に残る所である。正に映畫時代の來らんとする時、指導者として氏の力に俟つものが少くないであらう。



日本放送協會関西支部出資會員

大藪千太郎

明治四年十月十五日生
大阪市東區北久寶寺町堀筋

人生を價値付けるものは創造を以て他にない。無爲徒食は人生を無價値ならしめるもので、而もこうした創造も更に社會に及ぼしたときそこに始めて意義付けられるのではなからふか。我國ラヂオの創立に當つて多くの功績を齎した大藪千太郎氏は西部唯一の開港場として股盛を極めてゐる長崎市に生れた。氏は人を容れるに大きい雅量を持ち、事をなすに大なる決斷力を有し一度意を決すれば何事でも徹底しなければ已まない男性的氣魂の持主である。そして世に出た氏は尙幾多の困難辛苦を経て來たであらふが、強固な意思はよく事に當つて善處し、以つて今日の大をなすに至つた。即ち氏の令息幸太郎氏は帝國大學に學んで藥學士の榮稱を得て、後獨逸に留學しクロム鍍金術を發明して歸朝した。この大なる發見は總て氏に大なる光明を齎らし早速特許を受けてクロム鍍金業を営むことになつた。斯くて五十名の職工を擁して神戸西灘村に工場を持ち大阪北久太郎町に本店を、東京丸の内ビルヂングに東京支店を置いて大々的に營業を開始し、表國器具、食器類を日本全國は云ふに及ばず遠く海外にまで輸出するに至つたのである。この大事業も蓋し氏の剛膽な度量と令息の英才との然らしむるところであらふ。こうした餘暇に義太夫にも趣味を持ち五年前から研究を始め今では玄人の域を摩すると云ふ。尙更に氏の後世を仰る大なる功績は、我國にラヂオの普及されるに及んで放送局出資會員として之が設立に盡力した事で、氏の名聲は炳として輝き渡るものであらう。

國際講座

井上雅二

明治九年六月生
東京府下高田元巢鴨町三番

多年海外事業の實際に従事して來た氏は、其の研究経験を以て昭和三年AK國際講座に於て「移民問題と國際協力」に就いて識見を傾けて居る。即ち過去三百年來の人類の移動、及其の影響による文化の進展を説き、更に人口難食糧難の現状及之に對する各國の態度を説明し、進んで批判を加へ更に國民の自覺を叫んで居る。氏は兵庫縣の出身で、足立多兵衛氏の二男に生れ、先代藤兵衛氏の養子となつて井上姓を名乗つた。始め攻玉舎海兵學校に學んだが、次いで早稻田大學に入り、政治經濟科に於いて瑩雪の功を納んだ。卒業後は更に修養を刷して海外留學の途に就き、埃太利維也納大學を経て、更に獨逸柏林大學に學んだ。此の間主として殖民及經濟學を研究し、大いに新知識を齎して歸朝した。後身を官海に投じて通信省の囑託となり、更に韓國政府財務官、宮内省書記官等に歴任した。此間海外事業に着目して支那、滿洲等を普く踏査視察し、更に樺太、中央亞細亞、波斯、土耳其、巴爾幹諸邦等を漫遊して足跡さらざる所なく、其後期する所あつて官を辭し、多年の宿望たる海外興業株式會社を興して之が社長となつた。亦南亞公司株式會社取締役、スマトラ興業株式會社監査役等を兼ね、別に南洋協會を組織して之が専務理事となり、海外富源の開拓と邦人の南洋發展に資する處があつた。現に前記の外東亞同文會に理事として、又代議士として、重きをなしてゐる。尙其著「支那論」を公にする等。氏は稀に見る活動家でも亦實に國家的人材である。家庭には日本女子大學教授ひで子夫人との間に長男陽一君長女支那、二女幽子の二嬢がある。

趣味講座

高野辰之

明治九年四月十三日生
東京府下代々幡町代々木一六七

邦樂研究の最高權威者高野博士は常に邦樂の指導的地位に在つて斯界の進むべき道を指示してゐる。長野縣下水内郡永田村に生れ、幼時から稀に見る神童として郷黨の間にその前途を囑望されてゐたものだ。明治三十三年東京帝國大學文科大學を卒業し文學士の榮冠を贏ち得て歸郷し、長野縣師範學校に初めて教鞭をとる身となつた。越えて三十五年文部省國定教科書編纂委員を囑託され、次いで四十一年東京音樂學校教授を拜命した。而かも知識慾の旺盛なる氏は毫も研究を怠ることなく、該博なる知識と明哲な頭腦とはよくその蘊奥を極めて該切なる學理を究明し、遂に大正十四年一月文學博士の學位を授けられるに至つた。これより先き文部省圖書官を辭して、只管斯學の研究に没頭し、大正十五年から我國最高學府東京帝國大學に講師としてその蘊蓄を傾けることになつた。爾來若き學徒に音樂の哲理を教示し、又壇上、紙上から一般民衆へも常に働きかけてゐる。近時モラチオを通じて音樂講座を開き歌謡に就いてその由緒あるそして意義ある存在を微に入り細に涉り、或は純理論の上から、將又情趣の上からも論じ、歌謡は我々の先祖が情のかたまりを吾々に残した尊い聲であることを説いてゐる。而も歌謡に現はれた節は忘れても、歌詞のみは、常に盡きな泉の如く新しい吾々の心の裡に生きてゐることを力説した。斯くて博士は常にその眼界を舊方面に向けてこれを更に新方面に活躍せしめてゐる。そしてその研究を日本歌謡史、日本民謡の研究、義太夫節研究等の勞作に發表してゐる。



日本放送協會々長 岩原謙三

文久三年十月生 東京市芝區葺手町二三

我國ラヂオ發達史の第一頁は先づ斯界の恩人岩原氏の偉大なる功績によつて飾られなければならない。氏は石川縣大聖寺町に生れ、夙に大鵬の志を抱いて東京商船學校に學び、澎湃たる海洋に剛健の氣を練り汐の香りに純真な情操を培つて業を終り、直に共同運輸會社に入つて力める處があつた。後幾何もなく三井物産會社に轉じ總て神戸を振り出しに大阪、紐育の支店長を経て到る所に其の八面玲瓏の才能を發揮して餘蘊なく遂に拔擢されて理事となり更に常務取締役に擧げられた。斯くて高邁なる識見と男性的氣魄とを以つて益々名を馳せ功績の偉大なものがあつたが後同社を辭して芝浦製作所の社長となり専ら之が經營の衝に當つて幾多の刷新を斷行し、以つて今日の大をなすに至つた。此の他内外電熱器、東京電氣、小野田セメント、鶴見臨港鐵道、日本無線電信、臺灣製糖の各會社に取締役を兼ねて實業界に嶄然頭角を抽んでゐる。之より先き大正十三年偶々放送局開設の議起るや氏は挺身自ら其の渦中に投じて出願人の合同に狂奔し、或は之が代表として主務省と折衝を重ねる等其の奮闘は實に目覚ましいものがあつた。斯くて愈々東京放送局設置されるや推されて之が理事長となり、越えて同十五年八月其の組織變更されるに及んで日本放送協會々長となり、爾來快刀の亂麻を截つが如き巨腕を揮つて、大いに内部の充實を計り我がラヂオ界の發達に不斷の努力を續けてゐる。資性剛毅、朴訥にして言行を修飾せず輕舉を戒めて眞に古武士の俤がある。氏は尙反面劇、音樂を愛好する趣味の人でもある。

講演

西田仲衛門

明治二十八年一月八日生 大阪市東區今橋三ノ二九

大阪中央放送局から飛行機の發達の歴史及び世界に於ける斯界の現狀に就いて放送した西田仲衛門氏は、寥寥たる我國飛行機製作界に明星の如き存在を示して居る人である。氏は早稻田大學の出身で、大正二年同大學商科を卒業したが、年來の素志は實業の外に在つた。其の生家は大阪屈指の富豪で、實業方面には坦々たる前途が既に氏の鐵足を待つて居たが、校庭を一步出た若い氏は、最も意義多い事業として國家的の急務たる飛行機製作に遠大にして而も燃ゆる様な希望を抱いて居た。事業の前には勿論名狀すべからざる幾多の困難が横はつて居た。之を乗り切つて木津川尻に私財を投じて大飛行場を設け其抱負を實現したのは大正十年十一月であつた。併せて研究所を設け、飛行士を養成する等爾來着々理想の實現に力めて行つた。曩に太平洋洋行計劃の際も盡瘁頗る努めて其名は普く人口に膾炙して居る。氏は飛行機知識の一般普及を期して、廢機及び模倣等を各學校其他公共團體に寄贈する等麗しい篤行家である。今や二十世紀の智識は國防に交通に於て最も能率的なる航空機の製作に集中されて居る。而も各國は化學の進歩を以て争ふて來たが、今や航空機の發明こそ化學の争覇戦を代表するもので、遲々として振はぬ我國に於ては氏の活動に如何ばかり大なる期待を懸けられて居るか殆んど察するに餘ある。氏は此の他愛日青年團團長、愛日小學校評議員として公務に貢獻して居る。高潔な人格の所有者で、澤子夫人との間に美智子、喜美子、建子の三才媛がある。

日本放送協會東北支部理事長

佐久間俊一

明治九年二月生 仙臺市東北二番町五五

科學の殻を打破つて、研究室から街頭へと躍り出たところのラヂオは、潮のやうな大衆の歡聲に迎へられて、隙原を行く火のやうに、津々浦々の寒村にまでも普及發達していつた。そして文化から遙かに遠ざかつてゐる山間、漁村の人々の生活にも、經濟市況、ニュース、趣味講座、學術講演演藝等の放送は、文化人同様の修養と娛樂を與へるに至つた。されば仙臺市に、日本放送協會東北支部が設置されて、JOKKの聲が聞かれるやうになつた事は、ひとり學都に住ふ人々のためばかりでなく、深い雪に埋れて、終日倦怠に苦しみながら爐邊に籠つてゐる東北の人々にとつて、最も有意義な、喜ぶべき事である。而も東北支部理事長たる我が佐久間俊一氏をはじめとした當事者の獻身的努力と犠牲的精神によつて、ラヂオ放送の機能が、圓滿に、迅速に進捗してゐることは、ラヂオ將來の爲めにも、ラヂオファンの爲めにも、更らに更らに喜ぶべきことではなければならない。氏は正四位伯爵にして、七十七銀行及び東京双物株式會社の取締役の椅子を占め、其の明晰な頭腦と、卓絶せる手腕をもつて實業界に重きをなしてゐる。氏は佐久間左馬太氏の三男に生れたが、嚴父は舊山口藩士で第十旅團長、第二師團長、中部都督、臺灣總督を歴任し二十八年勳功によつて華族に列せられ、四十年伯爵に陞せられた人、陸軍大將である。氏は大正四十年家督相續と共に襲爵、現在に及んだが、先に第二高等學校を卒へて實業界に入り、今日の地位を獲ちえたのである。家庭には正子夫人との間に二男四女がある。

講演

倉上由一

明治十七年五月二十三日生 東京市赤坂區青山北町四ノ六六

氏は刀圭界一方の權威である。其の研究の所産たる「嫁姑の醫學的觀察」に就いて昭和三年八月三日東京中央放送局マイクの前に珍らしい發表を試みて世人の注意を喚起したことは人々の記憶に新なる處であらう。氏は倉上伊十郎氏の子息で埼玉縣大里郡明戸村が産んだ人材である。夙に醫學に志し、明治二十八年、濟生學舎醫學專門學校を卒業して直に内務省醫術開業試験に合格したが、更に進んで東京帝國大學醫學科大學專科に入り、衛生學科及皮膚科を専攻して、斯學の蘊奥を究むる所があつた。然るに氏は尙も研究室に止まつて専門的方面の研究を遂げ遂に獨立開業したのは明治四十年のことであつた。氏は實に眞劍なる學者で、開業後も日夜來訪の患者の診療の外に寸陰を偷んで研究の歩を進め、降つて大正九年には再び東京帝國大學醫學科大學專科に於て研究に従事するに至つた。同十二年には長崎醫學科大學の招聘を受け、法醫學教室助手となり、四十四年七月論文「インズロトキシン糖尿病の研究」外に參考論文十編を提出して醫學博士となつた。同年東京養育院に於て研究し、四十五年三月赤坂區青山北町四丁目に診療所を開設し、専ら血壓亢進症、糖尿病の診療に従事して來た。氏は殆んどその半生を擧げて研究のために終始した丈けに、其専門方面に至つては當に第一人者を以て稱せられてゐる。彼の嫁と姑の家庭的の不和を醫學上より討究したる講演は、家庭の平和の上に大きな貢獻を齎した事は云ふ迄もない。雅號を保香と稱して義太夫に長じ、外に讀書に興味多く、煙草を愛好する。



武藤長四郎

明治四十一年四月一日生
東京市淺草區馬道六ノ一五

アリストテレスは悠ういふ事を言つた。オリンピックに於て、勝利の月桂冠を得る者は、最も美しきもの、最も強きものにあらざして、最も善く闘ふ者なり」と。實に如何なる成功も無闇より出ずるものである。先般氏の兄録氏中央放送局主催の、ラヂオ受信機懸賞に二等を勝ち得たのも即ち、我が長四郎氏援助の賜である。これ決して偶然の事ではない、氏こそ灼熱的な研究心と、不斷の努力を持つて闘ひ來つた稀にみる奮闘の人である。明治四十一年、武藤福太郎氏(舊幕臣にして七代の舊家なり)の四男として東京市淺草區に生れ、淺草富士小學校を卒へて、藏前高工の附屬徒弟學校電氣科に學んだのは大正九年の事であつた、雪の功なつて、十二年同校を卒業したが、氏は尙同校に止まつて六ヶ月間研究を続け、十三年職を横河電機製作所に奉じて精勵今日に至つたのである。其の間雜誌電氣評論、電氣學會雜誌、早稲田電氣學會雜誌に、新型周波數計に就いて、新型交流電位差計に就いて、及び熱電對溫度計用電位差計に於ける冷接合點の影響を自動的に更正する一方法に就いての三論文を執筆するに至つた程氏の研究は素晴らしいものである。尙氏は有望なるラヂオの將來を洞察して勤務の傍らラヂオの研究に志したのは大正十二年の事であつて、現在に至つたのである。人となり聰明、水晶のやうに透徹した頭腦と、鐵の如き鞏固なる意志の持主で、一度意を決すれば何事をも貫徹せしむる已まざる熱と男性的氣魄に満ちてゐる。趣味には其明るい資質に相應しいところの撞球がある。

講演

高橋義雄

文久元年八月生
東京市赤坂區一ツ木八二

多々益々辯じ赴く所として佳ならざるなきの概あるは我が高橋義雄氏ではあるまいか。氏は箒庵の雅號を以て知られラヂオの趣味講座に再三遺詣を傾けて居る。義公烈公其他、維新以前の幾多の志士を輩出した茨城縣の水戸は氏の懐しい播種地である。尊父は高橋常彦氏で氏は四男に當り明治三十六年十二月分家して居る。是より先明治十五年慶應義塾大學を出でて實業界に投じ、直ちに三井銀行に入り累進して後三井吳服店理事となつたが、同店の發展は實に氏の力が與つて力が多い。後更に三井鑛山合資會社理事に推され、王子製紙會社事務取締役、倉谷鑛山會社監査役等に就任して實業界に重きをなしてゐる。氏はこうして大三井の元老格として異彩を放つてゐるが、有名な水戸學の研究者で、去る昭和三年十一月十六日「水戸義公の本領」の題下に義公の尊王の精神の如何に大なる影響を及ぼしたるかを詳細に講演したこともあつた。亦一面考證の大家として知られ、茶道には秀れた造詣を有し、更に清元に精通し、東明流を以て世に知られて居る。柳舟夫人は彼の清元、常磐津、長唄等の長所を取り入れ生粹の江戸藝を作り出した故平岡吟舟氏の愛娘で、現時同流の家元である。氏の作にして最も雅致に富んだ「峠の茶屋」は柳舟夫人の作曲を以て昭和三年九月二十五日東京放送局より各名取花形に依つて放送され、多大の好評を博したものだ。氏は此の他著述に手を染め、既に上梓した所、書冊も尠くない。實に氏はあらゆる意義に於て尙古家の一人者で、世に得難き才藻の所有者と云ふべきである。夫人との間には忠雄君がある。

講演

大島義清

明治十五年九月生
府下代々幡町代々木二二一

全世界にも屈指な研究所の一として其名を海外に迄喧傳されて居る處の埼玉縣川口町の國立燃料研究所長として、確固たる地位を占めて居る大島工學博士は、先頃ラヂオに依つて出で、發明家と大衆に呼びかけた。よく世の中では發明と發見とが混同されて居る様であるが全然別のものである。發見は偶然的なもので發明は科學を基礎として種々なる操作と實驗とに依つて、學理と實驗とを織り混せて自然を征服して或物を創造する事を云ふ。科學の進歩は實に素晴らしいもので今日では天産物迄創造する様になつたが満足すべきで無い。更に天産物を精巧なものにまでする様に誘引する黄金時代を招くことこそ主眼であるとして、一々例證を擧げての一大獅子吼であつた。天産物に恵まれ無い我國民は氏の如き一大科學者に従つて宜敷く自然を征服すべきである。氏は兵庫縣人黒澤正司の二男と生れ、後乞はれて先代六郎氏の養子となり大島姓を冒すに至つた。絶大な希望を抱いて學んだ東京帝國大學工學部應用化學科を卒業したのは明治四十五年の七月であつた。其在學中より衆人に勝れた秀才振はいたく斯界の先輩を動かし、翌四十四年九月多數の卒業生中より撰ばれて東京帝國大學助教授に任ぜらるるに至つた。就任後も熱心に學生を指導する傍不斷の研究を続け更に大正四年自己専攻の學科應用化學研究の爲米國に留學し歸朝後同八年九月東京帝國大學工學部教授となり翌九年二月には工學博士の學位を受け遂に今日に至つたのである。家庭は養母ノブ、ユキ子夫人以下二男四女で其間滿振は近國美望の的となつて居る。

講演

原嘉道

慶應三年二月十七日生
麴町區飯田町三ノ五

少年保護法が公布された日を記念する爲に催された少年保護デー當日、時の司法大臣原嘉道氏は少年が不良となる原因の奈邊に存するや、又其の主なる原因と目する、社會制度及社會組織の缺陷は如何に改善せらるべき哉、各種感化教養機關に不備なきや、若しありとせば其改善策如何と論じ畏くも皇室に於ては、深く少年保護を御念あらせられ事業助成の御思召に依り、年々多額の御内帑金を下し給ふが何分本法公布後日尙淺き爲また播種時代の感あるを免れぬ。此助成は一に懸つて一般有志家又は篤志家の後援に在りと、AKよりマイクローンを通して放送し識者の喝采を博した。氏は最近ラヂオに依つて人口に膾炙するに至つた小唄に名高い長野縣須坂の町に生れた。其家は代々須坂藩に仕へた由緒正しい家柄である。夙に青雲の志を抱いて上京し遂に明治二十三年東京帝國大學法學部英法科を卒業し直ちに農商務省に入つて試験となり、次で同省參事官鑛山監督官に累進し更に鑛山監督局長として東京大阪に歴任した。二十六年官を辭し辯護士を開業し傍早稲田中央の兩大學に商法の講座を擔當し後進の育英に努めた。四十年法學博士の學位を授けられ次で法律取調委員會委員を仰付られ同年五月歐米を遊歴し十一月歸朝した。越えて大正十三年三井信託會社の創立と共に其取締役に推されたが、昭和二年田中内閣の成立するや遂に擧げられて寮閣に列するに至つた。畏きあたりに於ては氏の多年法曹界に盡力した勳功を嘉せられ勳三等を賜つた。翌三年數十年振で錦を郷關に飾つた時郷黨の歡迎振は實に素晴らしいものであつたと云ふ。

前日本放送協會關東支部理事

津 守 豊 治

明治十六年十一月二十五日生
東京府大井町元芝八八八

日本放送協會關東支部理事たりし氏は東都實業界の花形である。愛媛縣松山市の出身で、父君は愛知縣人故津守虎太郎氏、氏は其二男として明治十六年十一月二十五日を以て生れ、夙に東京に笈を負ひ、中學を卒つて東京高等商業學校に入り、大いに陶朱の學を討究した。螢雪刻苦三年にして明治三十九年上席を以て之を卒業するや、直に古河鑛業會社に入社した。爾來恰も十年一日の如く忠勤を抽んで、年と共に次第に重用せられて行つた。大正四年自ら期する所あつて職を辭し、轉じて奔別炭礦會社に入り、擧げられて専務取締役となるに至つた。茲に於て始めて氏は縦横に天稟の才能を發揮し、帷幄の中に重望を擔つて社運の發展を招來した。かくて數年其の手腕を期待されて浦賀船渠會社に聘せられ、支配人として經營の衝に當つた。當時海運界は勃興の機運に逢着してゐたので、氏は目覺しい活躍を續けてゐたが、大正八年遂に同社を辭し、新なる活動の天地を求めて立つに至つた。降つて大正十二年東京電氣會社に入り、總務部長に就任し、爾來今日に至るまで其の職に執掌してゐる。此の間絶倫の才腕を展べて大阪電球會社に關係し、之亦取締役として幹部の中に重きをなしてゐる。現時日本俱樂部、如水會、電氣俱樂部等の諸會員として社交方面にも頗る信望が篤い。人となり、溫雅、頭腦明晰にして犧牲的精神を有し、稀に見る實行の人で、將來の發展は期して待つべきものがあらう。氏は趣味は觀劇で、家庭には晴子夫人と共に母堂サダ女の奉養に努め、元太郎君外數子がある。

講演

瀨 川 秀 雄

明治 六年 八月 生
東京市四谷區花園町一〇七

J O A K の、大正天皇を偲びまつる放送は、昭和二年十二月二十五日の大正天皇祭を期してなされたが、其の日のプログラムに加へられたものに、學習院教授、文學博士瀨川秀雄氏の講演があつた。大正天皇時代に於ける我が國の對外發展に就いてと題する放送は、史學家としての氏の面影を彷彿たらしむると共に、また言々句々に燃えるやうな愛國の血の高鳴りを自ら禁ずることが出来なかつたのである。即ち氏は大正天皇時代の盛大な國光、殊に世界大戰に参加して、講和會議に五大強國の一として列し、國際聯盟の理事國となつたことを宏大無邊なる先帝陛下の御偉徳なりとして、敬慕の情を披瀝したのである。そして、東方に伸びんとするアメリカと、有色人種の盟主たる日本が、太平洋を舞臺として、覇權を争ふ日の將來にありとして、國民の覺悟をうながしたのであつた。氏は岩國藩士瀨川成器の長男で明治六年八月呱呱の聲を擧げたが、夙に東京帝國大學文科大學史學科に學んで、同校を卒業したのは二十九年のことである。氏は更らに大學院に入りて戰國時代の中國史を專攻し、三十二年學習院講師となり、三十五年同院教授に任ぜられた。そして同院圖書館長を兼ね、文學博士の學位を授けられたが、後陸軍大學校講師を囑託し、歴史學を擔任したのである。また大正三年以來毛利公爵家三總傳編纂所長となり、歐米諸國を巡遊して史學の研究に従事し、造詣も甚だ深く、著書も亦甚だ多い、現在正四位勳三等、文學博士、學習院教授、同圖書館長である。家庭にはソカ夫との間に五男六女がある。



講演

吉 田 音 松

明治十一年三月四日生
大阪市東區平野町二ノ五

歐米の諸國に於ては、古くから陪審制度が行はれてゐたが、日本では、昭和三年にして初めて實施されるに至つたもので、陪審制度こそ、我國に於ける司法上の一大革新と云ふべきである。従つて國民の間から司法に參與するところの陪審員は、非常に榮譽ある職務であると共に、重大なる責任を持つて居り、國民がこの任務を完全に遂行するか否かは、國民のアピリティと、カルチュアの程度の試金石である。されば此の制度のスタートの切られた秋、健全なる陪審制度の基礎を打樹るべく、また立派な判例を造るべく、國民が擧つて精神的に努力することは、まことに希ましい事であつて、このためになされた放送こそ、まことに意義あることと云はねばならない。而して、この陪審制度に就いての講演によつて、人々に強い感動を與へたのが吉田音松氏である。氏は石川縣の人、明治十一年三月四日を以つて生れたが、長ずると共に學序を追つて關西大學に學び、法學を專攻したのであつた。同校を卒業するや、熾烈なる向學心をもつた氏は、更に日本大學專攻科に進んで、欣求と思慕を以つて研鑽をつづけ、優秀なる成績を治めて目出度く同校を卒業したのであつた。かくて明治四十年、大阪市に於て辯護士を開業し、多くの人々の權利擁護のために精進し、法曹界に健實なる地歩を築いていつたが、傍ら氏は自治方面へも進出して、大正四年には大阪府會議員となつたのであつた。また昭和二年三月には大阪辯護士會長に就任して、名實共に重きをなしてゐる。趣味は園芸、寫眞、書畫等で、家庭には夫人との間に一男三女がある。

講演

清 瀨 一 郎

明治十七年七月生
大阪市北區堂島濱通

衆議院副議長として、また民法學の大家として知られてゐる我が清瀨一郎氏は、發明協會評議員として、昭和四年五月十一日、J O A K のマイクロホン前に立つたのであつた。國家富強の基は科學の發明にありと、アメリカの前々大統領ウイリソン博士が云つたやうに、人間が自然を征服して、初めて文化が齎されるのであつて、科學文明の今尙一步後れた我が國に於ては、科學の發明が最も必要である。それには先づ根本に於て、國民が科學や發明を尊重するの精神、即ち發明精神を涵養しなければならぬ。斯うした論旨によつて、發明は文化の源泉と題する氏の講演がJ O A K から放送されたのである。氏は兵庫縣の人、清瀨一壽家氏の長男にして、明治十七年、風薫る初夏の七月に呱呱の聲を擧げたのであつた。幼にして穎悟、小學、中學、高等學校と天才的閃めきをみせて、秀才の名を轟はれ、優秀な成績をもつて、明治四十一年、京都帝國大學法科大學を卒業したのであつた。然し、燃ゆるやうな向學心を持つてゐた氏は、日本の最高學府を卒へただけで満足することなく、英、佛、獨に留學して、欣求と思慕のうちには法學の研究を續け、名譽ある法學博士の學位を受けたのであつた。大正九年大阪市より選出されて衆議院議員となり、革新俱樂部に屬して其の中堅となり、代議士に選ばれること數回に及んだ。かくて昭和二年田中内閣當時、衆議院副議長に推されて快刀亂麻の手腕を揮ひ、令名を轟はれながら今日に及んでゐる。家庭には才色兼備の比那子夫人がある。

講演

石崎芳吉

明治十一年一月生
東京市赤坂區青山南町五ノ八〇

人口食糧問題は皆だ人口と食糧の問題ではなくして、失業問題をはじめ、諸種の經濟問題、社會問題の基調となるものである。故に今日の如く經濟界が不振で、國民思想が動搖してゐる秋は、まづ食糧問題の解決を第一原理としなければならぬ。J O A K から放送された畜産品で食糧問題を解決せよと題する講演は食糧問題解決の鍵として、大きな光明を其の前途に與へたものであつた。そして、多年の経験と蘊蓄をもつて、統計を擧げながら明快な雄辯を揮つたのは農林省畜産課長、我が石崎芳吉氏であつた。氏は明治十一年一月をもつて、長崎縣に、石崎次郎氏の三男として生れた、九州男子である。後家督を相続したが、夙に學序を追つて東京帝國大學農科大學に學び、明治三十五年優秀な成績をもつて同校を卒業すると共に、東京帝國大學農科大學助手を命ぜられ、次いで農事試験所技師兼農務技師となり、また種牛牧場技師、畜産試験技師等に歴任して、至る處に、明晰なる頭腦と、卓絶せる手腕を顯はれたのであつた。そして現在では、農林技師兼畜産試験所技師、農務局畜産課長の椅子を占めて、いよく其の令名を高からしめてゐる。氏は曩に歐米各國に差遣されて、新知識を先進國に求め、學識に於て一段の進境をみせ、其の経験に於て、また一異彩を放つてゐる。また正四位勳四等に敘せられてゐる。家庭には貞淑の譽高いき上子夫人との間に、芳郎君、茂男君、忠雄君の三男と、萬子、麗子の二嬢があり、變々たる常春の和氣が漲つて、近隣の羨望の的となつてゐる。

講演

金子堅太郎

嘉永六年二月生
東京市麴町區一番町三〇

徳川光圀は日本の政治史に、文教史に、産業史に、永遠に記されなければならぬ國民的大偉人である。昭和三年はこの英雄の生誕から三百年に當るので祭典が催されたが、この日を記念するため、J O A K から、金子堅太郎氏の義公生誕三百年の記念に際してと題する講演が放送された。今上陛下御即位の大典を行はせ給ふた秋、この明治維新の新天地を開拓した大偉人の偉績を想起することは誠に意義深いものであつて、フアンを感動させることも亦深かつたのである。氏は舊福岡縣藩士金子清藏氏の長男で、嘉永六年二月を以て生れ、明治六年家督を相続し、四年渡米してハーバート大學に學び、十一年同校を卒業したのであつた。歸朝後東京大學教師となり、元老院少書記官、同大書記官、内閣總理大臣秘書官、樞密院議長秘書官、貴族院書記官、農商務次官、等を歴任して果進に果進次第に頭角を抽んで、農商務大臣、司法大臣等の顯職に就いたのであつた。また明治二十三年には貴族院議員に勅選され、翌二十四年には瑞西國開設國公法會議に參列し、同三十二年にはハーバート大學から法學大博士の名譽學位を贈られたのである。そして三十三年には、勳功によつて男爵を授けられ更に日露事件の功に依つて子爵に陞爵した。現在、從二位勳一等、樞密顧問官、議定官、臨時帝室編輯局總裁、維新史料編纂會總裁等の重職にあつて、政界に噴々たる名を馳せてゐる。家庭には長男武磨氏同夫人豊子令孫やへ子、明子の兩嬢及び正忠君があり、圓滿を極めてゐる。



講演「蘆江」

平山壯太郎

明治十五年十一月十五日生
東京市牛込區市ヶ谷富久町一三三

日本音楽は勿論、凡そ藝術と名づける世界に憧憬をもつてゐるものにとつて、蘆江——平山の名は、餘りによく知られてゐる。昭和元年の夏、J O A K に於ける流行漫談、及び昭和二年十二月二十八日のまじないの研究昭和二年秋のJ O B K での、女の髪の話等は、いづれも藝術的香氣の豊かなものであつて、ボーリツシユな人にも大きな感動を與へたのであつた。氏は明治十五年十一月十五日、兵庫縣の兵庫湊川の河畔に生れ、風光明媚な、そして由緒ある歴史の地に、天真爛漫な幼少時代を送つたのである。そして藝術的天分が、次第に芽ばえてくると共に、早くより操觚界に入り、艶麗な筆を從横に揮つて次第に其の名を知らるゝに至り、現在都新聞社幹部として朗かな存在を示してゐる。氏は諸音楽研究の必要から、大正十年日本音楽の司と云はれる義太夫節を、浪花家かきつ氏に手解をうけた。そして大正十二年には、早や三段を上げたが、震災のため中絶し、大正十四年三月より、再び習ひはじめ、豊澤良造氏の指導をうけたのである。藝術的天分の豊かであるばかりでなく、日本音楽に精通してゐる氏のこととして、其の語りも、實に迫真的なもので、聴き手を感動せしめてゐるが、寺小屋、妙心寺といつた様なものが十八番とも云ふべきものである。家庭には、才色兼備の譽あるゆき子夫人との間に清郎君あり、父君の血をうけてまた、アーティストとしての才分をもつた人、文學志望で、同人雜誌「花卉幻想」の同人である。

講演

神田正雄

明治十二年三月生
東京市外落合町下落合一三六七

日本と支那との關係が經濟の上から、貿易の上から、國防の上から又其他の點から密接の度が加はれば加はるほど、支那を正しく理解することが必要である。そして支那の眞髓を極めんとするには、支那國民の性情を正確に諒解しなければならぬ、この支那國民性を裏と表から觀察して、日支問題の解決に一縷の光明を與へんとして講演されたのが、J O A K から昭和四年四月六日放送されたところの、支那國民性の話と題する我が神田正雄氏の講演であつた。永く支那に於て、支那通として知られ、殊に支那民族の研究には第一人者の稱ある氏の講演は、學術的にも、常識的にも、センセーションを與へるものであつて、A K の放送講演のうちでも一異彩たるを失はない。氏は栃木縣の人、神田貞氏の二男に生れ、大正二年令兄孝一氏より分れて一家を創めたが、夙に學序を追つて早稲田大學の前身たる東京專門學校の政治經濟科に學び、三十四年拔群の成績で同校を卒業するや、支那四川省に教育顧問として招聘された。三十八年米國コロンビヤ大學に學び、更に英國オックスフォード大學に留學、歐洲各國を視察して歸朝したのは明治四十一年で、直ちに東京大阪朝日新聞社に聘せられて、支那北京特派員となつた。在支十年にして、大正六年には東京朝日新聞社本社勤務となり、北米及南米を歴遊して歸朝後は支那部長外務部長政務部長等に昇進した。大正十三年の總選舉に際し、栃木縣郡部より出で、衆議院議員に當選し、民政黨に屬して今日に及んでゐる。操子夫人との間に三男三女がある。

講演

本多 靜 六

慶應二年七月生
東京市外濠谷町中濠谷四〇三

J.O.A.K.のマイクロホンを通じて、家庭講座を放送した我が本多靜六氏は、林學博士で、日本林學界のオーソリテイである。昭和三年十月十六日の幸福とは何ぞやといふ話は、氏の貴い體驗から生れたものであつて、氏は幸福の要素を、第一心身の健康、第二自己の慾望に満たざること、第三自己の努力によること、第四心の感じ方、第五比較的進歩的なこと、第六社會の希望に反せざることの六つとし、我々の最も欲するところの幸福の眞髓を語り、處世の秘訣を教へたのであつた。そして我々の頭腦に、林學者としてよりは、寧ろ教育者らしい、宗教家らしい、親しむべき亦た敬すべき圓滿性に富んだ性格を印象づけたのである。氏は舊一橋徳川家の世臣で勘定方を勤めた舊家に、慶應二年七月を以つて生れ、埼玉縣の人、折原金吾氏の令弟に當る。後彰義隊の頭取たる本多吾氏の養子となり、明治十七年、東京山林學校に入り、次で東京農林學校に轉じ、二十三年林學士の稱號をえた。後獨逸に留學してタラント山林專門學校に學び、ミュンヘン大學に轉じて國家經濟學を修め、ドクトルの學位をえたのである。歸朝後農科大學助教授となり、同大學教授に進み、今日に及んでゐるが、明治三十三年の三月林學博士の稱號を受け、現在從三位勳二等である。家庭には峯子夫人との間に東京帝大獨法科出身の博君外四女あり、長女たる子は青山女學院卒、林學博士植村恒三郎氏に、三女イサ子は實踐女學校出身、林學博士三浦伊八郎氏に、四女安子は日本女子大出身、法學士大村清一氏に嫁してゐる。

講演

長岡隆一郎

明治十七年一月生
東京市芝區白金三光町四二九

明治四年八月二十八日、太政官布告によつて階級差別が撤廢され、四民平等の御代となつたが、因襲的に不合理な差別觀念が、今尚ほ國民の胸底に残存して、同胞間の感情が阻隔し、動もすれば鬭争の種となつてゐる。これは人道的にも、國家社會の發達の上にも遺憾なことであつて、我が長岡隆一郎氏の國民情和に就いてと題するA.K.からの放送は、實に封建的差別の偏見を絶ち、同胞相愛の信念を喚起せしめんとするの意義ある講演であつた。氏は東京府の人、長岡安平氏の長男として、明治十七年一月呱呱の聲を擧げたが、幼にして穎悟、學序を追つて東京帝國大學法科大學に學んだが、在學中の明治四十年十一月には已に文官高等試験にパスしたほどの天才的閃きをみせた。翌四十一年優秀の成績で赤門を出るや、直ちに内務屬となつて官吏生活のスタートを切り、佐賀、神奈川、和歌山縣事務官和歌山縣警察部長、内務書記官、内務監査官等に歴任して、至るところに其の卓絶した手腕と、明晰な頭腦と、高潔な人格とを顯はれた。後内務省土木局長の椅子を占め、更に社會局長官に昇進したが、これより先き歐米各國に於ける戰時地方狀況調査囑託となつて歐米各國に出張を命ぜられ、新知識を世界に求めた事もある。かくて、昭和四年七月警視總監に命ぜられたが、田中内閣瓦解と共に辭職し、直ちに貴族院議員に勅選されて今日に及んでゐる。家庭には母堂トラ子刀自を中心に、卯江子夫人との間に道男君と、神奈、和歌、聖の三嬢、それに令弟義雄君があつて賑かである。



中村 正 治

明治二十七年正月三日生
横濱市南太田町宇東新地三〇

横濱山之手の居留外人が未納市税で毎年市民に十萬餘圓の特別負擔を負はせて居る所から、愛市の一念に逸早く横濱放送局の設置案を提唱して一時は市參事會の決議を経て具體化したことがあり、氏の先見の明と奉仕的眞心とは市民感激的となつてゐる。新潟縣南蒲原郡三條町の出身で、三條實業學校、新潟通信局電信學校、東京工科學校高等電氣科、帝國無線電信學校等に多年螢雪の功を積み、更に進んで早稻田大學に入り政治經濟科に研究を累ねた。大正元年より翌年十月まで東京區裁判所に勤務し、後逡信省の無線電信係を経て、安中製作所に勤務し、技術、研究、製作、販賣等の各部に腕を揮ひ、拔擢せられて横濱出張所主任となり、傍ら無線電信講習所の講師となつた。其間氏は、各所に於ける無線電信局の船舶並に陸上工事に従事してゐたが、大正十一年極東無線社を創立して之が代表社員となつた。爾來横濱開港記念會館に放送を設立したのを始めとし、横濱船舶信號所囑託として、無線電信局並に港内海陸連絡無線電話通信所を設置する等其功績は定に没すべからざるものがある。かくて同十三年には朝鮮各地に於て無線電信の講演並に實驗を試み、更に野澤屋及東京眞空球製作所の囑託となり、現に横濱ラヂオ商組合副組合長として重きをなし、亦ビナンカヅラを主劑とせる美髮液を發明し瑠璃園をも經營してゐる。此外氏は一人一職主義のキゲン俱樂部を主宰し、發明協會横濱支部、日本ラヂオ協會、明治會、横濱市政研究會、新潟縣人會、十二日會の會員で、豪放快活な頭梁の器である。



淺 村 三 郎

文久元年十月二十五日生
大阪市東區北濱五ノ六三

日本最古の歴史を有する淺村樋口特許事務所の創設者たる我が淺村三郎氏は、又斯界のオーソリテイとして、噴々たる令名を轟はれてゐる。氏は東京市小石川區原町に生れ、明治十五年七月東京高等工學校の前身たる東京職工學校の機械科に入り、第一回卒業生として、十九年七月同校を辭したのであつた。直に海軍省技手を拜命して艦政局に勤務したが、翌年當時の農商務省特許局長高橋清氏の推舉に依りて農商務省に轉じ、特許局審査官補を拜命、發明課に入り發明審査に關する職務に専らした。然し血の氣の多い氏は、自由の天地にあつて發明思想を喚起し、以て我國工業の發達に資せんと志し、明治二十三年三月官職を退き、大森俊次、眞中直道氏等と共に東京特許代官社を起し、發明考案の助成及び特許代理事務に従事するに至つた。次で翌年更に我國商工業の中樞たる大阪市に特許代官社を創立したが、後淺村樋口特許事務所と改名して爾來三十有七年、終始一貫工業所有權の確立保護のために努力し、内外國に對する取扱事件数は五萬有餘に及んでゐる。又外國事件に就いては二十年の經驗と共に六十餘の外國特許事務所と連絡して萬善を期し、東京、京都、神戸、福岡の各地に出張所を設け、四十有餘名の所員によつて正確迅速に事件が進捗してゐる。氏は作山鐵工所、住友製鋼所、日本製布羽室鑄鋼所、東出鐵工所、東洋リノリューム等の創設者で各會社の監査役取締役たる外發明品博覽會第一回の役員で現在理事及び大阪副會長である。氏は功によりて、昭和三年の御大典に際して藍綬褒章を賜つた。斯界並びに商工業界の功勞者である。

講演 宇野哲人

明治八年十一月生 東京市小石川区竹早町八二

昭和四年五月六日、IOAKのマイクホンを通じて、孔子の大義名分論に就いてと題する、文學博士我が宇野哲人氏の講演が放送された。孔子と云へば戦亂熾む時もなかつた革命の國に生れて、専ら大義名分論を主張し、敢然天下に向つて火の如き理想と道義を説いたところの先覺者である。そして其の大義名分論は、後世我國體觀念の上に、甚大なる影響を及ぼしたばかりでなく、明治維新の大業を達成する上にも、大きな感化を及ぼしてゐるのである。されば我が宇野哲人博士のこれについての講演は、思想國難に遭遇して、思想指導の聲の高らかな時、まことに意義深いものであつた。殊に浮薄な、揮發的な西歐思想に陶醉して、東洋思想の永遠性を閉却する者にとつて、良き警鐘となつたのであつた。氏は熊本縣の人、宇野丈九郎氏の四男として、明治八年十一月を以て呱呱の聲を擧げたのである。夙に學序を追つて、東京帝國大學文科大學の漢文科に學び、研鑽の功なつて同校を卒業したのは明治三十三年であつたが、間もない三十六年には東京高等師範學校教授に任ぜられた。そして同三十八年東京帝國大學文學部助教授となり、大正八年には同教授に進んだのである。又氏はさきに清國及びドイツに留學して、老大國の支那、科學の國のドイツに、新知識を求めたこともあり、現在正五位勳四等で、文學博士である。家庭には嚴父丈九郎氏、母堂チキ子刀自、それにひで子夫人との間に五男三女があり、たえず常春の和氣がたゞよつて、靜かな山の手の高臺に、賑やかな圓滿な生活が營まれてゐる。

講演 本多辰次郎

明治元年四月十五日生 東京市外大森不入斗五三一

あらゆる方面に於て、指標を失つてゐるのが、現代である。殊に思想方面に於ては、思想的國難が高らかに叫ばれ、思想善導が高唱される程、混沌として、其の落ちつくところを知らない有様である。さればこの秋、法學博士、我が本多辰次郎氏によつて、皇國の大道と題する講演が放送され、百萬の人々に深い感動を與へたことは、まことに喜ぶべき次第である。まこと皇國の大道こそ、我々の生活の、我々の魂の、永遠の故郷であつて、新文明の創造も、新社會の建設も、東方の精神に覺醒し、祖國の傳統に即して、はじめて成し得られるところであらう。氏の搖籃の地は愛知縣で、明治十九年、燃えるやうな希望を抱いて上京し、開城中學の前身たる共立學校に學んだ。同校卒業と共に、第一高等學校に進み、更に向陵生活を捨て、東京帝國大學法科大學に學び、目出度く同校を了へたのは明治三十一年であつた。かくて明治四十一年から大正十五年まで約二十年間を、宮内省圖書寮の臨時帝國編輯局に勤務し、深遠なる學識と、高邁なる識見とを以て、信望を一身に集めてゐた。學者肌の氏はこうした間にも研究を捨てず大正十二年には學界の最高權威たる法學博士の博士號をえたのである。さうして氏は精勵もつて學究に勤むと共に、其の寸暇を惜んで、讀書とか、園芸とかまた謡曲とかに興味を求めて、豊かな情懷を培つてゐる。夫人を文之(アヤノ)と呼んで才色兼備の譽高く、其の間に慶大在學の正一君及び府立第三高女出身の才媛節子嬢がある。

特許岡田乾電池製造業

岡田悌藏

明治四年三月六日生 東京府品川町大字南品川宿二五二

氏は温泉に名高い兵庫縣城崎の出身である。幼少時代から敏明な頭腦を惠まれ、若い時代に電池製造に携つて來たので、東京に於ける乾電池製造業者としては経歴多い人である。健康な體軀を持つて居た氏は日清役に従軍して戦功を建て、亦日露、日獨の兩役にも参加して勳功を顯して居る。かうして國家緩急に奉仕して獨立事業に携る暇がなかつたが、日露役から凱旋した明治三十九年現在の乾電池製造業の搖籃を創始した。是に先つて某工場で専門知識を養つて來た氏は、豫てから獨立大規模の經營を企圖して居たので、茲に同族を糾合して日本乾電池製造株式會社を興したのである。猶亦氏は從來の乾電池の幼稚不完全なるに憚らず、獨特の乾電池を發明し、府下品川町南品川宿に工場を新設して、一大製造を開始するに至つた。然るに其後氏は期する處あつて自ら獨立し、多年苦心の結果、優秀なる岡田式乾電池の發明に成功し、遂に之が特許を得て一般の需要に應じてゐるが、其製品の優秀にして價格の低廉なる、頗かに他の追従を許さざるものがある。製品の主なる納入先は、諸官廳を始めとし、學校、會社等であり、其販路は全國各地に及んでゐる。蓋し氏の如きは立志傳中の人として、現代青年の範とするに足るであらう。人となり聰明、燃ゆるが如き熱情と、剛健なる意志を有し、一度意を決すれば徹頭徹尾志を貫徹せずんばやまざる男性的氣魄の持主でもある。夫人をすま子さんと云ひ、貞淑の譽れ高く二人の間に長男好武君、長女珠子、次男好雄君がある。

講演

藤田榮吉

慶應二年三月十五日生 東京府下澁谷町神泉三〇



爛熟し切つた元祿時代、ことは退廢的なリズムの中に、血と肉と魂が混然と融けあつて生れた、絆縮縮のやうな情緒をもつた江戸文化は、圓はねば生きてゆかれないところの、争闘そのもの、やうな現代では、遠い、そして薄絹で包まれたやうな夢の世界である。されば我が藤田榮吉によつて放送された「江戸趣味の釣」と題する趣味講座は、釣りに興味をもつた人ばかりでなく、二十世紀の空氣を呼吸するものには誰れにも、齊しく、盡きない興味と共に、廣重の繪にも似た限りない懐しみを與へたのであつた。氏は靜岡縣の人、夙に濱松師範學校を了へて、明治二十三年靜岡民友新聞の創立と共に招かれて入社し、操觚界に一步を踏み入れたのであつた。かくて四十年には、聘せられて朝日新聞社に轉じ、地方版を創設するなど多くの功績を擧げて、間もなく庶務課長となり、また通信部長に累進し噴々たる令名を斯界に馳せたのである。大正十二年、病氣のため退社したが、好きの釣の研究は、これを一轉機として始められ、釣に關する内外古今の文獻の蒐集は勿論、寒暑と晴雨を選ばず、釣竿を肩にして奥多摩に、相模川の上流に、或ひは荒川の附近に出かけて、實際的研究をなし、今日では名實共に釣のオーソリテイとして知られてゐる。氏のラヂオ放送は、鮎の釣り方、秋冬の鮎と其の保護、趣味としてタナゴ釣り等數回に亘り、其の都度、趣味性に富んだ氏の話は太公望は勿論、一般ファンを喜ばせてゐる氏はまた園藝にも趣味があり、家庭には夫人との間に俊雄君をはじめ六人の子女がある。



童話、吃音矯正家

田澤嘉聲

明治二十九年五月二十八日生
横浜市中西区花咲町一ノ五三

童話の叔父さん、巖谷小波氏と並稱される童話界のオーソリテイ、我が田澤嘉聲氏は、多くの少女から全幅的の親しみを寄せられてゐるばかりでなく、吃音矯正家として、吃音者から救世主的尊敬を受けてゐる人である。氏は横浜市中西区伊勢町に生れたが、成功の陰には何時も美はしく血と涙で彩られた苦心と努力が秘むもので、氏は性来非常な吃りであつた。そして全精力を傾けて矯正法の研究に苦心し、遂に動物の欠伸と口の閉閉に暗示をえて、獨創的で合理的な矯正法を完成したのである。其の間實に二十五年で、これを多くの吃音者に試みて成功すると共に、氏自身も雄辯家となり、雄辯家揃いの早稲田大學政治経済科を卒業する頃には、雄辯會を牛耳る程であつた。卒業後は専心矯正事業のために精進し、動物の心理を研究して動物のお伽講演をしながら、全國を旅行して、八十萬の吃音者に福音を與へてゐる。氏は大正十三年十月十八日皇族學術研究會で吃音矯正、動物の心と聲の題で御前講演をなし、畏くも時の攝政宮殿下から世界第一人者の御詔を賜り、また獨大使ゾルフ氏からも世界的動物博士との稱讃を受けた。故野田大塊翁は天下第一人者の一幅を贈り、上皇將軍は天下之美聲の一幅を贈つてゐる。氏は日本赤十字社神奈川縣支部名譽講師、横浜市青年聯合會評議員、横濱瀧頭青年團長、大日本吃音矯正會會長、動物心理研究會會長、動物お伽講演會會長、横濱お伽會名譽顧問、横濱女講師等の榮職にあり、田澤式吃音矯正法、吃音矯正法に就いて、雄辯に就いて、大猿雄等の著書があり何れも廣く世に讀まれてゐる。

講座

森賢吾

明治八年九月月生
東京市麹町區下二番町五九

國際財政通として令名ある氏は、曩にパリ獨逸賠償會議の帝國委員として出席し、其の大任を完して歸朝するや、東京中央放送局の國際講座の依頼に接し、此の獨逸賠償最終解決案たるヤング案の平明な説明をマイク・ロホンの前に試みた。昭和四年二月より同六月七日までの間を要した本案は、平和條約後十ヶ年間未解決の儘残されたヨーロッパの重大なる問題を一決して、列國の經濟界を建て直す最も重大なる問題である。氏は多年財務官として海外に派遣されて居たが、這般之が適任者として大任を拜するに至つたのである。氏は佐賀縣士族で、森義勝氏の令弟に當り、東京に出て、夙に學業を修め、進んで東京帝國大學法科に學んだ。明治三十三年卒業と同時に文官高等試験に登第し、直に身を官界に投じて司稅官兼大藏書記官となり、傑出して大藏大臣秘書官に任ぜられた。其後更に大藏省參事官に擧げられ、煙草專賣局主事に補せられ、大藏省書記官を兼ねた。亦馬政局書記官をも兼任し、次いで專賣局參事となつた。こうした多年の經驗の間に國家の財政に通曉し、遂に擧げられて日本銀行監理官に任じた。依つて海外駐劄財務官として任に就き、久しく海外に留つて居た。昭和二年之を辭して歸朝、貴族院議員に勅選せられ、同年亦東京電燈株式會社社政顧問を囑せられた。尙之より先き大正十五年十一月ジュネーブに於いて開催された第二回國際經濟會議に帝國代表として出席を命ぜられ、此の度亦賠償會議の帝國委員となつたのである。高邁なる識見を有する國家的人物である。

講演

太田正孝

明治十九年十一月生
東京府大森町山王二六一六

氏は經濟讀本其他多くの通俗經濟學書を著して一般國民の經濟常識の涵養に貢獻して著聞し、一方各放送局に於ける經濟講座を擔當して全國の經濟思想の涵養に獻替して來た。氏は靜岡縣の出身で、太田萬吉氏の三男に當り、卓抜の才を抱いて夙に笈を東都に負ひ、學序を遂つて東京帝國大學法學部經濟科に學んだ。明治四十五年優秀なる成績を以て之を卒業し、進んで専門學の研究に没頭し、著々學界に頭角を顯して行つた。大正八年に至り、報知新聞社の招聘に接して入社するや、其の該博なる知識と、高邁なる識見とを以て操觚界に雄飛し、其後果進して取締役となり更に副社長に推さるゝに至つた。是より先早稲田大學講師として教壇に立ち、亦法政大學にも同様經濟學を擔當し、深遠なる學殖を傾けて學徒の指導に當つてゐたが、遂に大正十三年經濟學博士の學位を授けらるゝに至つた。其の多數著書の中最も世に行はれて居るものに「關稅行政の研究」「社會と新聞」「保稅制度論」「羅馬風呂」等の文獻がある。先年歐米各國を視察して大に見聞を廣めたが、昭和三年再度歐洲各國を親しく巡遊して歸朝するや、偶々東京中央放送局の聘に接して九月二十日歐米各國の狀態を其の學識と秀れたる觀察とを以て放送した。殊に米國の好況の根據、米人のビジネスライフ、復興に努める獨逸魂、金解禁の説話等は世人の大なる注意を喚起した。蓋し氏の如きは我國指導者階級の一人者として得難き人物である。本年齡齒四十四、其の活躍と貢獻とは寧ろ今日以後に在る。襟度寛潤温良の學者である。

英語講座

岡倉由三郎

明治元年二月生
東京市小石川區雜司ヶ谷三七

我國の英文學者として齊しく識者に知られてゐる氏は又ラヂオ英語講座の擔任講師として斯學に志すもの、誰もの記憶にあることであらう。氏は家は代々越前國福井藩主松平侯に仕へ、父勘右衛門氏は同藩特産生絲賣捌役として横濱に至り、石川屋と號してゐた。氏はこの山崎正し家の三男に生れ、我國に於ける美術界の恩人故岡倉覺三氏は實に氏の令兄である。若い頃から穎悟な氏は明治十八年青雲の志を抱いて高等商業學校に入り、後英人サンマース氏に師事して英語を學び大いに特異性を發揮して、その學才を讀えられたものである。明治二十年には東京帝國大學の文學部に選科生として入り、業了するや、朝鮮政府の聘に應じて日本語學校を創設して、日鮮融和のために貢獻するところが尠くなかつた。後鹿兒島造士館教授を経て二十九年に、東京高等師範學校教授に拔擢され、一時東京外國語學校教授をも兼ねてゐた。明治三十四年學術研究のため英國に留學を命ぜられ、三星霜の研究を積んで歸朝後、専ら新知識を齎らして我國教育界に多大の貢獻を勤んだ。齡年を重ねて大正十五年同校を辭したが、勳功に依つて従四位勳四等に敘せられ、又名譽教授の稱號をも贈られた。現に立教大學に英文學の講師としてその蘊蓄を傾けてゐるが、傍ら、東京放送局に英語講座が新設されて以來、ラヂオを通じて初歩より、よく微に入り細に涉つてまで懇切丁寧な指導を續けて同好の士から未だ見ざるの生きた先生として尊敬を受けてゐる。資性謹嚴な氏は光風霽月の襟度を有し稀に見る高潔の人格者である。

請演 宇都野 研

明治十年十一月四日生 東京市本郷區駒込東片町三三

先頃AKの家庭講座で『我子の爲に』と題し小兒の體質異常其他に就いて、其該博な知識と永年の經驗から得た蘊蓄を尤も平易に明快な口調を以つて放送し、世の親達から感謝と賞讃とを以つて迎へられた宇都野研氏は、小兒科の泰斗として令名を馳せ、現に駒込東片町に小兒科病院を經營して居る人である。本郷の高臺の一角に聳ゆるその大病院を仰ぐ時、子を持つ親達は如何にも心強い感じを抱くのである。氏は愛知縣の人宇都野式氏の長男として、額田郡本宿村に生れた。梅檀は双葉より香しの鬢に洩れず先天的に持つて生れた鋭才は幼時より常に他の村童を壓して居た。長ずるに及んで其天分は益々發揮され明治三十八年には東京帝國大學醫學部小兒科に抜群の成績を以つて入學した。降つて同四十一年同部を卒業し、附屬病院小兒科に在つて臨床上の研究を積み大正元年九月遂に現病院を設立するに至つたのである。爾來最新の知識・優秀なる技能とを以て患者にまみえ、絶大なる信用の下に一路幸運を辿つてゐる。人と爲り淵雅にして襟度廣く極めて文藻の豊かな人格者である。殊に歌道に秀でては北原白秋氏等と共に短歌雜誌「白樺」を出して居たが、後歌道に對する見解の相違から分立して現在は「頸草」を主宰して居る。昨年讀賣新聞社が催した昭和百人首にも、氏獨特な佳麗な歌を寄せて斯界を驚嘆せしめたことは普ねく人の知る處であらう。澄子夫人は和歌山縣人醫學博士田村昌氏の令姉で夙に貞淑の譽高く夫君と同じく歌道に深い造詣を持つて居る。氏は恵まれたる子嗣者で目下長男龍一君を筆頭に三男四女がある。

講演

小橋 一太

明治三年十月一日生 東京府大崎町上大崎五三八

思想に經濟に、或は政治に教育に、國難來の聲漸く高く、華かなる昭和の聖代は、心ある人をして杞憂措かしめぬ國歩艱難の秋である。曩に濱口總理起つて經濟國難を説き、次で九月五日文相小橋一太氏亦マイクロホンの前に言々句々肺腑を抉るが如き熱辯を揮つて思想國難を説いたことは今も記憶に新なる所であらう。氏は熊本藩士小橋元雄氏の長男で、熊本市道廻田畑町に生れ、第五高等學校を経て明治三十一年七月東京帝大英語科を卒業し、直ちに内務省に入つて縣治局に勤務、同年文官高等試驗に合格し三十二年五月山口縣參事官、三十五年二月長崎縣參事官、三十六年四月内務書記官に任ぜられ衛生局保健課長に擧げられた。次いで内務省參事官となり四十一年ベテログラード開催萬國道路會議に差遣せられ、歸朝して内務省參事官に累進した。同四十三年末内務省衛生局長となり進んで地方局長を経て土木局長となり鐵道院理事を兼ねた。大正七年四月内務次官に任ぜられ、同十三年一月清浦内閣の内閣書記官長となつて親任官の待遇を受けた。大正九年來熊本縣より代議士に累選せられ、曩に政友本黨幹事長となり、立憲民政黨成立するや總務に擧げられ次いで濱口内閣に文部大臣として列なつて居る。氏は大戦以來浮華放縱に押れたる國民の覺醒を促がし一大覺悟を要望すると共に質實剛健の氣風を高潮して教化運動の必要を説き、國民思想の建て直しを計つて居るが、其の國家を思ふ火の如き丹誠は、我等をして敬虔措かざらしむるものがある。氏の如きは得難き國家の重寶と云ふべきである。

ラヂオ商、富久商會 市村 繁次郎

明治十年一月二十一日生 東京市神田區錦町三ノ八

絶大の信用と堅實なる基礎を以て、ラヂオ商界に重きをなしてゐる富久商會主市村繁次郎氏は、茨城縣北相馬郡藤代出身である。十七歳の時青雲の志を抱いて上京し早稻田中學に學んだ。同校を了へて明治二十九年近衛歩兵一聯隊に入營し、一時軍務に服して實業界に足を踏み入れたのは明治三十五年のことである。其後間もなく日露の役に遭つて出征し屢々生死の間を馳驅して偉功を樹てた。凱旋後事業家肌の氏は間もなく業界の雄星一氏等と提携して製紙會社二興社を興した。かうして同社順調に發展を見るや一方に機械工場をも經營して花々しく活動して居たが、遂に大正十二年關東大震災に遭遇した爲、遂に多年氏が尊い血と膏とを以て作られた苦心の結晶も悉く灰燼に歸するに至つた。然るに不撓不屈の氏は、毫も之に怯む處なく、益々勇を鼓して奮闘した。當時偶々東京中央放送局開設の議が起つたので、機を見るに敏い氏は、之が開設に先立つてその年の十月ラヂオ商を開業した。果せる哉、劃策大に當つて急速の發展を遂げ、今や一流商店として斯界に重きをなしてゐる。之より先き同店では日本放送協會關東支部主催のラヂオ受信機懸賞募集に應じて、見事一等當選の榮を膺ひ、その技術の優秀なる事を裏書せられた。此外同店ではエレバム特久トランスを始め、東京電氣、湯淺蓄電池製造及古川工業各株式會社等の製品の一手販賣をなし、販路は全国各地に及んでゐる。夫人をふく子さんと云つて貞淑の譽高く、二人の間に子寶はないが家庭は極めて圓滿である。

講演

加茂 正雄

明治八年八月生 東京市本郷區向丘彌生町三ノに三號

我國工業界の權威加茂正雄氏は、昭和四年六月二十日、東京中央放送局に於て「平和の戦争と發明」の題下一場の講演を試みた。氏は愛媛縣の出身で、家は同縣土族である。夙に高等學校を経て東京帝國大學に入り、工科機械科に於て學究を遂げ、明治三十一年七月優秀の成績を以て卒業した。後母校に留つて引續き研究を累ねてゐたが、幾許もなく拔擢せられて助教となり、更に進んで教授に任ぜらるゝに至つた。越えて同三十九年船用機關學研究の爲米獨佛の各國に留學を命ぜられ、普く觀察研究を遂げて歸朝した。同四十一年三月帝國鐵道廳技師に任命され數年間實地技術の指導に當つて居たが、降つて大正元年東京帝國大學工學部教授を兼任し益々令名を馳せてゐた。かくて大正二年遂に工學博士の學位を授けらるゝに至つた。後進國たる我國民は、科學の力歐米各國に劣る所甚しく、殊に工學化學の知識に至つては其の幼稚なること殆んど同日の比ではない。氏等先覺識者は深く茲に思ひを致して後輩の薰陶に努めて來たのである。其説く所に依れば、最近米國學者の研究の結果、日本兒童の頭腦の發達程度は世界第一に位すると云ふ、而して先天的に劣らざる能力を備へた日本人の完全なる科學知識の發達は一に指導者の力に俟つのみである。戦争は既に人類から除かれつゝある。今後の國家國民の發展と勝利とは一に頭腦の競争であり發明の競争である。而も我國民に於ても努力次第に於ては遂に勝を制すべきを保することが出来ると説いて居る。氏は尙ほ從四位勳三等である。



講演、三越呉服店家具部主任
山本秀太郎

明治二十九年一月三十日生
東京府下碑倉町三三〇五

人間は家庭に生れ、家庭に育ち、家庭に終りを遂げるものであつて、家庭は實に、人生發祥の地であり、人間生活の玉城である。されば其の安息處であり、慰安處であるところの家庭の平和を望まぬ人もなければ、其の家庭を形造つてゐる住宅の美と充實とを欲しない人はないであらう。住宅を裝飾するといふ事は、美を欲し醜を嫌ふ人間の本能がら出たもので、殊に文化生活が營まれる様になつてからは、美であると共に簡易安直な住宅が求められるやうになつた。従つて、我が山本秀太郎氏によつて放送された、小住宅の洋風化、西洋間の掃除と器具の手入れ法と題する再三の講演は、これら近代的情緒に生きんとする人々を、喜ばしたに違ひない。氏は現在三越呉服店家具部主任として令名ある立志傳中の人である。日本橋區北新堀町に生れた生粹の江戸ッ兒で、嚴父を多藏氏と云ひ、氏はその二男である。明治四十年青山小學校を卒業するや、將來家具製作の有望なるに着目し、築地工藝學校の家具製作科に入り専ら器用な功を積んだ。大正三年の春遂に同校を卒業すると共に三越呉服店の家具部に勤務し、孜々として職務に精勵すること實に十有五年、遂に拔擢せられ家具部の主任となり、引續き今日に及んでゐる。人となり温厚篤實にして頭腦明晰、思想の圓熟した好紳士で、家具裝飾に關する造詣極めて深く、殆んど第一人者を以て稱せられてゐる。美術、釣、登山等の趣味に豊かな情操を見せ、閑あれば水に糸を垂れ清境に日頃の鬱を散すと云ふ。夫人をフサ子さんと云ひ貞淑の譽れ高く、二人の間に一男三女がある。

講演

千葉眞一

明治十三年二月七日生
東京市日本橋區濱町二ノ一

耳鼻咽喉科の國手とした知られた醫學博士千葉眞一氏は、東京中央放送局の通俗醫學講座に再三講演を試みて、其該博な専門的學殖から、常識醫學の心得を説いて衛生思想の向上に資する所が極めて多かつた。氏は千葉立造氏の三男で、生來明かな頭腦を有し、學業は常に群を抜いてゐた。中學を卒業後高等學校を経て、更に東京帝國大學醫學部に入學した。かくて専門學の蘊奥を極め、明治三十八年卒業するや、直に大學院に入り副手として母校病院に勤務することになつた。後幾許もなく擧げられて助手となつたが、同四十二年遂に醫學の祖國獨逸に留學した。彼の地に於てはストラスブルグ大學に研鑽し、在ること三年にして、フランクフルトに轉じ、市立病院神經科に於て専ら實際的手腕を磨いて行つた。同年冬新知識を齎らして歸朝し、翌年早々耳鼻咽喉科長として本郷順天堂病院に勤務するに至つた。然し燃ゆるが如き向上心を以て満されてゐる氏は在職中熱心に之が研究を重ね、大正二年四月一人の岩様骨に關する解剖的見知一及外に參考論文七編を提出して醫學博士の學位を受け、茲に多年の宿望を達したのであつた。爾來在職十年恰も一日の如く精勵し、大正九年獨立して淺草區左衛門町河岸に千葉病院を開設し、自ら之が院長として經營の衝に當ることとなつた。以來名聲頓に加はり、耳鼻咽喉科屈指の名病院として都人の間に知られて居る。氏は學士會員で、又習江と號して書畫をよくし、くに子夫人は日本女子商業出身の才媛で、二人の間に長男幹一君外六子がある。

講演

松本君平

明治三年四月生
東京市外大森神明山二二六三

ドイツ皇帝カイゼルを、オランダのドルンの古城に訪れた松本君平氏の土産話はAKから放送されたが、近代的英雄の面影を彷彿たらしめたものであつた。氏は葛城眞人の後裔たる松本丑太郎氏の二男として、遠江國小笠郡中内田村御門に生れたが、夙に米國に留學してヒラデルヒア大學に財政經濟學を修め、更にブラウン大學總長アンドリュース博士に招かれて同大學の大學院に入り、哲學史學を研鑽して同大學より、文學、哲學博士の稱號を送られた。次いで英佛兩國に遊學したが日清戰爭當時は米國にあつてヒラデルヒアプレス及び紐育ツリビュン新聞記者として活躍し二十九年歸朝するや、東京新聞社の主幹となり又東京日々新聞社の客員に迎へられ、三十年伊藤公に隨行して歐米各國を巡遊し三十一年歸朝、直に東京政治學校を創立して校長となつた。また雑誌大日本を刊行し、日米商工協會を組織して日米通商雜誌を發行した。偶々伊藤公政友會を組織するや公を助け静岡市に政友會の機關紙静岡新聞社を經營して社長となり、三十七年に衆議院議員に當選したのである。日露戰爭に際して支那南北各省を巡視し、次いでポーツマスの日露講和に加り、また北京に日刊「新支那」を、天津に日刊英字新聞チャイナ、タイムス、英文週刊チャイナ、ツリビュンを創立、四十二年社団法人青年教團を興し、機關雜誌獄獄を發行、大正四年には廣東雲南、南洋印度を視察した。代議士に當選すること數回海軍參與官に選ばれ、普選の功勞者、婦選運動の主唱者として知られてゐる。

講演

横森賢治郎

明治二十年十月十九日生
東京市牛込區北山伏町四三

醫學は我國の誇るべき科學とされて居る。従つて斯界には各々一家を以て任ずる大家が宛然綺羅を競ふ有様である。醫學博士として令名ある横森賢治郎氏は、分泌病の研究に於ける第一人者を以て稱せられて居る人である。氏は此の造詣を昭和三年九月二十日のAK家庭講座に、「若き婦人の内科病」の題下に傾倒説する所があつた。其の獨壇場たる委黃病、假性バセトウ氏病等の破瓜期婦人の内科病の病狀及び療養法は大いに世人に益する所があつた。氏は長野縣南佐久郡畑入村の出身である。曩に東京帝國大學醫科大學に入學して研鑽を積み、大正二年優秀なる成績を以て卒業するや、直に母校附屬病院の副手となり、専ら臨床上の研究を重ねて行つた。功成るや辭して南滿鐵道株式會社に入社し、營口醫院内科部長として重任に就いた。而も猶研究足れりとせや更に研鑽の目的を以て大正八年上京し、東京帝國大學傳染病研究所に入つて研究を兼ね、越えて十年再び南滿鐵道病院に復歸し、遼陽醫院内科部長に就任した。同十二年二月「淋巴球に對する實驗的研究」外參考論文七編を提出して醫學博士の學位を受くるに至つた。かくて同十五年三月現在の地に獨立して、一般内科の診療に従事した。氏は特に呼吸器病、消化器病、血液病等は多年心血を濺いで研究したわけであつて、既に一方の權威者として認められて居る。氏は如龍子と號して俳句の趣味深く、其他尺八、洋畫、文學等を愛好して高尚な趣味の人として知られて居る。乗馬等も其好む所である。ハル子夫人は第三高女の出身で、長男を正通君と云ふ。

講演

柳澤信賢

明治二十二年九月十九日生
東京市淺草區馬道六ノ一

氏は小兒科に名を獲た刀圭家である。昭和四年五月、AKの小供の時間に「楽しい郊外散歩」の題下に現時歐米各國に盛に行はれて居る日曜祭日等の家族連れ郊外散策に就いて講演し、更にワンドルフォノゲル、夏季集團、キャンプ等の「人間は自然に還れ」と云ふ流行に就いて各國の状況を語り、猶更に其の専門的見地から、是等の流行が健康に及ぼす好結果を説き、知識偏重に煩はされた都會兒童の健康増進法として最も相宜しいことを力説した。氏は東京府士族で、故柳澤信行氏の長男に當り、淺草區小島町に呱呱の聲を揚げた。高等學校を了るや直ちに東京帝國大學醫學部に入學して、醫學の堂奥に研進し、大正三年卒業した。後同大學附屬病院に留り、實際に當つて手腕を練ると共に、諸大家教授の薫陶に接して主として小兒科の研究に没頭した。降つて大正六年普く研鑽を遂げて淺草馬道の現地を下して獨立し、柳澤小兒科醫院を開設した。猶これより先レントゲンに就いて深く究むる所あり、現時に至るまで、泉橋慈善病院X光線療法科を擔當して頗る名聲を馳せてゐる。學究的な氏は今後猶斯界に飛躍するの目あるべく矚目されて居るが、一方區内生え抜きの人材として住民の信望頗高く、馬道町會委員として町民共榮の爲に貢獻してゐる。スポーツ方面に通曉して居るばかりでなく、自ら亦水泳、ボート等に長じ、學生時代から鳴らしたもので、趣味は外に釣魚、讀書等がある。其家庭には鈴子夫人との間に睦子嬢がある。

講演

鈴木梅太郎

明治七年四月生
東京市澁谷町上澁谷一四一

人口食糧問題は我が國に於ける刻下の重大問題で、世上亦喧々轟々として諸説沸騰を極めて居る。此の方面に於ける我國の一人者たる氏は、深く茲に鑑る所あり、東京中央放送局の國產獎勵講座に於いて飲食物の自給自足に對する蘊蓄を披瀝して世人の注意を喚起したことは、當に時宜に適したものであらう。覺悟を促して居る。氏は農學博士、東京帝國大學農學部教授として知られ、榮養素味の素の發見に依つても其名博く籍甚して居る。静岡縣が其出身地で、鈴木捨藏氏の令弟に當り、夙に高等中學の科程を終つて東京帝國大學農學部農藝科に學び、明治二十九年優等なる成績を以て卒業するや、直ちに拔擢せられて母校の農科助教授に任ぜられた。後教授として職を盛岡高等農林學校に奉じ、更に東京農業大學教授を兼務し明哲なる頭腦と深遠なる學殖とを以つて大に其前途を矚望せられてゐた。現に引續き東京帝國大學農學部に職を奉じて居るが、既に教職に在ること實に三十有餘年、此の間恰も一日の如く學徒の養成と専門學理の研究とに心血を瀝いだ氏の努力は誠に涙ぐましいものがあつた。之より先き氏は明治三十四年農藝化學研究のため獨佛瑞の諸國に留學し、同年農學博士の學位を授けられた。亦大正七年理科學研究所創立せらるゝや其研究員となり、肥料調査委員會委員に擧げられ、引續き在職中である。一方氏は又三共、大和醸造各株式會社學術顧問として指導の任に當つて居る。學界に實際界に其の貢獻は實に没すべからざるものがある、功に依り正四位勳三等を賜つて居る。



眞野精次郎

明治十二年十一月十三日生
東京府下日暮里宇日暮里八五三

西歐文化の輸入と共に、民衆の趣味性は次第に高潮して來たが、就中音樂に對する理解には、異常的なものがある。まことに藝術的趣味は、機械的に旋轉動作してゐる近代人のオアシスであつて、其處に生命の休息を求め、はじめて人間的性情に立ち歸へるのである。其の音樂の中でも最も民衆的なものはハルモニカであるが従來我國では此種の樂器で、繊細な音色と微妙な倍調を具備したものは製作されなかつたので、海外から供給を仰いで、辛うじて邦人の趣味を満足せしめてゐた。これは文明人としての恥辱であり、且つ民衆の趣味性涵養の上から云つても、甚だ遺憾とする處であつた、之れに發憤して、外國品を凌駕するところの優良品を製出し我が樂器製造業者の爲めに萬丈の氣を吐いてゐるのが、眞野精次郎氏である。そしてハルモニカ製造販賣を以つて聞えてゐる高陽堂眞野精八商店の當主である。氏は雪で名高い新潟縣高田市の人、善光寺町に生れ、十三歳の時青雲の志を抱いて上京したのであつた。まづ東海堂玩具店に雇はれ、精勵十有餘年模範店員として重用されたが、不幸にして主家が事業上の蹉跌から廢業の憂目を見るに及び、獨立して之が製造業を營み實社會に一步を踏入れたのは、實に明治三十六年の事であつた。かくて超人間的な努力をもつて奮闘し、歐洲大戰當時は獨逸からの輸入杜絶を機會に速く英支南洋方面にまで逆輸出する有様であつた。現在では板橋金井窪に大規模の分工場を有し、年額實に六十萬圓以上を産し、別に六百餘坪の敷地を一般玩具製造に當てゝゐる。

講演

奥平昌恭

明治十年六月十六日生
東京市芝區高輪南町五三

昭和三年八月東京中央放送局の趣味講座に、黒鯛打網の講話を試みた趣味の人奥平昌恭氏は、舊豊前中津藩主奥平昌邁氏の嫡子で、伯爵貴族院議員として知られた人である。當家は其かみ村上天皇第一皇子具平親王より出で、其遠裔奥平美濃守貞能の長男信昌氏の後胤である。彼の三百年の礎を築いた家康が、未だ創業苦心の時代に、奥平信昌三州長篠城を死守して徳川勢のために勳功を顯したことは鳥井強右衛門の美談を以て後世に永く傳へられてゐる。其後世々徳川の爲に盡瘁し上州宮崎の地三萬石を領して居たが、關ヶ原の大戦後は進んで濃州六萬石に封ぜられ、爾後轉々して享保年間豊前中津十二萬石に封ぜらるゝに至つた。後數代徳川の世と共に繁榮して昌邁氏に至り、同十七年に至りて伯爵を授けられた。昌恭氏は東京に於て生れ、幼名を九八郎と云ひ、明治十八年を以て襲爵を仰付けられた。夙に學習院及び京都帝國大學に學び、歐米漫遊後貴族院議員に擧げられ現に在任中で、功に依り從三位勳三等に敘せられて居る。尙實業方面には樺太鐵道社長、朝鮮銀行監事、愛國生命保險取締役等の重職に就き、頗る手腕を顯はれて居る。氏は早くから投網に興味を有してゐるが、流石に三十年間手がけた丈けあつて、その技術の如きも極めて堂に入つたものだ。従つて氏の放送も能く眞髓を穿ち太公望連に深い感銘を與へたことは云ふ迄もない。そして濃厚な氏はかうして暇さへあれば網を手にと水邊に遊ぶことを常として居る。

講演

小野 鑛 造

明治十四年三月五日生
東京市牛込區築土八幡町二六

一ヶ月餘に亘つて尙且感染能力を持つて居ると云はれるチフテリアは主に小兒を襲ふ最も懼るべき傳染病の一種である。此のチフテリア菌の性質及び人體傳染方法、症狀、豫防治療法等に就いて、氏はラヂオを通じて多年の専門的造詣を傾け、世人に警告されたことがある。氏は耳鼻咽喉科の大家、此の種病菌の研究に於ては當代屈指の士である。氏は福島縣伊達郡桑折町の出身で、故小野玄海氏の長男である。夙に郷里に於て學習を了へ、更に東京に篋を負ふて第一高等學校に登壇刻苦を積んだ。聰敏な頭腦を持つた上に人に越えた熱心家の氏は、學生時代から既に片廬の學徒と選を異にする所があつた。同校を了るや進んで東京帝國大學醫科に入り、主として耳鼻咽喉科の研究に意を注ぎ、明治四十二年之を卒業した。直ちに日本赤十字社病院に招聘され、外科に勤務して診療に當つたが、猶傍ら研究を進め、越えて同四十四年七月母校醫科耳鼻咽喉科副手となつた。在ること五年、親しく斯學の先輩大家に學んで大いに腕を磨き、大正四年迎へられて小此木病院に勤務し、爾來次第に登用せられ、遂に同八年には拔擢せられて副院長となるに至つた。同年三月獨立して神田區神保町に病院を開設し逐年繁忙を極めてゐたが、震災のために病院を擧げて悉く烏有に歸するに至つたので、更に現地に假病院を設け目下隆盛を誇つてゐる。之より先き大正十四年二月論文「應器迷路の機能より強迫現象の成立を論ず」を提出して醫學博士の學位を授けられた。氏は現時年一會の會員で、亦學士會日本醫師會、及醫學 各會員である。

講演

山本 忠 興

明治十四年六月二十五日生
東京府高田町一四二一

二十世紀の科學は電子の研究によつて物理的並に化學的諸現象を説明し遂に新時代の文化を代表すべき、電氣萬能の時代を現出した。我が國に於ける電氣工學の第一人者で斯學の發達に貢獻する所が極めて多い。氏は四國の人、高知縣土佐山本修次郎氏の次男で、同縣香美郡岩村に生れ、明治二十五年十一月前貴族院議員多額納稅者山本忠秀氏の養嗣子となつた。若くして上京し、東京高等中學校を卒業するや學序を遂つて東京帝國大學工科電氣科に學び、明治三十八年、優秀な成績で卒業した。同年芝浦製作所に入り、直ちに電氣機械の設計に従事した。同四十二年辭して獨逸に留學し、斯學の大家アーノルドスタイメツツ氏に師事してその蘊奥を極め、多年に亘つて刻苦する所があつた。かくて普く電氣工學の知識を得て歸朝するや直ちに早稲田大學の招聘に接して現工科教授となり、電機學科主任として學徒の薰陶に當つた。そして傍ら研究室に於て實驗及び研究に没頭し、其の結果大正六年遂に認められて工學博士の學位を授けらるゝに至つた。此の頃より本邦電氣機械學の權威者としての令名愈々高く、同期誘導電動機其他誇るべき大發明を完成した。降つて大正十三年倫敦に於ける萬國動力會議に出席し、更に亦工業動力問題研究のため視察を命ぜられて歐米を遍歴した。現に早稲田大學工學部長である。氏は熱烈なる基督教信者で、曩には萬國日曜學校大會に日本代表として參列し現時日本日曜學校協會理事長の職に就いて居る。猶長男道雄君は目下佛國巴里に留學中の新進家である。

講座

竹野 芳 次 郎

明治八年十一月四日生
東京市赤坂區青山北町七ノ一

氏は小兒科の大家として令名高い刀圭家である。昭和二年十二月二十日のARK家庭講座に「お正月と子供「衛生」に就いて松の内御馳走攻めに暮す子供等の衛生上の注意を放送し、亦季節と養物の營養價値に就いて専門的研究を發表し、家庭の主婦に多大な寄與を齎らして居る。氏は世々士佐藩の士族で、先代は維新當時より上京し、氏は四谷區舟町に呱呱の聲を揚げて居る。明治三十八年八月千葉醫學專門學校を卒業し、猶研究に従事して居たが、同四十二年六月獨逸國に留學し、ミュンヘン大學に入り専ら血清學、醫化學を研究し、傍らザイツ教授に就いて小兒科を研究した。同四十三年九月より小兒科教室に轉じてパウンドンレル教授に就いた。同四十四年四月ドクトルメ、チチーネの學位を受け、直ちにベルリン大學に轉じた。専ら小兒科教室にホイブネル教授に師事し、傍らインケルスタイン教授に従つて乳白養養學を攻究した。亦十五年一月より小兒科教授ミュレル氏に従ひ、大正元年十月塊佛英の諸大學小兒科教室を見學し、同年十二月歸朝した。大正二年四月東大醫科化學教室に入り、大正四年四月現地に小兒科醫院を開設し頗る隆盛を極めてゐる。之より先き氏前記教室に於て引續き研究を累ね、大正八年十二月乳汁中に存する「コロイド」カルシウム「マグネシウム」及無機性有機性磷定量補遺にチーグフリード氏の所謂「ヌクレオン」の存否に就いて、外參考論文四編を東大醫學部教授會に提出して醫學博士となつた。氏は又文藻豊かにして「子供を丈夫にする新育児法」等の著があり、夫人をせい子と云ふ。

福 島 琢 郎

明治十九年四月十九日生
東京府下大井町四三三一

ピアノ、オルガン等の製作界のオーソリテイとして令名ある氏は、明治十九年四月十九日を以つて、東京市に生れ、開成中學から、早稲田大學商科へと學んだ。學生時代から樂器の構造及び樂譜の研究に對して深い興味を抱き、其の當時邦樂の譜を完成して、天才的閃めきをみせたこともあつた。明治四十年早大を出て、一年志願兵として近衛一聯隊に入營し、除隊後引きついで研究を重ねること數ヶ年、即ち大正二年十一月には、東京音樂學校の推薦に依つて農商務省からピアノ、オルガン製作研究の爲め北米に派遣されたのである。翌三年一月ポストン市のニューイングランド、コンサーバトリ、オブ、ミュージックに入學してピアノ、オルガンの構造及び調律を研究し、同四年七月卒業と共に第一流の諸樂器工場に於て製作調律の實地研究をなした。大正五年九月歸朝したが、留學三年間に於て成績優等であつたので、農商務省から二回賞金を受けたのである。歸朝後は東京音樂學校講師となり、其の傍ら自ら福島樂器研究所を創立してピアノ製作の研究並に調律技師の養成に従事した。九年宮内省から宮中及赤坂離宮のピアノ維持手當方御用を仰せ付けられ、越えて十一年一月歐洲樂器界の狀態を視察するために渡歐、主としてドイツを中心に視察し、同年十一月、新知識を修めて歸朝した。十四年三菱商事會社樂器部の顧問に聘せられて樂器製造の改良に努め、今日に及んでゐる。氏が斯界の最高水準を求めて精進した努力は、氏自身の技能の完成であるとともに、また日本音樂界への一大貢獻であつた。

講演

有吉忠一

明治六年五月生
横濱市南太田町二〇二八

昭和四年六月一日有吉横濱市長は「復興の横濱」の題下にマイクロホンの前に講演を試みて居る。横濱市は今より七十年前戸數百戸に満たぬ一寒村であつた。神奈川條約を以て開港場となり、爾來急足なる發展を遂げた。然るに大正十二年の震災に遭遇するや忽一朝にして悉く灰燼に歸するの已むなきに至つた。故に於て全市民は擧つて復興に全力を盡ぎ、さしも難事業も數年にして舊態に復するに至つた。此の記念すべき大事業の完成には我が有吉氏は横濱市長として率先難局に當つたことは言ふまでもない。氏は京都府士族有吉三七氏の長男で、明治二十九年東京帝國大學法科英法科を卒業し、高等文官試験に合格して内務省となつた。同三十年島根縣參事官に任ぜられ、爾來兵庫縣參事官、内務省參事官等に累進し、同四十年歐洲各國に差遣せられた。歸朝して翌四十一年千葉縣知事に任ぜられ若くして治績を遺し名聲頗る高かつた。同四十二年統監府總務長官、次いで朝鮮總督府設置さるゝや總務部長官となつた。亦四十四年宮崎縣知事となり、更に神奈川、兵庫各縣知事を経て朝鮮總督府政務總監に就任した。横濱市長に推舉されたのは實に大正十四年四月である。大都市の市長は、動もすれば複雑なる行政事務に災せられ、或は政争の渦中に投ぜられて更迭を餘儀なくせられ、爲に眞の抱負經綸を實行するを得ないのである。然るに氏は獨り多年市長として經綸を行ひ、毫も非難の聲を聽かないのは、以て氏が如何に市民より信任せられて居るかを雄辯に證左するものではあるまいか。尙ほ氏は正三位勳二等である。

ラヂオ器具商

加藤文吉

明治三十二年五月二十二日生
東京市芝區赤羽町四

新興のラヂオ機械器具商の間に於て、目立つた飛躍を見せて居る加藤文吉氏は、靜岡縣の出身で、加茂郡稻取村が其の懐しい搖籃の地である。大正元年に十四歳で上京し、當時赤坂區溜池の廣瀬商店に勤務した。そして忠實其のものゝ七年を、主家を扶けて一日の如く精勵し、同七年に轉じて宮本商店に入つた。かくて二十五歳の年まで店頭に立つて修養を厲み、其後亦二年を経て大正十四年初めて獨立して現地にラヂオ機械器具商を開業した。かねて鍛へて來た手腕と、機會洞察の遠見とで、以來メキメキ事業の成績を擡げて行つた。そして市内は勿論各地の同業者間に廣く商品の信用を培ひ、遂に芝區赤羽町四番地に工場を設けて、ラヂオ器具並に蓄電池の製造に従事するに至つた。目下技術員並に店員は十數名の多きを數え、何れも同方面の註文に頗る繁忙を極めてゐる。現に同店の主なる取引先は、鐵道省を始めとし、瓦斯會社、大公使館、其他一流の實業家等で、之を以てしても同店の營業振りが、如何に堅實で、而かも絶大の信用を有するかを知ることが出來やう。氏はこうして家業に精勵する傍ら、同業者の共存共榮に力を注ぎ、現に蓄電池業組合の理事に推され、黎明期にある組合の發展と、組合員の親睦に、絶倫な精力を傾注してゐる。人となり、温厚篤實にして抱擁力に富み、その圓熟せる思慮と共に、益々斯界に信望を高め、大に其前途を囑望せられてゐる。音楽に興味を有する處、亦愛情の人と云ふべく、夫人をクラ子さんと云ひ、二人の間に長男二三男君があり、家庭は極めて圓滿である。

三共電機工業經營者

岡田完幸

東京市麻布區新廣尾町三ノ二三

先進諸國に立ち遅れたかの觀ある我がラヂオ界の成長のために、各専門家が相踵いで精巧國産品を出して居るのは、輒近文化を代表するラヂオ界に取つて尊い貢獻でなければならぬ。我が岡田氏の礦石式マイクロスピーカも其一つである。氏は多年電信方面の研究を積み、逡信省無線電信局長の職に在つた人、從來の礦石の不完全なるに慊らず、自ら研究に没頭するに至つて三年間を、研究室に閉ち籠つて専門書の讀破と實驗研究に傾倒した。昭和三年甫めて實際製作に着手し、遂に苦心酬いられて完成品を斯界に送るに至つたが、之を礦石とロードスピーカーとの間に使用すれば六百ボルトの乾電池で百哩乃至五百哩、一QQバルヴに依れば三百乃至四百哩の長距離に及び、眞空管の如く取替への要なく、礦石の如く不鮮明な低聲に惱ませられる缺陷は絶對にない。一方價格に至つては、從來の不完全な英國式マイクロ、スピーカーの半額にも満たざる安價なものであると云ふ。當時米山東京無線電信局長は「三球式以上の明瞭な音聲を出す該品は、全國の礦石化を實現し、ラヂオ界に一新紀元を劃するものである」と銘打つたが、使用界の反響は當に此の豫言的な言葉に頌和して居る。目下英米獨加奈陀等の特許を得て、國際市場に堂々舶來品を運送して居るのも心強い氏は官職を辭してからは三共電機製作所を經營し、既往の學殖經驗を以て幾多の新製製品を出して居るが、今後尙世に問ふ優良品の發明を期待されて居り、斯界屈指の權威として推すに足る人である。

家庭講座

五十嵐健治

明治十年三月生
東京市外灘谷町中灘谷七九六

ラヂオの生命若しくは價值が、報導機關、教養機關、娛樂機關である限り、ラヂオの民衆化といふことは、ラヂオと家庭との距離が次第に接近してゆく、其の歩みに外ならない。この意味に於て、家庭講座の如きは、ラヂオの機能を最もよく生かすところのものであつて、また我が五十嵐健治氏の洗張りの仕方と題する二回に亘つての講座は、その代表的なものと云ふべきであらう。殊に板張り、火押し仕上げ、仲子張り等についての、詳しい、行届いた、手を取つて教へるやうな親切な話は家庭知識の一つとなつて主婦を喜ばせただけでなく、家庭經濟の上から見ても極めて有益な事であつた。氏は、東都の洗濯業界に潮を唱へてよく知られてゐる白洋會社リーニング株式會社の重役で、現在取締役の椅子を占め、獻身的な努力をもつて社業の隆盛に勵み、部下の尊敬を一身に集めてゐる。新潟縣の人で、船崎資明氏の二男に生れたのは、北陸の天地が丈餘の雪から救はれて、纏て柳も芽ぐもうとする明治十年の三月であつた。十四年四月先代五十嵐幸七氏の養子となつて、大正三年十月家督を相續したのであるが、雪の中から生れた北陸人特有の理智的な、そして忍從的な性格をもつた氏は、惡戦苦闘して遂に實業界に頭角を抽んで、洗濯業界に令名を馳せるに至つた。家庭にはテイ子刀自を中心として、ぬい子夫人との間に、丈夫、恤生、光喜、充、有爾君、道子、恵子、知視子、ますみ、禮子嬢があり常春の和氣が漂つてゐる。尙じゆく子さんは弘前高校教授西郷啓藏氏に嫁してゐる。



講演、北品川丹毒病院長

加藤 清一

明治九年四月八日生
東京府下品川町北品川二〇七

日本程醫學の進歩した國も少ないが、日本國民ほど醫事衛生に無關心な國民も少ない。従つて最近ラヂオによつて醫學思想が國民に吹き込まれ、家庭醫學が普及されてゐることは、最も有意義な喜ぶべき事と云はねばならぬ。殊に過ぐる日北品川丹毒病院長加藤清一氏によつて放送せられた、恐るべき丹毒病についての講演は患者は勿論一般市民にとつて極めて有益なものであつた。氏は明治九年四月八日をもつて山口縣に生れたが、幼にして穎敏、夙に醫學を志望して東都に出て、濟生學舎に學んだ。明治三十三年同校卒業後、同大學の助手を命ぜられ、約十一年、醫學の殿堂に立籠つて、學理的研究を続け、また實地研究の必要から三十四年現住所に病院を開いて、兩方面から躍進的に醫學研究をすること、二十有餘年の長きに及んだ。そして遂に、不治の病として、いかなる醫も手を携いた丹毒病の治療薬を發見して醫學界に一大衝動を興へ、死魔に取りつかれた丹毒病者には救世主的な一大光明を興へたのであつた。されば全國各地から、なだれのやうに、同病院を訪れ、門前市をなすばかりの有様となつた。そして氏は、美しい犠牲的精神をもつて、これらの患者に對し、悉く回生の喜びを興へてゐる。昭和元年一月二十日の丹毒病に就いて、二年九月二十八日の家庭衛生講座等は、氏のさうした算い研究になつたものである。氏は義太夫を趣味とし、而も堪能で、豊かな情操を培ふことを忘れず、家庭には俊子夫人との間に四男一女がある。

講演

床次竹二郎

慶應二年十二月一日生
東京市麻布區三河臺町一四

廟堂に入つて天下國家を論ずる政界の大立物も、時にまたAK小供の時に「終世の導」と云ふ稚時代の思出を語つて諄々兒童に説く優しい父の一面を持つて居る。其の講演の言々句々は子供の胸にいかばかり強く響いたことであらう。氏は舊鹿兒島藩士床次正精氏の長男で明治二十三年東京帝國大學政治科を優等で卒業し、直に大藏省試補に任ぜられ、爾來累進して大藏書記官となり愛媛縣稅長、宮城縣參事官、岡山縣警察部長等に歴任した。次いで山形、新潟、兵庫、東京各府縣書記官となり、其後徳島縣知事に累進、更に秋田縣知事となつた。明治三十九年内務省地方局長に擧げられ、樺太廳長官を兼任した。其後内務次官を経て四十二年山本内閣成つて鐵道院總裁となり、大正三年内閣交迭と共に辭して同年郷里より衆議院議員に擧げられた。政友會に囑して累選五回に及び、大正七年原内閣に内務大臣として列り、鐵道院總裁を兼任した。越えて大正十年高橋内閣の成立するや再び内務大臣として臺閣に連り、大正十二年政友會分裂するや氏は同志を率ゐて政友本黨を興した。昭和二年四月田中内閣成るや氏は憲政會と提携して新黨樹立運動を興し、同年六月兩黨合體して憲民政黨成立するや濱口雄幸氏を總裁に推して顧問となり、謙徳高風を以て敬慕的となつてゐた。後新黨俱樂部を興し、更に政友會に合して今日に至つて居るが光風霽月の襟度と偉大なる抱擁力とを有する大宰相たるべき器で、功により従三位勳一等に敘せられてゐる。

講演

新渡戸 稻造

文久二年 八月生
東京市小石川區小日臺町一ノ七五

日本の世界的進出につれて、國際親善、國際協調などの聲が高くなつたが、この秋、國際聯盟と日本と題して、愛國心を基礎としたインターナショナルマインドを養へと高唱喝破した我が新渡戸稻造博士の放送は、感興と印象と光明を興へたものであつた。氏は文久二年八月を以て生れ明治二十二年先代七郎氏の養子となり家督を相續したが、これより先札幌農學校を卒業して開拓使に出席し、更らに東京帝國大學に學び、次いで十七年米國に渡航してジョンズホプキンス大學に入り、歸朝後札幌農學校助教授に任ぜられた。かくて間もなく獨逸に留學を命ぜられてボン、ハレ、ベルリン等の大學に遊び、農政農學經濟等を専攻し在留すること四年、歸朝と共に札幌農學校教授となつた。傍ら北海道廳技師を兼任、三十二年農學博士の學位を受け、臺灣總督府技師、京都帝國大學法科大學教授等に歴任して、三十九年には法學博士の學位を授けられたのである。そして同年第一高等學校長に任ぜられ、帝國大學農科大學教授を兼任したが、大正二年第一高等學校々長を辭し、東京帝國大學經濟學部教授として現在に及んでゐる。氏は曩に日米交換教授として米國に出張を命ぜられ、ブラオン大學其他五大學に於て講演し、ブラオン大學から法學大博士の學位を贈られたのであつた。また國際聯盟事務局事務次長として瑞西のゼネバに滞在したこともあり、其の令名を國の内外に謳はれてゐる。現に従三位勳二等、貴族院議員で國家の根本道義に關するとして雄辯を揮ひ田中首相問責決議案を通過させた事は人のよく知るところである。

講演

大倉喜七郎

明治十五年六月生
東京市麴町區下二番町三〇

曩に南歐諸邦及南洋視察の途に上り、ジャバ、スマトラ、マレー半島、シヤム等々を具さに視察研究して歸朝した男爵大倉喜七郎氏は、昭和二年十月十日東京中央放送局趣味講座に於てシヤムの國情を講演し、大いに國民の海外發展に資益する所があつた。氏は男爵大倉喜八郎氏の嫡子、先代は北陸の邊陲から出て、一代を以て天下に名だたる大實業家となつたことは世人の齊しく知る所であらう。こうした嚴父の血を享けた氏は、學窓を出ると共に早くから實業界に雄飛し、大に天賦の才幹を揮つて令名を馳せてゐた。昭和二年偶々嚴父の長逝するや、氏は家督を相續して襲爵を仰付けられ、茲に守成の功を全ふすべく大なる決心を以て其矢面に立つた。其の主なる關係會社を擧ぐれば合名會社大倉組頭取、帝國ホテル社長、汽車製造、日本電池、鴨綠江製紙、東海紙料、新高製糖、大倉製絲、山東鑛業、大源鑛業、秋田木材、日本ローヂ、溜川炭鑛各株式會社取締役、日本化學工業株式會社監査役等の諸重役で、夙夜活動して寧日ない有様である。尙氏が日本棋院副總裁として重きをなして居ることは人の知る所である。氏は人となり襟度廣く夙に海外發展を提唱して國運の伸長に培ひ、之が大理想の實現に邁進して倦む處がない。蓋し氏の如きは近代的大實業家の典型とも云ふべきであらう。昭和元年十二月末日白耳義皇帝より名譽多き「コマンドル、レオポール」第二世勳章を受領し又功に依り従五位に敘せられて居る。

講演

濱口雄幸

明治三年四月生
東京府高田町雜司ヶ谷龜原二〇

七千萬國民の崇敬と興望とに支援されて、一國運理の大任を負ふ濱口雄幸氏は、組閣以來一大決意と英斷を以て、勞頭豫算の大緊縮を行ひ、放慢積弊の政局を拾收すると共に、此の未曾有の國難を國民をして徹底的に理解せしむる爲、遂に起つて昭和四年八月二十八日東京中央放送局より全國に向つて緊縮講演を試みた。其一念唯國家を念ふ赤誠を吐露して、言々焔の如き熱辯を揮ひ、全國民に一大奮起を促したことは普ねく人の知る所であらう。氏は高知縣士族水口胤平氏の三男で、同郡安藝郡内野村に生れ二十二年先代濱口義光氏の養子となつた。學習時代より明哲なる頭腦を以て常に才學を蘊はれ、第三高等學校を卒業して明治二十八年東京帝國大學法科政治科を卒業した。先是文官高等試驗に登第、大藏省に入り山形縣收稅長、大藏書記官、松山熊本東京各稅務監督局長等を経て明治四十年專賣局長官に進み、在職六年の後大正元年第三次桂内閣成るや、後藤選相の下に遞信次官となり、幾何もなく辭して大正三年大隈内閣成るに及んで若槻藏相の大藏次官となつた。憲政會に屬して衆議院に當選すること四回、總務委員として加藤總裁を扶け、大正十三年加藤内閣の大藏大臣となつた。爾來謹嚴そのものゝ高潔なる人格を以て帝國財政の釐革を行ひ名藏相の名を恣にした。降つて大正十五年若槻内閣の内務大臣となり、昭和二年舉黨一致を以て立憲民政黨總裁に擧げられ同年内閣總理大臣の印綬を佩びるに至つた。政界頗に潤濁して一人清廉赤誠の大宰相を戴くことは同胞の齊しく意を強ふる所である。

講演

岩住良治

明治八年一月生
東京府東鴨町一四七〇

氏は昭和四年三月A.Kの畜産週間に「日本人の牛乳使用量」に就いて講演を試みて居る。現時我國の食糧問題は殆んど解結不能の如く見られて居るが、之を飲料の方面に見るに、最も榮養に富む牛乳の年産額は約八十萬石に過ぎず、其半額を乳製品の原料とし、残る半額を以て各家庭の需用に當て、居る有様で、其平均一升三合の量は、米國人一人當りに比して纔に二百分の一に過ぎない。一方乳製品の輸入額は原料に換算して約十五萬石、即ち日本の牛乳生産量の二割以下である。之を我國牛乳生産能力に鑑るに、今後一層の需用額増加が行はれても、僅に國內生産を以て之を償ふ能力を剩して居る。氏は更に力説して營養價に富む牛乳の需用の増進を促し、以て刻下の食料難を緩和せんとしてゐる。氏は實に此の方面に於ける權威者で、東京帝國大學農學部長として學界にも重きをなして居る。宮城縣の出身で、父君は岩住玄作氏、氏は其長男である。夙に東京帝國大學農學部に學び、明治三十三年卒業するや、畜産學研究の爲留學を命ぜられ、英獨二國に亙つて視察研究を遂げ、歸朝後は東京帝國大學農學部助教授を拜命し、更に盛岡高等農林學校教授を経て母校農學部教授に任命せられた。此の間農學博士の學位を受け、爾來氏は常に教壇に立つて熱心に後進の誘掖指導に任じ、亦久しく農林技師として實際界の指導に任じ、或は亦畜産試驗場技師として民業の發達に資する等其功績は寔に没すべからざるものがある。我國食糧問題の解結には今後尙ほ氏の力に俟つものが多からう。

講演

平沼淑郎

元治元年二月七日生
東京市牛込區早稲田鶴卷町六六

一國の存亡は國民經濟の如何に左右せられることは言ふ迄もない。而も逐年國際間の經濟關係複雜を極め、世上亦漸く經濟思想の發達を見るに至つたが、我國民未だ國民經濟及國際經濟の濃密なる關係に思ひ及ぶ者は少い。氏は一般世人の經濟思想の向上を促し、且つは改善々處を要すべき點につき先頃ラヂオを通じて其蘊蓄を披瀝したことは人の知る所である。氏は現時法學博士として幾多専門著書を以つても知られ、亦其令弟に前司法大臣にして樞密院副議長の顯職に在る平沼騏一郎氏を持つて居ることに依つて普く世人に知られて居る。家は舊津山藩士で、氏は平沼晋氏の長男である。夙に高等中學を終り、東京帝國大學文學部政治理財學科に學んで明治十七年之を卒業した。若くして各新聞雜誌々上に卓見を發表して財界論壇を賑はして居たが、次いで岡山師範學校教授に任ぜられ、同二十一年には仙臺第二高等學校教授に任ぜられた。明治二十三年轉じて大阪商業學校長として赴任、かくて久しく各校に於て育英に盡瘁して來たが、其後大阪市民多數の聲望に推されて大阪市助役として始めて自治政の要理に當つた。越えて三十一年職を辭して再び大阪高等商業學校長に任じたが、其後病を獲て之を辭し、同三十七年九月早稲田大學教授に聘せられた。爾來専ら同大學經濟學部、商學部に教鞭を掌り、大正七年四月法學博士の學位を授けられ學界に重きをなす一方同大學の書宿として重きをなしてゐる。目下商學部々長、同大學理事である。稱義に従六位勳四等に叙せられて居る。

講演

小原直

明治十年一月生
東京市外千駄ヶ谷町原宿一五五

昭和三年十月一日は、日本の裁判に劃時代的の變革を齎すところの陪審制度が、いよ／＼本日から實施せられた記念すべき日であつて、司法制度が一大躍進して國民と更らに一層密接な關係を結ぶに至つたばかりでなく、長くも聖上陛下が裁判所に臨御、親しく大審院、控訴院各法廷竝に地方裁判所陪審法廷を御巡覽遊ばされた光榮ある司法記念日である。この日我が小原直氏は、司法次官として、J.O.A.Kから感謝と感激の講演を放送したのであつた。そして、我が國文運の發達憲政の進歩に伴ふ裁判制度の變革を慶福すると共に、國民の自覺を促したのである。氏は新潟縣の人、田中敬治郎氏の二男として、明治十年の一月生れたが、日本海の澎湃たる怒濤に洗はれ、丈餘の雪に埋められ、陰鬱な空氣に閉込められてゐる北日本の天地は、氏に理智と忍従の性情を培つていつた。二十六年先代小原朝忠氏の養子となつたのであるが、夙に學序を追つて東京帝國大學法科大學に學び、研鑽の功なつて同校を卒へたのは、三十五年のことであつた。直ちに東京地方裁判所の判事を任命せられ、後ち、東京、千葉の各區裁判所に轉じ、更らに東京、千葉の各地方裁判所檢事に榮轉、司法省參事官、横濱地方裁判所檢事正、長崎控訴院檢事長等を経て大審院檢事となつた。大正十年四月歐米各國に司法制度の視察に赴き、十一年四月歸朝、昭和二年四月田中内閣の成立と共に司法次官となつて現在に及んでゐる。從四位勳三等、家庭には母堂やす子刀自をはじめひろ子夫人との間に四男六女がある。

講演

赤司鷹一郎

明治九年七月十五日生
東京市本郷區春木町三ノ三九

全國何百萬の小中學校卒業者が巢立たんとする昭和四年三月一日、入學指導と職業指導と題して、J.O.A.Kから放送されたる我が赤司鷹一郎氏の講演は、子を持つ家庭の一指針となるに充分のものであつた。殊に大日本職業指導協會々長として、また前文部次官として子弟教育についての高邁な識見があるだけ、父兄への警告ともなり、子弟のゆく道に對して光明を與へたものであつた。氏は舊鍋島藩士元福島縣令赤司欽一氏の長男で、明治三十八年家督を相続したが、これより先、學序を追つて東京帝國大學法科英法科に學び、欣求と思慕をもつて、螢雪の功を積んだのである。かくて三十年、優秀の成績をもつて同校を卒業すると共に、直ちに内務省に入り、翌年文部省に轉じて參事官となり、三十五年、行政法及教育制度研究の爲め、二ヶ年間、ドイツ、フランスに留學を命ぜられた。三十八年歸朝するや、文部大臣秘書官參事官に任ぜられ、四十四年には參事官兼維新史料編纂局長から、更に普通學務局長にと、快刀亂麻をたつやうな腕の冴えと、明晰な頭腦と、而して高潔な人格とをもつて次第に累進して行つた。のち文部次官の榮譽ある椅子を占め、個人並に社會の要求する學校教育の實現のために獻身的に努力し、勤勞教育、職業教育を始めとした全教育組織の上に、多くの功績を残したのであつた。大正十三年之れを辭して暫く閑地であり、現在文部省維新史料編纂委員、從三位勳二等法學士の肩書をもつてゐる。趣味は撞球で、家庭には才色兼備のかよ子夫人があり、圓滿である。



講座、東京手藝研究會講師

島 阜 月

明治三十年五月四日生
東京市下谷區上根岸二六

時といふ大きな流の前に、女性がめざめるのは、のぞましい事である。だが男女同權とか、婦選獲得とかを高唱して、女性が家庭を捨てたのは、決して好ましい事ではない、さりとて、人形としての女性を望むのではないが、女性には女性としての、進むべき道がある筈である。女性が家庭の人となつたからとて、それは男尊女卑の不平等とはならない、家庭の人として女性が、女性の新しい世界を見出す事は、婦人參政權を與へられる事よりも、女性にとつては眞に喜ぶべき、また祝福さるべき事である。我が島阜月女史がラヂオによつて放送せられた手藝講座は、盡きせぬ興味があつたと共に、女性に對しての進むべき道を訓へたものと云へやう。女史は富山市の人、大久保秀民氏の長女として生れた。夙に富山師範幼稚園から同附屬小學校に進み、更に女子師範學校に入學して、大に其天稟の才能を盡へられたものだ。大正六年の春優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直に職を星井小學校に奉じたが、後幾許もなく拔擢せられて同市の高等女學校に教鞭を執る事となつた。職に在ること三ヶ年にして同校を辭し、大正九年縁あつて日米雜貨商會の支配人島康親氏に嫁し、翌年上京するに至つた。現在では手藝研究會の教授所を開き、手藝に志す人々を親切に指導してゐる。昭和三年二月二十四五の二日間に亘つて『離人形の造り方』に就て放送したことは、普ねく人の知る處で、温良貞淑な賢夫人である。音楽に興味を有する處其愛情の縮圖とも見るべく二人の間に一男三女がある。

遠 藤 宏

明治二十七年三月三十日生
東京市麻布區我善坊町三八

日本新音楽は將に世界的融合に向つて發達の過程を急ぐ躍進時代である。進歩へ、向上へのグラウンドマーチ、是がコンダクターとして我樂壇の功勞者に遠藤宏氏がある。氏は神奈川県横浜市出身で、遠藤孝一氏の二男である。神奈川県立横濱一中を卒業後岡山第六高等學校に研鑽し、學序を踏んで東京帝國大學に進み、文學部美學科に最高専門學を討究して大正十年卒業。更に進んで大學院に入り、美術音樂の蘊奥を極めて倦まず、かくて學理を究むる傍ら先輩田中美敬、小笠原隆造の兩氏に就いて技術の實際を修道し、東京音樂學校管絃樂指揮者クローニ氏に指揮法を學ぶ等多年修養の功を積んだ。大正十三年東京帝國大學友會音樂部管絃樂指揮者に擧げられ、亦音樂獎勵會幹事、日本大學音樂講座講師、東洋音樂學校音樂部講師等となり、更に母校帝大音樂部教導及美樂部講師に聘せらるゝ等、殆んど寧日なく、此の外猶徳川家南榮音樂事業部評議員として重きをなして居る。去る大正十四年澤崎貞之氏外帝大音樂部員七十有餘名を率ゐてマイクの前に立ち、放送局設立空前の大交響管絃樂を放送したことは未だ人々の記憶に新たなる處であらう。氏は現代西洋音樂の權威者で著書にグローブ著「ベートーヴェンと彼の交響曲」の翻譯其他がある。猶ひさ子夫人は大正八年熊本縣立第一高女を卒業し、同十三年東京音樂學校を卒業して更に研究科に留り、同十五年三月卒業した女流樂壇の明星である。目下神田東京音樂學校分校所囑託、第四臨時教員養成所講師等に就任して居る。家庭には一男がある。

講演

森 本 厚 吉

明治十年三月生
北海道札幌市北十二條三丁目

生活改善運動の主唱者として知られて居る森本厚吉博士は、昭和二年六月第五回日の歐米視察の途に就き『經濟繁榮及消費經濟の研究』に就いて先進諸國の現状を研究して約半ヶ年にして同三年一月歸朝した。そして其の土産話として『世界を巡りて』の題下にA.K.M.I.K.の前に我國民衆の學ぶべき諸點を説いて大いに啓發する所があつた。氏は京都府出身で、増山純一郎氏の三男に生れ、明治二十九年に至つて東京府士族森本治造氏にその人物を認められて養嗣子となつた。夙に學序を追ふて札幌農學校に學び、同校を卒業したのは明治三十四年である。燃ゆるばかりの抱いた氏は、直に米國に渡つてジョンズホプキンス大學に砥礪を累ねた。學成つて歸朝するや明治四十年東北帝國大學豫科教授に任命せられ、翌年六月同大學助教授に轉じた。大正四年九月經濟學財政學研究の爲米國に留學し、歸朝後母校たる北海道帝國大學の教授に任じた。爾來今日に至るまで同大學に教職を奉じて居るが、大正八年遂に法學博士の學位を授けられ、學徒養成及び學界奉仕の外に、更に一步を進めて大正十二年財團法人文化普及會を興して、之が理事となり、模範アパートメントを建設して社會改善事業の第一著手として住宅問題解決を實行した。又消費經濟の學理と應用の研究に従つて月刊雜誌「文化生活」を編輯して居る。氏はかうして經濟生活、社會生活の改善發達を大目標に向つて、眞先に采配を振つて居る民衆の先達である。功に依り正五位勳四等に叙せられて居る。

ラヂオ用ゴム製作

大塚 榮三

明治三十一年五月三十日生
東京市神田區猿樂町三ノ一

科學者をして現世紀以後はゴムの時代だと断定させるまでに護謨の應用は進歩して來た。凡てのものをゴムを以て具現して行かうとするのがゴム工業家の力であり態度である。然るに大正十二年以降本邦にラヂオが開設せられてから更に此の方面に向つて亦一大進出を見るに至つた。即ち各家庭を賑はしてゐるセツトを見れば如實にそれを語つて居るではあるまいか。近頃此のラヂオ用ゴムの專門に製造して、良質安價をモットーに需用方面の好評を博して居る人に大塚榮三氏がある。出身は大阪市で、大正四年大阪の大倉商業學校に學び、卒業後大正九年上京して同時に南國ゴム會社に勤務した。業に従ふこと三ヶ年、生來獨創力と事業慾に富んだ氏は、ゴム使用界の機運を洞察するや、震災後獨立して同年十二月にはラヂオ用ゴム商を現地に開業し、同時に市外向島の隅田町に製造工場を構へて斯界の需用に好投した。爾來長足の發展振りで、今では市内一流商店では一樣の所有者となつて製品を取扱つて居る。氏は一方に於て發明家的な才能の所有者で、自家製品の改良に没頭する傍らゴム荷掛幣を發明して非常な好評を博し、目下實用新案特許の出願中だと云ふ。本年未だ三十二歳と云ふ青年實業家で、將來の發展は期して待つべきものがあらう。文學、音樂、美術等の藝術に興味を有するを見ても其人と爲りを知るべく、兼ねて撞球に長じて居る。夫人をとり子さんと云ひ貞淑の譽れ高く、家庭は常に和氣霽々として平和に營まれてゐる。

講演

栗原彦三郎

明治十二年三月七日生
東京市赤坂區氷川町二八

「夏の風情」と題してラヂオを通じて瑞草靈花と珍重される蘭の栽培觀賞竝に之に關する古實文獻等の講演を放送した栗原彦三郎氏は、區民市民の信望を負ふて、市會區會の第一線に立ち、市民のため、區民のため利福の増進を志し、邪を正し正を助けつゝある人である。氏は栃木縣安蘇郡馬村の産、夙に義人の譽高い田中正造翁に伴はれ明治二十四年四月上京し、故大隈侯の知遇を得て青山學校に學び卒へて一旦郷關に錦をかざり後再び上京した。父君は氏を美術家たらしめんとして、斯界に名聲高かつた羽田子雲、竝に同地出身の田村草雲に就き南畫を學ばしめた。然し氏の窓生活時代には培はれた詩才は、畫を以つての自己の思想の表現には満足出来なかつたので斷然之を廢し、詩人として立つ可く、古詩及び英詩の研究に専念した。其間自ら「玉子の死」を創作し名聲遠近に喧傳さるゝに至つた。恩人田中正造翁は氏の如き英才を一詩家として朽ちさすに忍びずとなし勝海舟翁に計り、共に懇懇して政界に雄飛せしむる事となつた。程なく足尾の鑛毒問題起るや、渡瀬川沿岸住民數萬人の生死に係はる一大事件となし、東奔西走遂に圓滿なる終結を見るに至らした大功は特筆大書すべきものである。後「新世界」「東半球」等の言論機關を創始し治國安民の宏論を張り、次で「中外新論」を繼承し民權擴張の急先鋒となり更に政界に威名を馳するに至つた。爾來氏の名は至る處の民衆運動に見出される様になつたのは其の性格を雄辯に物語るものである。因に氏は曩に普選案通過後六大新聞社より殊勳者として表彰されて居る。

東京無線電話機商組合長

田邊 綾夫

明治二十二年九月十六日生
東京市麹町區一番町四三



我國に於けるラヂオが、比較的短期日の間に長足の進歩發達を遂げた事は、當局の指導其宜しきを得たことは云ふ迄もないが、一面に於てラヂオ商組合の隠れたる力を見逃がすことは出来ぬ。田邊綾夫氏は東京無線電話機商組合長として多年第一線に立つて活動したラヂオ界の功勞者である。氏は岡山縣淺口郡長尾町をその懐しい搖籃の地とし、青雲の志を抱いて岡山第六高等學校に學び、卒業後進んで東京帝國大學法科に入學して、専ら法學の研究に幾春秋を重ねた。大正五年遂に赤門を出づるや、將來歩むべき途を實業界に求め、直に横濱本町なる増田貿易株式會社に勤務することゝなつた。大正七年店務を佩びて渡米し、在ること二ヶ年、親しく泰西の文物を視察して歸朝したが、越えて大正十年轉じて日本ベニア會社に入り大に其巨腕を揮つたものだ。一葉の流るゝを見て大勢の赴く處を洞察する、明敏な資質の持主たる氏が、其頃漸く擡頭しかけたラヂオの將來を見逃がす筈がなかつた。遂に大正十二年田邊商店を創設してラヂオ器具の販賣に従事すると共に、一方株式會社坂本製作所を創立して、之が社長となりラヂオ器具の製作に、三面六臂の活動を續けたものだ。目下本店を神田小川町、支店を京橋の銀座及大阪北曾根崎町に、工場を麹町區飯田町に有し、非常な發展を見せてゐる。人と爲り快活明るい性格の持主で、その巨大な額は鞏固なる意志と絶倫なる精力とを象徴して餘す處がない。趣味を柔道に有し、壽子夫人との間に長男全吉君二男公二君長女弘子嬢二女恵子嬢等がある。

講演

今泉嘉一郎

慶應三年六月生
東京市芝區高輪町四七

我國製鐵界の權威者工學博士今泉嘉一郎氏はJ.O.A.Kで開催された工業週間に「我日本國と製鐵事業」と題し其歴史沿革等を放送したのであつた。それによれば、日本の製鐵史は少く共三四千年の古代に始まり技術も獨目の發明に基いたものと豫想される。併し其製鐵法は直接製鐵法と云つて鑛石から直に可鍛鐵を造る方法で、これは明治初年迄行はれた。西洋の製鐵史は第一期より第四期に分ける事が出来る。之に反し我國は古代から明治時代迄西洋第一期の直接製鐵法で押通した。其間直接法は年と共に進歩し明治維新迄に數萬の有名な刀鍛冶を輩出し、複雑巧妙な技術を要する日本刀を製出し世界に類例ない刀鍛冶工業が出現したのである、が帯刀の禁止と共に終りを告げ明治に入り加速度に長足の進歩を遂げ今日の隆盛に達したのであると云ふ事であつた。氏は群馬縣人今泉常子の長男として呱呱の聲を擧げた。明治二十五年帝國大學工科大学を卒業し直ちに獨逸に渡り、フライブルグ鑛山大學及柏林鑛山大學に學び新知識を携へて歸朝後農商務技師に任ぜられ後製鐵所工務部長鋼材部長等を歴任す、其間製鐵學理及實地研究の爲歐米を視察すること前後六回に及び、大正四年工學博士の學位を授けられた。後官を辭し製鐵業界へ進出の第一歩として岸本製釘所を設立し民間製鐵事業の先驅をなした。尙氏は帝國經濟會議員工業品規格統一會委員で、曩に群馬縣より選出されて衆議院議員となり維納に開催された第九回萬國議員總會日本帝國議會代表派議員團長に選ばれたこともあつた。

講演

相羽有

明治二十八年八月八日生
東京市外大井町立會川五〇〇

グラフィック、ツエツペリン號が、世界の航空路を開拓したことは、一千九百二十九年に於ける一大壯舉であつた。そして勇まじきもの、美しきもの雄々しきものに注がれる子供達の憧憬が、この天空の征服者に向けられぬ筈はない。こうしたとき、日本飛行學校長、日本自動車學校長相羽有氏が、J.O.A.Kで、子供達のために飛行機の話を送つたことは、子供達の美しい憧憬を十分に満足させたと共に、プロペラーの爆音を聞くやうな、爽快さと、雀躍を興へたに違ひない。まだ小さな頭に科學的知識をインスパイヤする點に於て近代科學と子供の世界を接近させる事に於て、まことに有意な話であつたと言へる。氏は明治二十八年の八月八日をもつて、宇都宮市に呱呱の聲をあげ、幸福で繪巻物のやうな幼年時代をこゝに送つたのである。夙に宇都宮商業學校に學んだが、明治四十二年、青雲の志を抱いて横濱に至りフヌヤモンド、アカデミーに入つた。大正三年同校を卒業するや、豫て多大な興味を感じて居た飛行機研究の爲所澤飛行場に入り更に稻葉飛行場に轉じ、勤々一年半にして學理、組織、操縦の技に至る迄體得し、遂に獨立を決議し大正五年の秋始めて日本飛行學校を創立し、續いて日本自動車學校を併置し當局の認可を受け、未だ何人も一指だに觸れなかつた本邦唯一の特殊學校を經營するに至つたのである。爾來熱心に飛行士、自動車運轉手の養成に努めた效あつて現在では全國至る處の地に氏の教へ子を見出さぬ處は無い程になつた。蓋し氏の如き遠眼の士が斯界に健在の間は意を休んじて可なりである。

講演

戸田保忠

明治二十年九月十日生
東京市小石川區林町三六

畜産物が現代生活上の必需品の一に算へられて來た事は何人も否め無い事實で、被服に食料に其需用は日々擴大されつゝあるのである。従つて畜産業の消長は國民生活上、或は國防上將又國家經濟上極めて重大な關係を有するが故に各國は競つて之が普及發達に努力して居る。是の秋、我國の畜産界は實に寒心すべき状態に在るが、幸當局にも我が戸田保忠氏の如き先覺者があつて斯業の發達獎勵に精進されて居ることは邦家のため、まことに喜ぶべきことで、心強さを感ずるのである。氏は先頃A.Kの畜産週間に本邦畜産の現況を説くと題し畜産の重要性並に之と緊密な關係に在る耕種農業への利用等を説き、種々なる統計及推定に據る計數を示し農林省當局が如何に斯業の獎勵助成に努め居るかをラヂオに依つて放送し識者の注意喚起を促した。氏は我國有数の牧場友部種羊場を持つ茨城縣に於て、同縣士族戸田忠正の男として生れた。長ずると共に遊學を志して上京し第一高等學校を経て東京帝國大學法學部獨法科に學び、明治四十五年卒業して法學士の肩書を受くるに至つた。氏は將來官界に身を立てんと思ひ立ち、同年文官高等試験を受け首尾よく合格し、直ちに島根縣屬試補と成り多數の失意者から美望の眼を向けられたものだ。爾來同理事官農務局事務官兼臨時米穀管理局事務官農商務書記官兼參事官同副業課長農務課長農林書記官大臣官房會計課長を歴任し昭和二年畜産局長心得となり同年七月畜産局長に任ぜられた。家庭はとみ子夫人と二男二女で長男尙文君は秀才の譽高

c



講演

伊藤熊太郎

明治二十六年六月十日生
大阪府北河内郡交野村會治

所謂資本主義社會は正に爛熟期に達して、之を指導する思想も亦著しい躍進を續けてゐる。斯くて實際家と思想家との間には常に露露たる論争を續けて、或るものは勞資協調を説き、他のものは社會の改造を叫ぶも、こゝろした中に在つて實直に能率の増進に向つて鋭意研究を續け、以つて圓滿に完全なる社會の發達を促さんと希つてゐる士も亦尠くない。即ち伊藤氏を先づその第一人者に推すべきではなからうか。氏は天下の温泉境別府から程遠からぬ大分市に於て始めてこの世の光に浴したもので、幼時から神童の譽高く物心の着き初める頃から常に社會のために働きかけんことを念願としてゐた。聽て長ずるに及んで我が國最高學府東京帝國大學に深遠な學理の究明に勵み、優秀な成果を收めて大正七年卒業した。こゝに於て高遠なる理想を抱いて輿論の府に而も一方の雄大阪毎日新聞社に入り正論確報をモットーに名記者として知られてゐたが、更に母校四條畷中學に教鞭をとり第二國民の養成に全力を注いでゐた。越えて大正十二年來現職の大阪府立能率研究所に所長代理を勤めて能率の増進、就中適才適所に關して研究を續けて社會に裨益する所尠くない。蓋し氏自らが適所に精通するものとして最大の能率を示すことは好箇の示範として實踐の誠を歩むものであらふ。そして今やその蘊蓄を傾けて街頭に叫び、ラヂオ等にも放送して心あるものに感銘を與えてゐる。氏は内に在つては閑恭、撞球を嗜み、外に在つては庭球野球に興味を持つと云ふ。尙家庭には二男一女がある。



少女講座

細谷章

明治十九年一月三日生
東京府下大森町不入斗四七六

人生のある處、必ず其處に悲哀ありとは、シヨペンハウエルの言葉だが、いとけない少年少女が、試験地獄に焦心勞思するのは、餘りにも傷しい姿である。心ある人々によつて試験制度が改正されたが、まだ口答試問や、メンタルテストは、責道具の様に小さな心を暗くせずには措かない。この不安におのゝき慄へる少年少女へ、慈愛に満ちた力強い鞭撻と、光明とを與へたのは、細谷章氏の『入學試験に就て』と題する放送であつた。氏は東京府西多摩郡調布村友田に生れ、夙に育英に身を捧げんと志し、青山師範學校に入學した。明治三十九年、優秀なる成績を以て卒業するや、職を郷里の調布小學校に奉じ、五ヶ年と云ふ永の年月、兒童の訓育に身心を捧げ、同郡の熊川小學校長に榮轉したのは、實に氏が二十有六歳の時であつた。また以て氏が如何に明哲な頭腦と、卓越した手腕を有してゐたかを知ることが出来やう。次で此若き青年教育家は、二十八歳の時、郡下第一の西多摩小學校に校長として赴任し、更に三十三歳の折、抜擢せられて、南足立郡々視學となる等、恰も名玉の如く年と共に益々光りを添へて行つた。大正八年遂に入新井第一尋常小學校々長に補せられ、引續き多端な校務に絶倫の精力を見せてゐる。此外實業補習學校長、青年團長、學務委員、郡教育會理事等の公職に携り、精進して毫も倦む處がない。庭球野球等に趣味を有する明るい性格の持主で、閑あれば鳥籠を飼はして靜境に浸ると云ふ。みよ子夫人との間に、滋、聰、葵、毅の四男及百台子嬢がある。

講演

増田義一

明治二十年十月二十日生
東京市小石川區原町一二五

快活で親切に「ればお客は満足する」とは實業の日本社長増田義一氏が養にラヂオを通じて店員、商工業従事員に與へた警句である。氏は更にこの言葉を分解した責任、對人、店の三者に就いて詳細な解釋を加へて後進に示した。其に依ると先第一は現代一般の通弊とされて居る責任觀念の類廢を防止し、眞に完全な責任を果す者とならねばならぬ。次に商業は接客の良否が其成否の一大條件となるから、親切快活を旨とし面倒を厭はず小事を忽せず不絶快感を與へる研究をなし、常に積極的に店の發展を工夫せねばならぬと云ふ事であつた。氏は政界に雜誌出版界に將た實業界に目覺しい活動を續けて居る現代稀に見る奮闘立志の人である。新潟縣中頸城郡板倉村は其の播種地の十四歳の時小學校を卒業して直に職を小學校に奉じ明治二十三年青雲の志を抱いて上京の時迄同地に過した。十六歳の折初等訓導試験に翌十七歳の時には中等訓導試験に合格し引續き教職に在る傍ら、嚶鳴會を組織し嚶鳴會雜誌を發行して其牛耳を執り大いに英才を稱へられたものだ。明治二十二年高田新報記者奉職の時感ずる處あつて翌年東上早稲田専門學校政治經濟科に學び、明治二十六年卒業後讀賣新聞社に入り縦横に才筆を揮つて益々名を馳せてゐたが、明治三十三年同社を辭し雜誌實業之日本を主宰し、社會に向つて大いに名論卓説を吐き忽ちにして實業雜誌中の覇を稱へるに至らしめた。後實業講習會を起し講義録を發行し不遇に在る實業徒弟の養成に勤めて居る、尙氏は新潟縣選出の衆議院議員である。

講演

添田敬一郎

明治四年八月生
東京市芝區白金三光町三〇一

資本家階級と労働階級との軋轢は、世界を通じて今や其の極に達して居る。之が爲め、兩者の協調によつて新なる希望の世界を見出すべく絶大な使命を背負つて居る協調會は、我が國に於ても設置以來幾多の眼ざましい活動を續けてゐる。氏は實に同會常務理事として此の大任に當つてゐる人で、曩にAK放送局より労働運動の沿革と趨勢に就いて詳しい放送を試みた。氏は福井縣の士族で、添田良平氏の長男に當り、遠敷郡雲濱村はその懐しい播種地である。郷費に修養を終へて後は東都に上つて高等中學を經、進んで東京帝國大學法科に學び、明治三十一年卒業直に高等文官試験に合格した。爾來身を官海に投じ次第に累進して兵庫縣參事官となり、次いで大分縣參事官に任じた。其後熊本、山梨、滋賀各縣參事官として歴任し、大正二年六月遂に埼玉縣知事に任命された。越えて同三年六月山梨縣に轉じ、五年四月山形縣知事となり、更に大正六年十二月被擢せられて内務省地方局長に昇進した。先年亦山形縣民の輿望を負つて衆議院議員に打つて出で、見事金の射止めて重任を完うしたことは人の知る處であらう。降つて大正九年十月協同會の常務理事となり、傍ら社會局參與として専ら社會問題の研究及び解結に快刀亂麻の手腕を揮ひ、益々名を馳せてゐる。我國労働階級の自覺と資本家階級の今日の理解を招來するまでには特筆すべき貢獻の數々を残して居ることは云ふ迄もない。現時外に交詢社、學士會、日本俱樂部等の會員で、從四位勳三等に叙せられ趣味は園藝、篤郷、天城、若水の雅號がある。夫人てい。養嗣子滋氏は東大法科の出身である。

講演

穂積重遠

明治十六年四月生
東京市牛込區南町二

人類の永遠の幸福と平和は、誰れしもが願ふところである。けれども個人、國家、世界の三つが調和せられない限り、永遠に望むことは出来ない。それには、家庭に於ての生活に善意があるやうに、社會生活にも善意がなければならぬとは、我が穂積重遠博士が、J.O.A.K.から放送した、善意生活と題する講演である。氏は樞密院議長故穂積陳重氏の長男として、明治十六年四月東京市深川區に生れ、大正十五年四月家督を相続したのであつた。まづ第一高等學校を経て、明治三十七年東京帝國大學法科獨法科に入り、四十年在學中に文官高等試験に合格し、四十一年、首席を以つて卒業、直ちに同大學講師となつた。四十三年助教に進み、大正元年十月民法及法理學研究の爲め渡歐、獨逸ボン及ベルリン大學、佛蘭西巴里大學、ロンドン大學ケンブリッジ大學等に學び、五年二月歸朝したのである。翌六年法科大學教授に任ぜられ、法學博士の學位を受け、現に東京帝國大學法學部の教授たるの外、中央大學及び東京家政學院に私法一般を講じてゐる。また氏は高等試験行政科試験委員たること前後五回に及び、臨時法制審議會、家事審判所法調査會、教科書調査會、借地借家調査會、宗教制度調査會の各委員、國際聯盟協理理事、華族會館學士會員で、從四位勳四等男爵の肩書をもつてゐる。著書は日本民法總論、戰爭と契約、法理學大綱親族法大意、裁判の簡易化、ロシア革命と婚姻法、離婚制度の研究の外社會評論等がある。家庭には母堂宇多子刀目、なか子令夫人、重行君、和歌子、美代子嬢がある。

講演

大隈信常

明治四年八月生
東京市赤坂區青山南町六二五

維新の元勳大隈重信侯は、明治維新の變改以來伊勢神宮には特に奉仕する所多く、侯の養嗣子たる我が信常氏亦大神宮御選宮奉議會長の榮職に擧げられて居ることは世人の知る所である。此の度式年選宮の御盛儀取り行はせられるに先つて、氏は其光榮ある職責を擔つて、「御選宮を祝ぎ奉る」の記念講演を、東京放送局より放送して居る。嚴父重信侯は佐賀藩士大隈信保氏の長男で、尊王の高義を大唱して王政復古に大功有り、明治十三年參議となり、翌年野に降つて改進黨の總理に推された。同二十一年外務大臣となり、條約改正に執掌して物議を紛起し、福島縣人來島恒喜のために傷けられて隻脚を失つた。次いで野に降つて憲政の發達のため努力し、同二十九年松方内閣の外務大臣となり、同三十年憲政會内閣を組織し總理大臣兼外務大臣となつた。大正三年再び内閣を組織し、總理大臣兼内務大臣となり、同五年七月侯爵に陞され、大勳位を賜つた。亦早稲田大學の設立者としても有名である。當主は伯爵松浦厚、子爵松浦清兩氏の令弟に當り、子爵井上勝純氏の令兄である。明治三十五年先代の養嗣子となり、明治三十二年東京帝國大學法科政治科を卒業して渡英し、劍橋大學に學んで歸朝後早稲田大學講師となつた。亦早稲田中學校長に任じ、次で内閣總理大臣秘書官に任ぜられ、大正四年前橋市より衆議院議員に當選した。曩に日獨事件の功に依つて勳三等に叙され、現に早稲田大學名譽總長及貴族院議員で、外に日本文明協會長、日印協會副會頭、ボルネオ護謨、日清生命保險相談役等である。



放送協會東支部主催ラヂオ
受信機懸賞一等當選者

新田 卯太郎

明治三十九年八月九日生
東京市神田區錦町三ノ八

大電力放送を記念する爲に行はれた、放送局主催のラヂオ受信機懸賞募集は、我がラヂオ界に大きな衝動を興へずにはゐなかつた。全國礦石化の實現を待ちあぐんでゐた業界の人々は元より、我れと思はん人々は争つて之に應募したものだ。然るに斯界の權威者たる横山、鯨井、荒川、箕原、北村諸氏が嚴密なる審査の結果、一等當選の榮譽を贏ち得たものは、實に白面の一青年であつた。その祝福せられた青年こそ誰あらう。我が新田卯太郎氏その人なのである。栗林公園で名高い四國の高松市は氏の懐しい産土の地である。夙に栗林小學校を卒業後、逕信省通信養成所に入り、傍ら電氣學を學んだが、大正十三年の夏、私設無線電信従事者資格檢定試験三級に合格するに及んで、將來愈々エレクトロニクセンヂヤとして立つべく固い決心をした。そこでその年の十月前途に輝く希望を抱いて上京し、一級試験に應ずる準備として神田の正則英語學校に入學して語學を學び、傍ら田邊商店の工場部に勤務して熱心に實地研究を積んで行つた。昭和二年更に市村商店に轉じ引續き研究に餘念がなかつたが、偶々同年九月放送協會關東支部主催のラヂオ受信機懸賞募集に應じて、見事に一等當選の榮譽を擔ふに至つたのである。氏は之により放送協會より賞金壹千圓を贈られたる外、特に同業通信社長より祝文並に記念品の贈呈を受け、大にその面目を施したものだ。氏は温厚な資質に理智を盛つた奮闘の青年で、雅號を州と云つて、日本畫を能くし、兼ねて野球に深い趣味を持つてゐる。

講演

南 次 郎

明治七年八月十日生
東京市四谷區三光町四

昭和三年十二月今上天皇御即位後の最初の觀兵式が代々木原頭に於て舉行されたが、東京中央放送局は、此の近年の大盛儀を記念すべく諸兵參謀長たる氏に囑し、大禮觀兵式に就いて明治初年以來の歴史の放送を試みた。即ち、天皇の皇軍を親しく御閱兵被遊たのは明治三年四月十五日の駒場野の御儀が最初で、觀兵式舉行は明治五年十一月三日の天長節當日、日比谷操練所に於ける御儀が最初である。其後天長節及陸軍始めの年二回に觀兵式を取り行はせらるゝ事となつてゐたが、今回の御盛儀は、明治三十九年の凱旋觀兵式、大正四年十二月大正天皇御即位最初の大觀兵式に次ぐ本儀あつて第三回目の記念すべき觀兵式であつた。其の諸兵指揮官は元帥陸軍大將閣院宮載仁親王殿下に耳せられ、氏は即ち此の光榮ある諸兵參謀長の恩命を拜したのである。氏は大分縣土族故南喜平氏の次男で、明治二十八年陸軍士官學校、同三十六年陸軍大學を各上席で卒業し、同二十八年陸軍騎兵少尉に任じ、爾來果進して各聯隊及師團附を被仰付、亦本省に勤務して大正十三年二月陸軍中將となつて第十六師團長騎兵監等に歴任した。昭和二年五月參謀次長に補せられ次いで參謀長となつた。猶兼に大本營參謀、陸軍大學校教官、關東都督府參謀、騎兵學校教官、騎兵第十三聯隊長、陸軍省騎兵課長、支那駐屯軍司令官、騎兵第三旅團長、陸軍騎兵學校長及士官學校長に歴補した。昭和四年亦朝鮮軍司令官として任に就き現に在任中である。氏は人格高潔で其將來を囑望せられ現に正四位勳二等功四級である。

講演

三 上 參 次

慶應元年九月生
東京市本郷駒込林町一六九

多年東京帝國大學其他高等學府に職を帯じ、今や我國教育界の耆宿として重きをなして居る氏は、古典學者としても普ねくその名を知られて居る。兼に孝子内親王御降誕あらせられ、我國の誇るべき慣例たる鳴絃、讀書の御儀式の行はるゝに先つて、氏は東京放送局の依頼を受けて此の壯嚴優美なる而も文武兩道に亘れる典禮を「御浴湯鳴絃讀書の御儀に就いて」の題下に記念講演を試みた。氏は兵庫縣幸田貞助氏の二男で、先代三上勝明氏の養子となり、明治二十二年東京帝國大學文學部を抜群の成績を以て卒業し、更に大學院に入つて最高學の蘊奥を窮めて倦まず、同二十四年始めて母校文科大學講師として教壇に立つた。翌年東京女子高等師範學校講師兼務を命ぜられ、大に心血を注いで教職に力め毫も倦む處がなかつた。其後同師範學校教授に進み、更に東京帝國大學助教授を経て教授となり、文學部長として重きをなすに至つた。是より先氏は明治三十二年文學博士の學位を授けられ、爾來漢籍、國學等の研究に身を捧げ、學界に貢獻する處が極めて多かつた。大正十五年功績多い同大學教授の任を辭するや推されて名譽教授となり、一方臨時帝室編修官長に任ぜられ、更に維新史料編纂會委員、古社寺保存會委員等を兼務し、今尚ほ矍鑠として其任に當つて居る。氏は此の外居町駒込林町の爲に貢獻し、推されて西部町會長として常に町民の共榮共存のために盡して居る。斯の如きは學者には稀に見る所で其の襟懷たる洵に床しい限りである。はる子夫人との間に長男文學士勝氏外揃つて有爲の子女を持つて居る。

講演

藤 村 作

明治八年五月生
東京市外千駄ヶ谷町五七〇

マイクローホンの前に立つこと十數回、其の聲と其の名をファンに懐しいものとして知られてゐる我が藤村作氏は文學博士で、日本文學史に徳川時代の文學研究の權威者である。氏は福岡縣の人、藤村榮太郎氏の弟として、明治八年五月、呱呱の聲を擧げ、大正七年四月分家して一家を立てたのであつた。これより先、學序を追つて東京帝國大學文科大學に學び、明治三十四年、螢雪の功なつて國文學科を卒業したが、其の明晰なる頭腦と天成の學才は、氏をして教育界に入らしめたのである。第七高等學校造士館教授を振り出しに、廣島高等師範學校教授、東京帝國大學文科大學助教授等に歴任し、また大正八年十二月を以つて、文學博士の學位を受け、さらに東京帝國大學文學部教授に迎へられ、常に學界のトップを切つて來たのであつた。さうした間に氏の日本文學史の研究は、不退轉な努力をもつて續けられ、文學者としての今日の地位を捷ちえて、人々の尊敬の的となつてゐると共に、また學者肌で、其處に九州男子の氣魂を緘りませてゐる氏の性格は向陵健兒、赤門學徒から慈父に對するやうな親しみと懐しみを寄せられてゐる。ラヂオファンは親しくさうした性格の氏に接することは出来ないが、文明の利器ラヂオによつて、其の研究なるところの興味ある講話によつて文學史の分野の開拓の鋤を入れてゆくことは、大きな喜びと云はねばならない。尙氏は正四位勳四等の肩書を持ち家庭にはスエ子夫人との間に、聰、昌明、堯の三君及び宮子、ふみ子、ちよせ、えい子の四女があり、圓滿を極めてゐる。

講演 丸山鶴吉

明治十六年九月二十七日生 東京府下谷區谷中天王寺町二〇

建國運動の主唱者たる氏は、昭和四年の建國祭典當日のAK放送に記余講演を試みた。即ち我國は建國以來種々なる國難に遭遇したが、常に偉大なる國民の意氣に依つて之を善用利導して遂に今日の隆盛を見るに至つた。我國現下の情勢に於て、吾人は此の廣大なる建國精神を省み、祖先々輩の高範に従つて一大勇猛心を喚起せよと絶叫して、大に國民精神の作興に資する處があつた。氏は廣島縣の出身、沼津郡松永町に生まれ、第一高等學校を経て明治四十二年東京帝國大學法政政治科を卒業し、先づ警視廳に職を奉じた。果進して方面監察官となり多年恪勤勵精して更に保安部長に任命せられた。大正六年警察事務研究の目的を以て歐米に差遣せられ、歸朝後内務省に入つて地方局書記官となつた。同時に内務書記官をも兼ね其後果進して朝鮮總督府警務局長に補せられた。大正十三年依願職を免ぜられ閑雲を遂つて居たが同十五年七月選ばれて東京市助役に就任し、伊澤市長を扶け、同年十月市長と袖を連ねて勇退し、爾來野に悠遊して居たが、昭和四年夏濱口氏に内閣組織の大命降るや、拔擢せられて警視廳總監の職に就いた。嘗つて寺院境内地讓與審査會幹事、地方職業紹介委員會委員、日本青年會館理事長心得、大日本聯合青年團理事、中央社會事業協會評議員、中央朝鮮協會理事、國民會相談役等の公職に就き、現に在職中のものも多し。亦昭和二年四月ジュネーブ海軍軍備制限會議參列全權委員の隨員を被仰付た。目下鐵腕總監として嘖々の名高く、號を遺芳と云ひ、正五位勳三等に敘せられて居る。

講座

朝倉文夫

明治十六年三月生 東京府下谷區谷中天王寺町二〇

氏は我國彫塑家中の第一人者である。曩に東京中央放送局の美術講座の依頼に接し、廣く聴取者の藝術趣味の涵養に多大なる裨益を齎して居る。氏は九州大分縣の出身で、渡邊要藏氏の三男として不世出の藝術的天分を持つて同縣竹田に生れた。長ずるに及んで朝倉家の養嗣子となり、明治三十五年始めて東都に向け藝術修業の旅に上つた。生來藝術的天分の豊かな氏は夙に天才的閃めきを見せ、大に其前途を囑望されてゐたが、後東京美術學校に入り、彫刻科に於て琢磨の功を積んだ。當時仁禮子爵銅像建設の舉あり、氏は在學中の身を以て其の塑像の選に應じて第一等に入賞した。亦四十四年南洋ポルネオに遊び、土人の群に投じて其風俗人情を研究して大いに情操を培つた。是より先明治四十一年文部省美術展覽會開設に際し「暗」を出品して第二等に入選し、爾來二等を受くること三回三等を受くること三回に及んだ。卒業後は更に一段の進境を示し、各有名展覽會に入選して愈々聲價を揚げ、大正四年帝國美術院會員を被仰付、亦美術學校教授に擧げられた。此外帝展審査員、帝國美術院會員となり、更に東亞彫塑會員、太平洋畫會々員等各方面にも關係し、独自の藝術技能を以て遂に朝倉派の一大勢力的分野を形成するに至つた。從來各方面の彫塑に傑作多く、其の手に依つて養成された優秀藝術家も極めて多い。藝術良心熾烈なる氏は先年意見の相違から一派の士を率ゐて院展を去り、現在は専らアトリエに精進して居るから今後尙我美術界の進歩のために裨益する所尠くあるまい。家庭はやま夫人、撫子嬢等である。



講演 天兒民恵

明治六年三月五日生 神戸市下山手通八ノ二

水の公園瀬戸内海のつぎる所、史實に聞えた詩の國、淡路島に程遠からぬ徳島縣福原村旭は、我が學界の權威醫學博士天兒民恵氏の懐しい故郷である。懐古的な風物、和やかに流る暖風、高雅な氏の風格は、實にこころした環境の裡に玉成せられたのであらう。碧空に映ゆる青螺の海をそのまゝの、クリヤーな頭腦を惠まれた氏は、少年時代から秀才として級中常に異彩を放ち、大に其前途に望を囑されてゐた。長ずるに及び將來自己の歩むべき道が、醫學界に展げつゝあるを見て、大阪醫科大學の前身たる、大阪醫學校に入學した。爾來幾春秋を醫學 研究に委ね、首尾よく同校を卒業したが、性來知識慾の旺盛なる氏は、尙ほも進んで學術の殿堂に健全なる歩みを続け、遂に醫學博士の學位を授けらるゝに至つた。氏の得意や將に想ふべしである。之より先氏は招聘せられて神戸市立東山病院院長となり、多年の蘊蓄を傾けて幾多の改善を行ひ成績の大に見るべきものがあつた。後市立屯田療養所長を経て、市立衛生試驗所長に拔擢せられ、市民の衛生保健に貢獻する等其功績は寔に没すべからざるものがある。かくて大正九年現住所に醫院を開業し、拮据經營の結果、年を追ふて次第に幸運に恵まれ、現在では神戸市内に於ける刀圭界の泰斗たると同時に、關西醫學界の權威として重きをなしてゐる。曾てBKマイクrohンの前に立つて醫學の講演をなしたことは普ねく人の知る處であらう。人となり温厚にして襟度廣く、家庭には夫人との間に、現在九州帝大醫學部助手の長男民博氏、同大學在學中の次男民和氏外一女がある。

講演

建部遜吾

明治四年三月生 東京府下千駄ヶ谷町九〇二

一世の師父として我が國文教の上に多大な感化を残した一代の國士杉浦重剛翁が逝つてから已に五ヶ年の星霜が流れた。昭和四年二月は恰も其命日に當るので東京中央放送局では偉人の偉を偲ぶべく、翁在世中最も知遇を得た建部遜吾博士を介して放送を試みた。氏は翁の門下に親しく薫陶を受けた多數の名士を措いて故人の遺徳を偲ぶ追憶の講演を囑されたことを痛く感激して、翁在世中の交友及び翁の日常の篤行等を詳しく放送したのである。一世の偉人から篤い知遇を得た氏の人格と識見とは推して知るべきであらう。建部家は日本武尊の王子稻依別王に出でて居ると傳へられ世々舊新殿田藩領の大庄屋として百餘村を管して来た家柄である。氏は建部貞夫氏の五男で、幼にして神童の譽があつた。郷費の外父に従つて漢籍國學を修めて小學教育に従事すること三年、次いで上京して明治二十三年東京物理學校を卒へ、同二十九年更に東京帝國大學を卒業した。後大學院に入り、三十一年官命を帯びて歐洲に留學し、研究三年にして歸朝するや東京帝國大學文科大學教授を命ぜられ社會學講座を擔當した。三十五年文學博士となり、東亞の風雲急を告ぐるや氏は同志六博士と日露開戦を主張して當局の忌諱に觸れ職を退いたが後復職した。四十二年再度歐米に渡り萬國社會學士員正員、政治學社會學士院會員、伊太利社會學士院名譽會員等に擧げられた。大正十三年新潟縣より當選して衆議院議員となり、立憲民政黨相談役として重きをなして居る。著書三十餘種に上り、號を水城と云ひ、從三位勳三等である。

講演 林 毅 陸

明治五年五月一日生 東京府下澁谷町下澁谷一八四

早稻田の高田早苗博士と對して我が國私學の兩雄たる慶應義塾總長の林毅陸氏は、『不戰條約を中心として』の題下に東京中央放送局マイクの前に...

講演

勝田主計

明治二年九月十五日生 東京府下澁谷町中澁谷大和田三益

田中内閣の文部大臣として頗る治績を残した氏は、明治大帝の御聖徳を...



講演 中島常吉

明治十七年十二月五日生 東京市芝區西久保廣町四〇

明治大學豫科教務課長として、また明治大學ローバースカウト團長として...

講演

飯田旗郎

慶應二年五月生 東京市小石川區西江戸川町一八

人口問題の沸騰を告げて居る折柄、日本人の働く天地として残されて居る...

講演 潮 惠之助

明治十四年八月十一日生 東京市市ヶ谷藥王寺町四五

第五十八回目の伊勢大廟選宮祭が取り行はせらるゝに就いて、國民をして中外無比なる國體の精華を徹底的に知らしめ、國民精神の作興に努むべく各放送局より名士の講演があつた。茲に氏も政府の一員として東京中央放送局より放送を試み、式年選宮に對する御遺營の次第を明かにし、かねて敬神尊王の精神を鼓吹した。氏は若槻氏を出した島根縣の出身で、其の將來の政治生活には縣人から大なる望を囑されてゐる。故名判事湖恒太郎氏の令弟に當り、同縣美濃郡豊田村はその懐しい搖籃の地である。夙に第一高等學校を卒業後、東京帝國大學法科に學び、明治四十年七月卒業するや、直に高等文官試験に合格した。翌四十一年七月長野縣に赴任し事務官として在職すること一年、拔擢せられて翌年内務本省に入り事務官兼内務書記官となつた。爾來引き続き本省内に腕を揮ひ、大正二年六月内務省參事官に進み市町村課長となり、次いで府縣課長拓殖課長等に累進した。尙ほ大正六年十月兼地方局事務官となり、更に八年内務省衛生局長心得を経て局長に擧げられた。越えて同十四年六月内務省地方局長に進み更に内務事務次官となつたが、田中内閣の内務行政に多大の功績を挺で、内閣交迭後引き続き要職に就いて居る。現在外に島根縣協會評議員として郷黨のために戮力協心して居る。今や僅かに年齢五十、才腕愈々圓等の境に入り、而も尙春秋に富み、將來の國勢を變肩に擔ふべき逸材として信望を集めて居る。趣味は讀書旅行運動等で、高潔な人格を以ては省内に知られて居る。



家庭講座

石 丸 雪 子

東京府下大森町新井 宿木原山一七六八

巴里の超モガ、ギャルソンの、嶄新な化粧に就いての、我が石丸雪子女史の家庭講座は、フレッシュな巴里みやげとして、流行を追ひかけるモガ連を奮躍させ、また甘美に溢れた蠱惑的な、パリジャンの生活をフアンの眼の前にグロリアスアツプしたやうな興味ある放送であつた。女史の夢寐だにも忘れえない搖籃の地は、本州の西端、山口縣であつて、父のやうな親しみと、母のやうな懐しきをもつた故郷の山河を背にして、泌々と離別の哀愁を味ひながら、前途に輝く光明を抱いて上京したのは、大正七年のことであつた。まづ大森町に居を構へて、女醫たらんと志したが、烟塵の女史は益々多望なる美容術の將來に思を馳せて、十年岡崎アンナ師の許に美容術の研究を續けるやうになつた。そして十三年には、日比谷ビルデングに美容院を獨立經營するに至つたが、滿身向上心と研究心に燃えた女史は、これに満足せず、更に斯業の蘊奥を極めんとして翌年單身渡佛したのである。かくて流行の府たる巴里に止つて研究すること二年の後、ベルリン、ロンドン等に渡つて、新知識を求め、昭和三年二月、シベリヤ經由で歸朝したのであつた。されば昭和三年三月十二日の放送は、エトランゼの香が漂つて巴里みやげとしては絶好のものであつた。なほ女史の放送は渡佛前、即ち大正十四年にも美容術についての家庭講座があつて、其の時も大いにモガ連や、令嬢令夫人といったやうな人々を喜ばせたのであつた。女史の趣味は旅行、讀書、ダンス等のモダンなもので、艶麗な容姿の持主として知られてゐる。

講演 牧 野 菊 之 助

慶應二年十二月二十一日生 東京市牛込區北町一〇

思ひ出づる明治大帝御大葬の日九月十三日、我が司直の最高の府を司る牧野菊之助氏は、『國民の司法參與と保護事業』の題下に、躬ら起つて東京中央放送局のマイクの前に、國民の自覺と理解とを説いて其理を明かにし、世人の裁判制度に對する知識の涵養に力めた。我國も陪審制度の實施と諸法規の改正に依つて立憲治下に於ける司法制度の完備を見たが、之に對する民衆の見解に至つては未だ遺憾なる點多く、殊に刑餘の人に對しては甚だ理解を缺いて居る。氏は之が保護善導の事業の完成を要望し社會の之に對する同情を切言して居る。氏は東京府の人牧野清壽氏の三男に生れ、幼年時代私塾に學んで高等中學に進み、明治二十四年東京帝國大學法學部佛法科を優等で卒業した。静岡地方裁判所を振り出しに横濱地方裁判所判事に進み、次いで東京控訴院判事となり、更に同部長に累進した。當時已に明哲な頭腦を以て囑目されて居たが、果せるかな、其後大審院に入つて部長となり、傍ら専門の法學に就いて研究を累ね、大正七年遂に法學博士の學位を授けられた。昭和二年八月遂に大審院長に親任せられ、大任を荷つて今日に及んで居る。曩に法學研究のため歐洲に留學し、亦手形法規統一萬國會議參列のため歐米各國に差遣され、司法裁判上、或は法規制度上に貢獻する所極めて多く、亦氏の手になつた法學書は何れも好評を博し、學徒から多大の尊敬を以て迎へられてゐる。人となり襟度廣く而かも絶倫の精力を有し、現に従三位勳二等である。

ラヂオ技術者 丸 山 正 男

明治四十二年一月五日生 東京市四谷區鹽町三ノ六

ラヂオの恩人マルコニーが、無線電信を發明した時は、二十歳の青年であつた。放送局主催のラヂオ受信機懸賞に三等を獲ち得た我が丸山正男氏も亦、前途ある二十歳の青年である。氏は明治四十二年一月五日、丸山政治郎氏の長男として、芝公園地に呱呱の聲を擧げ、大正十四年東京高等師範學校附屬中學を卒業すると共に慶應大學豫科に入り、眞摯なる學徒として専心法學の研究を續けてゐる。氏は性來明敏にして、殊に中學時代から電氣學に對する興味を開き、震災前自宅の庭園に小規模の軌道を敷設し、動力を利用して豆電車を動かした事もあつたが、ラヂオの研究に没頭するやうになつたのは、化學畫報の『來らんとするラヂオ時代』に刺撃された處が多かつたと云ふ。曾てニュージランドの市長ネルソン氏と、數回に亘り日本の放送状態に就て交通した事もあり、シルダイン六球式にロースチューナーを取付け、從來不能とされてゐる廣東の聴取が完全に出来ることに成功した等、エピソードはなかなか多い。又受信機の組立に就て、桑木源吾、水野國太郎共著のラヂオ解説に執筆したこともあり、前途有爲の士として明日を期待されてゐる。人と爲り快活、發明家に相應しい剛健なる意志と、稀に見る明哲な頭腦の持主である。氏は尙ほ引續き、趣味と無線電話、ラヂオの日本、無線と實驗等によつて益々ラヂオの研究を積んでゐるが、郵便切手竝に昆蟲の採集等に深き趣味と造詣を有し、現に千二百有餘種に及ぶ各國の郵便切手を蒐集し、また昆蟲の採集も、單に蝶だけでも八十有餘種類の多きを標本としてゐると云ふ。

講演 廣瀬基

明治十二年四月生 東京市外日暮里町字日里森二六

現代の生活から、電燈、電信、電話、印刷機、タイプライター、活動寫眞、著音器、ラヂオ、蒸気機関、蒸気タービン、石油發動機、ガソリン發動機、飛行機、自動車、電車等を除き去つたならば、果して何物が残るであらうか、これら近代文明の中心は發明の賜であり、發明家の苦心研究の結晶である。實に發明は人類の幸福と、國家の産業とに重大な關係を有するものである。そして一國が其の富強を世界に誇らんとするには、其國內に豊富な天然の資源を有し、更に天與の資源を利用するところの智能的資源即ち發明考案の旺んな國でなければならぬ。氏は斯うした事から縷説して發明を促すべく、昭和四年四月十八日の工業週間に、發明の話と題する講演をJ.O.A.Kから放送したのであつた。氏は岡山縣の士族、廣瀬謙吉氏の長男として、明治十二年の、春色漸く山野に動こうとする四月、呱呱の聲を擧げたのである。幼にして穎悟、學序を追つて東京帝國大學工科大学機械工學科に學び、三十九年優秀な成績を以て卒業するや、直に特許局審査官補に任ぜられ、四十年には審査官に進んだ、かくて、明晰な頭腦と快刀亂麻を斷つ才腕を次第に認められて、地位を高めてゆき、大正四年特許局技師を兼任、十一年歐米出張を命ぜられて、先進國に新知識を求めたのであつた。現在特許局技師、特許局機械部長で、從五位勳五等、噴々たる名を轟かされてゐると共に、其の多望なる將來を期待されてゐる。家庭にはスガ子夫人との間に節男君、綾子、照子嬢があり、嚴父謙吉氏にかへてゐる。

講演

山口健治郎

安政五年七月三日生 東京市麻布區飯倉町五ノ六〇

新潟縣は雪の國であると共に、また民謡の國である。追分に聞く斷腸の調、大津繪に味ふエロチックな陶酔、おけさに唄われた纏綿たる情緒、明治の文豪尾崎紅葉の血涙を絞つた美しい唄の國である。そして雪のやうに清浄な純情の人達によつて、平靜ないなみが続けられてゐる國である。さればJ.O.A.Kで放送される新潟の民謡は、最も強くファンをチャームするところであつて、昭和四年新潟の夕がA.Kで催されたのも、ファンの熱望によるところであつた。この時民謡の放送に先立つて、雪と唄の國があつてゐる多くの美しい誇りを紹介したので、我が山口健次郎氏の講演である。氏は南蒲原郡の人、山口甚九郎氏の長男として安政五年に生れたが、家は代々土地の名望家として知られ、氏は若くして大面村々長に推されたのであつた。偶々明治二十二年國會開設に際し國會議員たらんとして遂鹿場裡に打つて出たが、當時革新黨と自由黨との確執激甚を極め、惜しくも一票の差を以て志を達することが出来ず、心機一轉總てを放棄して上京し實業界に身を投じたのであつた。翌二十三年現在の地を卜して新炭業を創始したのが今日の大をなす最初の第一歩であつて、爾來數十年努力と精進は家運をして幸運の一路を辿らしめるに至つたのである。現に新潟縣人會の幹事として郷黨の尊敬の的となり、また東京新炭同業組合相談役として重きをなしてゐる。令望しづ子夫人は貞淑の聞え高く、令嗣武君は早稻田大學商科を出で、氏を補佐して家業に精勵すると共に飯倉町青年會長を勤めて居る。

講演

麻生正藏

元治元年一月九日生 東京市外高田町雜司ヶ谷三二一

ラヂオが、報導機關として、娛樂機關として、また教育機關として百パーセントの科學機能を揮つてゐるのは、ラヂオが大業的で、家庭的であるからである。さればJ.O.A.Kから「母の日」の當日放送された我が麻生正藏氏の講演は、たゞ單に母性愛の高潮だけでなく、家庭教育的なものであつた。氏は人も知る日本女子大學校長で、同校の創設者の一人、日本女子教育界の最高權威者である。元治元年一月九日をもつて大分縣珠郡東飯田村に生れ、夙に學序を追つて京都同志社に學び、明治二十年同校を卒業するや更に帝國大學文科大學に進んで、哲學を専攻した。二十二年四月新潟縣の北越學館の教頭に聘せられ、傍ら新潟女學校に教鞭をとつたのである。次いで二十五年一月には大阪梅花女學校教頭に招聘せられ、更に同年九月母校たる京都同志社教授となり、同志社女學校の教諭を兼ねたのであつた。三十年八月同志社を辭して東上し、日本女子大學の創設に東奔西走し、校成るに及んで三十四年四月同校學監となつた。かくて三十七年二月、女子教育を視察研究のため歐米各國を巡遊し、三十九年二月歸朝、爾來専心前學校長成瀬仁藏氏を輔佐して、受難と苦惱の過程にある日本女子教育の向上と發展のために超人間的な努力をつとめたのである。成瀬仁藏氏の歿後、即ち大正八年三月、衆望を擔つて校長の椅子を占め現在に及んでゐるが、女子教育界に資した貢獻は實に殫するべからざるものがある。また大正九年には文部省教育評議員を仰せつけられたのであつた。

講演、カクテール創製家

天草種雄

明治八年三月九日生 東京市四谷區鹽町

都會生活の過度の疲勞の棄て場所を、カフェーなどに求める、其所には陶酔的な裝飾燈の青白い光が漂ひ、あくまでも陽氣なジャズのレコードが奏でられ、リラの花が踊娘の唇の様な強烈な眞紅の魅力を投げかけて居る。總ての條件は整つて居る、が肝心のアルコールに至つては時代の人々の味覺を満足させる洋酒に乏しい。ペーミンントに飽き、リキールにあき足らぬ此の狀態に應じて生れて來たのはコクテールであつた。名に於て味に於て完全にモダニズムを具現して居るコクテールの眞價は今更喋々する迄もなく其風の如き禮讚の聲が最も雄辯に之を物語つてゐる。かうした新しい洋酒の醸成に成功した天草種雄氏は、變つた閱歷の持ち主である。薩摩軍人々代表する熊本縣の出身、夙に軍人を志し、明治二十七年陸軍士官學校を卒業するや、直に歩兵聯隊に勤務したが、偶々日露戰役の際軍に従つて偉勳を樹て、功により金鷄勳章功五級を賜つた。越えて明治三十九年軍務を帯びて遠く朝鮮、モスコイ等に赴き功績の見るべきものが多かつたが、遂に四十二年官を退き、一時山紫水明の京都にあつて務かに機の到るを待つてゐた。此間に於て氏は嘗てモスコイ滞在中寒國人の慾求を満すべく研究してゐた強烈なる洋酒釀造に就て苦心の結果最近日本人の要求に添ふべきコクテールの創製に成功したのであつた。曩にマイクrohンの前に之が蘊蓄を傾け、各方面から多大の好評を擔つた事は人の知る處であらう。軍人に相應しい明い性格と極めて正義觀の強い人で、夫人をよし子と云ひ二人の間に長男洋君、波子、民子嬢の一男二女ある。現に正六位勳五等である。

講演

城戸四郎

明治二十七年八月十一日生
東京市赤坂區榎町三

トーカー、レビュール、小劇場の大劇場進出等々、將に過度期の最尖端に位置するものは、映畫界であり、演劇界である。そして松竹キネマ株式會社及び松竹合名株式會社は、依然として、斯界に王者の地位を占めてゐる。そしてこの兩社の取締役として、副社長としてまた蒲田操影所長として、超人間的な才腕を揮ひ、斯界の寵兒となつてゐる人が、我が城戸四郎氏である。氏は北村宗平氏の息として明治二十七年八月十一日生れたが、後城戸姓を名乗るに至り、東京府立第一中學校、第一高等學校、東京帝國大學へと進んで、法學部英法科を優秀な成績で卒業したのは大正八年の事であつた。直ちに菅生商會に入りて外國貿易部國際信託金融課等に歴勤し、明晰なる頭腦と卓絶した手腕を顯はれ、大正十一年、松竹合名株式會社に轉じた。かくて、人に對するに懇切であり、事に對して熱誠ある事務振りと、明るい性格、高潔な人格とは、忽ち見出されて、異數の拔擢を受け、同社の副社長に推された。また松竹キネマ株式會社、帝都興業株式會社の取締役にもなり、更にまた野村芳亭氏の後を繼いで蒲田操影所長の椅子を占め、熱心センスものに轉回して、映畫界に一大紀元を劃したのも、氏の獨創と努力によるところが多い。昭和四年四月歐米各國の斯界を視察して歸朝した氏は、AKからラヂオ放送してフアンを雀躍させた。とまれ氏は映畫界、演劇界の寵兒であると共に明日の王者である。

講演

尾關榮

明治十四年十一月二十二日生
大阪市西區江戸堀下通一ノ四五

BKのマイクロホンの前に立つこと數回、其の學識の深さと、其の名を知られてゐる人に、醫學博士尾關榮氏がある。氏は福岡縣の人、明治三十九年十月、大阪府立高等醫學校を卒業して、同年十二月京都帝國大學福岡醫科大學助手となり、四十二年十月に至るまで其の職にあつて斯界の最高水準に精進した。かくて翌年三月渡歐して獨逸のストラスブルグ醫科大學に、病理學並に醫化學を、大正二年四月柏林理科大學に有機化學を、また獨逸ウイールヘルム皇帝研究所附屬勞働生理學教室に醫化學を専攻するなど、食る様な研究を續けた。三年十月歸朝したが、向上心に燃えた氏は四年二月大阪醫科大學小兒科教室に入りて小兒科を、次いで五年一月府立大阪醫科大學醫化學教室に於いて三ヶ年醫化學を専攻し、同年十一月、大阪醫科大學試講囑託、翌九年九月講師を命ぜられて小兒科を擔當するに至つた。また同年十月大阪醫科大學附屬病院醫員に任ぜられて十年五月には小兒科學研究の爲め歐米各國に出張を命ぜられ、十一年十二月副養素の研究に關する論文を提出して醫學博士の學位を得、十四年三月三日歸朝したのである。そして同年四月大阪醫科大學附屬醫院小兒科醫長に推され、十四年六月公立大學教授に任ぜられ、高等官六等を以て待遇せられた。同年同月大阪醫科大學教授となつたが翌五年これを辭し、病院を獨立經營して今日に及んでゐる。家庭には松枝夫人との間に健夫、英夫、壽夫の三君及び仲子嬢がある。

講演

柏原長弘

明治二十年八月八日生
大阪市東區常盤町一ノ二〇

JOBKのフアンに親しみのある醫學博士柏原長弘氏は、大阪回生病院の産科婦人科醫長として令名ある斯界のオーソリテイである。氏は和歌山市の人、高松中學校から、第一高等學校に進み、京都帝國大學醫科大學にて勤務し、次いで五年七月岐阜縣立病院産科婦人科醫長として赴任、六年十月京都帝國大學醫科大學講師囑託となつたのである。超えて十年五月、京都帝國大學助教授として醫學部勤務を命ぜられたが、氏は部長代理として、講座を擔當したのであつた。同年十二月、京都帝國大學に論文を提出して醫學博士の學位を授與されたが、其の論文は、莖骨筋の自發的纖維性變縮に及ぼす液液内イオンの作用に就いて及び同長性筋變縮は單一變縮に非ずといふのであつて、實驗上の事實に基いてアイ、ロエプのイオン學說を破壊し、多數先輩學者の研究及學說の信するに足らざることを述べた堂々たるものであつた。十一年八月京都帝國大學助教授を辭して現職たる大阪回生病院の産科婦人科醫長の椅子を占め、十二年四月には産科婦人科學見學のため北米合衆國に遊んで歸朝後は益々卓絶した技能をもつて斯界に重きをなしてゐる。氏は一高時代ボート、ランニングの選手で、ボート、野球、庭球、競走を好み、舞踊、繪畫等に趣味をもつてゐる。家庭にはチエ子夫人との間に四女があり、醫博柏原光太郎氏の令兄である。

講演

池口武夫

明治十七年十月四日生
大阪市港區四條通り三丁目

民衆的、家庭的なラヂオによつて、家庭醫學乃至醫學思想が、民衆の中に、家庭の中にインスパイヤされつゝあることは、誠に喜ぶべきであつて、大阪市電氣局病院長たる我が池口武夫氏を數回となく、BKのマイクロホンの前に迎へることは更に／＼に喜ぶべき次第である。氏は兵庫縣の人、明治四十三年十一月大阪府立高等醫學校を卒業すると共に直に同校助手となり、大正三年には同校助教授を命ぜられた。また翌四年十二月大阪府立醫科大學教授となり、超へて六年十月醫化學研究のため米國に留學を命ぜられて、先進國に食る様な精進をつゞけて新智識を求め、八年十月歸朝したのである。同年十一月官制改正大學令昇格によつて、大阪府立醫科大學豫科教授に任ぜられ、また十年十一月、醫學博士の稱號を授けられたが、其の論文はインヴェルターゼの力學的的作用に就いて、インヴェルターゼに對するXグルコース及Bグルコースの抑制作用に就いて、大腸粘膜に於ける消化酵素の形成に就いての研究であつた。十三年六月大阪府立醫科大學講師を囑託せられ、大正十一年以來大阪竹尾結核研究所々員を兼任したが、昭和二年十月これを辭して現職たる大阪市電氣局病院長となり、精勵今日に及んでゐる。氏が學界に貢獻せる業績は血液内に於けるヒヨレステリン物質の消長に就いて、血液内に於けるヒヨレステリン定量の一變法に就いて、家兎結核感染と血中ヒヨレステリン物質との關係に就いて等で、斷然斯界に重きをなしてゐる。趣味は運動、洋樂で、家庭には辭子夫人との間に四女がある。

講演

熊谷謙三郎

明治二十一年三月十九日生
大阪市南区八幡町二四

大阪市立桃山病院長として、内科殊に結核病の一權威として、またBKのファンに親しみのある人に、我が熊谷謙三郎氏がある。氏は山形縣西村山郡の人、明治四十年縣立山形中學校を卒業するや志を刀圭界に立て、大阪府立高等醫學校に入學し、大正二年卒業すると共に同校助手を命ぜられた。四年十二月府立大阪醫科大學教授を囑託、六年二月同大學管理財團法人竹尾結核研究所病理解部員を命ぜられ、九年五月公立大學助教授及び大阪醫科大學助教授に任ぜられたのである。十一年七月、學界の最高名譽たる醫學博士の稱號を授けられたが、其の論文は、實驗的メレル、パーロー氏病及脚氣様疾患に就て、參考論文は結核菌毒素の生理學的研究、アナフイラシーに對する硫酸アトロピアンの應用、家兎の脚氣様疾患、腸管の結核菌吸收機轉に就て等であつた。十二年六月助教授を辭して大阪市立桃山病院副院長となり、十二年十一月洋行伯林大學及ハンブルグ熱帶病研究所に於て一般傳染病學研究、奧、瑞、佛、英を視察して十三年十月歸朝、翌十一月桃山病院長に推されて、今日に及んだのである。氏は偏食に因するモルモットの病變に就て、實驗的壞血病に就て、モルモットの脚氣様疾患に就て、實驗的パーロー氏病及脚氣様疾患に關する知見、實驗的カルレル、パーロー氏病及脚氣様疾患に就て等の研究をもつて學界に貢獻したと共に超人的努力をもつて桃山病院をして隆盛ならしめた。趣味は登山と旅行、家庭にはゆき子夫人との間に二男一女がある。

講演

渡邊鐵藏

明治十八年十月十四日生
東京市赤坂區青山南町一ノ二八

JOAKのマイクを通じて歐洲大戰以後我國の商業界は如何なる實勢に在るか、之を歐羅巴の現状に比して日本の地位は那邊に在るか、今後日本の商工業に従事せる者は如何なる道を歩むべきか、更に商業の實際的及理論的方面から其經營に就て多年の蘊蓄を披瀝した法學博士渡邊鐵藏氏は、東京商工會議所理事として斯界に噴々の名聲を馳せて居る人である。大正十一年行はれた東京市政廳正運動と大正十五年市會總選舉に當つて、理想選挙運動に腐敗し切つた帝都の市政に一味の清涼劑を授けたのは實に氏であつた。氏は明治十八年大阪府の人渡邊寅藏の男として北區堂島仲の町に生れた。後勉學の爲上京し東京帝國大學法科大學に學び明治四十三年卒業後直ちに商學研究の爲英獨白三國へ留學を命ぜられ、大に其前途を囑望せられたものだ。大正二年歸朝と共に東京帝國大學助教授に任ぜられ、大正五年五月同教授に陞任し六年十一月法學博士の學位を授けられた。一方都市計畫調査會に於ては、都市計畫法市街地建築物法の制定に參與し、復興に際して復興評議員として帝都復興計畫に參劃し多大の貢獻をなし、更に帝國經濟會議員、社會事業調査會委員としては經濟機關の完成住宅問題の解決等に多大の力を致して居る。斯の如き學理の實際化に努力しつゝある氏は實に社會の至寶と云ふも決して過言では無いのである。家庭はやち子夫人と二男六女の十人で、夫人は刀圭界に其人ありと廣く海外に迄喧傳されて居る北里博士の長女で夙に貞淑の譽高い。

日本放送協會關東支部理事

長滿欣司

明治十三年八月二十九日生
東京市外大久保町西大久保四一〇

廣島縣世羅郡吉川村に醫師發朗氏を父に持つて人となつた長滿氏は明治三十九年二月長滿家を創立して戸主となつた。そして同時に東京帝國大學獨法科を卒業して實社會に最初の一步を踏出した。即ち明徹な頭腦を持つ氏は翌年早くも高等文官試験に合格して農林省に官職を食む身となつた。後幾許もなく抜擢せられて特許局審査官兼農商務書記官となり更に鑛山監督署事務官を経て大正五年臨時産業調査局事務官、農商務書記官兼參事官、商務局監理課長等に歴任して天賦の才能を發揮し大正九年食料局長に、更に翌年農務局長に累進するに至つた。爾來多年の造詣と尊い經驗とを以て幾多の刷新を斷行し、大に功績の見るべきものが多かつたが、同十三年惜しまれつゝ官界を退き、現に東京株式取引所理事に推されて商議員をも兼ね財界の鍵を握つてゐる。尙氏は近時各家庭に於ける一日の勞苦を慰むべく大きな役割を演じてゐるラヂオの普及發達を計るべく獻身的の努力を捧げて來た人で現に日本放送協會關東支部理事として華々しい活動を續けてゐる。そして更に産業組合中央會顧問、大日本産業會參事として、力を我國産業の發達に致せるのみならず、日本大學、法政大學の講師としても多年の蘊蓄を傾けてゐる。此外氏は學士會並に同氣俱樂部に會員として社交方面にも重きをなしてゐる。人となり温雅にして謙讓の美德を備へ、見るから人をして好感を抱かしむる明るい資質と明哲なる頭腦の持主で、敬すべく親しむべき人格者である。因に令夫人は、家庭に在つて多忙な氏を扶け、二男三女に賢母として慕はれてゐる。

講演

塚原政次

明治五年九月生
東京府中野雜色一〇七

氏は兒童心理學の大家で、昭和四年五月東京中央放送局に於て「青年の精神的特性に就いて」感じ易き青年の心を詳しく放送する所があつた。青年に於ては倫理道德上の觀念がたゞ知識として取り入れられたに過ぎず、信念として確立性をもつて居ないため、奇抜な思想などが現れる場合に容易に其の誘惑に陥る缺點がある。氏は知識としての倫理道德の價値を説明した上教育上の立場から幾多有益な意見を開陳して居る。兵庫縣の人で、父君は塚原秀雄氏、氏は其長男に生れ、早く父を東都に負ひ高等中學校を卒業後、進んで東京帝國大學文科大學に入り、哲學を専攻して螢雪琢磨の功を積んだ。そして明治三十年抜群の成績を以て卒業したが、滿身向上心を以て充されてゐる氏は、更に進んで同三十四年生理學研究のため獨逸及米國に留學した。爾來各大學に於て學術の研究に身を委ねその蘊奥を究めて歸朝するや、直に身を教育界に投じて廣島高等師範學校教授となるに至つた。後幾許もなくして文部省に入り累進して督學官に任命せられ、文教の興隆に貢獻する處が多かつたが、後靜岡高等學校長となる。名聲頓に推薦せらるゝに至つた。以來心血を注いで教育の刷新に力めた結果、設立日尙ほ淺きにかゝはらず、着々實績を擧げ、頗る聲望を傳へられて居る。之より先き氏は大正十三年文學博士の學位を授けられ、世に公にした苦勞も尠くない。氏は寡黙で人格的、既に從四位勳三等に叙せられてゐる。貞淑なハマ子夫人との間に政春君其の他前途多望な子女がある。

講座

田川大吉郎

明治二十年十月生

東京市小石川小日向臺町三ノ五

氏は現代我國の大業指導者の一人である。東京中央放送局は一般聴取者の智識啓蒙に對しては常に心を砕き、放送種目の選擇に意を資ひ、曩頃來國際講座を設けて世界の情勢を各大家に囑して放送した。氏は其依囑を受けてマイクの前に最近の「世界のいろ／＼」のニュースを紹介して大いに世人の興味を唆つた。「窓の無い家」「曆の改良」等は即ちそれである。扱て氏は長崎縣の士族で、家は代々大村家の重臣、氏は先代節造氏の長男に生れて居る。早くから笈を帝都に負ひ、明治二十二年東京專門學校政治科を優秀な成績で卒業した。若くして郵便報知新聞記者となり、更に都新聞社に入るに及んで、明哲なる頭腦と高邁なる識見とを以て極大の筆を揮ひ、益々名を馳せてゐた。後操風界を去つて東京市吏となり、亦陸軍通譯等を経て遂に東京市助役に擧げらるゝに至つた。當時第三部長兼下水改良事務長に任ぜられ、大いに經綸を布いて一大事業を完成したことは普ねく人の知る處である。次いで明治四十二年衆議院議員に當選し、大隈内閣成立するや、司法省參政官に任ぜられた。亦昭和二年六月東京市京橋區衆議院議員補缺選舉に當選し、曩に日本大博覽會の理事官となつたこともある。亦歐米を視察し、最近都市計畫に關する大著を公にし、此の方面の權威者として目されて居る。經綸の多い政治家として世人の信望が頗る篤い。子息には長男信一氏、次男文二氏等があり、何れも氏の血を受けて伶俐である。



日本放送協會關東支部理事

青山祿郎

明治八年七月八日生

東京市芝區高輪南町四五

治平三百年の礎を基いた英傑家康の出生地たる愛知縣岡崎は、我が電氣事業界の大建物業山録郎氏の播種地である。鈴山巖氏の長男で、先代嘉四郎氏の認むる所となつて養嗣子となつた氏は、明治二十六年良成績を以て東京郵便電信學校を卒業した。職を通信省に奉じ精勵十餘年前途有爲の青年として囑望されて居たが其經驗學究共に成るや、胸中鬱勃たる霸氣を以て明治三十七年十一月官途を退いて株式會社ヒーリング商會の支配人となり、實業界に一步を印した。其後益々發展して藤倉電線株式會社を始め、帝國聯合電球株式會社、帝國電燈株式會社、安中電機製作所及日本國產株式會社を創立して之が取締役となり、現に株式會社安中電機製作所所長、日本國產株式會社社長、帝國電燈株式會社常務取締役、亦食糧研究所監査役、明電社、弘電社各相談役等を兼ね、斯界に重きをなして居る。就中安中電機製作所は、日本無線電信電話及東京無線と共に我が國無線電機製作に關する三大會社の一にして、殊に海岸局並に船舶用無線電話送受信機製作に關する一頭地を抜いて居ることは普く人の知る所である。此の外氏は鐵道信號株式會社を組織して功績多く、大正十三年東京放送局設立せらるゝや推されて理事となつた。現に關東支部理事として眞摯なる態度を以て我ラチオ界の發展に力を注いで居る。人と爲り濃厚篤實、溢るゝばかりの温情を男性的氣品の上に見せ、創始の才と、統御の徳とを兼備した實業界稀に見る君子人である。貞節の譽あるサヨ子夫人との間には長男伊佐男君其他の有為多望な子女がある。

日本放送協會關東支部理事

辻

湊

明治九年十一月生

神戸市坂口町二七

我國財界に一方の驍將として遠く植民地の實業界にまでその才腕を揮つてゐる辻湊氏は現に日本放送協會關東支部に理事として文化の普及に參與し幾多の功績を擧げてゐる。氏は東京府士族小原儀三郎氏の下に生れ、その英才を認められ明治二十七年一月當主泰城氏の養嗣子となつた。體て京都帝國大學に工學を専攻して同三十七年優等の成績を以つて卒業するや、社會の各方面から招きを受けたが氏は自ら興味を持つ造船界に身を投じ、石川島造船所に技師となつた。而も優れた識見と、秀でた人格とは氏をして次第に重からしめ、早くも三ヶ年の後には鈴木商店神戸製鋼所の技師長に拔擢された。尙忠實な氏は幾多の信望を博して同四十三年七月には北港製糖會社取締役兼技師長に、又大正元年十一月には臺灣事業界の因、空蘭電氣會社に常務取締役として迎えられるに至つた。蓋し急速度の躍進と云はなければならぬ。其の他無線電機會社、鳥羽造船所にも重役として關係したこともある。そして現に神戸製鋼所、帝國汽船、クローツ式窒素工業の各會社に取締役として實業界に華々しい活動を續けてゐる。高邁なる識見と、創始の才を有する男性的氣魄の持主で、而かも年と共に思慮益々圓熟せるのみか、前途尙ほ春秋に富み、その將來に幾多活躍の舞臺を残すものと云つてよい。蓋し家庭に在るすみ子夫人は良妻賢母として日本婦人としての教養に篤くよく氏に内助した功も決して尠しとしない。そして四男三女を恵まれて多忙な裡にも幸福な日々を送つてゐる。

講演

嘉納治五郎

萬延元年十月二十八日生

東京市小石川區大塚坂下町二四

氏は「修養の眼目と其方法」に就いて昭和三年一月東京中央放送局のマイクホンの前に立つて居る。近來教育者は勿論のこと修養の言葉は口にする者が多い。然るに中には其修養は果して何のためにするか殆んど其目的さへも明にしない者が尠くない。茲に於て氏は修養の眼目を明かにし、尊い自家既往の修養に基いて其の方法と希望とを述べて居る。氏は我國々技たる柔道の創始者で、講道館長として知られた人である。出身地は兵庫縣で、嘉納治郎作氏の三男に生れ、東京帝國大學に入り、文學部政治科に學び、更に理財科の専門學理をも討究して明治十四年優秀なる成績を以て卒業した。そして翌十五年哲學選科を卒業するや、直に迎へられて學習院の教授に任ぜられた。爾來久しく教壇に立つて貢獻する所多く、進んで教頭に擧げられた。後文部省に入つて參事官となり、再び教育界に入り第五中學校長に就任した。後推されて東京第一高等中學校長となり、拔擢せられて文部省普通學務局長に補せられた。幾許もなくして更に東京高等師範學校長に推さるゝや、心血を注いで育英事業の刷新に邁進し、功績の見るべきものが極めて多かつた。是より先明治十五年講道館を創設し柔道の指南研究を開始して遂に全國に亘つて今日の隆昌を招くに至つた。曩に勅選せられて貴族院議員となり、弘文館長、弘文學院長、教員檢定委員會臨時委員長等に歴任し、現に東京文理科大學名譽教授、日本英語協會長、講道館文化會會長、中等教育會長等其の職に就いて居る。青年修養訓の著あり、我國育英界の第一人者で正三位勳一等である。



日本放送協會關東支部理事
河合 良成

明治十九年五月十日生
東京市外中澁谷七七三

深遠なる學殖と高邁なる識見とを以て、官界に、實業界に行く所として可ならざるなき河合良成氏の如きは蓋し稀である。氏は富山縣西礪波郡福光町の人、夙に東京帝國大學法政政治部に入學し、明治四十四年優等を以て之を卒業した。直に職を農商務省に奉じ、累進して保險局監督課長となつたが、滿身燃ゆるが如き覇氣を以て滿されて居る氏は、捉はれた官界より、寧ろ實業界により多く自己の進路の展げつゝあるを見て、大正八年遂に職を辭するに至つた。時恰も我が實業界の重鎮たる郷男が、東京株式取引所の理事長となるに及び、氏は其知遇を得て之が専務理事となり、實業界に榮ある第一歩を印したのであつた。爾來縦横にその材幹を發揮して、躍進的な發展に實業界の驚異の的となつた。かくて大正十三年一月郷男が同所を去るに及んで進退を共にしたが、將來生命保險事業の益々有望なるに着目し、身を斯界に投じて天賦の才能を揮ひ、日華生命及萬歳生命各保險會社常務取締役として噴々たる驍名を馳するに至つた。現在引き続き其職に在り、外に滿州紡績、中央毛織紡績各會社取締役を兼ねて居る。亦氏は深淵なる學殖を以て東京帝國大學經濟科に教鞭を取つて居る。是より先偶々大正十三年放送局の設立が世に喧傳せらるゝや、機を見るに敏なる氏は曩に出願せる二十七個團體の一に加はり、岩原謙三氏を陣頭に押立て東京放送局の設立に關し日覺しい活躍を遂げたが、其の功績は我が國放送史上特筆大書すべきものである。人となり襟度廣く、謠曲尺八等に趣味を有してゐる。

日本放送協會關東支部理事

上田 碩三

明治十九年二月二十七日生
東京府大井町庚塚四七九三

氏は日本放送協會の設立に際しては率先奔走して盡瘁たる努め、目下關東支部の理事に擧げられて居ることは人の知る所である。本事業に對しては、氏は高遠なる理想の下に、重大なる責任を負ふて放送内容から經營方針に至るまで當路者としての巨細な研究に多大な犠牲を拂つて居る。曩には歐洲視察の途に上り、詳細なる調査を遂げて歸朝するや、早速マイクの前に聴取者に見えて、發達した歐米の現在を紹介し、更にラヂオ事業の將來に就いて穿ち得た豫測を下して居る。氏は熊本縣の出身で、男性的氣魂を多分に有する九州男兒である。上田眞九郎氏の長男である。早くから上京して勉學に力め、明治四十二年優秀な成績を以て東京高等商業學校を卒業した。後直に日本電報通信社に勤務し、通信記者として次第に其人物忠勤を抽んで、次第に其眞價を認められて席を進め、遂に拔擢せられて總務課長に擧げらるゝに至つた。次いで外報部長に轉じてその明敏なる資質を見せ、更に進んで編輯長の椅子に就いた。大正十年九月多數の推薦により同社取締役となり、爾來専ら經營の衝に當ると共に一方事務部長として社員を董督し着々實績を收めてゐる。此外ロータリー俱樂部の會員であり又、交詢社、如水會等にも關係して居る。明るく資質に理智を盛つた活動家で、夫人をしげ子と云ひ、貞淑の譽れ高く女大出身の才媛である。我國放送事業の將來は前途益々多望で之が發展は一に當路者たる氏等の雙肩にかゝつて居ることは云ふ迄もない。自重加餐一層斯界の發達に貢獻せられんことを要求して已まない。

講演

梅野 明二郎

明治十五年十二月六日生
東京市小石川表町一〇二

醤油醸造工業界の權威者として噴々たる名聲を博してゐる氏は、曩にA Kマイクの前に其蘊蓄を傾けて居る。調味原料として不可缺の醤油は、從來舊套的な幼稚極る醸造法で、仕込後一ケ年乃至三ケ年を経過して始めて商品となる有様であつた。之が爲氏は莫大なる資本の空費を憂ひ苦心の結果、斯界に革命的新紀元を畫したのが即ち我が梅野式醸造法の發明である。氏は新潟縣長岡市の出身で、仙臺高等學校を卒業後、刀圭家を去つたが尊父の反對に逢つて果さず、偶々先輩新渡戸博士の意見を叩いた結果、始めて國家的事業たる醤油醸造法の改良に腐心するに至つた。茲に於て東京帝國大學農科に入り二年生の頃には日本醤油株式會社々長鈴木藤三郎氏を訪ふて自己の意見を披瀝し更に卒業後の入社迄も約した程の願脱さを示して居た。卒業後直に入社して東京第一工場の技師となつたが、其後尼ヶ崎第二工場火災の爲同社は不幸にして倒産する已むなきに至つた。氏は其後アルコール特許權讓渡の爲渡米し、四十四年大藏省に醸造試験場設立せらるゝに及び、郷里の先輩橋本圭三郎氏の推薦を得て茲に梅野式醸造法の研究に着手した其苦心空からず、遂に僅か二ヶ月以内にして極めて優良なる醤油を醸造する事に成功した。之が爲氏は大正六年橋本氏及大橋新太郎氏等の背景で資本金五十萬圓の日本醸造株式會社を創立し、推されて之が専務取締役社長に就任するに至つた。尙ほ同社は醸造機械器具並に材料等を販賣して國益に資する處あり氏の著「最新醬油醸造論」は天覽を奈うした。

講演

石樽 鎌次郎

明治十三年二月二十三日生
大阪市南区選信局官舎

選信如に投じて名もない一局官より身を起し、遂に奮闘努力の結果、堪たる今日の地位を贏ち得た石樽氏は正に成功傳中の人として、現代青年の範とすべきであらう。風光明媚なる岐阜縣三里村は氏の懐しい搖籃の地で淳朴な田舎の靜寂な環境は、青春の雄圖を抱く若い英雄を育てて行つた。體て長するに及んで電信學校に學び、明敏な頭腦の閃をみせて明治三十四年卒業し、直ちに岐阜郵便局に奉職して官界への雄歩を進めた。斯くて完全なる社會人として獨立し邁進して行つたが、生來篤實な氏の勤勉な執務振りが長く長上の眼に止まらぬ筈はなかつた。後幾許もなく認められて東京選信局に榮轉となつた。選信事務に携つてゐたが、後都下二等郵便局長として、深川局、下谷局、神田局に歴任し帝都通信の統整に専念して上官の信任を博し遂に拔擢されて高等官に榮進するに至つた。こゝに於て土佐の高知郵便局長に赴任し、更に静岡を経て再び東京選信局に復り中央電話局長、規畫局長代理、監察事務官等に歴任し、次いで大正十三年三月幾多の人に惜しまれ乍ら大阪に下り大阪中央電話局長に榮轉して現在に至つた。そしてこの間多年の經驗をマイクの前に放送したこともある。今や五十の齡を重ねて常に官界に終始し、よく精通して見るべき成績をあげその温厚な人格を部下に慕はれて名局長の譽を馳せ、大阪に於ける朝野に重きをなすと云ふ。尙家庭には三男三女の子寶を恵まれ極めて圓滿である。

講座

内藤彦一

慶應元年七月生
東京市京橋區尾張町二ノ六

氏は昭和三年十月A Kの家庭講座の依頼を受けて、近頃旺に高唱されて居る「廣幅織物の應用」に就いて講演を試みた。從來の小幅織を廣幅織物に代へる事は國家の經濟上に於いて多大なる利益のあることを提唱し、各家庭の主婦に大なる衝動を與へた。氏は近來好評頗る高い松屋呉服店に常務取締役として、我が國百貨店界に雄視して居ることは世人の知る所である。氏は水晶の産地で而かも山國美を誇る山梨縣に人となつた。父君は内藤朝政氏と云ひ、氏は其長男で、明治十六年家督を相続した。從來山梨縣は實業界に幾多の人材を輩出してゐるだけに、氏も早くから實業界に驥足を延べんと志し、上京して華々しく活動を續けてゐた。其後百貨店の將來有望なるに着目し、松屋呉服店及その姉妹店たる鶴屋呉服店取締役兼支配人として専ら之が經營の衝に當つてゐた。一輩の流るゝを見て能く大勢の赴く處を洞察するの氏は時代の趨勢に鑑み、有ゆる萬難を排して一大増資を決定し、銀座に新店を開設して滿都の顧客を吸収するに至つた。新時代の先端を切る松屋の聲の陰にはかうした氏の尊い苦心が常に輝いて居るのである。氏は此外現に菊水商店及煙草商を經營して繁忙を告げ、關係會社としては日本化學ペンキ株式會社の社長、東京織物洋品株式會社の相談役として實業界に重きをなしてゐる。之より先き大正十四年二月東京商業會議所議員に當選して貢獻する所があつた外公共に奉仕する所も極めて多い。統御の徳と、創始の才とを有する實行の人で、しん子夫人は亦貞節の人として令名がある。



講演

老川茂信

明治十六年一月五日生
東京市外千駄ヶ谷原宿二七一

ドイツを訪れる日本人は、學者政治家實業家留學生を問はず誰れでも必ず世話にならなければならぬのは老川茂信氏である。氏はヒンデンブルグ元帥を始めドイツの凡ゆる名士と親交あり、私設日本領事とまで言はれて噴々たる令名を彼の地に馳せてゐると共に、在留邦人から慈父の様に慕はれ、領事以上の尊敬を受けてゐる。氏は富山縣西郷郡西野尻村宇興法寺村に、老川正行氏の長男として生れたが、父業を繼いで刀圭界に立つべく單身ドイツに留學したのは明治三十五年の事であつた。先づ伯林大學で三ヶ年半醫術の研究をなしたが飄然政治經濟學を收めるやうになり、後外務省嘱託として對獨貿易に盡瘁した。またヨーロッパ大陸と日本との特許仲介とか、獨文雜誌「東亞」を刊行して日本の政治經濟藝術等の紹介とか、日本への貢獻は少なくない。尙氏は大朝紙上に鐵血生のペンネームで極大な筆を揮ひ百萬の讀者を雀躍させた事もある。また日獨戰爭當時は最後までドイツに踏み止まり、軍事探偵の嫌疑で獄に投ぜらるゝ事二回、遂に瑞西に退去を命ぜられたが、千九百十八年休戦するや、翌年氏は邦人として最初のドイツ入をし、ハンブルグに滞在して邦人の世話をなし、其の數は一萬人の多きに及ぶ。氏は久邇元帥宮、梨本宮、朝香宮同妃殿下の知遇を得て多くの記念品を拜領し、日本の政界、學界にも多くの知己を持つてゐる。氏は大正十五年の末、二十五年振で歸朝し、其の土産話として昭和二年十月八日J O A Kで「在獨二十五年の感想」と題する講演を放送し、ファンを喜ばせた。



前東京中央放送局説示係長

大羽儔

明治二十一年四月二十一日生
東京府下大森入新井町

元東京中央放送局説示係長の椅子に在つた大羽氏は人も知る其の聲にも似た美はしい來歴と性格との所有者である。氏は愛知縣の人、渥美半島の勝地、田原町を搖籃の地として舊三宅藩中に知られた大羽家の三男に生れた。浩蕩滂沱たる懸路ヶ浦と明鏡の如き靜かな衣ヶ浦に包まれた渥美半島の風光、山影海光の相映する田原町の風情は、氏の性格を陶冶するに大なるものがあつた。夙に穎敏を顯れ、名古屋の英和學校を卒業するや、直に上京して神學を研究し、社會風教の矯正を志して基督教青年會館の總務部に入つた。當時氏は現在日本放送協會關東支部庶務課長の次席にあつて涙ぐましい程の獻身的な努力を續けたものだ。就中、映畫を以つて社會教育の資料たらしめんと欲し、その輸出入商を營み各方面に多大の衝動を與えたが、大震災に遭遇して廢業の止むなきに至り、遂に報知新聞の企劃部に入社した。大正十三年上野公園に開催された無電展覽會に於てウエスタン社機のリヂオ放送實驗にアナウンスを勤めたのが氏のマイクの前に立つた初で、同時に之が帝都に於ける放送の最初の試みであつた。翌年東京放送局が假設されるや、アナウンサーに任ぜられて一般ファンに感謝の念を以つて迎えられてゐたが、偶々幹部と意見を異にし昭和三年冬遂に高踏勇退した。斯くて多くのファンに惜まれ乍ら愛宕山を去つた氏は大いに感ずる所あり「アナウンサー」を刊行して紙上放送を續け、一方長田幹彦氏等と共に藝術家協會を設立して演藝、音樂の民衆化を雄叫びしてゐる。意思堅固にして才氣喚發な氏の先途や蓋し刮目に價する。

講座

五斗欽吾

明治十八年十月十五日生
東京市外澁谷町下澁谷

氏はA K夏の家庭講座に「海に行くか山に行くか」の酷暑を避けて繰り出す都會人のために、體質に適當した土地の選擇を専門的に講説して參考に資する處があつた。殊に山の療法に就いては各病患者に對する醫學的説明を加へ、衛生知識の啓發に努めて多大な裨益があつた。我國刀圭界の大家としての氏の名聲は既に人の知る所であらう。氏は和歌山市北町に生れ若くして岐阜市に出で、縣立岐阜中學校を卒へて山口高等學校に學び、之を卒るや東京帝國大學醫科に進んで明治四十二年拔群の成績を以て卒業した。熱烈な研究心を以て直に大學院に入り、更に研究して倦む所を知らなかつた。同四十三年細菌學教室及醫學科學教室に於いて専ら研究を續け、其の奥堂を極むるや、大正五年北米に渡つてペンシルバニア大學に學び、更にハーバート大學に研究を果ね亦ロツクフェラー研究所に留る等普く砥礪を加へて大正七年歸朝、直ちに母校青山内科に復歸して診療に従事した。次いで大正九年日本赤十字社病院の聘を受けて入り、研究を進むる傍ら巨腕を揮つて名聲漸く揚つた。同十年北京ユニオン醫科大學開校式に參列し、歸路支那マニラ等を視察した。亦十一年財團法人啓明會より「妊娠腎炎の研究」に對し二ヶ年間補助金を受けた。是より先き大正九年醫學博士となり、其著「ア、レドージュ」機能的診斷學」等は頗る推稱されて居る。現時赤十字社病院内科主任及び臨床研究室主任として重きをなして居る。紀水及啓堂と號して音樂美術の趣味深く、人格篤俊人望頗る篤く、令聞よね子は東京女學館出身の才媛である。

講座

和田 三造

明治十六年三月生
東京市赤坂區福吉町一

氏は東京中央放送局の家庭講座に「婦人の服飾漫談」の題下に年來の造詣を傾けた。即ち服飾の配合を科學的に觀察を加へて美的調和法を詳細に説明し、進んで單に無自覺に服飾せんとする人々へ強い刺戟を與へたが、殊に服飾美に憂き身を委す都會の婦人から多大な傾聴を受けたことは言ふ迄もない。氏は我が國藝術界の權威者としてひとり畫壇に活躍して居るのみならず、常にかうして社會の美的生活の向上に努めて居る。福岡縣出身で、夙に藝術的天分を自覺して白馬會研究所に西洋畫を學び、更に進んで東京美術學校に研鑽を累ねた。明治三十六年畫壇の功成つて同校西洋畫科を優等で卒業し、文部省美術展覽會第一回に「南風」を出品して特選を得、同第二回に「煤煙」を出品して同様入賞し一躍して畫壇に名をなすに至つた。同四十三年には文部省より拔擢されて海外研究員として佛國に留學し、歸途印度に滞在して佛教藝術を研究して大正四年歸朝した。其後第十回文展審査員に推され、第十一回文展に「バーの午後」を出品して呼び物となり、亦大正七年「南蠻繪更紗」海の幸「山の幸」の三大作を完成して異彩を放つた。同年審査員を辭して専らアトリエに親しみ、大正十二年大阪毎日新聞社主催日本美術展覽會審査員に推された。亦朝鮮總督府大壁畫を作成し、其傍ら日本畫に筆を染めて力作數十點を完成した。降つて大正十三年東京美術展覽會審査員に任命せられ、爾來日本洋畫壇のため貢獻を勤み、昭和二年六月同會員を命ぜられ藝術のために不斷に精進して居る。

日本放送協會關東支部理事

千野 米作

明治十三年三月生
東京市外千駄ヶ谷町原宿一七〇

廣く財界に活躍してゐる千野氏は亦我國に於ける放送發達史の上に没することの出来ない功勞者である。氏は山高く水清い所謂山嶽美を誇る山梨縣に千野廣章氏の長男として生れた。環境は人を造る。こうした自然の偉大な感化を受けて清朗なそして快活な性格を抱いて東京に出た氏は絶大の抱負と希望とを持つて明治の産んだ偉人福澤諭吉翁の門を叩き、その人格に私淑し乍ら慶應義塾に學ぶことになつた。聽て人格的にも智能的にも幾多の光を添へて明治三十八年卒業し、日露の大戦が齎らした産業の勃興と共に實業界に身を投じ北海道炭鐵會社に忠實なる社員として勤務してゐた。こゝに勤続すること數年、後富士護謨工業社に帝國自動車株式會社の各取締役兼に推され多年の尊い經驗と天稟の才能とを持つて、之が經營の衝に當り、年と共に益々名を馳せて行つた。現に引續きその職にある外交詢社、帝國鐵道協會に會員として社會の第一線に立つて華々しい躍進を續けて止まない。之より先き近代科學の生んだラヂオが我國に創設されるや、入つて日本放送協會關東支部の理事となり餘力をかつては之が健全なる發達と普及に力を注ぎ功績の大に見るべきものがあつた。其後氏の直營する事業が多忙を極めたので大正十五年八月その職を辭したが後幾許もなく擧げられて再び理事となり精勵今日に至つてゐる。人となり恬淡稀に見る活勳家で社會の各方面から將來の活躍を期待されてゐる。家庭ではゆき子夫人との間に一男三女を恵まれて趣味の生活に浸つてゐる。

日本放送協會關東支部理事

荻野 元太郎

明治七年二月二十五日生
東京市麴町區一番町一一

神祕の學園早稻田の杜を巢立つてから二十有餘年、今や氏は公私の社會に燦たる地歩を築き、光のやうな明かな存在を示してゐる。風光明媚な岡山縣に石川光輝氏を父として生を受けた氏は、前途に輝く希望を抱いて上京し、明治の元勳大隈重信侯の創設にかゝる美はしの學府、自由の學園、早稻田大學に入學した。斯くて政治經濟科に覇氣ある學徒として意の赴く所學理と現實との研究に没頭し、偉人老侯の膝下に濃い學生生活に浸つて人格を陶冶し、優秀なる成績を以て卒業したのは明治三十六年であつた。かくて身を實業界に投じ、三十九年古河合名會社が上海に支店を新設するやその長として赴任した。爾後大阪支店長を経て本店營業副部長兼營業課長になり、遂に大正六年拔擢せられて古河商會社常務取締役の重職に就任するに至つた。而も才氣喚發よく世相を達觀して手腕を揮ひ、日支の財界に著しい進出をみせたものである。現に古河電機工業、中華電氣の各會社に取締役、東京スタンダード靴會社相談役等として實業界に重きをなし精勵今日に及んでゐる。之より先き氏は日本放送協會關東支部に推されて理事となり、成長期にあるラヂオの健全なる發達と普及に力を注ぎ、功績の見るべきものが尠くない。向永樂俱樂部、日本工業俱樂部、交詢社に各々會員として相互關聯の樞機に在る尋常に社會の上層を華々しく潤歩してゐる。氏は精力絶倫にして光風霽月の襟度を行し、勇圖は聽て明日の舞臺により目覺しい跳躍を顯現するものならん。



講演

田結 宗誠

明治十六年四月七日生
御影町篠坪

大阪中央放送局の囀に接して、曩に放送講演を試みた醫學博士田結宗誠氏は、現關西醫士界の泰斗として令名あるのみならず、社會的事業たる濟生會の發展に殆んど全力を傾けて來た尊い人格の人である。岐阜縣不破郡赤坂町は氏の懐しい搖籃の地である。學序を追ふて鹿兒島第七高等學校に學び、卒業後更に進んで東京帝國大學醫學科大學に學んだ。刻苦股錐の修を累ねて、明治四十三年好成绩を以て校門を辭するや、直に職を神田和泉橋病院に奉じ、實地に就いて大いにその手腕を磨いて行つた。當時博識にして而かも努力家たる氏は早くも其前途を囑望されてゐたが、果せる哉大正元年八月新に濟生會事業の興さるゝや、直に下谷診療所長として赴任するに至つた。氏の奉仕生活は實に此の時から始まつたのである。爾來各診療所に奉職し、諺に云ふ「醫は仁術」の意義多い天職に向つて尊い實踐の年を累ねて行つた。後遂に拔擢せられて大阪濟生會病院院長となつたが、此間氏は恰も十年一日の如く醫學の殿堂に研究し、就中結核菌に就て各種の研究を遂げ、培養せる結核菌と、動物組織内の結核菌の抵抗力の比較研究に就いて論文を提出し、大正十三年醫學博士の學位を授けらるゝに至つた。抑々結核病は、文明病都會病とまで異稱されて居る程で、今や生命を蝕む病源の中最も戦慄すべきものとなつて居るが、人類繁榮の大理想に向つて伏魔の先途に戦ふ氏の使命は聖くも亦尊い極みである。氏は清而有徳の人格者として信望極めて篤く、趣味として俳句を好み豊かな情操を培つてゐる。貞子夫人との間に安正君、美保子、幸子の二嬢がある。

日本放送協會關東支部監事

中原 岩三郎

明治元年十一月十三日生
東京市牛込區市ヶ谷谷町四〇

廣く時流を洞察してそれに倣し、悠々と彼岸の輝きに接近して遂に今日の大をなすに至つた中原氏は、纏て光輝を身に浴びて今や其能力を趣味三昧に没り、傍ら放送事業に興味を抱いて之に参劃し、幾多の功績を齎らしてゐる。氏は山口縣土族中原衛人氏の三男に生れ、明治十七年十月家督を相續したものだ。若くして一家を背負つて立つた氏は尙向學の志斷ち難く、電氣學を帝國大學に學んで同二十五年には工學士の榮冠を贏ち得た。斯くて直ちに東京電燈會社に入社し、新進技師として大にその特異性を發揮し、遂に選ばれて電氣工學研究の爲獨逸に渡ることになった。こゝに於て遠く異郷に大なる使命を帯びて研鑽を續け、幾多の文獻と清新な知識とを齎らして歸朝し、工學博士の榮冠を受けて東京帝國大學に講師として傍ら社運の進展と革新とに寄與したものだ。蓋し同社が今日六億萬圓の巨資を擁して世界的大會社の實現をみるに至らしめたのも氏の努力が興つて力あることは云ふ迄もない。現に技術顧問として重きをなしてゐる。其の他信越電力、草津電氣鐵道、大和毛織の各會社に取締役として、又吾妻川電力、第二吾妻川電力の兩會社に副社長となり、我が國電氣工業界にその先驅者として之が啓發に努めて倦む處がない。又傍ら能樂、團扇等の深遠な情趣に没る氏は日本放送協會關東支部監事としてもその發達に貢獻するところが少くないと云ふ。因に家庭にはミチヨ夫人あり、間に女子大學出身の才媛一女ハルコ嬢を恵まれて津長男氏を養子に迎え、二男二女の愛孫に取まかれて温い家庭愛に浸つてゐる。

講演

井上準之助

明治二年三月二十五日生
東京市麻布區三河臺町三一

輓近の財界難關に處して才腕愈々顯はれ、宛然財界の大御所の觀あるは現大藏大臣井上準之助氏である。金解禁の未曾有の國難に際して、氏は曩に國民の一大覺醒と、緊縮生活の必要とをラヂオを通じて全國民に呼びかけたことは今尙記憶に新なる所であらう。氏は大分縣日田の出身、地方の豪農で世々庄屋を勤め、尊父は井上清氏、氏は其五男に當り、明治十一年八月井上簡一氏の養嗣子となつた。早く東京に笈を負つて常に拔群の成績を示し、明治二十九年東京帝國大學英法科を優等を以て卒業した。直ちに實業界に投じ、日本銀行に職を奉じ累進して營業局長となつた。其後更に紐育代理店監督に進み、横濱正金銀行副頭取となり、更に同頭取に就任した。次いで三島總裁の後を襲つて日本銀行總裁に就任し、大正十二年山本内閣の成立するや特に大藏大臣として豪閣に列した。内閣瓦解して挂冠するや幾許もなく貴族院議員に勅選せられ、昭和二年五月偶々我國金融界空前の動搖惹起するや擧げられて、再び日本銀行總裁となつた。同時に臺灣銀行調査會長を被仰付、危殆に瀕したる國家の難局を打開して絶大なる貢獻を齎した。今次濱口内閣の成立するや、その手腕を信頼せられて再び大藏大臣として難局に處するに至つた。是より先大正十五年日本青年館理事長に就任し、東京商業會議所特別議員に擧げられ、功に依り正四位勳三等に敘せられて居る。氏は今や一身を賭して經濟的國難に直面し、更正日本建設に向つて邁進してゐる。蓋し氏の如きは近代稀に見る人傑であらう。

講演

小川 雅文

明治六年二月二十八日生
大阪市住吉區天王寺町三三五三



大阪博物館科學館主任として令名ある小川雅文氏は、過般大阪放送局の放送講演を囑され、多年心血を盡いで研究した有益なる講演を試みた。宮城縣本吉郡唐桑村は氏の夢寐にも忘れ得ない故郷である。夙に學序を追ふて東京外國語學校に學び、明敏の才を以て級中常に異彩を放つてゐた。後優秀なる成績を以て學窓を出るや、助手として東京高等工業學校に職を奉じ、服務の傍ら寸陰を惜しんで、切磋修養の功を勵んだ。茲に於て氏は語學の外更に進んで理學の研究に没頭し、遂に數年を出でずして中等學校理科教諭の檢定試験に合格し、茲に日頃の志望を達するに至つた。氏の得意將に思ふべしである。後徳島縣工業學校教諭として赴任し、久しく教壇に立つて、只管子弟の養成に獻身的努力を捧げ、名教諭の名を恣にしてゐた。かくて大正十年拔擢せられて大阪博物館科學館の主任となり、爾來天賦の才能を發揮して幾多の改善を行ひ、年と共に着々其の抱負を實現して、功績の大に見るべきものがあつた。現に其職に止まり、引續き精勵今日に及んでゐる。我が國に於ける工業都市として重要な地位にある大阪市が、智識の寶庫とも云ふべき博物館の而かも科學館主に、斯學の造詣深い、熱心家を有することは、工業界の爲に大に祝福すべきであらう。人と爲篤實、只管職にいそしんで餘念なく、普ねく高風を欣賞されてゐる。すい子夫人は貞節の譽高く、目下明淨女學校教諭として生徒の愛敬極めて篤く、家庭には三嬢があり、兩親に似て伶俐で、常に平和の光に家中に満ちてゐる。

日本放送協會關東支部理事

若目田利助

明治十三年十二月生
東京市麴町區一番地五

近代科學文明の齎らした放送無線電話文化の我國に於ける急速の發展は何と云つても我が若目田氏の力に負ふところが尠くない。氏は栃木縣に若目田晋三郎氏の長男として生れ、幼ない頃から、既に推理に長けて天晴れ麒麟兒の名を轟はれたものである。纏て日を経るにつれて向學の志の切なるものがあり、郷黨の信望と、賞賛とを一身に浴びて上京し、學の殿堂東京帝國大學に工學を専攻して、榮ある工學士の輝冠を頭に頂き社會に巢立つたのは明治三十五年であつた。而かも向上心を以つて滿されてゐる氏は更に進んで英米に遊び、電話事業の研究に没頭した。當時我國の通信事業は極めて幼稚だつたので、斯界に造詣の深い氏の歸朝は蓋し早天に雲霓を望むが如く、初め通信局工務課長を振り出しに、大阪郵便局電話課長、逓信技師等に歴任して我國通信事業の上に幾多の功績を齎した。其の後官を辭して實業界に入り、曩に日本電話工業會社の専務取締役として手腕を揮ひ、現に國産電機製作に關係すると共に、川北電機製作所に専務取締役として重きをなしてゐる。尙大正十四年ラヂオの布設されるや、之に参劃して東京放送局理事の要職に就き播盤期に在るラヂオ事業の發達に資し、後組織の改變されるに及んで日本放送協會關東支部理事として引き続き之が發展に超人的努力を盡してゐる。因に家庭にはタニ令夫人あつて岳父竝にテイ母堂に孝養を盡し、三男四女が恵まれてゐる。

講演

三浦政太郎

明治十二年五月二十三日生
東京府下落合町下遊谷目白
第一文化村三二號

氏は我國に於けるビタミン研究の大家である。昭和三年八月東京中央放送局の子供の時間に「ビタミンの話」の題下に新榮養素として近頃盛んに話題に上るビタミンの講演を試みた。從來榮養素としては蛋白質、含水炭素、脂肪及び無機類のみが必要なるものとされてゐるが、各國共次第に研究を進め、ポーランドのワントラ氏、英國のホップキンス氏等の苦心に俟つて榮養素として大なる役割を持つビタミンを發見するに至つた。之と前後して我が國では鈴木博士が米の榮養價に就いて新しい榮養素を發見して居るが、氏は其後先人研究の後を繼いでビタミンの多大なる研究を積んだ。氏は靜岡縣の出身で、三浦藤平氏の長男、夙に東京第一高等學校を経て、東京帝國大學醫學部に學び、明治四十年優等の成績を以て卒業した。然し向上心の強い氏は同大學醫學部三浦内科に入つて助手となり同博士の指導のもとに、欣求と恩慕を以て醫學の堂奥に研進し、實際的手腕を養つたが、大正三年遂に學術研究の爲め英國に留學した。其間専ら榮養素に就いて研究し、大正十一年醫學の蘊奥を究めて故國に錦を飾つた。そして直に理化學研究所の囑託となり引き続きビタミンの研究に携つてゐたが、報いられて遂に醫學博士の學位を授けらるゝに至つた。今や醫學界研究の中心となつてゐるビタミンに就いては各大家が夫々研究を進めてゐるが、氏も同秘密室に留つて之に熱中して居るから新なる貢獻を齎す日も近い將來にあらう。

日本放送協會關東支部理事

山口喜三郎

明治七年一月三十一日生
東京府下品川淺間臺二六〇

氏は日本放送協會關東支部理事として放送局創設以來技術方面に幾多の功績を齎してゐるのみならず、現に多數電球會社の實權を掌握し、當に電球王を以て稱されてゐる人である。氏は東京府の山口長藏氏の三男で夙に工學の研究に身を委ね、遂にその蘊奥を究めたが向上の覇氣に富んだ氏は之を以て自ら満足せず、進んで米國に渡り、海外文化の研究に没頭した。次いで明治三十五年バルチモア市に於て、ジョンズ、ホプキンス大學に入つて再び工學の堂奥に研進し、數年砥礪の功成るやドクトルオブ、フィロソフイの稱號を授けられた。かくて始めて錦衣歸朝し、幾何もたく古河合名會社に招聘されて技師となり、越えて明治三十九年日光電氣製鋼所の創設に參劃し、擧げられて鑛業部部長となり、兼ねて技師長となつた。明哲の頭腦、深遠なる學殖、火をも踏む俠氣、鮮かな事務的才能等は、次第に氏をして重からしめ遂に推されて常務取締役に擧げらるゝに至つた。次で古河電氣工業會社の創立と共に之が専務理事となり、更に大正十年東京電氣會社の副社長となつたが、現在では此の外、日本電氣證券、旭電化工業、大阪、大日本、關西、大正、帝國聯合各電球會社の取締役に推されて居る。又嘗つて支那興業會社取締役、中華電氣會社監査役等に擧げられた事もあり、遂に工學博士の學位を授けられた。氏の如きは實に學識人格手腕と三拍子揃つた稀に見る逸材で、フサ子夫人は婦徳篤く、二人の間に長男義君がある。



講演

住田正雄

明治十一年三月二十九日生
大阪市東區北久太郎町一丁目

巽に大阪中央放送局マイクの前に盆栽の趣味に就いて深い蘊蓄を傾けた住田正雄氏は、醫學博士で、目下住田病院長として關西刀圭界に盛名かくれなき大家である。氏は盆栽作り及其鑑賞に於ては我が國に於ける一人者で、其講演は廣く盆栽愛好家を啓發する所極めて多かつた。兵庫縣淡路津名郡江井町の出身で、學序を追ふて第五高等學校に進み、終つて笈を東京帝國大學醫學科大學に負ひ、明治三十五年拔群の成績を以て卒業した。後直に東大佐藤外科教室に入つて助手となり、親しく佐藤博士の薫陶の下に實際的經驗を積み、造詣益々深きを加へた。次いで明治三十八年七月招聘せられて九州帝國大學助教授に任じ、同九月專任の大森教授を得て職を退くや氏は其後任として同教室を擔任した。降つて明治四十年整形外科學研究の爲め獨逸に留學を命ぜられ、主として人體運動機關に關する病理學及外科學の研究に従事した。在ること四ヶ年にして新智識を齎して歸朝し、再び九州帝國大學に任じ整形外科學を擔當した。大正二年醫學博士の學位を授けられ、引き続き教職に執掌してゐたが、同十四年八月遂に職を退き翌年九月現地に病院を經營し、逐年名聲を高からしめて居る。氏は人體骨格の先天性常特に侏儒、關節及骨格の結核性病理解及治療、骨格成形及移植術、強直關節、動手術等に就いては斯界の權威者で脊髄カリエスの研究既に十數年に及び、亦門下に輩出した博士既に十餘名を數へて居る。趣味と學殖とを兼備した罕に見る人格者で、家庭には清子夫人との間に一男正樹君がある。

講座

村上隆吉

明治十年三月生
東京市小石川區名荷谷町五七

我國社會問題中の喫緊の難問題、それは即ち人口食糧問題に外ならない。氏は東京中央放送局の家庭講座を依囑せられ、平素執掌する所の多大なる造詣を以て、食糧問題より見たる饑饉の講演を試みて好評を博した。四面環海、陸の富を限られて居る我が國は一方海産に於ては殆んど無盡藏である。茲に當然必要なのは、保存食糧の方法で、地理的にも經濟的にも、或は亦衛生の立場からも味の保存の見地からも饑饉の完全なる發達を要するに至るのである。氏は此の點を詳説して家庭の人の理解を求め、進んでは此の發達に依つて國産食糧の増加を招来せんとする抱負を語つて居る。氏は現帝國水産會會長として常に此の問題に就いては國家的の大抱負を實現すべく努めて來た人である。明治の功臣村上隆吉氏の長男に生れた氏は、學序を遂つて明治三十五年七月東京帝國大學法科獨法科を優秀な成績で卒業し、同年直に文官高等試験に合格した。爾來身を官海に投じて保險事務官兼農商務省參事官、特許局事務官等に歴任した。進んで參事官に任ぜられ、水産講習所教授を命ぜられて學徒の養成に當つて居たが、後亦拔擢せられて特許局長となり、更に農商務省水産局長に補せられた。此の間官命を帯びて歐洲及西比利亞方面を視察し、其後職を辭して専ら水産事業に關係して今日に至つた。亦昭和二年七月七日、人口食糧問題委員會委員を仰せ付けられて居る。温厚な質、高尚な風格と相俟つて人望頗る篤く、正四位勳三等に敘せられて居る。尙ほ家人は令閨梅子、長女昭子嬢外三女がある。

元仙臺逓信局長

戸川 政治

明治十八年九月二十日生
東京府下中澁谷大山七二六

世界の時流に随つて我國にラヂオ放送事業の創設を見るまでには幾多識者の奔走功勞の力が與つて居る。氏も實に其一人で、仙臺放送局の創設に際して氏は當時仙臺逓信局長として其の所管の放送事業には尠からざる寄與盡瘁があつた。其の家は代々萩の藩士として知られ、氏は山口縣野口清弼氏の二男に當つて居る。其八歳の明治二十五年戸川龜氏の養子として入りて前姓を改めた。郷費に學んで後は進んで高等中學に修養を累ね優秀な成績で東京帝國大學法政政治科に進んだ。明治四十三年之を卒業し、同年文官高等試験に良成績を以て登第した。依つて官界に投じ、直ちに逓信省に職を奉じ、卓越なる才識を以て格勲職に盡し、着々席を進めて逓信管理局事務官兼稅關事務官となつた。其後累進して逓信局副事務官となり、次いで事務官に補せられた。其後亦臨時電信電話建設局事務官を命ぜられ、次いで逓信局書記官として同局電話課長に擧げられた。轉じて通信局庶務課長に就任、後仙臺逓信局長の職に任ぜられた。かくて偶々ラヂオ開設の機運に當り、氏は東北支部の創設を期して率先奔命し、遂に其實現を見て放送局沿革史の一頁を飾るに至つた。昭和二年六月氏は惜しまれつゝ、退いて野に降り、其後閑雲野鶴を遂つて専ら悠游して居るが、本年々齒不惑を踰ゆる四歳、當に識見圓熟の時に入り人世の活動期に入つて居る。空しく埋むるには洵に愛惜に堪えない。再び時巡つて其の眞骨頂を國家のためにも示すも遠くはあるまい。氏は趣味豊かに、家庭には養父母及び千代子夫人との間に三嬢がある。

日本放送協會關東支部理事

加納 與四郎

慶應元年八月二十七日生
東京市小石川區第六天町四八

躍進に躍進する科學の尖端に、さん然として光りを放つてゐるものはラヂオである。而してラヂオ界の第一線に、オーロラのやうな、華やかな大きな存在を示してゐる人に我が加納與四郎氏がある。氏は父君を善右衛門氏と云ひ、其長男として、三重縣に生れた。三重縣と云へば、佛聖芭蕉や本居宣長等を輩出した民族の故地で、かうした環境に人となつた氏は、温健な性格の中に明るい覇氣をもつた此の地の人々の誇るべき特性を恵まれたのである。夙に學に志して螢雪の修養を積み、學成るに及んで、實力争覇の實業界に満々たる志を抱いて身を投じた。若年にして業界波瀾の中に鍛練され、着々地歩を固めて、其の縦横自在の手腕を以て知友の間に鳴らすこと既に久しいものである。而も機敏明察の氏は先年來無線電信事業界の近き將來にひそかに期待をかけ、有力者の間を奔走して、着々事業の計畫を運んだが遂に日本無線電信電話會社創立を見るに至り、これと同時に推されて氏は專務取締役となつた。次いで放送事業が開始せらるゝに至つて、同社は俄然新天地を展き、氏にも亦新分野が開けるに至つた。即ち氏は曩に日本放送協會の設立に關與し、現に關東支部の理事に擧げられて居る。此の他小穴製作所、日本護謄、東洋タクシー自動車、日本炭酸瓦斯、日本コルク各株式會社等の監査役に就いて今や實業界に押しも押されぬ地位を確立して居る。日本工業俱樂部、交詢社等の會員で、教育に興味深く、令閨ふく子。長男莊介君は東大理學部在學中の秀才である。

大阪中央放送局出資者

八木 寅太郎

明治十七年十一月二十日生
大阪市南區安堂寺町四丁目

懐古の舊都、京の町に産聲を揚げてみやびやかな環境の裡に育ぐまれただけに、温雅寛容の床しい風格を備へて居る氏は、一面機敏を以ては江戸っ兒の上を行く鉦々たる大阪實業家で、堂島を中心にして其華々しい一舉手一投足は經濟界に向つて波紋を描かうと云ふ株式取引所員中の花形である。名聞榮達の儂ない影を追ふ官僚生活よりも、實力一つで自由に闊ひ且つ發展される實業こそ男子の魂を打ち込むに足る事業だと云ふ確信は、少年時代から其胸に燃えて居た。其頃から大阪では鳴らして居た親戚の八木商店に、商才修練のために入つて店員生活を経験した。そして變轉極りなき財界の動きを實際の取引の上に研究して、多年雌伏自重的修養を累ねて行つた。そして獨立で開業したのは大正十一年の氏が三十八歳の年であつた。爾來天稟の商才を發揮して波瀾の多い取引市場に逐年根強い勢力を扶殖して、現在では店員拾五名を使用し、押しも押されぬ地位を占めて居る。一方氏は取引所の完備發達を希ふ點に於ては同業中でも人後に墮ちず、曩に大阪放送局の設置に際しては率先出資會員として成立を協賛した。世界の隅々に起つたあらゆる變動を反映する財界のパロメーターも、ラヂオの利用に依つて一大成備を遂げたことは言ふ迄もない。氏は本年四十七歳の當に商才機略圓熟の時代に入り、愈々花々しい活動を試みんとして居る。圭角なく接するからに奥床しい人格的迫力を備へて居る。夫人との間には二男二女があり、揃つて將來多望な子女ばかりである。

講演

堀居 左五郎

明治六年四月一日生
大阪市住吉區天王寺町三二五三



昭和四年、聖上陛下の行幸に全市民を擧げて感激に浸つた大阪市は、嘗て明治大帝行幸の光榮にも浴したのであつた。我が堀居左五郎氏は、この御皇室と大阪とについてBKから感激の講演をなしたが、氏は明治天皇大坂行幸誌の著者であるばかりでなく、大阪市立博物館長として令名がある。氏は滋賀縣阪田郡大原村の人、夙に東都に出で、東京高等工業學校に學び、同校機械科を優秀な成績で卒業したのは明治二十七年の事であつた。直に兵庫縣師範學校の教諭となり、更に迎かへられて大阪高等工業學校の教授を拜命したが、大阪工業學校の前身たる市立都島工業學校の設立と共に、抜擢されて同校々長の榮ある椅子を占めたのである。次いで工業研究所長に榮轉し、躍進的に地位を高めて現職たる大阪市立博物館長となつたのは大正七年の事であるが、此の間氏は工業國たる英國に工業界視察のため洋行して、工業界のあらゆる方面に新智識を求め、精進的な研究を續けた。歸朝後工業學校生徒の養成、工業者の啓蒙、一般市民の工業的常識の培養等のために獻身的に努力し、大阪市の工業都市としての完成に志したのであつた。大阪が日本一の工業的、科學的メトロポリスとして、工業界に進出してゐるのも、エンヂンや、モーターの高らかな響の下に、ひそんだ氏の如き人々の努力を母體とするものであらう。氏は亦能率増進については日本最初の研究者であつて、斯界に貢獻したところも極めて多い。また博物館長として人格的にも性格的にもまことに適任者である。



講演 渡邊 正照

明治七年六月十四日生
大阪市此花區上福島北二ノ六二

BKのマイクを通過して、ラヂオファンに其の名と其の聲を知られてゐる我が渡邊正照氏は、大阪微生物化学研究所長であつて、また獸醫學界の權威者でもある。氏は大阪市東淀川區木津川町に呱呱の聲をあげた生粋の浪花ツ子、明治二十四年大阪府立農學校獸醫科を卒業した第一回の卒業生で、直に陸軍に入り、日清、日露、北清の三役に従軍したのであつた。明治四十年大阪市に入つて市立衛生試験所技師となり、深遠な學識と、卓越した手腕の程をみせて、次第に地位と信用を高めたのであるが、招かれて大阪血清藥院の技師に榮轉した。かくて大正十年、おしまれて其の職を辭し、獨立して現住所たる此花區上福島北二丁目六十二に大阪微生物化学研究所を開設し、其の所長となつた。そして獸醫學界に造詣の深いところの氏は、苦心の結果一般家畜のために、數種の藥を創製するに至つた。即ち家畜用狂犬病豫防液、ネオ、ヨチカンボル、ネオヨチカンボル原液、犬瘟熱注射劑チヌ、バリン、リンデルカンフル原液、純ヨードカルチウム濃液、純クロールカルチウム濃液、鹽酸ピロカルチン注射液、鹽酸モルモネ注射液、硫酸アトロピン注射液、注射用カンフルオレブ油、祛痰鎮咳内服劑ラヂオルギン等で、治療上に一大貢獻をなし、獸醫學界にセンセーションを興へたのであつた。氏はまた競馬の鑑定についてはナンパーワンの折紙をつけられてゐる。氏は我が國の斯界に、今日の地位をかち得た人としてよりは寧ろ明日の獸醫學界に一大光明を與へる人として祝福されるべきだらう。



日本放送協會關東支部理事 越野 宗太郎

明治三年五月五日生
東京府下西大久保

古人は云ふ、守成の功は創業に勝ると、多年操縦界にあつて眞摯なる態度と誠意とを披瀝して守成の功を全うせる我が越野宗太郎氏の過去の道程は眞に現代青年の範とするに足る。氏は石川縣の人、加賀百萬石の城下金澤市は其の懐しい搖籃の地である。夙に郷愛を終るや更に中學を経て明治大學に學び、攻學に理智の閃きを見せて専ら雪の功を積んだ。卒業後自己の進路を操縦界に求め、政治經濟記者として帝國通信社に入社したのは明治二十六年の事であつた。爾來燃ゆるが如き熱と意氣とを持つて極大の筆を揮ひ、前途有爲の青年記者として社長の信任を得、後幾何もなくして地方通信部長に拔擢せられ、次いで大阪支社長を経て、明治三十七年本社編輯局長に擧げられて、至公至平、人間味豊かな其の資を以つて上下の信望を一身に集めてゐた。斯くて大正十一年遂に推されて取締役となり、殉教者の如き敬虔なる態度を以つて社務に精進してゐたが、時代の趨勢に鑑み、經濟無電放送組合を創立して我國に於ける放送事業の機運を醸成するに資したものだ。大正十二年更に専務取締役として頼母本社長を扶けて餘す處なく、而も大震災に遭遇するや寢食を忘れて復興に心血を注ぎ、遂に今日の大をなすに至らしめた等其の功績は實に枚擧に遑がない程である。尙同十三年東京放送局の設立に際しては氏は推されて新聞係の起草委員となり、現に日本放送協會關東支部理事の要職を占め、傍ら日本放送史編輯委員會各係委員等をも兼ね、其の縦横の才幹を揮つて信望を恣にしてゐる。濃厚篤實な氏は廣大な襟度を持つて更に書畫骨董にも趣味を持つ。



講演 飯島 貫一

明治十一年七月五日生
大阪市南區長堀橋筋二ノ三二

氏は曩に大阪中央放送局マイクを通過して、ラヂオファンに其の名と其の聲を知られてゐる我が飯島貫一氏は、大阪微生物化学研究所長であつて、また獸醫學界の權威者でもある。氏は大阪市東淀川區木津川町に呱呱の聲をあげた生粋の浪花ツ子、明治二十四年大阪府立農學校獸醫科を卒業した第一回の卒業生で、直に陸軍に入り、日清、日露、北清の三役に従軍したのであつた。明治四十年大阪市に入つて市立衛生試験所技師となり、深遠な學識と、卓越した手腕の程をみせて、次第に地位と信用を高めたのであるが、招かれて大阪血清藥院の技師に榮轉した。かくて大正十年、おしまれて其の職を辭し、獨立して現住所たる此花區上福島北二丁目六十二に大阪微生物化学研究所を開設し、其の所長となつた。そして獸醫學界に造詣の深いところの氏は、苦心の結果一般家畜のために、數種の藥を創製するに至つた。即ち家畜用狂犬病豫防液、ネオ、ヨチカンボル、ネオヨチカンボル原液、犬瘟熱注射劑チヌ、バリン、リンデルカンフル原液、純ヨードカルチウム濃液、純クロールカルチウム濃液、鹽酸ピロカルチン注射液、鹽酸モルモネ注射液、硫酸アトロピン注射液、注射用カンフルオレブ油、祛痰鎮咳内服劑ラヂオルギン等で、治療上に一大貢獻をなし、獸醫學界にセンセーションを興へたのであつた。氏はまた競馬の鑑定についてはナンパーワンの折紙をつけられてゐる。氏は我が國の斯界に、今日の地位をかち得た人としてよりは寧ろ明日の獸醫學界に一大光明を與へる人として祝福されるべきだらう。



講演 牧野 榮次郎

明治十一年七月十四日生
大阪市北區小松原町七三

氏は東西古今に於ける發明家に就いて歴史的な研究を進めて居る人で、先般大阪中央放送局に於て、是等人類の尊い貢獻者に就いて興味多い放送を試み、其の偉大なる功績をたゞと同時に發明熱の鼓吹に努めた。氏は現社團法人大阪發明協會専務理事で、多年發明家の後援及び發明喧傳に眞先に立つて活躍して來たことは世人の知る所である。大阪市西區榎上通りに呱呱の聲を揚げ、夙に笈を帝都に負ふて法政大學に學び、琢磨研鑽に没頭した。學成つて明治三十四年茲を出づるや身を官海に投じて、農商務省特許局に奉職した。發明に對する氏の關心の芽は此の在職中に培はれたもので、發明の尊さを目のあたりに知つた氏は、我が國に於ける發明助長機關の設立をひそかに希つて居た。明治四十二年官海を退くと共に、轉じて小樽材木會社に入り、取締役兼支配人として快刀亂麻の手腕を揮ひ、行くところ可ならざるなき縦横の才を示してゐた。次いで亞鉛電解株式會社を興し、之が支配人として經營の衝に當るの外、尙ほ八千代ゴム會社専務取締役に推されて居る。先年帝國發明協會の設立に參劃して貢獻する處極めて多く、越えて大正十二年大阪發明協會の創立せらるゝや、推されて専務理事となつた。文化の進歩は常に發明家に依つて開拓せられてゐるが、財的に行詰りつゝある我國の現狀に鑑み、之が打開策として發明思想の普及は現下の急務で氏等の力に俟つものが少くない。氏は俳句をよくし、義太夫に長じ、高尚な趣味を備へた人格者でます子夫人との間に榮子嬢がある。

川本金三郎

明治十九年十一月六日生
豊多摩郡千駄ヶ谷町

氏は性來質實温良な陰徳の士として知られてゐる。近來内實は空虚でも、表向き虚飾を事とし、民衆の利害がどうあらうとも、歸する處自家の利のみ動く云ふのが一般公職に就く士の心情であるらしい。と云ふのは、眞に念頭公衆の福祉の爲め自己を空しうするの熱意があるならば、官治政にしる自治政にしる、今少し眞剣味のある充溢したものがないが通弊だからではない。形式的に繁華なる理窟を捏ねて實績も擧げないのが通弊だからである人情紙よりも薄いと古來の譬にもある通りで、近頃自己を空しくして公事に奉仕すると云ふ様な徳行の士があれば鼻先で嗤笑する不心得な連中さえある。だから毀譽褒貶に超然として己が信ずる方法に依つて愛町の赤誠を全うし様とする敬虔な篤志家、千駄ヶ谷有志の川本金三郎氏の如きは或は一部の偏見者流には不可解な人であるに相違ない。氏は父祖數代來千駄ヶ谷生え抜きの家であり、土地の事情には最も精通し、地の變遷上の沿革等からして町本來の施設に最も妥當な見解を持つて居ながら、近傍有志の推薦を斷つて町政一線上には更に乗り出す氣色は見せなかつたが、一朝町の死活問題、利害関係等の持ち上つた時には、常に身を挺んで、活動し、名譽職委員等の改選期に至つては、附きもの、因縁情實を斷ち切つて理想的な人物本位の人選に向つて猛運動を試みるを常とする。氏は云ふ「選挙は政治の源泉であり、憲政成果の岐路である」と、其意氣實に感ずべきものがある。かくてこの理想の彼岸に到達せんが爲に健闘されること氏の如き人に對し、吾人は敬意を表せざるを得ない。



柳瀬兵太郎

明治十一年生
浅草玉姬町一四九番地
電話 浅草 六七二番

もしも東京市内實業家立志傳と云ふものが編纂されるならば、君の立志苦闘と、一つの希望に向つて着々と建設して行つた履歴は、立派に業を飾るものとなるであらう。君は目下浅草区内鐵類工業家として股賑を見せて居るが、其の過去は谷間をくぐる溪水であつた。郷土を柄木縣に持ち、父兄と携へて親譲りの田畑を耕して居た若い頃に、あの焙える野心を、傳統と土地の舊慣とに葬つて仕舞つたなら、今頃は東京の眞中で忙しく鐵材を持ち廻したり、自動車を買つて御得意廻りする様な事を夢にも経験しないで仕舞つたらう。上京したのは二十才前の潑刺たる意氣に満ちた頃だが、何かの途に依つて目鼻を附けやうと青雲高峰を嶺がれては居たものの身に幾許の資も持たない赤手空拳ではいさゝかならず當惑した。此の頃たまたま、某鐵工場の職工募集があるのを知つて、敢然として一職工に投じたが、着目には斯界將來の經營にある君の事、同僚職工の様に放肆に目を空しくはしなかつた。そして自重の中に、實際作業と事業經營の内容等をつかり心得て、幾許の資本でも積んだら何時か獨立で經營し様と機運を待つたが、遂に思はれた日は來て、さゝやかながらも獨力の經營が出来る様になるや、幾度かの戦争や動亂のために鐵類相場の變動して行くのに、巧みに機微を因へて巨利を博し、遂に工場を擴張を感じて猿若町にあつた從來の居る現在の地に移したが、其の後大恐慌にもめげずに依然今は堂々と經營して居る。現在玉姬町では屈指の有志で町會創立にも多大の畫與があり現に之が副會長を務めて居る。夫人はひる子と云つて二男一女がある。

新村喜一郎

明治十六年九月十日生
浅草區聖天町五五番地
電話 浅草 一一二九番

町民の善良なる嚮導者として、常に勇壯なる行進曲をかんで、之が善導に力めつゝ、ある人に我が新村喜一郎氏がある。又氏は修身齊家の道にも精進を見せ先に町民の衛生保健と勤儉の風を鼓吹するの目的を以て早起會を起し、私費を投じて集ひ來る附近の子供に賞品を頒つ等、變つた企てに篤志の存する所を偲ばせて居る。氏は柄木縣郡野木村の産で、柄木中學校に學び、上京して稻門に入學、同大學政治經濟科を了へて明治三十八年卒業、最初日本興業株式會社に入り後に古河鐵業會社に轉じた。そして次第に將來の事業態を發揮して、地盤を固めて日本紡績會社取締役を筆頭に、和洋製紙株式會社、東海鐵工株式會社、大日本自轉車保全會社等の取締役に任じ、巨腕を縦横に揮ひ東都實業界一方を睥睨するに至つた。所が何を感じてか其後突如として一切の重役を辭し同時に居町の自治に對して一層熱心の度を増して行つた。君は又極大華麗な文藻に恵まれて夙に成文社副社長として出版事業に精進した事もあり、「鑛山労働者の實際」「舌主義」「明治憲法發達誌」生きて物言ふ文章の徳一等の極めて新時代的な有益な著書がある。公職には東京市第三方面委員副會長、第四十地區々劃整理委員副議長等を負ふて居り、町會組織の變更に力を致し會長として久しく盡力され目下相談役として後援に努めて居る。尙公民的自覺の急務を説いて町民大學を起して自ら講師に任じ、義務的施行貯金一人一口一錢會を組織して勤儉貯蓄を鼓吹し自賑會を興して住民の荒怠を誡める等其活動は聖天町が持つた人的誇りである。家庭は老母源子夫人達子との間に四女がある。

栗原勇三彦

明治二十五年七月二日生
日暮里町日暮里二二八〇番

君は茨城縣の人、東若城郡小松村の生れである。村はその昔小松内府重盛卿の遺蹟があつたのでその名があるといふ。有名な小松神社の附近、其處には那河の流れを注ぐ小川が潺々として、氏の少年時代を樂ませてくれた。流石に舊水戸の藩の領内、邊鄙の地とはいへ、人々の頭には教育の思想が古くからきざみ込まれてゐた。子弟の教育、その當時の農村の人々にとつて、それは餘りに大きな負擔であつたに違ひない。けれ共、素朴なこの邊の人達には、又子弟の教育が何よりの樂しみであつたのである。かうして氏は程遠からぬ縣立水戸工業學校へと學び之が第一期卒業生となつたのである。そこで大正二年九月兵庫縣網干町の日本セルロイド人造絹糸株式會社に勤め、實際に關して、多年の經驗をつみ、大正七年同所を辭して東上し、帝國大學應用化學科に助手として勤めの身となつた。こゝに君は完全な諸種の設備により、諸大家の近側にあつて専門の研究を重ねること久しく、大正八年夏、更にこれを辭して、大阪セルロイド工業株式會社に入社し、大いにその特技を發揮した後、大日本セルロイド株式會社と改稱されるに及んでも續いて同社にあり——次いで撰ばれて東京支店詰となり、大いに望みを囑せられてゐたが、大正九年これを退いて獨立事業を計畫し東京纖維工業所を設立した。そこで優秀なる製品を製造するや名聲大に擧り程なく東亞セルロイド會社の指定工場としてセルロイド原料硝化綿を製造し、今年年産額六萬五千ポンドの多きを見るに至つた。氏未だ三十五歳、その大車輪的な努力は更に、新らしき製造品を生み出すだらう。



中 田 善

明治二十三年四月十五日生
小石川區久堅町九十二番地
電話 小石川 九八六番

東都の鑄物工業界に相當の地位を保つて居る中田善氏は目下小石川久堅町にあつて、鐵道省、海軍省等を始めとし都下の代表的官公署の一手用命を拜して名聲噴々たるものがあるが、同工場の斯くも發展して遂に同業の他工場を凌駕し、聲望に於ても製産品の成績に於ても特出した長所を持つて居るのは、其所に大に據る所がある。氏は本年纔に三十七歳の青年事業家であるが、其の手腕はむしろ經營方法の奈何よりも事業實際上の技術の優秀な點に存しこれには父君の力が多大に與つて功を添へて居る、父君伊助氏は斯界の先覺者として久しく幾多の工場に於て作業實際の指導教育に任じて来た人だが、由來同方面に注目して、苦心慘澹して研究を積み漸く獨創的な優秀品を製作するにあつて、各方面の大工場から盛に招請を受けた結果轉々數工場に特技を揮つたのであつた、で鐵工界の巨壁芝浦製作所から招かれ、轉じて同社のために寄與する處多く遂に鐵工場長に任じ拾數年間に亘つて作業を督勵指導して来たのであつた。そんな關係上子息の善氏も同一工場に勤務して親しく父君の教導薫陶を受けて、學理的研宄偏重の非をさとつて只管實際上手の腕をきたへた練習するや幾許もなく獨立して芝區三田豊岡町の地を下して一工場を設置したのが明治三十九年で爾來非常な勢ひで需用家の注目を窺め、大正五年遂に擴張の必要上から小石川の現在地に移轉して東京計器株式會社の主製産工場を兼ねて他工場の模倣を容さないものを出して居る。前途泰秋に富む氏の將來の發展は如何かに逆睹し難いものがある。八重子夫人との間には三男一女がある。

村 田 米 三 郎

明治十四年五月一日生
日暮里町字日暮里一三五番地

仲鋼業者である氏は、三重縣安曇郡安東村字納所の出身である。十六の少年期に早くも故郷を辭して上京した。が全く知人ともなく、それに着へ金のともと怪しい氏は、都大路をさまよつた揚句救はれたのが日本橋龜井町の某石鹼工場であつた。一弟徒として忠實に働いてゐる内に徴兵検査となり、甲種合格で兵隊に採られて第四師團野砲第三聯隊に入營し、軍律厳しい服務に忠誠を勵んでゐると、あの征露の戦争となつた。直ちに出征した氏は朔北の風のむせぶ滿洲の野に轉戦し、功を奏したので凱旋と共に勳八等に叙せられた。かくて實社會に出た氏は幾ばくもなく、仲鋼工業の非常な有望なことに想到し、金資の調達に奔走の結果、神田江川町に工場を建設し抱負の一步を踏み出したのである。抑も我國は豊富な銅の産出國であるから、之を善用すると共に更に輸出率を高め、その代償として不足を告げてゐる鐵類を輸入するのは、最も宜機に適した方針で、仲鋼等の使用はこの見地から、國家的使命を帯びてゐると云つても過言ではない。氏はこの尊い信念を理想とせるためか、業績は順調を告げ、その創立當初のさやかな工場も、今では設備の完全であつて能率の優れてゐることと同業者間に重きをなすやうになつた。その以前氏は青山穩田に移轉して新工場を設けたが、火災のため類焼したので大正五年四月に、現日暮里百三十五番地に移つて再舉を計り、今日の繁榮を物語るやうになり、使用職工三十有餘名にまで達してゐる。趣味は豊富で謠曲、弓術、碁等行くところ可ならぬはないと云ふ調子。家庭には夫人あさ子との間に一男一女がある



黒 岩 貞 重

明治二十年十一月五日生
京橋區月島東仲通五丁目
電話 銀座 四六九番

本邦土木建築業界に嶄新機械の提供に依つて多大の裨益をなして居る黒岩貞重氏は、尙發明家として幾多の機械を案出して居る。生國は横濱で、父君富吉氏が早く工業方面に眼を注ぎ、諸機械の製造に従事して居た關係上、氏も次第に家業に關連した方面に陶冶されて行つた。そして始め工手學校に入學して専門智識を修めた。先天的な材器は一種の閃きを示して居たが、實際製作に手を染めてから遽に氏の天分は發揮された。先づ近來盛に使用されて来たコンクリート混合機械を發明し、従来の粗製機より數等優秀な、能率の擧るものを製作して土木業者の歡迎を受けた。同時に是が附屬機械にまで想到して鐵製混凝土攪拌を製出し、コンクリート工事に一新紀元を劃し、又之と前後して捲上杭打機の發明を以て建築方面に寄與し、防腐耐久煙突、鐵タンクを發明して各方面に多大の進歩と恩恵とを齎したのであつた。此の外にも洗濯機其他日用品の發明新案をも提供して、氏の事業は著るしい發展を見た。今後奈何なるものを出し、如何なる方面に新生面を開くか、凡庸でない氏の默してゐるのは、徒らに日を費す事でないのは推し測られる。工場の指揮監督等の實務にあたりながら、猶各工業機械の進歩改良に心を砕かれる氏の努力と熱心とは敬服するに足るものがある。現在使用職工二十有餘名、其の製品の主なる納入先は、大日本ビル株式會社、東京電燈株式會社、近衛師團、電氣局等、會社官公衛方面に有力な得意を持つて居る。家庭には夫人はる子と二男四女があり、和氣霽々たる生活を楽しんでゐる。



長 野 英 造

明治二十二年三月二十三日生
大崎町桐ヶ谷六二八番地
電話 高輪 四〇八九番

電球用ガラス製作界で一頭地をぬく極東硬質硝子工業所は、今六百餘坪の敷地に三百餘坪の工場及附屬住宅を建設し、百數十名の使用者を擁して盛んに優秀品の製造に當つてゐる。その工場の所有主が長野英造氏なのである。氏の出生地は愛媛縣今治市であるが、郷里の中學を卒へて後、上京して藏前的高等工業學校に入つて工業科學の最新學理を修得し、大正二年に目出度く同校を卒業、直ちに東京電氣に聘せられて實地にその術を磨き、更に轉じてマツダランプに入社した。が恩師平野氏が滿鐵硝子工場を遠く大連に創立することになつたので、氏も同時に渡滿して工場の建設其他に盡瘁した。けれど氏は後に再び東京に歸り、現在の場所に電球用硝子及び裝飾用ランプ自動車用ランプ等の製造工場を設けて、榮ある獨立の道に門出をしたのである。なんと云つても學理と實地を兼ね備へてゐる氏の經營とて、聲價騰く間に喧傳せられ、需要は益々激増する一方で、今では一日便に七萬個以上の製産額に上り、内地は勿論のこと遠く歐米方面にまで輸出されて、本邦品のために萬丈の氣を吐いてゐるの盛況である。特に氏の高雅な紳士的な襟度は、職工を遇するに飽迄デモクラツトであり毫も暴君肌のところがなく一視同仁を旨としてゐるので、多くの職工は何れも氏のためならばと精勵し、業績は彌が上にも顯著なものがあると云ふ近く事業研究のため歐米方面へ視察にゆき、多年の宿望を達するかも知れないとは、巷間の噂さばかりではないやうだ。少壯まだ三十八歳、前途尙洋々たるものである。夫人ちか子は才媛を以て評せられてゐる。

井原 作太郎

元治元年生
淺草區北仲町一番地
電話 淺草三三四一四番

一般に早老の評を受けて居る邦人は、六十の坂を越えんと類勢速に加はつて、一家の切り盛りは息子に委せて孫の笑顔でもながめるか、軒先きの鳥飼ひか盆栽いぢりを慰安にしたいのが世の常である。所が家の事に働く丈働いて、後とり息も一本立つて商賣出来ると云ふので家業の一切は之に委ね、餘世を公共社會に奉仕し様と云ふ奇矯な心掛けで、老ひをも忘れて居町の爲めに奔走して倦意疲勞を見ないと云ふ人に、淺草北仲町の井原作太郎氏がある。金物商としての君は、事業の傍ら從來幾多の公共的役員委員に選任されては韓旋の勞を執つて來たのであつたが、高邁氣鋭の性格に恵まれた人で老來愈々鏗鏘として圓熟した材幹を振はれて居る。現に北仲町々會長に推舉せられて、時事の問題などに對しても中々小まめに馳驅して遺漏なく職責を完うして居る。同時に市方面委員を囑託され、第三十八地區々刺整理委員を承つて日毎に現場廻りにうき身を棄してゐる。あの精悍な容貌の、何處かにをかし難い眞摯な色を覗はせてゐる君は、又秉公持平の意見を以て町民の信望を負ひ、夙夜馳驅して家事を振り向く暇がない有様であるが、其の骨折りの程はいつも町民に感謝されてゐる。又嘗ては國勢市勢の各調査委員をも勤め、同町での有志であり功勞者である。趣味も亦中々豊かなもので、取わけ養生流謡曲にかけては堂に入つたものである。息子泰一郎氏も父君に譲らない材幹を持つて居り公事にも關係して居る。家庭は作太郎氏夫人ひろ子、長男泰一郎氏妻女子は、及び孫子一人があり、和氣霽々としてゐる。

中 村 喜 六

明治二十八年十月二十三日生
芝區芝浦二丁目一番地
電話 高輪 二四〇四番

職業と氣質とは古來密接な關係があり、その性質に依つて性格は陶冶されて行く。堅鐵三千尺の下に鶴嘴を振り上げて居る炭坑夫の一寸先が地獄ならば、従つて其の性格は利那の殺伐なものに變つて行く。從來土木工事に従事する人々の風儀の悪かつたのも、亦そんな理由に歸着する。所が近來土木建築業の勃興に伴ひ、従業者の智識技能は非凡なるものを要するに至り、其使命は重大なるに至つて當業者の自覺と社會の見解が向上する様になつて來て居るが、教養のない筋肉労働者を驅使して頑丈な作業を行ふのだから動もすれば信任されない言行を見受けることがある。今芝區内で賣出して居る土木運搬請負業者中村喜六氏は、是を非常に憤して、誠實本意をモットーとして擔當作業の終了後、自己の盡した誠意が相手方に通じて悦ばれる事を第一に心掛くる事、不相應な請負をしない事、請負つた仕事は最後まで親切に果せ、最後に得意の好感のもとに勞賃を領收せよ、と是等の條件をかかげて實行に努めて居るが、船舶自動車、馬車等各運搬作業を請負ひ、尙努力人夫、衛生片付等を請負ひ、このモットーによつて使用者百餘人を統御して行く心事と努力とは、苦心の程も思はれる。氏は愛知縣深美郡伊瀬村の出身、大正六年に上京し、赤根祐次郎氏に知られて其の下に活動したが、幾許もなく獨立して今日の盛況を示すに至つた。芝浦に於ける町内有力者で、大正十二年以來町理事として町の自治問題に貢獻し震災當時使用者を指揮して罹災者救護に活躍したことなどは話題に殘つて居る、圍碁、圖書等を愛好し、妻女トメ子との間に二女がある。

守 谷 定 吉

明治十八年三月二十日生
神田區富山町二
電話 大手 二九九番

今や社會的生活の様式は愈々繁雜を極め、總ての取引關係は度量衡による嚴密を要する様になつて來た。これは文化の進歩經濟の發達と共に當然來るべき變化であつて、今や度量衡器の使命は獨り商賣に依つて認められるばかりでなく、一般家庭に於ての必需品となつて來た。所で此の方面の製作界に、唯一人超弩級の勢力を占めて居るのは守谷定吉氏である。現在度量衡器と云へば先づ守谷を聯想するに至らしめた氏の努力は敬するに足る。始め之に心を寄せて製作に従事したのは先々代の清三郎氏であつて、創業は今を去る五十一年前、明治五年の十一月であつた。そして爾來製作法の幾變遷は常に苦心研究の跡を物語つて居るが、先代も早く父志を承繼して精巧機の完成を以て世に裨益しやうと多大の犠牲を拂つた。そこで實際夥しい進歩があつた事は、或は功に依つて藍綬褒賞を賜はり、諸博覽會共進會等に出品しては常に受賞の榮譽を擔つてをり、先年臺灣及び朝鮮に於て度量衡器の總督府專賣の制が布かれた際、其の一手供給の命を蒙り、宮内省方面にも主として守谷製が使用されると云ふ調子で其の盛況並びないのも明かである。氏は前名を桂三と云ひ、明治二十八年先代定吉氏の養子となつたが、よくこの大業を完成するに足る器であつて、製業以來發展擴張の實があり、遠く印度及び支那方面に需用多く、經營に於ては仕入部販賣部等を設け、本所菊川、神田東松下の二ヶ所に大工場を構へ、年産額百萬圓を超へる大生産に忙殺されて居る。氏は激務を措いて前記町會長の職を完うして居る。夫人まつ子との間には一男二女がある。

角 田 光 五 郎

明治十三年五月二十九日生
府下碑奈村碑文谷二一六〇

幕政布かれて三百餘年、その間碑文谷の舊家として連綿打ち續くこと十四代、苗字帯刀をゆるされた名主角田兵衛門氏こそ、君の嚴父である。君が四歳のとき、一日君は嚴父に伴はれて鎮守の秋祭へと出掛けた。秋の日足は暮れかゝつた。しかし人々は益々出さかる、この時つくんと君の容貌をながめた一人の卜者は、將來大いになすあるべきを豫言したのであつた。光五郎少年の言動には、此頃已にどこか衆にすぐれた所があつたであらうか、人々は君を呼ぶに神童を以てしたのである。しかし君が五歳になつた春、不幸父兵衛門氏は病にたされた。かくて君が十四五歳の頃には現に弟妹を抱へて家事萬般をきり廻さねばならなかつた、舊名主の家として多くの家産を持つるだけに、その骨折りは亦並大抵のものではなかつた。長ずるに及んで、其間嘗めたる経験によりて、所謂苦勞人として業に重んぜられたのは勿論である。かくて君は大正二年三十三歳にして既に役にあげられ、重任して、大正十年七月遂に村長に推されたが、時たままた田園都市設置の計畫が有志の間に擡頭するや、君は同村の發展上時宜に適するものとして、自ら率先してこれに奔走し、又浦田電車新設の議もち上つた際の如きも、自家所有の敷地を提供して極力これが成立を扶ける等、同村開發のために盡すところ甚大なるものがある。君今やなほ四十有七歳、春秋未だ豊かなるとき、今後如何なる方面に活躍するか、四十年前言つた賣卜者の豫言がどこ迄實現されるか、蓋し刮目して見るべきものがある。



相馬源登

明治二十二年生
芝區櫻川町二番地
電話 青山 六八五四番

其の祖は歴代北陸にあつて武門のほまれたかく、亡父源太郎氏は舊高田藩に仕へ、桐原家の家臣として文武兼備の良將であつた。明治の新政施かれ廢藩置縣のことあるや、各藩の士は何れも主家を離散し、兩刀をすて、新たる職につかねばならなかつたのである。君の父も亦かうして、流離の人としての運命に廻り合はせた。しかし幼時より才氣に富んだ父君は、早くから其父君を伴ふて、今の東京當時の江戸に出で、神田の地をトして、逸早く生業につき、次第に業績を擧げて遂に今日の地櫻川に移つたものである。其後を享けたる君は、早くよりことに時世に通曉し、西歐の消息を熟知するを必要とし、只管歐米の地をふんで親しくその見聞を廣めんとして、精勵大いにつとめた結果、念願達して先年米國に渡り、更に西歐諸國を漫遊して、足跡普ねく先進諸國の産業状態、及び諸施設等をつぶさに見聞して歸朝し、今や家事の傍ら町事に力を凝ぎ、大正七年同町の有志森田正義氏と協力して櫻川町青年團を組織し、推されて團長となり、五十餘名の團員と、四百餘名の賛助員とを有するこの同團をして、一糸紊れぬ統括振りをしてゐる。又櫻川町會の組織に干與してもつとむる所多く、その他在郷軍人第七班理事等の名譽職にあつて、有志幹部中の利権者として町民の崇敬厚く、急國新湯港の築港には、早くより多額の資を投じて同市の發展につとむる等、寄與する所多きに從うて名聲いよ／＼揚り、自治團體施設の指導者として後來最も囑目されてゐる一人である。而も年齒未だ三十有八、春秋豊かなものがある。

多田惠一

明治十六年一月三十日生
芝區南濱町
電話 高輪 四〇三六番

芝區芝濱青年團長として青少年の指導監督に任じてゐる多田惠一氏は、實に開國以來空前の大事業として天下の視聽をあつめた彼の南極探險隊に事務長として遠く南極の地に渡り、東方帝國の國威を示した快男兒であつた事は、當時を知る人に取つては未だ耳新しい事である。氏は岡山縣江與味村の出身で、郷里小學校卒業後更に金川中學校に學び、次で笈を東京に負つて早稲田大學に入り、高等學理の討究に没頭して居た時、偶々日露の役勃發して砲路騎兵第十聯隊に配屬され、大孤山に上陸し第四軍の中堅として砂河、遼陽、奉天の各地に轉戦したが、歸來雄志勃々たる氏は、國民の海外發展の急務を説き、専ら輿論の喚起に努めたが、其の頃、有名な白瀬中尉の南極探險隊が組織さるゝに及び、奮つて一行に加はり、明治四十三年正月風肌寒い一日芝浦を發して南極に首途する開南丸の人となつたのであつた。前人未踏の境地を探險して生死を啗した一行は、明治四十五年無事に歸朝して盛大な歡迎に接した。而も氏は更に大正五六年に亘つて再び南洋諸島の探險を企畫し、南領東印度諸島に渡航して邦人發展の地區を開拓し、南洋開發社を創建し、南洋方面の地理氣候等の事情の紹介に任じて海外渡航者に便宜を供した。氏は居を芝浦に構へて南洋軒と稱し、南洋西歐の珍味を紹介し、此の間にも海外發展を奨励する宣傳法を怠らなかつた。今は前記の青年團長として剛快な氣魄を以て青年の理想修養に盡して居り、南濱町々會理事として盡す所が多いが、而も居常國力の進展は海外發展にありと絶叫する氣魄は亦偉とすべしである。

近藤伊三郎

明治二十二年八月二十二日生
府下井荻町上井草 一四四二

氏は深川區東中町に生れた生粹の江戸つ子である。小學校から中學校まで常に首席で通し、その頭腦の明晰細密なるに於て常に僚友の羨望の的であつた。かくて氏は在學中總ての學科に優秀な成績を示してゐたが、その最も得意とするところは數學であつた。中學時代に於て己の將來進む可き道を決定することは容易なことではなく、兎角目移りが多しものであるが、よく己れを知つてゐた氏は、その道を選ぶに當つて、己の才幹と趣味とよりして建築方面に伸びようとして、更に進んで東大建築科に入り、専心研究に研究を重ねて斯學の最高學理を究め、大正四年優秀の成績を以つて卒業し、同時に技師として先づ實社會に於ける活躍の第一歩を遂く關東廳に踏み出した。由來殖民地に於ける政策には、各國共に最も心膽をくだくところであつて、その内容の充實を圖るは勿論のことであるが、同時に施設の完備を期し、外觀の雄大壯麗を以つて先づ土民に敬畏の念を懐かしめる必要から、殖民地に於ける建築事業はその重大な役目を負ふてゐるものであつて、氏が第一歩を殖民地に踏み出し、その手腕を縦横に振つて實地に研究を進めようとした事は寔に所を得たと云ふ可きである。かくて數年、關東州開發の爲に多大の功を残し、大正十一年辭して歸朝し、翌十二年市の建築課に就任して今日に至つてゐる。現在では主として私用小住宅の建築、各社何事業に伴ふ建築に従ひ、大いにその手腕を示してゐるが、前途春秋に富む氏の今後の活躍は、更に刮目して見るべきものであらう。なほたか子夫人との間には春子といふ愛娘があり、實に圓滿な家庭である。

大谷善次郎

明治 年 月 日生
淺草區下平右衛門町

尤大なる東京府の會計事務を管掌して圓滑なる執務を續け、人格識見共に稀に見る士として推稱されて居る人に大谷善次郎氏がある。氏は生粹の江戸つ子で淺草區森田町に呱呱の聲を擧げたが、氏の生家は土地の素封家として良く知られ、徳川三百年間連綿として勢力を示して居たものである。特に父君祐次郎氏の如きは、府會議員として府政に盡瘁するところ數年、稀に見るの人格者として且つ識見豊富なる點に於て多數の議員中嶄然頭角を表して居たものである。當主にして、氏の兄君八郎氏亦夙に天稟の材を認められ、現に區會議員、學務委員等の名譽職に就くと共に、各方面の公共事業に盡瘁し、區民の信望を双肩に荷つて居る。而かしわが善次郎氏は、土地の小學校を卒業するや開成中學に入り、更に進んで第一高等學校に學んだが性來の病弱に禍されて不幸中途退學の止むなきに至り、一時療養に専心することになつた。その後健康の増進するや、官吏生活を志して府に職を奉じたのは明治四十年であつた。當時氏は府會計課の一吏員であつたが、刻苦精勵業に抽きんで、事務にいそしみ、常に模範的人物として推稱されたが、果せる哉其不斷の努力は遂に酬ひられ、大正十二年陽春三月には現在の樞要なる地位を確保するに至つたのである。今や氏の府會計事務に精通せることは歴代の會計課長中比する者なき程で氏が奉職當時の豫算は僅々四百萬圓を出でざりしに現在は三千七百萬圓の巨額に達して居り、之を如何に處理するかは實に氏の手腕にまつり外なしと云ふべきである。濃厚篤實なる氏の家庭には、夫人健子との間に一男一女がある。

田中三藏

明治十二年生
芝區白金三光町二四二

枯野の末の蒼條たる、砂礫の原の蒼々たる、さては北國に見るが如き白
皚々たる雪の曠野など、かうした單一なる景物は、一應はそれの風致
はあらうが、見果つれば忽ち倦意を感じしめ無聊を覺えしむるを免れぬ。
けに人を樂ましむるの景物は、山川聚落に四季とりんの變化を現じ、氣
象千萬、朝夕更るの如きものではなからうか、日常の忙しい仕事の間
にあつてもなほ慰安を與へ刺激を爲すものには、またそれ趣味状態の
異りたるものを要する。即ち物質的生産に没頭する間にあつても、絶えず
清新なる趣味的精神的慰安を欲することである。この見地から、氏は早く
音楽の文化的生活に缺くべからざるを思ひ、その微妙なるリズムより醸す
所の靈氣によりて高尚なる情操を養ひ、それを通じて社會に潤ひ味を持た
せやうとして貢獻して來た人である。氏の郷里は千葉縣で、長生郡一松村に
産ぶ聲をあけて。早く足利市の某樂器製造所に見習ひ、上京して引き續き
修練を積むこと數ヶ年、後神奈川縣下高座郡下に斯業の教員として勤務し
たが、大正三年現住所に營業所を開き、樂器系の製作に従事して今日に及
んだのである。氏は其の識見穩健にして、よく公共の事に力を致し、衆の
ために殉ずることを嫌はない。従つてよく衆望を博し、現在尙町衛生會幹
事、小學校兒童保護會委員、町會長等の幾多の職に奉じて頗る懸命に努め
て居る。温厚の士として亦、町内有志中の中堅人物として推重せられてゐ
る。本年々齡四十八歳、なほ春秋に富んでゐる。



相坂運吉

明治六年十二月十日生
北多摩郡三鷹村深大寺三八六〇

文明の進歩に比例して交通諸機關は發達し、距離時間は絶えず短縮され
て行く。殊に分秒を争ふ都會生活者にはこの時間的短縮が最大な恩恵であ
るが故に、その衝に當る人には特にこの企畫に於いて熟達修練の人を要す
る。現東京市電氣局運輸課貨物掛長相坂運吉氏は、正しく其人たるを稱す
るに足らう。氏は平民宰相故原敬氏と郷里を同ふした岩手縣盛岡の人、
夙に盛岡中學に學び、後鐵道事業界に雄飛せんと志し、先づ日本鐵道株式
會社職員講習所に入りて講習生となり。明治二十四年同所を卒業の後、直
ちに日本鐵道株式會社に就職し河輪業務に従事した。後同會社が鐵道國有
法に依り政府に買収されると共に、鐵道作業局に入つて精勵し、後數次の
官制改革によりて同局は、鐵道廳、鐵道院、鐵道省と變轉したが、引き續
いてこれに歴任し、我國運輸業務の爲に盡瘁貢獻するところが多かつた。
大正拾二年七月當時鐵道局副參事たりし職を辭し、同月東京市事を拜命
し、東京市電氣局運輸課貨物掛長に任命された。さすがに二十有餘年開斯
界に經驗を積みたる老練の手腕家だけあつて、爾後の畫策よく肯綮に當り、
業績は次第に擧つてゐる。今後益々多端にして、人物を要する市電氣局に
あつては、氏の如きは重要な人といはねばなるまい。彼の大正十二年の關
東大震災は、氏が就任後間もないことで、當時電車も大半を鳥有に歸した
が、後幾何もなくして舊に復せしめ帝都を維持するに與つて力あつた事は、
氏の努力によることが多いといふ。家庭に母堂、夫人、六男二女ありそ
の和合の状見るべきものがある。

宮澤武七

明治九年生
麴町區富士見町二の三二
電話 四谷 二六五二番

容貌魁偉、よくヒロイックな氣風を窺ふことが出来る。がその心情は潤
達として大空を流れる白雲のそれに似てゐる。なればこそ盡くるところの
ない人間味が躍如として對者の心を凝乎と掴むのだらう。この意味に於て
宮澤氏は、辯護士としての素質の第一條件に恵まれてゐる。氏は新潟縣東
頸城郡下松代の出身である。が天稟の性は早くも東都への遊學を志し、や
がて邊陲の地を去つて、文化の花咲き匂ふと云ふ東京に飛出した。がその
時には氏の年齢は相當の域に達してあり、常人なれば就學の煩に堪え得ら
れない年配であるのに、大器晩成の願望を抱いて悠々焦らなかつた氏は、
まづ中央大學に入つて研鑽に勉め、ついに大正二年目出度く辯護士試験に
合格したのである。氏はよく時代思潮を理解し、ヒューマニストとしては現
法曹界の新人であると聞く。だから一度法廷に立つや、熱辯宏辭常に弱者
の味方として、條理整然とした法理を説くことである。で今では同界
方面に重きをなし、日本辯護士會常議員に推され、一方の弱者として知ら
れてゐる。なほ無産階級擁護を標榜し人權の平等を説く自由法曹團の一
員として、單なる資本主義的レガリズムに向つて挑戰の陣を張り、無産階
級者の擁護に任じてゐる。まことに得難い異才だと云はねばならぬ。氏は
曩には官學偏重打破の叫びに先驅し、その交渉委員長として私學出身の大
學生に寄與するところが多かつた。以て氏の全人格が察せられやう。同町
内の富士會顧問として指導の任に當り、又區會議員としては區政刷新に不
斷の努力を拂つてゐる。以て黎明期に於ける好漢たるの感を深うする。



下條於菟吉

明治三年九月二十九日生
赤坂區臺町七十八番地
電話 青山 二八二六番

氏の家は代々刀圭家として救世の仁術に従つてゐる。そして父君通春氏
は、斯界の國手として大學教授まで奉じ、後進の薫陶に従ひ、かつ宮内
省御用掛として高貴の方に咫尺し、大正七年には正五位を贈られた程の名
醫であつた。氏はこの父君の業を繼ぐため東京醫學專門學校に學び、明治
二十二年、年餘僅か十九歳にして同校を卒業し、父君を助けて實習を怠
らなかつた。かくて病者に回春の福音を頒ち、扱ては貧しき患者には無料
で、施療し、親切に至らざるなきものがあるので、院前常に患者の市をなす
と云ふ有様である。一面氏は繁忙の間にひたすら公共の存榮を念じ、自ら
卒先して自治の要を説き、ついに町内有志と計つて自治會を設置し、當任
幹事として常務處理に努め、先般は推されて町會長に就き、専心町政自治
のためその勞を惜まなかつた。なほ昨年は、數多い區民に擁せられて見事
に區會議員に當選し、赤坂區政に參與して縱横の策を寄與し、同志間に重
きをなしてゐる。さて過ぐる大正十二年の帝都大震災の際には、罹災者救
濟金として金一千圓を惜しげもなく投げ出し、當時その日の糧に惱める
罹災者達の救助に資し、その人達から慈父とまで仰がれた如きは、氏の性
格の反面を遺憾なく物語つてゐるものだらう。その家系は代々十五世に亘
りて刀圭家として續いてゐる相で、稀に見る名門だと云ひ得られやう。明
治三年の生れと云へば本年五十七、その近世醫學の精を極めたる學識技能
と、門閥に負ふ名聲と、而して氏が公共に對する奉仕的意氣とは相俟つて
今後の活躍のほどを想像せしめられる。

遠藤政藏

明治十六年生
神田區鎌倉河岸二四

氏は深川區生れの純粹の江戸つ子だ。生家は代々引續いて材木商を營んでゐたが、明治二十七年父君榮藏氏が現在の地に移轉したので、氏はその家業を繼承して更に一層の努力を拂ひ業績の振興を計つたのであつた。そして直接に飛騨地方や紀州方面に出張して取引を爲し、低廉な價格で市場に材木を賣出し、顧客の便を計ることにのみ腐心してゐるので、長い間の暖簾と相俟つて先代に倍する繁昌を招致したと共に、父榮藏氏につかへて至らざる所なきの孝養ぶりには、皆その情の厚きに感服させられてゐたと云ふ。が悲しいことには父君は七十五歳の高齡を以つて前年物故され、氏の悲嘆は言語に絶してゐたことである。一方情誼に厚い氏は常に愛町觀念に燃、えなにくれとなく町内の世話役をつとめ、現に鎌倉河岸町内代表者として町民の共榮共存に度ましい努力を拂つてゐる。區會議員には二期に亘つて當選し、神田區々政刷新のため寄與するところが尠少でなかつたと云ふ。更に同業組合の役員としては同業者の福利を計り、東京木材界に隠然重きをなしてゐる。曩に學務委員に推されては兒童教育機關の整備及び教育方法の改善に畫策することが多かつた。この外に區劃整理委員に擧げられてその重任を全ふし、常に公正を持してあやまらない。現在鎌倉河岸町會は目下會員を二百餘名を抱擁し、夜警、衛生、其他萬般の町内の自治問題につき申分のない相互扶助を行つてゐるのは、氏の指導よろしきによるものと云へやう。氏は本年僅かに四十四歳、前途尚ほ春秋に富む。今後

茂田井喜兵衛

明治七年五月三日生
日本橋區本銀町四の一
電話 大手 三九〇七番
三九〇八番

十六歳の時に郷里岐阜縣不破郡を後にして上京した氏は、易學者として有名な高島嘉右衛門氏の親戚に當る横濱の人、茂田井嘉兵衛氏の經營に係る深川材木店に入つて、約八年間を精勵したが、其後美術學校に入つて、日本畫、洋畫の研究に没頭したのであつた。當時同窓生には現今わが國の畫壇の重鎮として聲名ある和田英作氏等があつて、共に繪筆に親しんだものだ。ところが氏の英才を見込んだ嘉兵衛氏は氏を迎へて養子とした。それは明治三十四年のことである。その以前に養父嘉兵衛氏は日本橋區本銀町四の一に高等旅館を營んでゐたので、養父の死亡と共に襲名して家業を引受け今日に至つてゐる。その時に氏は二十九歳であつた。同旅館は氏の風格なり趣味なりを最もよくシンボライズしたもので、繪畫に専門的な技能を有する氏の經營だけであつて、室内の裝飾は勿論、庭園の設備なども藝術的な氣韻が漂つてゐる。で旅客の筋が非常に高級で、東都に於ても著名な旅館の一つに數へられてゐる。大正十四年四月には本銀町四丁目町會の町會長に推され衆望を集めて町民の共榮を計つてゐると共に、同三年には日本橋區馬喰町加瀬氏等と共に、日本橋區旅館組合を組織し、同組合の幹事に推されて之亦組合員の福利に寄與するところが尠少でない。長男潤治君は目下父君を扶けて家業にいそしんでゐるが、父君に背て温雅な才人だといはれてゐる。使用人は十名餘に達してゐると、ことに趣味として書畫骨董品を愛し、珍奇なものが少なくなかつたが、惜しいことには先年の震災で殆んど灰燼にして終つたと云ふ。

堀越嘉太郎

明治二十六年六月生
神田區柳原河岸一四號
電話 大手 五五八一番

氏は我が化粧品界を風靡して都鄙の男女に其の名を禮讃されたホーカー液の創製者であり、同時に我が化粧品界に一進歩を加へた美容術發達の貢獻者である事は、ホーカー液の名と共に世間周知の事實である。氏の家は柳原河岸にあつて父祖幾世かを化粧品商として經て來たが、父君岩吉氏の長男として生を享けた氏は、當然其の家業を繼いで行くべき人として、早く家業に勵んだのであつた。當時泰西文化の輸入につれて殊に化粧品界は急激な發達を呈した矢先、氏は海外斯界の實状に見る所あつて、嶄新化學を應用した合成クリーム液を創製研究して國先鞭者の榮譽を擔つた。其の効用と時代の要求とは巧みに其の名を傳へ、加ふるに氏一流の廣告術を用ひて、津々浦々の新聞、海水浴場、活動、芝居等あらゆる機會を捉へて喧傳し、遂に需要者を獨占した時代さへあつた。斯うして其の人と家業は遍く世に知られるに至つたが、氏の此の擧が化粧品界に一大刺激を與へた事は没する事を得ない貢獻であつた。爾來斯界相ついで生理的方面化學方面の研究を進め、同様の方面に異常の發達を促すに至つたのであつて、甚しきは同類異名ものさへ出づるに至つた。以てその盛名を知るべく、氏の遠眼の嚴として斯界に偉勳を語つて居るのを思ふべきである。屋號を堀越二八堂と稱し、尙盛大な經營を續けて居る。氏は同地方面に於ける公共事業にも關係する所あり、其の卓見と人格とは隣保の信望を擔つて居る。令閨をつる子と云ひ、内助の譽高よく子女の鞠育にあたつて居る。

伊藤小四郎

明治二十八年五月四日生
神田區鍛冶町四番地

維新の頃、海外文物は非常な勢を以つて輸入されたが、新文化の輸入に伴なつて圖書出版は新たな勢を以つて勃興して來た。而も從來の純日本風のものにあつては、多く版木使用の甚だ覺束ない方法に依つて僅に印刷の用を便して居た始末であつたが、丁度其の頃外國風の印刷製本等嶄新の様式が輸入せらるゝに及び、炯眼早くも將來其有望なるに着目して幾多研究の結果明治二年斯業を開始し、過渡期に在る我が國出版界に一進歩を與へた人は實に氏の父君である。そこで新鋭な海外印刷機械を輸入して、先づ新印刷法を以つて斯界黎明期に先陣として大いに新しい所を發揮して刺戟促進する所があつた。現在伊藤氏の經營下にある鈞町富士見町の印刷所の前身が之であり、同所は同業中最も沿革歴史の舊い所を示して居る。氏は慶大普通部から進んで大學部理財科に入り、大正十年經理財政の學理を修めて卒業し、翌年株式會社大高印刷所に招かれ監査役として要務の處理にあたり、更に商工業株式會社に關係し専務取締役として手腕を揮ひ、合資會社三業時報社無限責任社員として經營の衝に當つた。尙前記富士見町九段ビルディング内に自營の印刷所を構へて活動して居り、中々多忙な身である。而も自治に關しては、神田懇話會、三ヶ町鍛冶町上白壁町、塾師町等の聯合町會幹事長として幹旋の勞を執つて和親發展に加へ、第九地區々劃整理委員として公務を行ひ、帝都復興信用組合理事に推され、神道評論社専務理事として活躍されて居る。而も年齢なほ壯、今後の發展こそ見るべきものがある。



青木 亦太郎

明治十二年十二月十二日生
赤阪區表町二丁目七番地

氏は市内日本橋品川町の出身である。そして今では帝都の高豪に當る赤阪表町で、染物業を營んで斯界に重きをなしてゐる。抑も氏は普通學を卒へるや、ある店の染工見習となつて二十九歳の頃まで専心その術を磨いた。そして同歳のみぎり獨立して表町二丁目工場を設け、第一歩を踏み出したのである。頂度その時が明治四十年だと云ふから、爾來二十九年の間といふものは種々の艱難に逢ひ、色々試練を重ねながら、日一日と家業の隆昌を招き、今では同地方きつての染物屋とし、かつは町内での有力者としての地歩を築くに至つたのであつた。さて染物と云ふと、その地方々々に於て、その人々によつて、各種各様の特長と技巧とを有するもので、同業者として容易にその模倣や追隨を容れないものでなければ價値がない。氏はこの點に留意し、光澤色彩の上に、さては耐久不褪色や布質を損ねないやうに、深く意を注いで、ついに氏獨特の一特色を案出するやうになつたので、段々とお得意の間に眞價を認められたのである。その間に拂はれた氏の苦心は、血の慘むやうなものであつたに違ひない、大正十一年三月には、東京染物業組合第七部長に推舉され、幹部として組合の共榮につとめてゐる。一方氏は町内の自治的訓練にも徹底して理想案を抱き、同志と計つて舊來の親和會を改めて、表町二丁目會と改稱し、組織を變更して町事の刷新と改造に資した等は、氏の功績に俟つところが少くない。今では同會幹事兼會計として衆望を負ふてゐる。長男金太郎君はまた質朴な青年で、父君を扶けて孝養に勵んで居る。



有元 岩鶴

明治十二年二月七日生
牛込區若松町五八番地

羅馬は一日にしてならず、とは有名な西諺である。如何なる成果も、如何なる成功も、決して易々として光榮の日を招いたのではなく、幾多尊い犠牲と努力とが裏面に拂はれてゐる筈だ。それを想ひこれを思ふ時に、わが有元岩鶴氏の今日あるは寧ろ當然のことであろう。氏は山口縣厚狹郡藤山村の出身であるが、故郷を後にした氏は先づ吳鎮守府の造船部見習職工として、苦酸な獨立の第一歩を踏み出したものだ。赤い火花の散る下で汗油になつて勞働した往年の氏の面影は想像するだに尊い體験であつた。それから山口歩兵四十二聯隊に入營し、やがて明治三十三年の北清事變の際には遠く出征し、列國軍隊に交つてわが武威を九天の高きまで發揮して除隊後氏は上京した。そして海城中學第五年級に編入したのである。これは明治三十九年のことだ。非常な晩學ではあるが、この晩學をも意とせずに向學の途についた君の超人的な傑さを思はずには居られない。翌四十年に同中學を卒業後は直ちに熊本高等工業學校土木科に入つて、同四年直ちに東京市橋梁課勤務を命ぜられ、それより爾來黙々として職務に専念し、下僚に厚く同輩に親切に、そして上長には從順に倦むところがなかつたと云ふ。大正十三年五月には橋梁課工務係長兼工務係長に任ぜられ、次いで現在の修繕係長に昇進した。趣味とするところは寫眞であつて、時にカメラを持つて各幽勝地を撮影して歩くことを無上の喜びとしてゐる。愛嬢は三人で、長女は府立第三高女に在學中。

永井 尙知

明治二十年十二月二十六日生
芝區白金三光町八二番地

泰西文化の輸入と共に諸種の運動競技が流入普及し、今や運動熱が高潮し、從來學徒獨專の觀があつた運動競技は、民衆的流行を呼び起すに至つた。山來運動が思想及體質の上に一脈の生氣を與へ、其の改善上に好影響を及ぼす事は争へない事實であるが、こうした方面に最も有力な効果を與へ、所謂精神鍛練と體育改善に最も適切なものは、我が國固有の柔劍道を惜いて他にない。古來中外に誇る武士道精神の鍛練は一に之に依つて行はれ、堅忍剛毅の膽を練り、禮讓の道義を養ふ上に於いて、古來如何に多大の貢獻があつたかは今更いふを要しない。近來鬼角開却され行く此の傳統的な特技を廣く復活すべく鼓吹に努めつゝ、ある人には兩道の達人として人も知る永井尙知氏がある。氏は舊金澤藩士で永井喜之男氏の長男として生れた。父君は土地の名望家で、金澤市會議員として功勞があつた。氏は早く石川縣一中學校に學び、後京都に出でて、柔道を修めたが、其の始め父に從つて長尾流を學び、進んで天真流揚流を究め、更に轉じて講道館流を習ひ、各典義に達する事を得た。尙劍道は一刀流の免許を得、歸つて郷里の各中學校、警察署等の師範を兼ね、地方青年の鍛練に資する所多く、後上京して三光町に道場を構へ、子弟教養の傍、高輪中學、高輪商業及び高輪警察署柔道講師として指導の任に當つて來た。尙其の得意の整腹術を施し接骨整腹に患家の好評噴々たるものがあつた。氏は風丰堂々として尚も溫容春の如く、日常隣保親善を圖りて町會に參じ、又親友會の創立にあつたつて盡力した。家庭には夫人ゆき子との間に二女がある。

本間 儀作

明治十五年九月一日生
日暮里町元金杉二〇四五

あの雪國情緒を誇る新潟縣西蒲原郡和納村は、氏の夢裡にだも忘れることの出来ない郷里である。幼ない頃は其の懐しい郷土に於て父や母と共に田畑で耕作にいそしんでゐたが、多感なこの一青年が、長くこの山間に朽ち果つべきではなかつた。氏は遂に敢然と決意して上京し、まづ淺草區駒形町のある羽織紐製造工場の徒弟として入つた。それは丁度氏の二十二歳の春であつた。すると間もなく日露戦争が勃發したので、遠く鷄林の彼方滿洲の野に轉戦し、身を以て祖國を守つたので勳八等に叙せられて、意氣揚々と凱旋したのである。そして明治四十年には獨立して工場を下谷區西町に設置し、腕におぼえの羽織紐帯はじめの製造に従つた。が氏の不斷の注意は、よく都會人の強烈な趣向の推移をキャッチするので、業績は日に日に上つて、今では斯界で押しも押されぬ位置を築き上げ、販路は全國各地に及んでゐると云ふ状態である。で曩には同業組合の副組長に推され、一意専心組合員の福祉を計つて來た。それのみか氏は常に公共方面にも意を注ぎ、衛生組合第六部長に推舉せられて、町内の衛生設備は勿論のこと流行病防疫に必死となつて活動し、町民の保健に寄與するところが甚大である。これこそ社會人としての自分の部署を、最もよく理解してゐるがため、ともするとエゴイズムのみ墮する當今風潮のには、珍らしい德行である。家庭には糟糠の妻として知られてゐるきよ子夫人との間に子女三人があり、和氣霽々としてゐる。氏今年齡漸く圓熟して來た。更に意氣を負うて活動するとき、必ずや前途洋々たるものがあらう。



長谷五郎

明治十五年一月五日生
四谷區荒木町二十七番地
電話四谷三三〇六番

氏は接骨治療の名手である。我が國の接骨治療の方法を見るに、舊來は家傳又は免許による接骨醫があつて、主として柔道の技から得た治療方法を施してゐる。で柔道畑の出身ばかりである。それに對し純粹醫學による整形外科があつて治療を行つてゐる。さて兩者を比較すると、共に一長一短があつて、前者は技術に相當熟練してゐるが、科學的根據を有してゐない。たゞ手足先の感觸によつてのみ施術するので危険を伴ふことがある。ところで後者は學理に秀でてゐるが、その治療に時日を要し、かつ技に拙い憾みがある。この兩者の長所を採つて治療界にエポックを作り、聲名のあつたのが長谷五郎氏である。氏は徳島縣の出身で、父君を長谷亦三郎と云つた。幼ない頃から父君に師事して家傳による天神流の體術を修業し合せて接骨の術をも修得したのであつた。それから更に泰西の醫學である整形外科の學理を學んで接骨の妙を得たのだ。ところが家督相続の長兄勝三郎氏が不幸にも病没したので、氏はその後を襲ふて家督を繼いだ。そして専ら患者の治療に従ふと共に、更に優秀な外科醫を聘して患家の依頼に應じたので、門前市をなすと云ふ繁榮を招致するに至つてゐる。今では市電氣局、鐵道省、または華族階級の指定醫として、非常な稱讚を購つてゐる次第だ。一方氏はこの目まぐるしい業務の傍ら四谷區會議員に推され、區政に參與して同志の推稱を受けてゐると共に、また荒木町々會副會長として町民自治のために萬全の策を講じてゐる。これこそ氏の恬淡な資性が然らしめてゐる所以で、今後の活躍には見るべきものがあるだらう。

鶴卷英松

明治十五年九月生
下谷區黒門町拾壹
電話淺草五七二番

我が國時計商中錚々たる士で、微より起つて獨力今日の盛大をかち得た成功立志傳中の人が二三ある。彼の服部金太郎氏の半生の力行奮闘は、よく人口に膾炙し世の畏敬をあつめて居るものであるが、いま帝都に時計商としてかくれないわが鶴卷英松氏の奮闘史はあまりに知られて居ない。氏は北越の地、新潟縣長岡の町に生れ、幼くして同地の某時計店に奉公に遣られた。之れがそも／＼氏の生涯の事業の振り出しであり、登龍の門戸であつた。少年としては實によく氣の廻る、勤勉な店員であつた。そしてきまりの年期を勤めあげ、天晴一簾の時計屋として立つ丈の商賣上の智識經驗を得て其の善はへを傾けて同じ町内に一少店舗を構へたのは明治三十年の頃だつた。其商舖は當時北陸の一小都長岡の市にあつても、殆んど道行く人の眼を止むるものではなかつた。況んや星霜三十年後、これが帝都は黒門町の一角に際大な構を以つて鶴卷時計店の名を誇るに至るべき前身であるとは誰が思はうか。氏は始めの程ひたすら地方での成功を夢見て努力した、其の經營方法には微細な點にまで、人の意表に出るものを考へた。間もなく北陸事業家の意氣を中央に示さうと、視界を擴張して意氣込んで東京に支店を設置した。そしてとん／＼拍子の順調を以て發展したので、遂に全力を東京に移したのであるが、今では瀧の川、巢鴨等に堂々たる工場を構へ、本場の瑞西製を凌駕する精巧なものを出し、一ヶ月僅に一萬個製出すると云ふが、此の成功の裏にひそむ並大抵でない氏の努力が偉大な功果を擔つて居ると云ふ夫人はる子との間には一男二女がある。

前田武四郎

慶應三年四月十三日生
芝區新堀町二十一番地
電話高輪四〇二〇番

芝新堀町々會長、同青年團長、東京商業會議所議員、工業雜誌社經營者盛大なる電燈器販賣業者、かう云ふ風に多方面に渡つてそれをうまく切り廻し得る人があるとしたら、その人は餘程の手腕家であり、人格者であり、學識ある人でなければならぬが、芝區新堀町に全盛を誇る前田武四郎氏こそ實にその人である。氏は生を雪の國、美人の國として知られてゐる越後の國に生を享け、青年期の前半を北蒲原郡堀越村に送つた。昔から農を主とする雪の越後は、冬期に於て活動し得る何ものも持たない爲、此の期に遠く出稼きをするものが多かつた。それが一つの原因となつて、海外に迄雄飛せんとする進取の氣性を、土地の慣性として持つ様になつた。こうした弊團氣に育まれた氏が搖籃の地を後に上京したのは當然の事で、それは實に氏が二十歳の秋であつた。来て見れば流石に帝都だけあつて、田舎出の青年を驚かすには充分であつた上に、其後の文明は年毎に見異へる様な進展振りを示して來た。そして電燈は何時しか燦として輝き夜の都を彩るやうになつた。こゝに於て氏は將來電氣の有望なるに着眼し此方面に向つて驥足を伸ばすべく進路を辿つた。氏は先づ日本電燈會社に入り轉じて東京電燈會社につとめた。この間氏が欣求と思慕を以て電氣工學の研究に没頭したことは云ふ迄もない。その後氏は獨立して日電商會を起し電氣器具一切の販賣に従事し、今日の大を致したのである。今や歐米を視察する事二回、又支那に遊び、かくてその見聞より得たる智識は愈々廣く、遂に氏をして工業雜誌を發行するに至らしめたのである。

天野良太

明治元年三月八日生
豊多摩郡下戸塚町四四

都の西北早稻田の森に廣壯な校舎を誇り、わが國文化の搖籃を以て誇る早稻田大學前の文房具店は、天野良太氏の經營になつてゐる。二萬の學生を抱擁する該校の門前に開店してゐることとて、店頭は繁榮は名狀し難い程で、家業は日に月に殷盛を示してゐる。然し氏と雖も元をたせば赤裸一貫で今日の成功を購つた立志傳中の一人だ。抑も氏は長野縣小縣郡鹽川村の出身で、上京したのは僅か十六歳の時であつた。そして最初は日本橋新材木町小西酒店に丁稚奉公をなし、二箇年と云ふものは幼ない身に餘る世路風霜を嘗めつくしたのであつた。其後都合により一時郷里に歸つたが十九歳の時に再び上京して今度は牛込區肴町藤本下駄店に雇はれ、約六年間餘忠實に働いたが、二十四歳の折世話をする人があつて現姓天野家に養子となつたのである。抑々天野家は越前の舊藩士の中でも錚々たる家柄で、夫人こま子さんは政治家として令名ある三木武吉氏の内室かね子夫人の姉君に當り、福井市第一の旅館と云はれてゐる五岳樓も親戚だとの事である。氏は明治二十四年八月に四谷區傳馬町二丁目に下駄店を開業したが、十年後の同三十四年に都合あつて閉店し、直ちに同年八月に現在の場所に學生相手の文房具店を開き、傍ら名刺印刷業も兼ねて異常な繁昌を招き、現に下戸塚東友會副會長として頗る信望が篤い。長男謙治君は早大法科出身で目下は東京電燈株式會社經理課に在勤し、前途のほどを囑望されてゐる。なほ夫人との間には外に二子があつて、至極圓滿な家庭を營んでゐる。氏の今日あるはみな氏の努力に加へて、謙讓な性格の賜物と云へやう。



井上 秀雄

明治十年十一月六日生
府下杉並町阿佐ヶ谷二三七の一

多年官界に游泳して其の手腕を揮ひ、現に東京市下水課庶務掛長として精進しつゝ、ある人に我が井上秀雄氏がある。孝子の一念遂に恵まれて玉なす湯水が芳醇な美酒に變つたといふ傳説を以つて廣く知られてゐる岐阜縣下、其名も養老郡は高田町と云ふのが氏の懐しい故郷である。山水明媚の地とは云へ、それは一途に功名心に燃ゆる純な青年に取つては何等の興をも惹かなかつた。氏は遂に明治二十九年意を決して上京し直ちに、大蔵省に奉じたが、之れ實に氏が官界に雄飛する最初の階梯であつた。其後各稅務署に轉勤し、更に名古屋稅務監督局を経て、三十六年には大蔵省主稅局に入り精勵格勤の譽れが高かつた。かくて其英才は忽ち認められ、其の六月には拔擢せられて兵庫縣明石署長となり、更に大正九年には埼玉縣署長に轉じ、大に功績の見るべきものがあつたが、大正十一年鑑みる處あつて自ら其職を退き、一先づ長い官吏生活から遠ざかることとなつた。然るに才氣發煥八面玲瓏たる才幹は、氏をして永く閑地に止めしめず、遂に翌年一月東京市に聘せられて下水課の庶務掛長に任じ、熱實至誠以つて今日に至つたのである。顧みると氏が官界に在ること實に二十有餘年の多きに及んでゐる。此の永の年月、而かも變轉極まりなき間にあつて、些の瑕瑾もなく、忠實に自己の職務を全うし得た處に、人知れぬ苦心と努力とが秘められてゐることは云ふ迄もないが、同時に氏の卓越した手腕と人格とが據として輝いてゐるのを認め得るのである。氏は本年五十歳の働き盛りで酒を嗜み、論曲をよくすると云ふ、夫人との間に四男三女がある。

石川 彌太郎

明治九年一月生
府下杉並町阿佐ヶ谷八三九

氏は柄木縣下都賀郡中村の人、幼にして人に優れ、郷黨の人士に畏敬されるころがあつた。普通教育終了の後東都に遊び、當時芝區三田臺町にあつて、獨立自尊の學風を以つて、我が學界を風靡した福澤諭吉氏の人格と識見とを慕ひ、その主宰するところの慶應義塾普通部に學び、大に新知識の研究に没頭するころがあつた。氏は運動競技に興味を持ち、殆んど運動に熱達してゐないものはなかつた程で、特にボート、テニス、大弓、野球、ランニング等には優れた技能を持つてゐた。慶應普通部卒業の後、法政大學に入學して法律を専攻したが時に恰も日露の開戦に當り氏は愛國の熱情禁じ難く、遂に學窓を捨て、近衛砲兵聯隊附きとなつて第一軍に參加し、大に滿韓の野に奮戦した。かくて三十八年自出度凱旋して再び學窓に入り、三十九年法政大學を卒業した。後民間にあつて社會各方面のために努力するころがあり、大正拾一年選ばれて代々幡町助役となり、同町の爲に大に盡力する處があつた。後東京府に奉職し、府都市計劃課第二主任として、北豊島、南葛方面の環狀線道路擴張計畫に與つて大に力があつた。大正拾四年九月東京府を辭し、直ちに杉並町助役となり以つて今日に及んでゐる。今や同町の發展は一に氏の才幹と熱誠なる努力に俟つもの大なりと云ふべく、その隆替は一に與つて氏の双肩にかゝつてゐると云つても過言ではあるまい。氏は又銃獵と散策を好みつゝ、餘暇あれば大自然の靈氣に慰安を求めてゐるといふ。

川久 保源 治

明治七年五月十七日生
赤坂區新坂町二五番地
電話 青山 五二八〇番

一度法廷に立つと、該博な得意の法理論と、滔々たる能辯に乗せて、論じ去り説き來りたるころあのリンコンを想はしめるのは、東京辯護士界の逸才として知られてゐる、わが川久保源治氏である。氏は千葉縣匝瑳郡杉賀村の出身、青少年の際上京して直に東京法學院に入つて法學の研究に不屈な精進を續けて行つた。かくて明治二十八年に首尾よく秀拔な成績で卒業すると、翌二十九年には司法官試験となりさすがの難關と目せられてゐた判檢事登用試験を一舉で突破したものだ。これが氏の二十三歳の時だつたと云ふから、その天才的な頭腦の閃めきと、異狀な勉學のほどが想像し得られやう。そして三十歳に静岡地方裁判所檢事として赴任し、私學出身者のために氣を吐いた。その内に進んで東京地方裁判所判事となつて、流るやうな名裁斷ぶりを以て良判官の名を轟はれた。その後累進して部長となつて、神聖な法廷の威信に盡力し、正七位に叙せられたが、遂に多年の宿望を上げて野に下つて、辯護士を開業したので、由來辯護士稼業は單に法理に精通してゐるのみでは成果を収めるものでない。業望を集めるに足る魅力とでも云ふべきものが必要だ。その魅力は女性の有する媚に似たものではなく、人格的な純心さのみが有する表現でなければならぬ。このデリーケートな必須條件を氏は完全に具備してゐたればこそ、今日の聲名を得たのである。大正十三年には市會議員に推され、また市參事會員としても侃々の正論を吐いて倦まなかつた。なほ赤坂區會議員として二期に亘つて區政刷新に奔走したのである。

田 中 端

文久三年三月廿九日生
北豊島郡板橋町

多年職を行政官廳に奉じて練達有能の士として推賞され、之を辭しては自治體に主腦者として、孜孜自治の進展に力を致す人に板橋町長の田中端氏がある。氏は新潟縣南蒲原郡福島村の人で夙に雄志を抱いて上京し法政大學に入り明治十六年之を卒業し、直ちに東京府屬を拜命したが是が即ち氏の行政官としての第一歩で、當時はまだ教育施設も整備を欠き地方の子弟は概ね父祖の業を繼いでゐた時代であつたから氏がよく奮起して一人學を東都に受けたと云ふのは異數であつたのだ。其の後次第に累進して明治三十一年には課長に進み、同年選ばれて北豊島郡長となり、拾有五年の間此の郡の主宰者として行政の局にあたり幾多町村の監督統治に加ふる所があつた。かくて大正元年には郡馬縣理事官に轉じ、地方開發に盡し、次で大正九年佐賀縣三養基郡長に任ぜられたる事三ヶ年に及んだが、偶々府下板橋町有志者の懇請する所となつて歸來町長として就任した。事を處して篤實に、人格圓滿の稱ある氏が多年官界にあつて洗練された才腕を囁せられたのは宜なるかなである。常に自治に對する探究の手をやめず、我が國自治體の由つて來る所を察し、將來の變遷の如何にすべきかを研究して常に根本問題から出發して舉措を決することを忘れない。相互共榮と憲政有終の美とは自治の精神にあるとなし、吏員の督勵から町村との意志の疏通なども極めて周密的な注意を拂つて居る。長い在職間に其の身邊をけがすが如き醜行更にないのみならず、何等の非難もなく民望年と共に厚いのは氏のために町のためにも喜ばしい、夫人とみ子との間に三男がある。

河村慶次郎

明治十三年十一月生
日本橋區小傳馬町三の一七
電話 大手 四八六六番

山紫水明の山國として知られてゐる岐阜縣本巢郡は氏の出生地である。中等學校の課程を終了後直に上京して、明治大學に學び法政經濟の學理を研究した。抑も岐阜縣人には陽性な人物は少いけれど、隱忍自重著々として萬里の路も遠しとしない傑出した人材が多い。之に加へて氏の學んだ明治大學校は、駿河臺健兒を誇る學生氣質が醸成されてゐて、剛健の氣風が漲つてゐる。この兩者の長所をビツクアツプして、兼ね備へてゐるのが河村氏である。卒業後は法曹界に志して盛んに活躍したものであり、傍ら日本橋實業同志會に参加して、その奇才を認められたものであつた。抑も實業同志會はかの政界及び財界の惑星として重きをなしてゐる武藤山治氏が主體となつて、全國的に愛國の同志を糾合したことに端を發し、經濟立國の趣旨を以てそのモットウとしただけに、氏は單に一辯護士として終止するは男子の本懐に非ずとして、遂に實業界に驥足を伸べんとし、大正五年洋室用建築金屬の販賣を營むやうになつた。これこそ時代の推移とその趣向とを察知した機宜の方針だつたと云へる。特に各歐米諸國の粹を集めての營業ぶりは、異狀な好評を博して業績は日に月に進んで、今日の大を築き上げるに至つたのである。後推されて區會議員となり、侃々の卓論を吐いて區政振興のため不斷の貢獻を拂つてゐる。趣味としては園藝を好み、餘閑常に鳥鷲の戦ひを唯一の慰安としてゐる。既に旦那藝を離れて玄人の域に達してゐること。夫人しめ子との間に一男一女がある。



宇田川伊三郎

明治十八年六月十四日生
麻布區北新門前町八町入

其の昔七百年北條氏の威名天下に布いた時代其の武將として勇名を振つた宇田川氏は當時の數度の戦陣にのぞんで偉功を立てたのであつた。榮枯盛衰は世の常、幾許もなく北條氏の武運ほろび足利の天下となるに及んで、時の股肱の臣は主家と運命を共にし、宇田川氏も其の悲運を擔つたのであつた。爾來稍睡して田夫となり、野に耕すを事としてゐたが、人に將たるの才器は野に在つても亦常廂野人の比でなく、常に隱然たる勢力を擁し、豪農として各大名に收穫する所の糧を供給するに至つた。斯くて累代相受け相譲り當年の盛大を思はせしめ、豪壯な邸宅は郊外澁谷町の一角に先般まで其の姿を止めて居つた。然るに丁度氏の祖父時代に或る事業の失敗から破産の憂き目にさらされて父祖長く榮えた其の住宅までも他人の手に委ねなければならなくなつた。當時僅か拾一歳の少年の氏は意中決する所あつて、一家再興のため丸の内千葉酒店に丁稚小僧として、にはかに卑賤な憂き仕事にこき使はれる身となつたが、勵精拾年を一日の如くに奉じて大正三年現在の地に獨立して酒店を構へるに至つたのである。然し當時は未だ營業監督人と云ふ名義で事業は主家の手に在つたため、氏等夫妻の辛苦艱難は言語に絶するものがあつた。でも悲壯な希望は着々報ひられて今日遂に堂々一戸の酒店として繁榮を誇るに至つた。先般以來多忙の裡を自治に貢獻して功が多く震災後の救護事業には一家を措いて奔走したのであつた。氏は本年四十二歳前逢春秋に富んで居る。幸に一家再興と町政の革新を併せ實現する事を得ば筆者も亦欣幸に耐えない。

篠塚宗吉

明治十七年生
大郷區丸山新町一九番地
電話 小石川 三一七番

渾身血と涙とを以て充されてゐる我が篠塚宗吉氏は千葉縣下の生んだ逸材である。幼にして才智に優れ、夙に中學を卒業するや、直に東京高等商業學校に入學し、切磋琢磨の功を経て後優秀なる成績を以て卒業した。かくて氏は一度實社會に入るや、自ら求めて東京瓦斯株式會社の集金人として雇はれたのであつた。彼の草履取から身を起した大岡秀吉の故智を學んだ譯ではないが、己に人生行路の第一歩に於て、常人と異なる偉大さがあつた。人格的閃めきがあるのである。此傑出した氏の才幹が永く重役の目に止まらぬ筈はなかつた。氏は其後次第に登用され、殆んどトン／＼拍子に各課長を経て遂に支配人に拔擢せらるるに至つた。以來職務に精勵する處があつたが俄然大正十二年九月一日未曾有の大震災災は、同社の殆んど全部を擧げて悉く烏有に歸せしむるに至つた。當時氏は日光にあつたが一度その報に接するや直に歸京し、危ぶむ重役連を勵して數萬個のストープを外國に注文した。かくて氏の先見の明は見事に適中し、同社を解散の危機から救つたのであつた。氏の此偉大なる功績は氏をして益々重からしめ、遂に同社の姉妹會社たる東京瓦斯コークス株式會社の常務取締役を兼ね、同社の中堅として隱然たる勢力を把持してゐたが、本年七月自ら鑑みる處あつて職を辭し目下閑地に悠遊してゐる。氏資性磊落、世路風霜を経た丈けに稀に見る人間味の所有者で、部下を愛する事篤く、曾て課長時代自己の賞與金を悉く部下の社員に頒ちて其勞を犒つたと云ふ。以て人格の奈邊に存するかを知るべく、其大成は期して待つべきであらう。



赤川文郎

明治二十四年七月四日生
府下代々幡町篠塚一〇二六番地

帝都の生命とも云ふべき河港の改良に渾身の努力を拂ひ、着々効果を齎しつゝある人に我が赤川文郎氏がある。氏は明治維新の際多くの偉人傑士を産んだ長州萩の出身であるだけに、傳統的に覇氣が血を環つてゐることは云ふ迄もない。夙に郷里の中學校を卒業するや、更に遠く札幌農科大學土木専門部に入學し、只管斯業の堂奥を探り、大正六年八月優秀なる成績を以て校門を辭し、直に職を東京市土木課に奉じ、専ら橋梁の事に當つた。之れ實に氏が公的生活に入つた最初の第一歩であつた。當時氏は京橋區三原橋の改築工事に従事し、大に努むる處があつたが、大正九年轉じて河港課に入り、東京灣築港計畫の樞機に參與し、同計畫の樹立に精進して大に力があつた。かくて大正十一年當時施工中であつた隅田川の改修工事に従事し、遂に之が實現を見るに至つたが、その完成には氏の熱心なる努力と幾多の苦心とが秘められてゐることを忘れてはならぬ。大正十二年九月、偶々彼の未曾有の大震災災が、一朝にして帝都の文化を潰滅に歸せしむるや、氏はバラツク用材の揚陸作業に従ひて日夜寢食を忘れて奮闘し、殆んど半歳の長きに亘つて應急施設の完璧を期した其功績は、寔に没すべからざるものがある。後復興計畫の樹立せらるると同時に、河川港灣等の諸計畫に従ひ、目下其職務に盡瘁してゐる。氏人となり高潔、而かも職務に對して頗る忠實で、自己の天職以外何物をも認めず、一意専心之に没頭すると云ふ稀に見る熱心家である。夫人との間に一女があり、家庭圓滿にして清福に浸つてゐる。

深井鑑一郎

慶應三年五月六日生
府下長崎町荒井一六〇七番地
電話小石川三二八六番

教育界に身を奉ずること三十有九年、齡還暦を過ぐるもなほ鏗鏘として
意氣壯者を凌ぎ、一意専心育英の任に當つて倦む處なき我が府立第四中學
校長深井鑑一郎氏の功績は之を偉としなければならぬ。氏は埼玉縣埼玉郡
舊岩槻藩の士族の家に生れ、幼にして雋銳の才を認められてゐたが、後志
を立て、帝都に出て學を東京帝國大學文部科大學古典科に受け、明治二十一
年同科を卒業するや、職を福島縣師範學校教諭に奉じ在職四年、明治二十
四年再び上京して私立共立中學校に教鞭を執り、二十七年同校が改名せ
られて東京府城北中學校となるや推されて之が校長となり、更に三十四年
再び東京府立第四中學と改稱されるに及んでも依然校長の要職を占め爾來
引續き今日に至つて居る。此間専ら力を生徒の教養に注いで幾多の改善を
行ひ、功績の見るべきものが多かつたが、就中同校の昇格には全力を傾注
して之が實現に力め、彼の城北中學校時代に於ては自ら私財を投じて迄其
の發展に盡瘁した程であつた。氏は學徒養成に當つて人格の陶冶を第一義
とし、學業之に伴ふの主義であるが、その訓育の宜しきを得たる結果は現
在全国中學校に範を垂れ、而かも府立第四中の名は秀才の代名詞として教
育界を風靡する迄になつた。之皆氏が身を以て衆に先んじ、職員と生徒と
の間によく其の主義を徹底せしめた不斷の努力に依るものと云ふべきであ
る。而かも氏は同校に終始して身の榮達を望まず、子弟教育を以て自己の
天職となし更に之を以て自己の趣味とさえ感ずるに至つて居ると云ふ。以
て其の人となりを知るべく信望の高いのも決して偶然ではない。



工東祐信

明治二十二年七月四日生
牛込區市ヶ谷臺町十三番地

近來市電の車輛が著しく改良せられて來たことは都市の美觀の上から云
つても、亦市民の便宜の上から見ても定に喜ばしい現象と云はなければな
らぬ。此車輛の改良に多年の蘊蓄と卓越せる技能とを以て精進しつゝある
我が工東祐信氏は、長野縣松本市の士族の家に生れた。武家には昔から見
習すことの出来ない風格が傳つてゐる。従つて氏にも傳統的に満々たる覇
氣を存し、長ずるに及んで次第に現實化せられ、然ゆるが知き向上心とな
つた。かくて中學を卒業後將來工業界に驥足を延ばさんと欲し、仙台高等
工業學校機械工學科に學び、切磋琢磨の功を経て明治四十五年優秀なる成
績を以て卒業するや、直に職を鐵道院中部管理局新橋工場に奉じ、學識の
實地活用を以て大に得る處があつた。次で大正二年濱松工場に轉じ、更
に大正四年中部管理局工作課に入るに及んで益々天稟の才能を發揮し、功
績の大に見るべきものがあつた。當時我國は歐洲大戰の後を受けて經濟界
は空前の盛況を極めてゐたので、氏は大正七年轉じて大倉鑛業株式會社に
入り、同社と支那政府の合辦事業たる滿洲本溪湖鐵礦公司に勤務したが、
後之を退きて大正十二年一月電氣局に入り、濱松工場に勤務することにな
つた。かくて震災後市の職制變更と共に現車輛課に轉じ、精勵今日に及ん
でゐる。氏は其堂々たる體軀が象徴せる如く性格頗る剛直で酒も煙草も嗜
まぬと云ふ稀に見る謹直な人である。趣味としては大弓、謠曲を好み就中
弓術は得意とする處だと云ふ。夫人を常子と云ひ、長男太一、次男安三、男
恒夫、四男定雄、長女枝久があり賑々しく團樂してゐる。

桑原彌兵衛

明治十三年一月二十五日生
麹町區元園町一ノ一九

艱難汝を玉にすとは古來の金言だが、動もすれば青年の血氣に逸つて功
を一策に缺くものが多く、克く堅忍不拔の精神を抱きて業を遂げ名を得る
の人は寥寥として寔に少い。その間にあつて、而かも苦學力行の士として
現代青年の範とすべき人に桑原彌兵衛氏がある。福島縣白河町は氏の懐し
い搖籃の地であつて、幼少の頃同縣柳川町なる叔父の許で、業務を見習つ
てゐたが、十七歳の折前途に輝く希望は氏の身を東都へと運んでくれた。
そして先づ麹町中六番町新聞取次店東山堂に入り、業務の傍ら通學して涙
ぐましい程の奮闘を続け、後日貯蓄した金を資本に、新聞取次店として
附近に知られてゐた加納新聞店の名を襲ひ、獨力を以て現在の地に新聞取
次販賣業を開始するに至つた。以來日夜奮闘努力した結果、日を逐ふて漸
次殷盛に赴き、今では使用人十五名、販賣部數百に五手を敷へ、一路幸福
を辿つてゐるが、氏は從來世路風霜を嘗めた苦勞人丈けに、人一倍思ひや
りが深く、自己の經驗に鑑みて使用人は悉く苦學生を採用してゐるのを見
ても、麗はしい涙の人たるを知る事が出来る。氏は又夙に公共の志篤く、
現に元園町々會副會長及び麹町衛生組合長として町の共存共榮の爲に盡瘁
するの外、曩に國勢市勢調査員の公職を帯び、熱誠事に當つたこともあ
る。氏は元來温健な思想の持主で常に中庸を尊び、身を持つること堅く、
從來態度か町會議員の候補者に推薦されたが、毎に固辭して受けないと云
ふ。平生旅行を好み、閑暇を得て明媚なる山川に情操を養ふといふ。家庭
にきよよと夫人との間はな子嬢あり千代田女高等學校出身であるといふ。

久富直次

明治十八年十月十六日生
小石川區原町六四番地

漸く混亂せんとする我國理想界を救ひ、而も確固たる信念を持して克く
忠君愛國の大義を奉じ、第二の國民たる少年の養成に献身的不斷の努力を
惜しまない人に湯島小學校校長久富直次氏がある。氏は景勝の地に富む岐阜
縣郡上郡八幡町に生れ、夙に驥足を教育界に伸べんと欲して岐阜縣立師範
學校に學び、日夜學にいとむこと數年、國民教育の重大なる使命を帯び
て明治三十二年教育界に第一步を印し、直ちに職を郡上郡奥明方小學校に
奉じ、學徒の指導に努めて令名を馳すること數年、同三十七年五月更に轉
じて岐阜縣師範の訓導に進み、別に加納小學校の校長をも兼任し、遺憾な
き迄に黨化の實を發揮して功績見るべきものがあつたが、明治四十四年自
ら決する所あり、上京して赤坂高等小學校訓導兼中之町小學校訓導となり
爾來數年東都教育界に盡力した功は遂に認められて、大正六年拔擢せられ
て湯島小學校長に任じ、以て今日に及んで居る。恰かも自己の利害を超越
したるが如き氏の熱心は、その一舉手一投足に表はれ、兒童教養の大任に
當つてはその眞面目さは溢るゝ許りでよく數多の兒童に反響を與へ、人格
の涵養と相俟つて社會的に向上せしめた業績は擧げて數ふるに過ぎな程で
ある。氏は更に學校建築にも不斷の力を注いだ結果、曩に復興第一の小學
校建築として同校の落成を見たるが如き眞に氏の奮闘の賜とも云ふべく、
其の結構の壯麗と設備の完整とは現下東洋第一と稱せられて居る程であ
る。夫人をたか子と云ひ其間に二男一女を擧げ、家庭的にも眞に教育家ら
しい平和を維持する處に氏の人格の偉大さが窺はれる。



松本 津

明治十四年九月二日生
下谷區谷中坂町五番地

氏が東京市に職を奉じてから已に春風秋雨二十有餘年の歲月が流れてゐる。二十餘年と唯だ一口に云つて了へばそれ迄だが、人生行路の上から見るとそれは決して短いものではない。其永の年月を、忠實に而かも眞面目に自己の職責を完うして來た氏の努力は儘かに推稱に値ひすると同時に、然かも變轉極りなき官公界に伍して今日迄堅實なる歩みを續け來た事は其一面に於て氏の人格の高潔にして、技能の優秀なることを最も雄辯に物語つてゐる。埼玉縣比企郡東吉見村は氏の懐しい搖籃の地で、明治十四年九月二日を以て生れた。夙に雄志を抱いて上京し、神田中學校を卒業の後早稲田大學高等豫科に學び、只管勉學に力めてゐたが、家庭の事情は氏をして永く就學せしむることを許さなかつたので、己むなく中途退學して職を東京市役所に奉じ、水道課工場掛に勤務することになつた。之れ氏が公的生活に入るに至つた最初の一步で、實に明治四十一年のことであつた。以來奮勵努力大に功績の見るべきものがあつたので、漸次累進し、遂に拔擢せられて工場掛長に任じ精勵今日に及んでゐる。此外氏は水道検査員特別任用試験員として働いてゐるが、流石に世路風霜を経て來た苦勞人丈けに、人に接するに毫も墙壁を設けず、快活な明るい性格の所有者である。殊に部下を愛すること厚く、上下に頗る信望をつないでゐる。趣味としては俳句を良くし、園藝を好み、時に忙中有閑の清境に浸るを以て唯一の樂としてゐる。夫人をくら子と云ひ、その間に二男三女があり、長女は青山高女の在學中である。

松方 幸次郎

慶應元年十二月生
神戸市山本通四ノ一五
電話神戸三宮六九八番

學識卓越、才藻該博の士を實業界に求める時、第一に擧げることの出来る人は松方幸次郎氏であらう。氏は明治の元勳松方正義氏の三男に生れ、早くより米國に遊びてエール大學に入り法律を修め、明治二十三年歸朝し二十六年再び英國に留學し、二十七年歸朝、二十九年株式會社川崎造船所専務取締役社長に就任し、實業界に雄飛することとなつた。三十六年神戸商業會議所議員に推され、大正三年まで繼續しその任にあつた。明治三十七八戰役には功に依り勳三等に叙せられ、旭日中綬章を賜り、清國皇帝よりは二等第三寶星勳章を贈與せられた。明治三十九年より同四拾一年迄神戸藥港委員、兵庫縣防疫評議員となり、四拾一年九月神戸商業會議所會頭に推され、四拾二年辭任した。四拾三年春には日本實業團代表として清國に渡航して彼の事業を視察し四拾三年の秋同じく米國視察に渡航した。大正四年六月五日天皇陛下軍艦樓名に親臨あらせられた時、特に氏を御前に召して拜謁を賜はつた。氏の社長たる川崎造船所が規模廣大にして本邦第一なることは内外普く知る所であるが、それを經營して益事業を隆盛ならしむることは、一に氏の絶大なる才力に負ふのである。氏は又美術鑑賞に秀で、我國古來の名畫の多く海外に散佚せんことを恐れ、先年渡歐の際特に斯道の大家に囑して之れを蒐集し、又歐洲諸國の名畫をも齎し歸り、今や松方美術館なる一大コレクションを作らんとするの企畫があるといふ實業家中藝術を賞玩するの士は多いが、氏の如き國家的立場を以て之を愛玩するのは稀である。こゝにも亦氏の識見を窺ふに足る。



平山 成寬

明治十九年一月十三日生
府下青梅町裏八〇六番地

教育界の三大本旨たる智育、體育、徳育に準據して克く之が實現を計り、高潔なる人格者として令名を馳せて居る人に平山成寬氏がある。氏は帝都に程遠からぬ埼玉縣飯能町の人、夙に俊敏の譽高く、天才兒として其前途を囑目せられてゐた。長ずるに及んで身を育英の業に捧げんと欲し、小學校を卒業後、上京して青山師範學校に入り、螢雪の功を積むこと数年、卒業後更に進んで東京高等師範學校に學び、大正二年優秀なる成績を以て卒業すると共に、職を滋賀縣立師範學校に奉じ、教育界に最初の一步を印したのであつた。在職十星霜、其間體育の奨励に力を注ぐと共に、一方智徳方面の向上をも計り、成績の大に見るべきものがあつたが、後縣視學をも兼任するに及んで益々理想の實現に力め、同縣教育界の恩人として敬慕されるに至つた。大正十二年府下青梅實科高等女學校の創立さるゝや、聘せられて之が校長となり今日に至つたのである。抑々同校は當初青梅町他六ヶ村に依つて創立されたものであるが、氏が校長となりて、教育指導の任に當るや、着々として顯著なる實を擧げ、當局の認むる所となりて大正十二年四月遂に東京府立となつたのである。氏の功績や又偉なりと云ふべきである。由來同校は實科高等女學校なるが故に地方の生徒多く、殊に卒業後は直ちに實社會の人として役立つべく教育すの必要あるが故に、氏は此點に深甚の注意を拂ひ、智識技能の外に人格涵養に不斷の努力を續けて居る。かくて質朴堅實なる校風は氏の名聲と共に益々發揚されつゝある。又趣味を書畫に有するといへばその風儀の程も察せられやう。

村田 猛

明治元年十二月二十六日生
總町區富士見町二の二七番地

教育家と人格、それは非常に大きな問題である。殊に國民教育は、被教育者が何んな方面にでも外れやすい模倣的な感化期に措かれてゐる純眞な兒童文けに、特に教育者に傑出した人格者を要することは言を俟たない。わが村田猛氏は斯界の第一人者として、高潔なる人格の光を以つて、兒童を正道にと導き得る完全なる教育者とされてゐる人である。氏の出生地は白虎隊に名高い福島縣若松市で、夙に教育家たらんとして青森縣の師範學校に學び、明治十九年卒業後直ちに職を青森縣下の小學校に奉じ、よく己が職責を心得て力量の凡てをそれに捧げた。後一年餘を宇都宮小學校西校に過し、明治二十三年東京に出でて、麴町富士見小學校に職を奉じ、在職十三年間の後、三十六年榮轉して芝の櫻田小學校長となつた。その後同區内の御田高等小學校長を経て、聖坂尋常小學校長となつた。此の間氏は始終教育を以つて己が天職とし、智育に徳育に體育に非常なる成績をあげ、大正十二年には遂に撰ばれて芝區より滿洲朝鮮等の小學校視察の爲に派遣せらるゝに至つた。かくて大正十五年四月赤羽尋常小學校の新設と共に招聘されて之が校長となり、以て今日に及んでゐる。氏は資性温厚にして謙嚴兒童に接するに溢るゝばかりの愛を以つてし、各自のよき個性の誘導に力を入れてゐる。又教員相互の人格を尊重し、出來得る限り自己批判に訴へさせてゐる。趣味を讀書に有し、専門書と共に性情涵養に資するものを好んでゐる。夫人を静子と云ひ、長男稔君は今年帝大經濟科を卒へ、次男は府立第四中に在學し、長女淑子は滿鐵技師工學士源水壽氏に嫁してゐる。



阿部喜市郎

小石川區原町一二五
電話小石川 六三・六九六・六三三

婦人病の中で最も恐るべきは子宮痛である。古來此の病氣は不治の病とされ、全く施す術を知らなかつた。罹れば死ぬ。これは餘りに悲痛な事であり、人智の不甲斐さを知るものである。現今我が國に於ける醫學界の進歩は實に素晴らしいものであるが、この進歩を以つてしても尙かつ子宮痛の治癒を望む事は出来ない。凡て病氣は其の原因を突き留める事に依つて治癒の緒は見出されるものであり、豫防する事も出来るのであるが、痛の原因は凡て醫學界に於ても全く未知のものとして直に對症療法を試みる原因療法は全く望まれない。そして只これに直に對症療法を試みるより他に方法はないとして、現今は多く手術に依つてなされてゐる。そしてそれが治癒の率は七十乃至八十二%を示してゐるが、これが再発死亡者には全く此の數の中には含まれてない。再発はこの病氣の特徴であるが故にかうしたものを含む場合は驚くべき死亡率を見る事は疑ない。然るに醫學博士阿部喜市郎氏の發見になるラヂウム、レントゲン應用の放射線療法は、嶄新の方法として醫學界に一大光明を投げ掛けた。元來この放射線は、人體を腐蝕せしめる力を持つてゐる。即ち患部に於ける病的な組織を死滅せしめる事に依つて治癒を計るものであるから、全く根本的治療法である事は云ふ迄もない。併し總て病氣の治療はさうである様に、初期に於ける治療の方が、危険も少く、死亡率の少い事は云ふ迄もない。氏は現に原町に婦人科専門の大病院を有し、醫學界に於ける放射線療法法の權威であると共に、廉價と親切とを以つて、婦人病患者の治癒に努めてゐる。

藤岡眞一郎

明治十年六月五日生
小石川區原町十三

多年教育界に幾多の功績を樹て、曩に長くも皇后陛下より御下賜金の光榮に浴して一代の面目を施した東京市視學藤岡眞一郎氏は長野縣史級郡信里村の生れである。夙に育英の業に志し、上京して東京府立師範學校に學び、明治三十四年更に進んで中等教員養成所に入り、明治三十六年卒業して、教育界に乘出し、果進して林町尋常小學校長となり、後同校夜學校校長を兼任するに至つた。以來心血を瀝いで生徒の教養に任じ、能く一校を醇化し功績の大に見るべきものがあつたので、遂々大正三年東京府知事より表彰せらるゝに至つた。超へて七年東京市教育會の委託を受けて北米合衆國の教育を視察し、新智識を齎して翌年歸朝するや、専ら教育の改善に力を注ぎ功績の頗る顯著なるものがあつたので、大正九年二月文部省並に東京市から表彰せられるの榮譽を擔つた。かくて同年九月東京市小學校低能兒教育に關する調査を囑託せられて大に其異材を發揮し、十年二月には東京市小學校教員講習會講師に、七月には學務委員に、更に八月には東京市劣等兒童教育講習會講師に擧げられ、其八面玲瓏たる才幹を揮つて教育界に貢獻する處が少くなかつた。之が爲め小石川區教育掛長を始め同町保護者會等より表彰若くは感謝状を受け、遂には長くも皇后陛下より御下賜金の光榮に浴するに至つたのである。かくて大正十二年拔擢せられて東京市視學となり今日に及んでゐる。其人格の高潔にして學に篤きは當代稀に見る所、夫人をきみ子と云ひ五男一女がある。氏は又文を能くし、著促進學級の實際的研究」は名著として廣く知られてゐる。

渡利定敏

明治十年十一月七日生
日暮里字元金杉六五八
電話 淺草 七三三八番

曩には我が國に於には全く製造不可能とされてゐた板硝子の製造に成功し、躍工業界に一方の覇をとなへ、今又東京織物用品株式會社の社長として、實業界に令名を轟はれてゐる渡利定敏氏は、京都府下丹後中郡峯山町に呱呱の聲をあげた。氏はその始め郷黨に修業したが、後實業界に志をたて、日本製糖株式會社に入つた。併し間もなく拔擢されて名古屋支店長となり、中京の廣大なる販路を擔つて活躍し、大いに同社の爲に貢獻する處があつた。後此處を辭するや、明治四十年常盤生命保險株式會社に入り、第一部長として保險事業界に乗り出したのである。かくて實業界の狀勢を通覽し得た氏は、自ら資本金二十萬圓を以つて日本工業株式會社を創立し、苦心研究の結果、今迄日本に於て製造不能とされてゐた板硝子の製法を發明し、斯界に新機軸を開いた。尙氏が發明に成る實用新案研磨用硝子ブラツシを出し、硝子商間に非常なる利便を齎した。その他硝子綿、電池、絶緣材料、食器附屬品等の優良廉價なるものを出して需用者の便を計つた。平和博に於て國産獎勵の御趣旨から宮内省御買上の榮に浴した事は、全く輸入のみに依つて需要を満してゐた板硝子を、一躍輸出に迄導いた同社の、當然受くべき榮譽である。次いで氏は東京織物用品株式會社を興し、金箴其の他織物機械器具の製造に従事し、逐年増資を見るの盛況を示し、今や實業界の利権者として異彩を放つてゐる。趣味は謡曲と園藝にありと。夫人を久和子と云ひ、長男敏文は慶大に、次男敏淳は同普通部に各々在學中。

門田音松

慶應元年 月 日生
府下大崎町下大崎四二三番地
電話 高輪 八五七番

由來農業を以つて立てたる我國が、近時漸やく萎微せんとするを歎き、之が助長發展に資せんとして多年献身的努力を續けて來た人に門田音松氏がある。氏は長州山口の生れ、幼にして雄志を抱き、十六歳にして大阪に出で先づ、職を大阪造幣局に奉じたが、青年志を立るには當に中央の地にありとなし、茲に留ること四年、二十歳の時上京して居を大崎に卜し、日夜寢食を忘れ、孜々として素志の貫徹に努めた。氏は夙に農村振興策に思を馳せ、徒らに空論に走るを好まず、只管具體的方策を講究するに餘念がなかつたが先づ、農業の振興を思ひ、農産の増進を計るは農具の改良に如くはなしとなし、農業用發動機の製作に志したのである。時に明治廿八年、爾來今日に至る三十年間之が製作に没頭し、改良に改良を加えて殆んど寢食を忘るゝ有様であつた。其効遂に空しからず、現在に於ては全く理想的發動機の成功を見るに至り、各方面に支店を設けその販路の如きも全國的となり、少からざる好評を博しつゝある。氏の特異的研究心の發露とは云へ、一意研究に身を委ねること實に三十有餘年、此間の苦心は又察するに餘りあり、その邦家に貢獻する處偉大なるは全く畏敬の外なしと云ふべきである。目下漸やく老境に達せんとするや、家業を長男實氏に譲り、氏自身は隣保共睦其他の社會公共事業に奔走し、町民より喝仰の的となり、恰かも慈父の如く敬慕されて居る。令息亦氏に劣らぬ天才的技能を有しその製作にかゝる同機は斯界に汎く氏の圓滿なる人格の發露と共に家庭に彌榮を續け、同町屈指の名望家であり、手腕家として認めらるゝに至つた。



寶田鐵藏

明治十三年十一月廿一日生
府下下遊谷七八番地

文化の進展に伴ひ、都會に於ける自動車の需要は逐年増加して行くが、帝都に於ける自動車も今や漸くその盛をなして、之を十數年の以前に比ぶれば全く隔世の感がある。此の帝都自動車界に多年功績著しく良く今日あらしめた貢獻者に東京市電氣局自動車課運轉掛長の寶田鐵藏氏がある。氏は日本海岸に於ける隨一の貿易港として夙に有名なる福井縣敦賀港に程遠かぬ坂井郡磯部村能堂に生れ、幼にして進取の氣象に富み、徒らに一寒村に埋るを屑とせず、雄志を抱いて帝都に出で、先づ學を明治法律學校に受け、一意専心登雪の功を積むこと數年、漸く業成りて校堂を去るに及び、市街鐵道株式會社に職を奉じ、忠實精勵能く能く衆に垂れ、卓抜なる技能と天稟の奇才は逐次認めらるゝに至つた。當時の鐵道は實に幼稚なもので、會社經營の馬車鐵道を以つて交通機關の尤たるものとして居たが、時代の進展は遂に電車となり、さらに之を市營とするに至つたのである。次で時代の欲求は自動車の需要激增を招致し、自動車課創設さるゝに及んで、氏は推されて同課の運轉掛長として就任し、爾來今日に至る迄之が發達に寄與する處は枚擧に追なき程である。大正十二年九月一日の大震災には、帝都は電車の大半を焼失し、一時的應急の策として多數市街自動車の運轉を見るに至つたが、其の體裁に於て實質に於て頗る非難されたものであつたが、氏の持異なる才幹はよくこの難關を突破して、遂に今日の如き域に到達せしめたのである。以つて氏が如何に天才的の手腕家であるかを推知し得るであらう。家庭には夫人すゞ子との間に一男一女がある。

上野信四郎

明治六年十一月
麻布區山本町五九番地
電話 高輪 五一二三番

我國の刀圭界の偉材として汎く其の令名を馳せ、斯界に貢獻する處多く、而かも一方自治的精神の發露はよく町政に參與してその改善刷新に奔走し遺憾なき迄に重大なる責務を全うしつゝある人に醫學博士上野信四郎氏がある。氏は栃木縣を出身地となし、人となり夙に俊銳奇才を以つて儔輩を壓し、郷里に於いて神童とさへ稱せられた程であつた。先づ郷土の小學を卒業するや直ちに中學に進み、更に高等學校を経て東京帝國大學醫學部に最高専門の學理を討究し、明治三十四年優秀なる成績を以つて校堂を去るや、其翌年聘せられて日本赤十字病院に入り實際診療に従事することになつたが、而かも氏はその間常に研究を怠らず、病理に對する不斷の造詣を養ひ、遂に認められて治療主任の要職を占むるに至つたが、偶々明治卅七年八月日露の戰端開かれるや、遠く滿洲の原野に轉戦奮闘を續けた傷病兵の治療に從事し、功に依つて獨逸國から送叙動された程の精勵振りを發揮した。越えて三十九年、同社から派遣されて歐洲の學校を巡歴し、此間蘊蓄を得て明治四十二年歸朝し、同四十四年偶々支那革命の亂起つて露國派遣救護團組織せらるるに及び、救護團長として其功績顯著なるものがあり、更に世界大戰に際し醫長に任ぜられ、勳三等に叙せられた外、露國からアンナ・スタラス勳二等を贈られる等、氏の名譽は全く斯界に比肩するものがない程である。之に先だつて明治四十四年榮譽ある博士の學位を授けられた。大正七年獨立して外科病院を開設して靈腕を揮ひ、更に麻布區醫師會長、日本醫師會理事を兼ね、居町の町會長に推されて益々社會に裨益しつゝある。



松本安太郎

安政五年二月二十一日生
本所區表町三二番地

尊い血と骨によつて成功の金字塔を築き上げた人に我が松本安太郎氏がある。氏は神田區松枝町に生れ、明るい情操を多分に恵まれた生粹の江戸つ兒である。明治三十五年同志四名を糾合して現在の地へ伸銅工場を設けたが、財界不況の爲失敗して遂に解散の止むなきに至つた。然るに氏は大にこれを遺憾とし獨力を以て之を引受け、大なる決心と勇氣の下に自ら第一線に立ちて職工を激勵し、朝は未明より夜は深更に至るまで粉骨碎身の努力を續けたものだ。其奮闘が次第に酬ひられて、明治四拾三年の頃には針金工場をも併置し、職工六十餘名を入るゝに至り、家運隆盛に赴いたが、大正拾貳年九月の大震災に遭遇し再び起つ能はざるまでに大なる傷手を被つたのである。しかし深く胸底にひめられてゐた其の勇猛心は、苦難に逢つて再び猛然としてここに燃出た。そして大なる決心の下に一途に復興に向つて新なる努力が繰返へされて行つた。かくて氏の努力は遂に焦土の上に美しく芽ばえ、信用は益々厚く、業務は以前にも倍して繁榮を極め、忽ち職工四拾名を便役するに至り、家運は益々隆盛に起くやうになつた。かく氏の生涯は實に一篇の立志傳であつて、ただ稱嘆の外はない、殊に今日迄辿り來つた過去の道程が悉く努力奮闘によつて織り成されたるのを見て、益その感を深うする。氏は非常なる敬神家で、業務に従事する間と雖も常に信神を怠らず、使用人に對しても信仰なきものは何事もなし得ずと訓え、この信念を以つて勞働の礎として居る。福徳圓滿なる氏の相貌を見るものは誰しも氏に敬意を表せずにはゐられない。



矢部通男

明治十八年十二月八日生
淀橋町角管館岡二七三

靜かに物寂びた、そして懐古的なあの信州高遠の町は、思ふだに情緒床しい古驛である。名城の一と稱せられた高遠城の古趾に連つて押し重なつたやうな一劃の家並みに、婦人が曳くなる駄馬の行き交ふ街に、古びた店看板に昔ながらの佛を残してゐるものもなつかしい。遠く望んで東西駒ヶ嶽の雄姿が聳ゆる前には天神山五郎山などの翠嶺がやんわりと並び、鉾持棧道の峻を廻りて三峯川が白砂を洗ふあたりは繪にしても見まほしい風景であつて、其中につゞられる史上幾多の哀話など、流涕の佳人繪島が涙と共に盡きない。この情緒床しき地に生れた氏が、情操には、必ずや優麗温雅なるものがあらうし、又清澄明徹の才識もあらう。殊に彼地は早くより教育思想が進み、教育國と稱せられたる長野縣トにありても際立つてゐることとは出身諸先輩の多きに知られてゐる。従つて氏が亦早くよりこれ等諸先輩の後を慕うて學問に志し、高い理想にあこがれて來たのも故ありと知られる。かくて氏は郷里の學校を卒業して東京高等學校に學び、卒業して後先づ鐵道省に奉職した。以來精勵格勵を以つて一貫し、其間新橋工場、長野工場、大宮工場等に在動し、進みて盛岡工場長となり轉じて大崎工場長となり、十六年の長きを一日の如く精勵してよくその特異の手腕を發揮したのである。かくて其間に於ける功績は忽ち認められ、大正十四年三月には聘せられて東京市に入り、現職たる電氣局工場課に技師となり、工作係長として所管事業に執筆することとなつたのであつた。夫人幸子との間に二男四女があり、郷里の山川の如き靜謐なる家庭を營んでゐる。

福原篤造

明治廿一年一月十六日生
芝區白金志田町五一
電話高輪五八九一番

天は自ら助くる者を助けるといふ。自らの天祐を信じ、刻苦勉勵遂に今日の盛大を致し、斯界に名を馳せてゐる人に福原工場主福原篤造氏がある。長野縣下水内郡太田村は氏の懐しい産土の地で、幼時から才能業に優れてゐた。明治三十一年八月、いたいけ盛りの十歳の身を以て健氣にも故郷を後に上京して、某天幕製作所に入りて大に力める所があつた。氏は天幕販賣の傍ら各官省の御用商人として雜貨商を営んだ。後明治四十年バルブ水栓製作の將來益々有望なるに想到し、某バルブ水栓製作所に入つて只管技術の修練に力めたが、その其實實剛健なる性格は遙かに儕輩に抽んで、將來大に爲す有るの人として其前途を囑望せられてゐた。總て其の機運の漸く熱するに及び大正五年獨力を以つてバルブ水栓工場を開き、茲に多年の經驗と天賦の才能を發揮し、専ら之が經營に腐心してゐたが、偶々歐洲大戰の影響を蒙り、各種の輸入杜絶したので各方面の需用頓に激増し、家運は次第に發展の一路を辿つて行つた。かくて氏はその機運に乗じ、益々業務を發展せしめ、現在では職工八人に事務員を使用し、年産額は六萬圓を突破するやうになり、その製品は東京市水道局を始めとし、目黒水道部、澁谷水道部、江戸川水道部、東京瓦斯電気工業株式會社等何れも一流の官公衛社等に供給し、その堅牢にして精巧なる點に至つては遙かに他の製品を凌駕し、各方面に好評噴々たるものがある。氏は又營業の傍ら在郷軍人會組長兼評議員として努力し、少壯有爲の士として益々信望を加へてゐる。家庭にきん子夫人との間に女二人あり、圓満和樂をつづけてゐる。



小澤清次郎

明治十三年十月十八日生
赤坂區田町六の一番地
電話青山七〇三番

赤坂區會議員中の錚々たる人物として夙に名を馳せ、常に區政刷新の實を擧ぐるに奔走する一方、米穀商を營んで同業者間に重きをなして居る人に小澤清次郎氏がある。氏は生粹の江戸つ見として麴町に呱呱の聲をあげ學事修了後は家業に従事して父祖の後を繼承し、逐年繁盛を極むるに至つたが、偶々日露の國交破るゝに及んで氏も亦召集されて遠く滿蒙の征途に就き、騎兵第十四聯隊附第二軍に編入され、硝煙彈雨の間に馳驅して武名を擧げ、得利寺の激戦から大石橋、遼陽、沙河等の地に轉戦し、死地に出入して陛下の赤子たるの自分を遺憾なく發揮したが、和議成つて後歸國して再び家業の發展に努力することとなつた。かくて漸く家運繁榮に向ひ同業者間中重きをなすに至るや、氏の胸に宿つた溢るゝばかりの自治的觀念は、發して町政の上に現はれて種々の改善刷新の實を擧げ、早くも区内有爲の材幹として衆に抽んずるの概をなした。即ち除隊後直ちに同地在郷軍人會の發展に資し、爾來今日に至る迄己れの利害を没却して寄與する處多く、現在はその第二班長としての要職にあり、専ら後進の誘導、部員の統率等に奔走して居る。更に又這般の區會議員選舉に當つては、區民の懇望もだし難く、立候補して見事大多數を以つて當選し、多年體驗せる豊富なる蘊蓄を傾注して献策至らざるなき熱心振りを示し、全區民喝仰の的となつて居る。而も寛容なる性格、卓抜なる識見は斯界稀に見るの士にして、同區に於ける氏の信望は牢として抜くべからざるものがある。家庭には夫人との間に九人の子女を擧げて居る。

川合徳次郎

明治二十八年二月十六日生
東京府中野町本郷五六
電話四谷三〇三番

歐洲大戰勃發に伴ふ我が財界の好況は異常な高潮に達し、經濟界はために放漫奢侈に流れた所へ、戰雲終熄に繼ぐ大恐慌は海嘯の如くに襲來して大反動の影響はあらゆる方面に波及し、戰時中沖積した國富はまたく間に蕩盡された事は、當時世人の喫した痛い打撃であつたが、それは戦後數年今尙常況に復活したとも見えない。思ふに挽回の原動力は之を他に覺めやうとするもむづかしく、我が國産状態から推して當然かくあるべき既定の運命であつた。故に我が國富を養ひ民力を培ふには、消極的に各自の覺悟に俟つて勤儉貯蓄の外なしとし、近頃朝野盛んに之を唱導して居るが、惜しむらくは宣傳の聲盛んなるに引きかへて一般の覺醒のあまりにそき事である。我が川合徳次郎氏は之を痛惜して率先實行に志し、實踐方法として先づ親戚知友の間二十餘名と計り、會員組織に依る相互金融機關を興し、各自事業の助長を計るべく、一方に節約貯蓄して之にあつるの方を講じ、ひたすら以て實行にあたつて居るのは其の行や大とすべからず又奇とすべからざるものではあるが民業振興の聲高い折柄、其の意の存する所定に敬服にたへない。吾人は此際氏等の行動を賛して以て一般の覺醒に資し度いと思ふ。氏は中野町有数の有志で、常に各種の公務に任じ、町議としても數度當選して居り、抱負亦甚だ多い。氏は今や同町發展上道路の完備が最も緊要であるとして實現に力め、同町兒童教育機關完備の急務を説き、ひたすら期成に努めて居る。而立を出づる二歳の少壯有志、今後尙町事に寄與するもの多い事と推測される。園藝をよくし旅行を好む。



岩本元次郎

明治十二年九月七日生
赤坂區高樹町
電話青山一四三四番

氏は埼玉縣相模町の出身で、始め郷里の學窓に勉學する頃、生來才氣の煥發せるを痛く教師長上にあてられ、幾度か賞與に接すると云ふ良好な成績を示した事から自分でも學問に依つて立とうと願つた。だが儘に成らぬが憂き世の常で、氏の家庭の事情では到底それを容さなかつた。そこで獨學和漢の書を繕いて努力を果ねて居たが、遂に意をひるがへして實業界に志し、直ちに上京して事業に就き、僅かな資本を得て蕎麥商を思ひ立ち、現在の地にさゝやかな店舗を開いた。併し始めから着眼する所があつた氏は、種々の點に於て新しい手法を試みた。都人の嗜好に投ずる方法としては調理の外に原料の精撰に多大の注意を注ぎ、日を逐つて評判の高まるを得た。現在では斯界の一流まで漕ぎ附けて居り、同業組合常務理事として活躍し、共同の發展に致す所が多い。先年は副組長として組合協定の居るが、成る程一角の男は何れの方面に向つても發展の道はあるものと感心させられる。區會議員當選以來は公務に奉仕して一身を空しうすると云つた概があり、熱心に刷新改造の道を説いて克くその節を全うして居るの外、青年團副團長として指導に任ずる等、有力な有志の一人である。先年物價暴騰に際して制限法の發布を見た時、其の前哨行動に晝夜奮闘されたと云ふ功勞もある。亦彼の震災當時の救恤事業にも非常に熱心な働きを見せて居た。本年四十八歳の温顔の紳士である。

中村 餅藏

明治廿六年十月五日生
本郷區丸山福山町七番地

大正十二年秋の大震災は、諸自治體更新の端緒として多種多様な意味を持つものだが、なかにも市内各町會の組織化と機能の擴張とを招來したことは、特筆に價ひすることである。従來の町會は單に居住者の親睦を計り、冠婚葬祭等の一機關に過ぎなかつたが、震災によつて自治體それ自體の自發的組織化を誘發し、同時に事業の方面に徹底的な擴張を見たことは何といつても意義深いことだと云はなければならぬ。思ふに今後普通選舉の施行と共に、各町會の前途はいよいよ多事を加ふるものがある。こゝにわが中村氏の如きは、常にかうした持論の忠實な實行者として、つとに丸山福山町會々長として貢獻の多い人、君は明治廿六年本郷區丸山福山町に生れた。大正元年東京高工機械科を卒業して高田商會に入つたが、程なく獨立して向島に木工場を創設し、目下これが經營者として少壯よく經綸の才をふるつたが、嚴父の死に會つて、同工場を他に譲つて父の家を繼ぎ浴場を經營してゐたが、霸氣に富む氏の性質はこんな生ぬるいことでは満足が出来ず大正十四年、これを廢して、専ら實業方面に活躍し、傍ら公共のことにつくす身となつた。かくて丸山福山町會々長として同町の事務を統轄し、又國勢調査委員、震災人口調査委員、東京市勢調査委員、國勢失業調査委員在郷軍人會第八班長等、あらゆる公職について、明敏な頭腦よく衆を導き、輿望日に厚きを加へてゐる。寫眞に興味を有し、又城北釣友會及び、神田釣友會の幹部としてその牛耳をとるなど、多方面なる君の性格の反映を見る。



伊藤 平藏

明治四年十一月生
四谷區尾張町
電話四谷三〇〇〇番

ゴルキーと云ふ現代露國の著名な文豪は、ある時には汽車の踏切番として、又は船人夫として人生のどん底を流浪しながら、終にその偉大なる文才を磨き上げた。彼と氏とはその目的は異ふけれど、等しく磨かれた人生の下層を辿つて來た後、光輝ある表面に浮び出たその苦思には、泪ぐましい精進の跡が窺はれる。鎌倉のある貧しい農家に生れた氏が、家運の挽回を胸に抱いて上京したのは、年齢も行かぬ十一歳のころであつた。まづ氏は深川區高橋際の某呉服店の丁稚に入り、六年の歳月を忠實に見習つた。が不幸主家が没落したので止むなく故郷に歸つて、農事に従つてゐたが、再び十八歳の時に上京して四谷區忍町で、さゝやかな書籍賣りの露店を開いた。毎夜深更までも夜露にぬれて客を呼ぶ露店商人の悲哀は文字の如く街頭に嘆く苦難であつたろう。が百難を排して經驗すること九箇年間、次第に家事の殷盛を招き、明治二十八年に、書齋骨董商をも兼ねて店舗を張るに至つたのである。骨董商が順調に行くのでやがて同商を専業し、明治四十年には現在の地に、新裝の設備を凝らした堂々の店舗を構へ、尙古癖の愛好者をして垂涎せしめてゐる。なんと云つても長い間に亘つて、此の辛酸を嘗めつくした氏のことゝて、人情に敦厚であり營業が堅實なので、日一日と繁昌を示してゐる。今でも露店正道會々長としてその指導に努め、更に尾張町々會長として、また警察後援會理事に推されて民衆警察の實を擧げしむる等、聲援を惜まない。なほ四谷銀行取締役の重職にあり、かつ東京美術俱樂部取締役をも兼ね、實業界にも雄飛してゐる。

藤村 忠次郎

慶應元年十一月生
本郷區本郷四丁目二四
電話 小石川 二四五〇番

本郷で有名なものと云へば誰しも湯島天神、根津權現、帝國大學、一高、百萬石の前田侯を擧げるに違ひないが、これ等にも勝つて藤村の羊かんか羊かんの藤村かと云はれてゐる菓子舖藤村の名は天下の甘黨の間に喧傳されてゐる。本郷四丁目町會會長藤村忠次郎氏はこの有名な菓子舖の當主であつて、先代藤村忠右衛門氏の第二子として生れ、明治拾二年先代後彼の家の家業を承け、爾來菓子製造に努力し、歐米各國の科學の粹を探りて合理的な研究とその材料の精撰に力め、各種の珍菓を製造するに至り、特獨の滋味風味を以つて名物羊かんの名と共に各方面に歡迎され、顧客殺到し門前市をなすの盛況を呈し、御門先の加賀様は申すに及ばず、宮内省各官家の御買上げの榮に浴し、益々その盛名を天下に謳はれるやうになつた。氏は家運の隆盛を計ると同時に町内各種の公共事業に携はり、大に隣保共存の實を擧げ、大正十一年本郷四丁目町會の組織せらるるや、町民その功を思つて全町一致氏は町會長に推薦せられ、以つて今日に及んでゐる。氏は性來温厚篤實の君子人で、身を持つること篤く、人に接するに常に温顔微笑を以つてし人をして春風駘蕩の思ひにあらしむるといふ。實に氏の如きは町會の長老として眞に畏敬さるべき人物といはなければならぬ。今年耳順を越ゆると雖もなほ鏗鏘として意氣正に壯者を凌ぐものがある。夫人との間に三男二女があり、長男正太郎君は家庭にあつて氏の業を授け二男徳次郎君は菓子舖梅月堂を開き、同じく隆盛を得てゐる。積善の家に餘慶ありとは氏の家庭の如きを云ふものであらふ。

田口 精爾

明治六年二月十五日生
芝區三田小山町廿番地
電話 高輪 二四七九番

今や世界を通じて人道の名の下に自由平等の思想が高潮され、自由平等の精神を以つて世界は改造されなければならぬといふ主張や運動が、猛然たる勢ひを以つて頭を擡げて來た此の秋に當り、時流に迎合せず、その正反對なる不自由不平等を以つて人道の根本義なりと説き、差別善を以つて不動不拔の眞理と確信し、現代社會の迷妄と墮落と混亂とを根本的に救済するにはこの差別善の思想を實際に應用するに如かずとなし、或は講演會に或は著書に其所信を披歴して國民思想の善導に涙ぐましい程の奮闘を續けつゝある人にわが田口氏がある。氏は岐阜縣郡上郡平造村の人、幼時から儕輩に優れ、その將來を期待されてゐた。後岐阜師範學校に入り、同校卒業後東京高等工業學校に入學し、大に研鑽するところがあつたが、後大に鑑みる處あり、同校を中途退學し、明治卅二年牛込區築土八幡下に工場を設けて専ら墨汁製造に力を注いだ所、業績大に擧がり、遂に濱町に移轉し合資會社に改めた。大正五年現在の地に移り、資本金二拾五萬圓に増加し、年産額七十萬圓に達するの盛況に至らしめ、店員二拾餘名、職工六拾餘名を使用し、その販路は朝鮮、支那、南洋等の各方面に及んでゐる。その製造に係る墨汁は光澤絶美絶對に腐敗しないのが其の特長である。氏はかうして熱心に事に當ると同時に、専ら國民思想の善導に力を注ぎ、同志を糾合して思想統一協會なるものを設け、卓然設立時流に超越して多年の持論たる差別善を提唱し、自ら私費を投じて各所に講演會を開き、健闘大に力めてゐる。上杉愼吉博士、後藤子、山梨大將等も熱心な氏の後援者である。



竹中寅

明治十三年四月四日生
府下西栗鴨町池袋三家二三七

躬行實踐の人として現在東京市商工課勸業掛長の要職を占め、常に卓越せる手腕を以つて令名を馳せて居る人に竹中寅氏がある。氏は北陸福井縣福井郡丸岡町の人、幼にして進取の氣象に富み常に書を好み學を以つて將來成すあらんとしたが、不幸事志と違ひ、家庭の事情に阻止されてその雄志又空しからんとした。然るに先天的に氏に賦與された不撓不屈の精神は、徒らに事に當つて挫折するを屑しとせず、獨學を以つて身を立てんとし、日夜精勵寢食を忘れて勉學に没頭し、明治三十六年普通文官試験に應ずるや、蠶雪の功空しからず見事に合格し、年來の宿望は茲に於て漸やくその第一歩に達したのである。同三十九年氏は職を東京稅務監督局に奉じ、屬としてその敏腕を發揮し、漸やく認めらるゝに至つたが幾何もなくして宇都宮に轉じ、後再び東京に轉じた。その後木縣矢板稅務署長、同縣眞岡稅務署長、千葉縣北條稅務署長等に歴任して東京本局に入り、次いで大藏省屬として國勢院會計主任となつたが、國勢院廢止と共に職を退き、大正十三年六月更に東京市商工課に入り、席を庶務課に置き専ら木造建築の助成事務を擔任し大に手腕を發揮したが、十五年四月市の商工課に勸業掛が新設さるゝに及び、之が掛長として榮轉するに至つた。今や復興途上の帝都に於て低利金貸下げ事務の如きは殊の外繁雜なものであるが氏はその掛長としてよく、事務の進捗を圓滑に計つて居る。氏はかうして繁雜なる事務を擔當すると同時に一方に於ては信用組合の統一をも行ひ着々業績を擧げてゐる處を見ると氏の八面玲瓏たる材幹を認めぬ譯には行かない。

外山文藏

明治元年七月生
芝區芝浦町二の四番地
電話 高輪 三一六〇番

渺々として展開する東京灣を隔て、遠く房總の連山を前面に望み、巍然として聳ゆる大廈は行人をして歩を止めしむるの結構あるが、これぞ芝浦不帝都を代表すべき華たり名物たる『いけす』である。二百萬市民の何れもが芝浦の名を呼ぶ時『いけす』を聯想せざるものなき程に其の好評は汎く認められて居るが、之が經營者こそ父祖三代の業を繼承した外山文藏氏である。舊幕時代より己に一流料亭として都人士の口に喧傳されてゐたが、氏に至つて其の名聲頓に加はり、今や其の組織を革新し、資本を集中して五十萬圓となして合資會社を設立し、あらゆる文化の粹を聚め、設備の完全と、出來得る限りの安價と、清新なる料理等夫々の特徴を以つて益々都人士の好評を博し、大小の宴會或は冠婚祭儀等に各階級を通じて連日數限りなく利用されて居る。而かも尙之を擴張して別館を芝浦海岸に、支店を五反田驛前天現寺、濱町等に置き、配するに親族縁戚を以つてして自らは社長として指揮鞭鞭に努めて居る。尙氏は巷間見るが如き單なる料亭の主人でなく、其の溢るばかりの自治的公共的觀念を以つてよく町政其他に盡瘁し繁劇なる業務の餘暇、或は花柳界の指導者となり、或は芝浦漁業組合の顧問に推され、更にも芝浦青年團長と仰がれる等枚舉に暇なき程幾多の業績を残して居る。而かも眞摯にして圓滿なる人格は各方面から喝仰の的となり業務の發展と共に圓熟の域に達した技能は益々芝浦町の將來に資せんとして居る。氏は郷里を埼玉縣とし安齋利兵衛氏の長男として生れたが、外山家の養子として迎へられ、明治十八年入つて其の家督を相続するに至つたのである。

山崎犀二

明治十七年七月廿日生
豊多摩郡野方町上新井六四九

鯨の惡戯と土龍のたはむれ——前者はかの關東の大震災をさし、後者は最近東京市内に絶えず演ぜられてゐる掘り返し工事を諷刺したものである宛かも古戰場の如く、百千の土工によつて掘り返し工事が演ぜられ、雨の日の泥事は膝を没し、風の日の黄塵は咫尺も辨ぜぬ程で、狹隘なる惡道路には緒土堆高く積み上げられ、又鋪石は所狭きまでに散布して、一層の雜關を啖り、片側通行禁止、假停留場の設置等のみ多く、東洋の巴里を以て自任する帝都も、今や神經衰弱病者發生地となつて了ふかと思はれるやうになつた。元來道路は市の動脈であつて、これが完成によつて市民のうける利益の大なるものあるはいふまでもない。而も現在の東京市はかゝる不始末を震災以來三年に亘り、一日も缺くことなく演じてゐる。そして市民の非難の聲は日とともに高まり、市道路局をのしり、復興局に對する怨嗟の聲はますます高められてゐる。こゝにこの非難を一身に背負つて立つ人に市道路局庶務課長山崎犀二君がある。氏がこの四面楚歌の間孤軍奮闘をつゞけて只管これが完成を期する不斷の熱心さを思ふとき、吾等君に對して一言半句の非難も口にし得ぬことを君のために辨じたい。敢てこの稿ある所以である。君は岡山縣の出身、上京して日本大學に學び、卒業後官界に身を置くこと十年、佐賀、宮崎、愛媛の各縣に理事官として歴巡し、先頭市に聘せられて道路局庶務課長の椅子に就いたが、私學出の君にして何等他に遜色あることなく、この重責に任するあたり、何といつても異數の人材として推奨するに足るものがあるのである。

井上治三郎

明治五年九月十五日生
淺草區阿部川町
電話淺草一八四七、一八四八

方今我が國の風潮動もすれば西歐文物の皮相に心酔して、帝國古來の良風美俗あるを忘れ、浮華輕佻に流れ國體の精華を顧みず、淺薄の風習に感染して三千年來の歴史を思はないものを輩出するに至つた。念へば邦家の前途轉た寒心に耐えないものがある。此の時にあたり衷心此の惡風を退け、孜孜として良風美俗の涵養に努め、隣保扶導の任にあたるの人に淺草區方面委員の井上治三郎氏がある。氏は攝津西の宮の人、明治三十四年雄志を抱いて上京し、現在の地に居を構へて、襖紙類の小賣商を營んだが、爾來二十有餘年間専心事業に勵精し、當初さ、やかな商舖をして日を逐ふて發展の域に進ましめ、汗と膏の結晶を以て遂に今日同業者中屈指の地位にまで辿りつく事を得しめたのであつた。氏は此の緊張しきつた生活の間に、尙町内公共の爲めに裨益する事を忘れなかつた。そしてさきに阿部川町々會組織の必要を唱へ、有志の士と共に奔走して相互親睦機關の設置を實現して多大の功勞があつた。氏は亦共積信用利用組合なるものを組織し、勞働者無産階級の人々のために住宅を提供して、生活の安定に資せ様とし、大正九年以來その把持提唱し來つた社會事業の急務を實現したものである。今や組合員の數百數十名に上つて居り、氏の熱心なる努力を扶くる隠れたる功勞者神谷松之助氏が其の事務を擔當して現今に至つて居る。先般東京市が社會事業の一として各方面の有力者に託するに方面委員を以てするに方り、氏は選ばれて其の任に當つたが、其の熱心周到なるは一般に畏敬されて居る。夫人やま子氏との間に五人の子女がある。



直木倫太郎
明治九年十二月生
小石川區原町一〇二番地
電話小石川五九三二番

あの前古未曾有の大震災後のわが東都も、着々として復興途上に在るがその成果の如何は一に直接に業務に關與する爲政者にある。わが直木倫太郎氏はこの重要な位置に推されて、曩程まで復興局長官として縦横の才腕を振ひ、第一期の復興事業を完成して、永久に東京市史上に特筆すべき人物だと云へる。氏はその著實性を以て知られてゐる兵庫縣の出身で、兵庫中學校を卒へてから第三高等學校に學び、更に東京帝國大學工學科に進んで土木學を専攻したのである。明治三十二年七月に優秀な成績で卒業し、官界の人となると、明治三十四年には早くも築港視察の爲に歐米出張を命ぜられ、約三箇年に亘つて先進國の科學的築港術を研究し、歸朝して同三十七年に東京市河港課長に擧げられ、その蘊蓄を傾けて河港改修にベストを盡した。轉じて大藏省臨時建築部に木工課長として敏腕を鳴らし、更に東京市下水課長に就任、その間の大正三年に、下水道に關する論文を提出して工學博士を授與され、翌四年内務省技師となり、同時に帝國大學工學科講師をも拜命した。次いであの難職を以て知られた大阪府の築港部長兼都市計畫部長として赴任、後再び官命を帯びて歐米に出張し、大正十年倫敦で開催された萬國都市計畫會議に出席し、我國のため萬丈の氣を吐いた。同十一年には支那に出張して同地の都市状態を研究し、層一層蘊蓄を廣め、十二年に技監となり、翌十三年復興局長官に推され、大正業を統督したのである。現在では職を退いて靜かに英氣を養ひ、來るべき日に備へてゐる。隣子夫人との間に八男二女があつて家庭的にも清福に恵まれてゐる。

河合忠兵衛

明治六年一月生
淺草區並木町五
電話淺草三二八〇番

昔、文化のころ君が幾代かの祖先某氏が、現淺草の地を下して刀劍類の製造に従事して、旗本相手に名をなしたのが、抑も今日あるはじめであつた。こゝに數世を経て今日に及び、今の打刃物器械工具の製造、並びに卸賣商井坂屋本店の名あるに至つた。先代忠兵衛氏は子なく、當時近隣に住める知人脇坂忠右衛門氏の三男堅藏氏を迎へて嗣子としたが、即ち現主忠兵衛氏である。氏は明治六年の生れ、三十五歳の砌り家督を相續し、前名を改めて忠兵衛を襲名した。今や井坂屋本店の名は銅鐵業同業者間に噴々たるものであるが、これみな一に懸つて氏の努力の賜物といひ得る。そしてその間の苦心と努力とは、それはとても、筆舌にはつくし難いものがあつたのである。氏が、全身これ熱のかたまりの様な感じのする人であつたら、父君の名を辱しめずして家産をなすに至つた、一方氏の胸に鬱勃として高鳴る、愛町の誠心は、家業をなげうつても尙且つこれにつくすの概があつた。震災前の町會設立當時の如きも、これが奔走斡旋に目も足らぬ有様であつたから、こゝに町會の設立を見るに及んで、並木町に會長の要職に推された。宜なりといふべきであらう。その他國勢調査員、市政調査員として又公事に盡瘁して些かも倦むところなく、献身誠意のほとばしる所、町民の渴仰して措かぬ所である。氏今や齡知命を越え、思慮正に圓熟してゐるから町内自治の爲には更に一層の加ふる所があらう。家庭には夫人との間に子寶なく、養嗣子平六君を迎へ、目下府立第七中學校に在學中であるが、又俊才として前途を囑されてゐる。



福井正太郎
明治十六年十二月二十三日生
東京市牛込區横寺町四二

氏は奈良縣北葛城郡高田町横大路に生れた。明治三十六年遠大の理想を抱いて東京に出で、私立東京法學院に學んだ。卒業後、明治四十年九月文部省大臣官房會計課に入つた。かくて氏の社會的生活への第一歩は踏み出されたのである。それから大正六年より大正九年十一月まで、東京、京都各帝國大學經理委員會の事務を拜命し、其間大正八年には文部省臨時教育委員會の書記ともなつた。大正九年十二月には東京帝國大學經理課委員の委員に任ぜられ、大正十一年都市計畫部地方委員となつた。大正十三年には東京屋製藥會社に入り、實業界方面に踏み出したが、氏の十數年に渡る永い官吏生活から、かうして民間の會社に入つた事は、氏の心的生活に幾分の變化を來した事は事を語るもので、星製藥株式會社業務取締役となつた。併し氏はやつぱり官公界の人であつた。大正十四年十一月には又東京市主事となり、十五年には東京市保健局庶務課主計掛長を拜命し、同年の三月は早く保健局庶務課長たる現職の榮冠を勝ち得るに至り更に同十年一月清掃課長を兼務し今日に及んでゐる。成功は努力の賜である。天才といへども決して只天性の力によつてのみ得らるゝものでない。そこには唯奮闘、進取の精神が常にその人を驅り立てなければ、天性なる玉もいたづらに一魂の石ころとして世人から返り見られないでしまふ。氏が今日の地位を贏ち得たのも全くその精勵恪勤の致す所であつて、そこに氏の經歷の凡ならざるを見るのである。氏いま年齒まさに熟してゐる。その手腕は尙大に期すべきものがあらう。

合田鶴次郎

明治二十九年十二月六日生
小石川關口水道町三〇
電話牛込 一三一三番

若くして秀才の譽高く、社會に出で、益々その敏腕を顯はれ、行くところとして可ならざるなく八面玲瓏たる材幹を以つて稱せられてゐる人に、現在東京市電氣局工務課庶務掛長合田鶴次郎氏がある。氏は香川縣丸龜市神樂坂町の人、明治二十九年十二月二十八日此の地に呱呱の聲を擧げた。幼時よりその才業に優れ、中學を終へ、高等學校に入るに及んで益々その眞價を發揮し、曩中の雜學その鋭鋒を現はして嶄然として頭角を抽んでゐた。後東京帝國大學法學部獨法科に學び、大正十年登壇の功空しからず優秀なる成績を以つて同科を卒業し、直ちに選ばれて三井倉庫株式會社に入り、斯界の實際につき研究するところがあつた。後同社を辭し、大正十一年十二月市電氣局經理課に入つた。同課にあること四年、その間諸般の事務に通曉し、その才能を充分に現はして課内にあつて名を負ふに至り、同拾五年特に選ばれて工務課庶務掛長となつて今日に及んでゐる。かく氏は、市に入つてから僅々四年の間に現在の地位を得、異常の昇進振りを見せてゐるのであるが、これによつて將來を推せば、その前途は實に洋々たるものがある。氏は又頗る多趣味で、撞球・圍碁・長唄等をよくするのとこで、特にその撞球と長唄はアマチュアの域を脱してゐる噂が高い。家庭に夫人たみ子、二女八重子がある。夫人は法學博士井上辰九郎の令嬢であつて、特に氏が秀才なる故を以つて法學博士添田壽一氏がその媒介の勞を取つて配されたものだと言ふ。爾來琴瑟相和して鬻々たる家庭をなしてゐる。

勝野勝

明治二十四年一月生
芝區西久保城山町十
電話 青山 四九一四番

「本會は佳いとこ住みよい所」と但語で知られたあの仙境は、他郷の人をしてどれだけ心地床しく感ぜしめる事だらう。そして、その秋の一日を木曾路の旅に費さんが、四面に眺めらるる峯の錦、其の野火にも似たる満山の紅葉の間に隠見する木曾の棧橋、下瞰すれば紺碧の潭に奇岩屏立する寢覺めの床、それ等数知れぬ名勝奇景が、古來いかに人々の情操を豊かならしたものであらうか。こうした仙境木曾福島は、氏の誇るべき故郷なのである。自然の環境よく人を陶冶すとか、宜なるかな氏の性格が清朗典雅なるや。父君を鐵砲藥業地金の發明者として我が軍事上の大恩人である勝野松次郎氏とし、母堂亦嘗て愛國婦人會幹事として令名を誦はれた賢夫人であつて、氏は兄妹四人の中に生れたのであるが、早く父君を喪ひ令兄亦夭折したので、二妹と共に織物き母堂の手に人とならねばならなかつた。夫人は苦境にあつてよく子女の鞠育につとめ、氏亦人となり聰明、麻布中學を卒へて二高に進み、更に東大法科に入りて大正八年校門を辭するや直に三井物産の招聘に接した。併し牛尾となるよりも鶏口たらんと志した氏は、當時創立された日英醸造會社に入り、後退いて日本採石會社に取締役となり、更に三谷株式會社の海事部長に任じ、兼ねて近東商會相談役として専ら事業界に調歩し、素晴らしい精力を揮つて今日に及んで居る。氏は又曩に大多數を以つて區會議員に當選し自治政の發展に寄與する處多く、活動性に富んだ社交家である。書畫・運動・乗馬・謡曲・撞球等趣味豊富で、信仰篤く神道を奉ず、令閔をきくと云ひ一男二女がある。



阪東義三

明治二十七年一月二日生
芝區芝公園十四號地

大正十二年の大震災は、あらゆる方面に刺戟を與へて幾多の改良を促すに至つたが、就中建築界には殆んど革命的の衝動を與へた。此活きた教訓に基き一般に從來の木造建築から目覺めて漸次耐震耐火的建築に改められつゝある。我が東京市の小學校建築も之に則り各所に工を起して一路復興へ邁進してゐるが、現にその衝に當り、深遠なる學殖と卓越せる手腕とを以て令名を馳せてゐる人にわが坂東義三氏がある。氏は北海道小樽市を其懐しい捕鯊地とし、幼い頃から數理に秀で、明智なる頭腦の持主として讃へられてゐた。長ずる及んで學序を逐ふて東京帝國大學工學部建築科に學び専ら斯業を専攻して幾春秋を累ねたが、當時氏は雄辯部の主腦者として大に熱辯を揮ひ、其明るい性格と相俟つて盛んに學友間に持て囃されたものだ。かくて大正九年優秀なる成績を以て校門を辭するや直に技師として職を東京市建築局に奉じ、茲に公的生活の第一歩を踏出したのであつた。以來翌年の蘊蓄と天賦の才能を發揮して學校建築の設計並に工事監督に任じ精勵今日に及んでゐるが、斯界の重鎮として令名を恣にしてゐる佐野博士や、佐藤博士などが、何れも氏の近親に當つてゐる處を見ると、氏のかうした才能は或は先天的に恵まれてゐるのかも知れない。此資性潤澤常に正義の觀念に燃えあらしめる情實に超越し、斷々乎として自己の職務を遂行する處に氏としての偉大さがあり、人格的閃めきがあるのである。家庭には兩親の外夫人光子と二女がある。

水谷嘉市

明治元年四月十一日生
麻布區霞町十九番地

動もすれば浮華輕佻に流れんとする現代に際して職を育英の業に奉じ、一面共榮共存の自治團體のため奔走して知られてゐるのは、わが水谷嘉市氏である。氏の思ひ出多い故郷は兵庫縣神戸市で、幼ない頃から忠君愛國の大義に目覺め、軍人になつて祖國を泰山の重きに置くのが唯一の宿望であつたと云ふ。かくて明治二十七年には日清の役に出征して、鷄林の地は勿論胡砂吹く南滿洲の各地に轉戦し、更に故北白川宮に供奉しては征臺の軍に従ひ、赤道直下の灼熱の地で兇惡な蠻民平定の爲に療勳の地に轉戦したのであつた。越えて日露戦役が勃發するや、再び南北滿洲の荒野に出征し、遼東の一角大孤山に上陸してからは、最も激戦を以つて知られてゐる遼東、沙河、奉天の戦ひに参加し、拔群の功によつて歩兵中尉に任ぜられ、勳五等に叙せられ、更に數度征戰の功により特に功五級金鷄勳章を下賜せられ正八位に叙せられた。軍籍を退いて後、東京府立第一中學校生徒訓練係として赴任したのは明治四十四年の三月であつた。以來今日に至るまで實に十有六年間、日夜營々致々として専ら生徒の薰陶に任じ、能く一校を醇化し、綱規の嚴峻にして恰も秋霜烈日の如き觀あるを得たるは、一に氏の高潔至純なる人格の反映とも云ふべきであらう。しかも氏はこの多忙な教職の傍ら刑務官練習所の講師を兼ねて誘掖至らざるなく、又現に霞町々會の副會長として自治政の發展に努力してゐる。斯く氏が終止一貫常に至誠を以つて事に處する所以のものは畢竟、皇國のために盡す赤誠の迸りだと云はずして何であらう。

松浦龜吉

明治三年八月三十日生
芝區金杉澤町六十七番地
電話 高輪 四三八八番

氏は岳南の長汀曲浦の麗しい海濱に近く、その勝景を賞でられてゐる静岡縣は駿府の出身である。駿府と云へば慶安時代に由井正雪を生み、其他英傑が多く輩出した所である。徳川家康も晩年をこの地で送られた。この環境に育てられた氏が凡骨でないのを見ると、自然と人物との微妙な關係を思はずには居られない。氏は十四歳の時に上京して神田の高等馬車製造會社に勤め、その後轉じて石川島造船所に入つて鐵工の技を習得したものである。かくて長い間、轟々たるエンジンの響きと鐵火の下で腕を磨いた氏は、遂に芝區櫻田備前町に獨立して鐵工所を經營した。その營業の堅實と技術の優秀とは瞬く間に社會の信用を博し、業績は日に日にあがつて行つた。かくて擴張に次ぐに擴張を以つて、明治二十九年現在の場所に工場を新設し、砲兵工廠、海軍工廠、陸軍衛生材料廠に納入する馬具や工具の製作に従ひ、家運は年と共に繁榮に赴いた。然し人一倍進取的の氣象に富んでゐる氏は到底之を以つて満足せず、更に百尺竿頭一步を進めて遠く滿洲、北支那地方を具に視察し、別に旭鐵工場を異郷の都、天津に經營するやうになつたのは日露戦争直後のことであつた。以來銳意之れが經營の衝に當り、今では押しも押されぬ同業者間での重鎮となつてゐる。そのかみの一鐵工にして今此地に至る、以て人間努力の好教訓となすべきである。一方氏は社會的事業と自治に努力し、東京市方面委員とし、さては曩に國勢調査員として、または金杉濱町々會創立の産婆役等を勤め、其の人格の高潔と仁俠の義氣とを以つて町内の敬慕を受けてゐる。



丸井熊吉

明治元年九月五日生
本所區横川町五十一番地
電話隅田一三二〇番

わが丸井熊吉氏は山口縣の出身である。防長人と云へばその精悍な氣宇と不屈な勇猛心を以て知られ、一度義憤を感じれば死をだも回避しない熱情を秘めてゐると稱されてゐる。嘗て高杉東行を生み吉田松陰を出した防長の歴史は、なんと云つても他地方に誇るに足るものである。この自然に生を受けた氏が、亦弱冠の頃雄圖を抱いて東都に出で、立身の地を求めたのは明治二十九年のことである。氏は直ちに菊川町松本工場に入り苦辛中、不幸にして病を得たので、醫師の勧めによつて北海道に渡り、同地の硝子工場に入つて精進したが、大正二年、病の癒ゆると共に再び上京し、猿江裏徳衛門町の某硝子工場に入り、専ら技術の習得に力めた。居ること數年遂に大正七年獨立して本郷區横川町五十一番地に硝子工場を創始するに至つたのである。防長の先輩が主に政界や官界に雄飛したのに對し、氏は赤手空拳を以て實業界へ乗出した譯だ。やはり痛快兒だとせねばならぬ。創業當時は使用人等も少く、工場の設備も甚だ不完全であつたが、製品の優秀である事とその圓滿なる人格とが日一日と業績を擧げ、多數の後援者まで現はれ、今日の繁榮を招來するに至つたのである。特に硝子製コップの如きは、その精巧なる點において他にその比を見ないとまで激稱され、販路は遠く支那、印度方面にまで及んでゐると云ふ。一方氏は隣保共睦に心を碎き、横川町々會副會長に推されて町民のため不斷の福利を計つてゐる。ただ哀悼にたえぬのは、かの震災のため愛妻を失つたことで、今では只管二男一女の成長を楽しんでゐるとか。氏のために多幸を祈る。



増川市右衛門

明治元年四月六日生
芝區豊岡町

氏の高祖父は七右衛門氏と云ひ、一刀流の劍客として幕府當時に鳴らしたもので、道場を今の三田聖坂下に開いて門弟の教授に尊い一生をさしげてゐた。曾祖父市右衛門氏は、父の武藝者なのとは全々正反對に藝術的良心に生き、幼ない頃から彫刻を好み、當時の巨匠出目の弟子となつて面の彫刻に天才的な技倆を示した。更に祖父の金五郎氏は左官屋として一介の職人にすぎなかつたが、非常に義侠心に富み、數多い職人を使役して、幕末盛徳の際にも僅に一家の業を樹てゐると云ふ。かく皆一角の識見なり技倆なりで鳴らした人ばかりを先祖に持つ氏はやはり凡骨ではなかつた。家業は父の左官職を襲ひ、明治十三年に現在の場所に移轉したが、何處となく一風變つた氣骨は常に同業者間に頭角を現してゐた。大の日蓮宗信者で、その信仰心の強固なことによつて、同じ信者であつた故村上大將や佐藤中將等の推稱を受け、殊に上村大將は何れとなく氏の面倒を見て、その愛用品をまで分與したほどだと云ふ。かくて氏は同業組合副會頭に推されて同業者の福利増進につとめ、非常に尊敬せられてゐると共に、豊岡町々會副會長とし、また青年團理事長として、あるひは町民の共榮のため、あるひは後進の善導に、息もつかぬほどに多忙な世話ぶりを示してゐる。あの關東大震災直後の如きにあつて、九月一杯は町内の救済に、十月中は同業者五百名の罹災者のため、家産を傾けてまでに救護の實を擧げたことは今もなほ世人に傳へられて美談とされてゐる。まことに當今には得難い仁俠の人だと云はねばなるまい。

松浦清吉

明治十三年三月一日生
下谷區龍泉寺町三七六
電話淺草五六〇四番

美術工藝はわが國古來からの長技であつて、歐米の先進國でもその技工を模倣することの出來ぬ獨特の妙所がある。特に明治維新以後西歐の文化が輸入せられてからは、咀嚼力に秀でてゐるわが國民は、かの地の長所を採つて巧みに之を同化し、益々その精妙を發揮するに至つてゐる。寫眞技工の如きも儘かにその一例であつて、従つて之に附屬する諸材料の製造業の如きも一段の精巧を得てゐる譯だ。わが松浦清吉氏はその間に在つて寫眞臺紙の製造に従ひ、聲名を擧はれてゐる人。生れが京橋區入船町と云へば純粹の江戸つ子である。小學校を卒業後は、吳服町に在る野木氏經營の工場に入り、専心臺紙製造の技工を修得するに至つた。後兵役に服して日露戰爭に従ひ、湖北の地に轉戦したが嚴父は不幸にして氏の出征中病を得て長逝した。有爲轉變は世のならばとは云へ、遠征の途上遙かに一家の悲運を回想した氏の胸底さぞかしであつたらう。歸國後野木氏がゴム會社を創立するや、その片腕として工場の監督に従ひ、精勵すこしも倦むところになかつた。三十歳の時に野木氏の諒解の下に獨立し、多年の宿望たる寫眞臺紙の製造を開始するに至つた。ところが氏の洗練された技工は、忽ち美術工藝品として聲價を高め、今では年額十萬圓、使用職工二十餘名に達し、販路は静岡以東、北は北海道から樺太にまで及ぶの盛況を呈してゐる。長男清雄君は第四中學に、長女けい子嬢は津田英學塾に、次女靜枝嬢は女子商業を卒業し、何れも秀才才媛の譽れが高く、夫人はつ子亦淑徳の良妻として知られてゐる。

源小太郎

明治四年八月二十七日生
本所區菊川町二の七四番地
電話本所二九七一番

遠い洋上に浮ぶ八丈ヶ島は氏の出身地である。島も通はぬ八丈ヶ島と、そのかみの小唄に詠はれてゐるが、現實の島はその豊穡なこと此世ながらの極樂淨土だと云はれてゐる。それに同島には、その中原の鹿を逐ふて破れた幾多の武夫が、悲憤やる方みく流滴されたものである。この由緒ある土地に生れたのが氏だ。氏が現に製材機械製作工場主として使用従業員五十餘名を超え、本所菊川町に大工場を設けて斯界に重きをなすと云ふ豪勢ぶりを見、そのかみの氏の祖先が、かの鎮西八郎爲朝であると聞いては、誠に宜なりと云ふべく、弓の猛者たりし爲朝の子孫にしてこそ、今日この大成功の金的を射止めることが出來たのだと考へさせられる。氏が青年の心を抱いて島を後に上京したのは明治二十一年の頃で、當時十九歳のとき、二十一歳の春から機械工業界に志したのである。最初は實地修得のため横須賀造船所に入り、それより越中島造船所に轉じ、苦酸を重ねること十餘年にして、明治三十八年獨立して深川區西金井町に工場を設け、更に明治四十五年現在の場所に工場を新築し、製材用諸機械の製作に従ふやうになつた。以來業績大に見るべきものがあつたが、彼の大正十二年の大震災に遭ひ、家財を擧げて悉く島有に歸せしむるに至つた。然し氏の不退轉な勇猛心と復興經營の宜しきを得たことによつて、瞬く間に以前に倍する殷盛を加ふるやうになつた。家庭には夫人たつ子との間に一男順弘氏があり、目下早稻田大學にて秀才の譽れがある。



島 多 郎

明治九年五月八日生
浅草區地方今戸町八番地
電話浅草一二二一番

その昔、仰着金葵照碧空。城南門外踏長虹。裾袂絡繹趨涼到。九十九橋
明月中。と詠ぜられ、天下の名橋として東遊記に其名を記されてゐる福井
市の詩趣豊かな九十九橋の町は、氏の嚴父島多郎氏の出生地である。先代
は明治初年に江戸へ上り、明治七年頃に牛乳商を営んでゐたが、不幸中途
で長逝したので、現代島多郎氏が僅か十九歳で先代を襲名して、その家業
を継いだのである。そして今では府下南足立郡西新井村に廣大な牧場を
經營し、百頭内外の牡牛を飼養して、日に月に盛況を極めてゐるのは、氏
の勤勉と努力とを最も雄辯に物語つてゐる。氏はこの繁忙な間に在つて志
を自治の進展に致し、あの附近七ヶ町の聯合町會の組織に際しては、率先
してその輿論の喚起につとめると共に、町内衛生の方面には特に意を注ぎ、
あの蠅取デーと云はれてゐるのも、氏が町内で行つてゐた試みだつ
たとす。公職として東京市方面委員の外に、浅草區會議員、借地借家調
停委員、借地借家鑑定者、第四十地區々劃整理委員、地方今戸町々會長、
曰く等々と數へきれないほどの多くを持つてゐる。これこそ如何に氏が衆
望を負ふてゐるかの立派な證據であつて、その手腕のほども察せられやう。
また町内の青年團や軍人の顧問にも推されて、後進のために啓蒙するとい
ふが尠くないとは驚くべき精力家だといへる。夫人や子も是れは精進の妻とし
て淑徳高く、現に四十有餘名の使用人を巧みに制御して、家業に勵んでゐ
るとは、當世には得難い女性であると共に氏が多方面の活動もこの夫人の
内助によるものが多い事が知られる。

國 領 吉 太 郎

明治十一年十月四日生
赤坂區表町二丁目
電話青山五六二〇番

近來共存共榮を目的とする町會其他の自治團體が到る處に設立せられ、
日を追ふて漸次健全なる發達を遂げつゝあることは、邦家の爲に喜ぶべき
現象と云はざるを得ない。元來此町會は震災以前迄はその數に於て力に於
て頗る微々たるもので、殆んど其存在をすら疑はれる位であつた。然るに
市民は震災の大なる教訓に刺激せられ、必然的要求から俄然町會の勃興を
見るに至つたもので、今日では前政友會總裁高橋是清氏を始め、江木司法
大臣、前東京市長阪谷芳郎男等、一流の名士も町會の主腦者として自治の
發展に嚮導してゐることは、復興途上にある東京市の爲意を強うするに足
るものである。我が國領吉太郎氏の如きも之に洩れず、現に墨表商として
實業界に重きをなしてゐる傍ら、赤坂表二町々會副會長として絶えず献身
的努力を續けてゐる。氏の率ゐる表二町會は、會員相互の親睦と福祉とを
増進し、町内自治の發展を圖る爲に生れたもので、住居交通の安全に關す
る一切の處理を始め、公達の周知、公共衛生の保持、公私吉凶の慶弔、兵
役の獎勵、祭禮の施設、夜警、非常事變の救済、等の諸事項を遂行してゐ
るが、町内いと圓滿に著々其實績を擧げつゝあることは、亦氏の高潔至純
なる人格の反映と見ることが出来る。氏は明治十一年十月四日滋賀縣愛知
郡葉枝見村に生れたが、氏が墨表商として現在の地位を築き上げる迄には
人知れぬ幾多の苦心と努力とが秘められてゐることは云ふ迄もない。當年
四十有九歳、眞に男としての光を發するのは是れからである。幸に健康を
祈る。



米 谷 留 太 郎

明治十二年十二月七日生
府下豊多摩杉並町馬橋三六〇

本州の最北端、激浪荒れ狂ふ大洋に、握拳の如く突き出されて固く陸奥灣
を抱きかゝへてゐる青森縣下北半島の田名部町は、東京市の經理課檢査掛
長たる米谷留太郎氏が出生の地である。氏は明治十二年十二月七日を以
つて、此の地に呱呱の聲をあげ、吹きさらさぶ吹雪と、山なす激浪とに身心
を鍛へつゝ成長して來たのである。大自然は人の心の中へ、絶えずその特
質を印影するものである。氏のかうした自然よりうけたものは、第一に克己
である、そして情熱であり、不撓不屈の精神であつた。それが向上進取の
氣性と相まつて、少年とも思はれぬ様なしつかりした理想を抱き、それに
向つて進むべく決心した。かくて氏は先づ津輕海峡の彼方の未開の地北海
道へ遙に思ひを馳せ、そこに名を揚げんとした。そして宿望叶つて渡航した
のは明治三十年の事であつた。氏は先づ縁故を辿つて古平郡に行き、郡内の
或町の役場に入つたが、其の翌明治三十一年には小樽支廳第三課農業係と
して此處に勤務した。此處に於て氏は勤勉大に盡す所であつたので、明治三
十六年二月選ばれて司法省へ出仕を命ぜられた。當時學の必要を痛切に感
じた氏は、司法省に勤める傍、學を法政大學專門部法律科に受け、明治三
十八年七月にはこれを卒業した。大正三年七月には會計檢査院第二十二回
統計取調委員となり、大正十三年六月、轉じて市役所に入り、經理課の主
事となり檢査掛長に任ぜられた。氏資性硬直にして思慮周密而かも精力絶
倫にして、明晰なる頭腦を有してゐる。今後の發展は期して俟つべきもの
があるであらう。



荒 川 秀 士

明治二十年十一月生
本郷區湯島下三組町八十壹
電話 浅草 六六七五番

氏は山口縣玖珂郡清生村の人、幼にして父兄と共に北海道に渡り少年期
をそこに送つたが、教育者たらんと志して同地の厚田師範學校に入學し、
明治四十二年同校を優秀なる成績を以つて卒業し、厚原田尋常高等小學校
に教鞭をとり、同地の國民教育に資することが多かつた。在職四年、氏の
燃ゆるが如き向上心は氏をして永く此地に止めしむるにはあまりに高かつ
たので、遂に意を決して東都に遊び、將來實業界に雄飛せんと欲し明治大
學商科に入つて琢磨の功を積み優秀なる成績を以つて卒業するや、大正七
年東京瓦斯電氣工業會社に入社し、大に新進氣鋭の手腕を揮つて同社の爲
に大に盡すところがあつた。居ること三年、大正十年鑑みる處あつて同
社を辭し、後洗濯業の有望なるを思ひ、現在の地を卜して洗濯業を開業す
るに至つた。之れ實に氏が獨立して活社會へ踏出した最初の一步で、高等
教育を受けながら自ら好んで實業に身を委ねたわけであつて、創業當時の奮
闘は實に涙ぐましい程であつた。然し其勤勞は應て酬ひられ、業務は目を
追ふて順調に發展の一路を辿り、今日では十數名の雇人を使用するの盛況
を呈してゐる。氏は又繁忙なる業務の傍ら町政の發展に心を砕き、隣保の
親善共榮に寄與する處極めて多く、大正十一年湯島下三組町々會創立せら
るるや、特に選ばれて常任幹事となり、町内の衛生其他の改善に力め幾多の
功績を齎してゐる。氏人と爲り高潔にして實行力に富み、敢爲の氣性を具
へてゐる。趣味としては運動繪畫を好み、繪畫は特に岡田三郎助畫伯に師事
して丹青を凝らしてゐると云ひ、夫人を節子と云ふ、貞淑の譽が高い。



宮下 伸次
明治二十六年六月廿八日
小石川區 西丸町
電話 小石川 一三九〇番

生存競争は自然界の事象であつて、生物である以上優勝劣敗の大則は如何にするも之を免れることは出来ない。人集つて國を成し、社會を形成する。若しこの事象を放任して顧みなかつたならば、恐らく世は弱肉強食修羅の巷と化すであらう。故に於て道あり、法律あつてこの大則を平和裡に行はしめやうといふのであるが、社會の事物は日に月に復雜を極め、容易にこの問題を解決すべくもない。そこで社會の收斂者となつた者は世を罵罵人を呪ひ、以て我國の美風良俗を傷けんとしてゐるのである。社會救済事業も世の進退と共に益々その組織を改め、その範圍を擴充して大いに平和協調の間に人をして生を樂しむことを得しめなければならぬ。方面委員制度は即ち、この目的を以て、よく衆望を荷ふた人格者であり、社會救済の先覺者である篤志家を各地より登用して、大いに市民の和合安寧を圖らうとするものである。宮下伸次氏はこの方面委員としてよくその本旨を體した人である。氏はまた西丸町共陸青年團長、町會幹事長としても隣保指導の任に當り、毎月一回講演會を開きて會員の修養向上に努め、また會報共陸青年を發行して會員相互の動靜研究等を載せて知識の涵養に力むる等、熱誠努力に至らざるはない。氏の家は綿糸麻糸染糸工場を經營してゐるが、これ亦氏が錦城商業を卒業後一意力をこの業に注いで今日の興隆をいたしたものである。氏は寫眞と旅行を好み、時々會員を引率して山岳を跋渉し、心身の鍛鍊に資してゐると。春秋に富む氏の前途は更に見るべきものがあるといはれてゐる。



湊 喜平
明治十六年二月八日生
本郷區向ヶ岡彌生町

嘗て軍職に身を奉じた事のある人は、假令現在如何なる職に就いてゐやうとも、未だ何處か軍人らしいキビ／＼した調子と、熱の籠つてゐるところのあるものであるが、その一面にはまた往々頑固に失し、單純に流れ、所謂融通の利かない一本調子なところを持つてゐる人もある。ところが吾が湊氏の如きは、この軍人の美點をこそ備へて居り、缺點といふ可きものは寸毫も無く、性情實に淵達にしてしかも圓熟した人格者である。氏は徳島縣那賀郡平島村に呱呱の聲を擧げ、幼少の時から軍人に憧憬れを持ち、長じて後は益々軍人として國家の干城となることを唯一の目的としてゐた。かくて望み通りに士官學校を了へ、歩兵第二十聯隊に少尉として入營することになつた。時偶々日露の大戦に會し、氏も亦軍に従つて出征し、祖國の爲砲彈雨の間に馳驅して大に武功を顯したが、不幸にしてその時受けた傷の爲めに止むなく中尉で職を退くに至つた。氏の爲めに定に惜しむ可きであるが然し軍人として立派に自己の本分を完うし得たことと思へば氏も亦満足すべきであらう。已に生來の望みである軍人として邦家に盡す事を得なくなつた氏は、奮然意を翻して明治四十四年法政大學の英法科に入學し、大正元年同校を卒業するや直に三井鑛山株式會社に勤務し、居る事十年、大正十年同社を辭して東京市役所電氣局運輸課に轉じ、更に昨十四年現在の自動車課庶務掛長の職に就任したのであるがに接するに城府を設けず、誰とでも快談して倦まないといふ明るいい性を有し、衆望を擔うてゐる。夫人もと子との間には一男一女がある。



松澤 鑛太郎
明治十一年二月十八日生
本郷區淺賀町二九番地
電話 小石川 一八八番

宰相の印綬を佩びて一國を經理するも、市井となつて民を治するも、將亦一町住民の指導者となつて自治の發展に努力するも、國家に貢獻するの誠意に至つては何等輕重は無いのである。たとひ地高く位尊きも、若し黨利を貪り私腹を肥やし虚名を博せんとすれば、これこそ自己の利害を超越した全身愛町の赤心に燃ゆる一町民に及ばないのである。我が松澤鑛太郎氏は、十數年來淺賀町々民の共同福祉の爲に常に第一線に立つて活動し、自治の發展に寄與する處が尠くない人である。今では閑地に就いてゐるが、夙に隣保共陸の爲に町會設立の必要を唱へ、同志を糾合して淺賀町喜盛會を組織し、推されて之が會長となり、大に赤誠を披瀝して町の爲に盡したものだ。玉の如き人格、水火をも怖れぬ任侠、それ等が事に當り物に盡れて光りを放ち町の信望を彌が上にも高めて行つたものだ。氏は又一面涙不眠不休の活動を續けて献身的に盡力し、各方面から賞狀並に感謝状を送られた程である。單に此一事を以つてするも、氏が如何に犠牲的精神に燃れたで、人情に濃やかなるかを知り得るであらう。氏は代々葬儀用具製造販賣を業とし、附近での舊家である。本年四十九歳の分別盛りで、事業的にも多くの未來を有し、其堅忍不拔の意志と相俟つて、各方面共更に一段の進境を見るであらうといはれてゐる。尙ほ氏は國勢調査其他の委員に擧げられて功績が多い。夫人をのぶ子と云ひ、二人の間に四男一女がある。



豊 永 啓 司
明治十三年一月九日生
小石川區柳町二十二番地
電話 小石川 四九五番

君は今でこそ浴場營業に拮据して變つた方面に發展して居るが、嘗つては言論界をめぐつた履歴のある人だ。小石川浴場組合長、東京浴場組合常任幹事と云ふ肩書を脊負はされて、同業の共同利益の増進に肝膽を砕くのは、一寸面白い廻り合せの様にも見えるが、小石川區政壇上に立つていづも卓見を披露して異彩を放つて居るのはその素養が然らしめるものと見える。君は福島縣伊達郡豊野村に生れ、地方の中學に學び、後東都に上りて明治大學法科に籍を置き、法學社會學政治學等に涉つて琢磨大いに勤め、學理の眞諦を究めて卒業後、直に操觚界に入り、北陸方面に於ける言論機關の權威越佐新報に記者として招聘せられたが、其天賦の才能は事に當り時に觸れて益々光りを放ち遂に幾何もならずして編輯長に拔擢せらるるに至つた。かくて遠大の筆を揮つて當局を鞭撻し、大に地方の開發に力むる處があつたが、後轉じて帝國通信社に入り、更に時事新報社に移りて獨特の才筆を揮つて腕の冴えを見せて居たが、心機一轉して言論界を退き獨立して出版事業に従事してゐたが、更に現在の浴場經營に轉ずることとなつたのである。だが雀百逆蹄りを忘れず、以上の經歷を持つて居る君は、時事の問題に對する見解や、自治政に關する識見等に至つては遙かに一等地を抜き、常に大勢の赴く處を洞察して民心の嚮う處を誤らしめず、熱心に公事に力めるので信望が益々高い。此外君は小石川柳町睦會々長に推薦されて共存共榮の實を擧げ、又同町青年團相談役として後進の指導扶掖を惜まない。本年四十七歳、書道に達し、園藝や旅行に興味を持つてゐる。

富田 繁樹

明治十年一月廿日生
日本橋區浪花町一七番地
電話 浪花 五五二三番

去る大正十四年十一月行はれた區會議員の選挙は、殆んど一二區を除くの外一齊に施行せられた。そして震災後初めての選挙であり、帝都の復興に極めて密接な関係のあるところから、その衝に當るものは、何れも才幹徳望ともに備はり、よく公難に處する所謂實行の人でなければならぬと云ふので、その争鬪戦は各區共頗る目覺しいものがあつた。従つて無事に此難關を切りぬけた人は何れも一見識を備へたものと云ふを得べく、就中大多數を以つて鹿を中原に射とめたのが富田氏の如きは、特に出色の異材といはねばなるまい。氏は長野縣須坂藩の土族の家に生れたが、維新の變に際して家運が衰えた爲、幼弱の頃早くも苦境に置かれたのであつた。で氏は十歳の時に東都に上り、淺草小學校を卒るや、具さに辛苦を嘗めて苦學力行し、當時最新學術の教授を以つて知られた獨逸法律學校に學んだ。現に日本橋區内の大立物として、市會に一方の覇を稱する近藤達見氏等もその同期生として、大いに天下國家を論じたものである。次いで明治三十四年文部省の檢定試験に合格するや、直に神田駿河臺に佐々木博士の經營する香雲堂病院に入り、後帝國大學小兒科に入り、大いに醫術の蘊奥を究め、明治三十八年獨立して醫師を開業し熱實至誠只管業務の刷新を計り遂に今日の盛大を見るに至つたのである。一方氏は日本青年醫學會を組織して専ら後進の指導に任じて貢獻する處が少くない爲に、區會議員の改選に際し同會が熱烈なる後援を以てしたのは畢竟氏が日頃の努力に酬ひる美しい人情美の發露に外ならない。將來の活躍また大いに見るべきものがあるであらう。

尾崎 新一

明治廿五年十一月廿三日生
淺草區田島町四十一番地
電話 淺草 一九八八番

淺草の六區、宛ら、支那町を思はせる街衢に支那料理店々軒とは誠に以てふさはしい情緒を漂はす。そしてその料理のうまさ支那色の豊かな點に於て人々の嗜好に投じ、支那料理を食ふ程の者は來々軒の名を知らねば恥とされるときに至つた。主人尾崎新一君は當年とつて卅五歳、古臭さい文句を借りれば、年齢不惑に至らずして才氣縱横とでもいひ度いところ、而も白哲精悍、日夜第一線に立つて經營し、神田須田町に支店を設け舊銳の意氣を以つて東都支那料理業を背負つて立てるの觀がある。それでゐて大正十一年新畑町會の設立を見るや、推されてこれが會長となり、自治發展のために盡瘁至らざるなしといふに至つては、吾人聊かその精力に驚かざるを得ない。宜なり矣その不撓不屈の火の如き誠心が、君をして今日あらしめたのである。この生粹の江戸つ子尾崎君が淺草松清町に呱呱の聲をあげたのは、明治二十五年もおし迫つた十一月のこと。それから年月は流れて君が伸び行く熱烈な性格は身と共に成長し、活力は次第に旺盛となりて常に發展の地を尋ねてゐた。かくて愈々目的を定め、田原町に支那料理店を開業したのは大正二年のことだ。現に前記新畑町親睦會々長たるの外、東京市支那料理同業組合長として盡力すること多く、少壯實業家としての君の前途は正に洋々たるものがある。家庭には夫人あき子との間に三男一女があり、夫人はこれらの子女を教養の傍ら、數多の雇人を督勵して家事にいそしんでゐる良妻君である。

松方 五郎

明治四年四月生
芝區西久保櫻川町一二
電話 青山 六八一九番
電話 青山 六九五九番

その身は華胄界に出で、修道練磨の士の間伍して更に遜色をも見ず、益々その才識を發揮しその將來を期待するは松方五郎氏である。氏は維新の元勳松方正義氏の五男であつて、幼にして聰明俊敏、その天資は學業に於て常に優秀なる成績をあらはし、第一高等學校を経て、東京帝國大學英法科に學び、二十九年卒業後、三十年英獨へ留學し、研鑽すること四ヶ年にして歸朝したが、更に數ヶ月後再び米國を経て英國に航し、世界一週腕を發揮したもので、これ氏が日實業界に雄飛する最初の歩みであつた。かくて四十二年、遂に同社を辭し、愈々實業界の檣舞臺に乗出して活躍し今や東海生命保險相互會社、常盤商會等各種の會社の重役として經營の任に當り、斯界に重きをなしてゐる。今や震災後の財界不況も漸くその終りを告げ、財界復興の曙光を見るの秋に當り、益々氏の巨腕を要するのである。氏は華胄界の出身なるに係はらず、性格頗る潤達、人に接するに城府を設けず、胸襟を開いて自由に談笑する所、必ず人をして氏の胸中に入らしむるものがある。爲に氏の經營に係る諸會社の社員は皆よく氏の意を體し、心服して事に當つてゐる。現下勞資の間に兎角協調を缺かんとする時に方つても、その事業には絶えてこれ等の不祥事が起らないのは、畢竟亦氏の人格に醇化されたのであらう。氏はかく外にありて活動しつつも、家にあつては温良な父君として夫人カメ子氏、長男正廣君、長女清子嬢、次男正信君、次女徳子を擁して團樂してゐる。



望月 喜太郎

明治六年三月二十一日生
南千住町三河島二九七四
電話 淺草 七三一六番

東洋の公園瀬戸内海、其の沿岸中でも須磨明石と云へ光ば風明媚で四海に開えて居る。氏はこの恵まれた勝地に産聲を揚げ、樂土の明け暮れを家業の鞆を取つて居つたが、かうした環境の人としては珍らしい程奮闘的な力行家肌の氣風を享けて居つた。明石郡の垂水村がその郷土であるが、長ずるに及んで其胸中に鬱勃たる向上心は、遂に氏をして永く此地に止まらしめず、明治二十三年、孤影飄然として上京したのは實に氏が十八歳の時であつた。かくて氏は淺草三筋町の海老原小鏡製造工場に雇はれ、只管業務に勵んでゐる中、十有餘年の星霜は夢の如くに流れて氏は三十二歳となつた。仍で自ら意を決して獨立し、多年の經驗から金屬拔物業に着眼して、神吉町に専門事業を開始し、蓄え來つた幾許かの資を以て一小工場を建て、新興工業界に附屬品製造を營んだのであつた。爾來事業界の好況に伴つて漸次發展を告げ、營々の努力よく多數需用家を作り、工場を設置し、更に廣く需用家の要求に應じてゐるが、主製品中タイブライター、自轉車、電氣用各拔物一切は殊に需用の日に多きを加へて居る。目下同工場には使用人三十有餘名が致々として働いてゐるが、工業界の趨勢から見ると、將來發展の餘地綽々たるものがある。氏は本年五十四歳、頗る事業家らしい性格の持ち主で、家庭は妻女いち子との間に二男二女がある。氏の如きはよく着眼の奇警と經營の努力とに酬ひられた人といへやう。

宇野澤辰次

明治三十一年生
府下澁谷町下澁谷一六三八
電話高輪五八七五・七七五九

府下澁谷町に、各種ポンプの製造、諸機械の製造等に優秀なる成績をあげてゐる鐵工所がある。これ宇野澤辰次氏の經營にかゝる宇野澤組鐵工場であつて、明治三十二年、即ち氏が生れた翌年、氏の父君辰雄氏に依つて創立せられたものである。辰雄氏は東京府の士族として生れた。當時我が國に於ける工業界は未だ搖籃時代で微々として振はなかつたが、氏は機械工業、就中ポンプ製造の將來有望なるに着目し、明治三十二年澁谷町に於て之が製作に従事することになつた。以來食する程の執着と思慕を以て夙夜之が研究に没頭し、遂に苦心考案の結果、在來のポンプに數度の改良を加へ堅牢精巧なるものを造り出す事に成功した。かくて事業は日を追ふて益々盛大に赴きつゝあつたが、大正八年不幸にして父君の長逝するに及び、長男たる辰次氏は遂に其遺業を受け繼いだのである。氏はかうした天才的閃めきを有する技術家を父に持つた丈けに幼にして創造的才能を多分に恵まれてゐたことは云ふ迄もない。以來氏はその天賦の才能を以て只管業務の刷新に努力すると共に、諸機械の製造にも従事し、力めて優秀なる製品を出すことに専念した結果、信用益々加はり販路は次第に擴張して、今日では内地は勿論、遠く海外に迄及び、注文殺到するの盛況を呈するに至つた其製品の精巧にして如何に優秀なるかは、現に宮内省を始めとし、陸軍省朝鮮總督府、大藏省、衛生試験所、各帝國大學、三菱造船所、浦賀ドック其他一流の官衛會社等の御用を一手に承つてゐるのに徴しても其一斑を知り得る。又同時に一面に於て氏が特異の器材を製するに足るのである。

櫻澤伊之助

明治十三年六月二十八日生
南葛飾郡吾嬭町小村井九〇七
電話墨田一八一六番

都下硝子器製作界に飛將と目されて居る櫻澤伊之助氏は、今こそ規模の大と基礎の堅實とを以て押しも押されぬ工場主として一方に雄飛して居るが、これこそ父業の餘勢を繼承した事業ではなく、實に氏一代に築き上げた粒々辛苦汗と膏の結晶に外ならない。今にして顧れば氏も亦一代の奮闘兒として立志傳を飾る人であらう。氏は生粋の江戸ッ兒で深淵に生れ、僅か十三歳の弱年で他家へ奉公すべく餘儀なくせられたが、氏は其の頃からして他日獨立の日を期して自ら恃む事を怠らなかつたのみならず、はつきりと將來行くべき道を考へて致々として主家に奉じて行つた。かくて二十五歳の不承不性に立ち働くのとは異つて健氣なものがあつた。かくて二十五歳で下谷入谷に工場を開設し、兎も角も獨立して事業を興した事は、よし當時家庭工業的小規模のものであつたにせよ、それまでに積まれた人知れない努力と奮闘とは、已に今日氏がかうして迫り來たコースの第一歩を踏み出したのである。奮闘家で覇氣に富んだ氏は、資本の不足は肉體で行くといふ決心で、創業當時は不眠不休の活動をした日も幾日か續いた。其内に硝子器製作に着眼してつとめて新時代的なものゝ製作に没頭し、不斷に流行界の趣向や需用家の趣味の變遷に深甚な注意を拂ひ、常に獨特の工風を凝らす事を忘れなかつたので、現在主として生産する幾多の高級コップは何れも白熱的な好評を博して居り、一日優に五百餘打を生産する程に擴張して居ると云ふ。家庭は夫人もと子との間に三男二女があり、長男は早大在學中である。

八重田高藏

明治十八年二月二日生
瀧の川町字瀧の川
電話小石川二二三二番

島崎藤村は勿論のこと、有名無名の作家の筆によつて、高原地信濃の美しい自然は廣く天下に喧傳されてゐる。その長野縣下水内郡外様村は氏の故郷である。明治三十五年僅か十七歳の時に父母の膝下を去つて上京し、神田中學に入つたのであつたが、間もなく鶴林の彼方滿洲の地では、東亞の平和を擾亂する露國に對し、日本軍の正義の火蓋は切つて落され、國を擧げて祖國を守るの聲は、わが日の本の津々浦々まで充滿した。かくて血に燃える青年の腦裡には一様に、劍を持つて立つ若し將校の姿が美望の的となつたものだ。學窓を出たばかりの氏もその例に漏れず、氏は近衛第三聯隊に入營して、繁劇な訓練、さては嚴格な軍紀に服する傍ら、榮ある士官學校へ入學を志し、受験勉強に耽つたのであるが、何を感じたか氏はさりとその希望を擲げ捨て、終つた。かくて營門を辭して實社會に送り出された氏は、未來を實業界に見出さうと覺悟したのである。けれど容易に順風に帆を揚げることの出來ぬ社會のことゝて、氏は萍のやうに幾つもの會社を轉々としたのである。が慧眼な氏のことゝて、早くもその間に車輻製造の有望であることを知り、ついに大正四年三月に月島西川岸通りに工場を建設して、爾來六箇年に及ぶ今日まで、一意専心その業績の發展に努めて來た。一方町自治にも貢献するところが尠くないとの由。夫人いね子は淑徳の譽れ高く、一男二女をもうけて明るい家庭に團聚の實を擧げてゐる。氏の如きは之より愈々思慮圓熟の域に入るのであるから、益々精進して社會公共の爲に盡されんことを望むでやまな。



田中長太郎

明治十九年十二月十五日生
本所區柳島横川町九番地
電話隅田二一九〇番

日本に於ける染色界のオーソリテイ日新染布株式會社の専務取締役として、繁忙な同社の經營を一身に擔ひ、その縦横の才幹機略を讃へられてゐるわが田中長太郎氏は、明治四十一年の東京高等工業學校出身である。府下豊多摩郡の人で、幼い頃から神童とまで云はれた才氣の持主であつた。高工を卒業後は先づ帝國製糸株式會社に入つて、修得した蘊蓄を傾けて同社のために精勵してゐたが、二年後に京都濱口染色工場に入り、約三箇年の間を一意専心染色術を研究したのである。京都と云へば染色界ではわが國第一の土地柄であつただけ、氏の實習し得たことは決して尠少なものでなかつた筈。大正元年に歸京すると、直ちに現在の日新染布株式會社に聘せられ、同社の技師として、多年の造詣を傾けて染布の指導及び監督に力め、延いては同社の聲名をして日を遂ふて隆盛ならしめた。これひとへに氏の賜であつた。ために大正七年には同社専務取締役の重役に推され、わが國染色界の花形役者に一躍した譯である。そして現在では使用従業員三百名を越へ、その販路は日本内地は勿論のこと、遠く海外にまで及んでゐる。氏はかくの如く要職に在りながら、今でも單なる一職工として、時々自ら作業場に出て従業員と共に仕事をすることがあると聞か、その眞剣な態度には敬服の外はない。これこそ勞資間の係争が目を逐ふて激甚を告げつゝある今日、ともすると苛酷に失する資本家並に重役の模範とするところ、自らを一職工として労働者間に伍する襟度には、デモクラツトな人格の閃めきを見出すことが出来る。前途こそなまものがあらう。



野萩定吉

明治十四年生
大久保町字百人町二七七

現在の住居から西の落合に出生し早く此の土地に移り住んだ氏の家は、此の邊では古い方である。氏は大久保小學校に學んで後、小石川巢鴨の御家人土屋氏を訪ひ、毛筆製造業を修得し、十數年の久しい間研究をかさね、毛筆製法上に變つた進歩を見せて居たが、尙幾多の考案をかさねて毛筆の大量生産を試み、毛筆界の新时代開拓を期して機械製造に腐心したのであつた。そして可成長い月日と研究費との犠牲を擲つたが、不幸にして其の希望は達せられずして水泡に歸して了つたが、事業に熱心な氏は、毛筆製造業者間には相當な權威を持つて居て、二十數年に亘る間同業組合幹事として働き、其の功勞を厚く稱はれた事もある。其の後不圖した事から眼病を患ひ、従前の事業を繼續する事を得なくなり、西洋料理店を出したのが丁度大正七年であつたが、事業家肌の氏は間もなく確固たる業礎を築いて了つた。氏は又經綸家として町民一般の定評に乗つて居る人で、彼の大久保設置問題の際には、町の發展上利害の大なるを見て非常な運動を試みたもので、後大正十年居町に親盛會を興して商家の共榮を計り、町勢發達に加へ、街燈建設其の他の功を残して居る、現在では百人町住民一區總代、百人町衛生委員、消防後援會評議員、勤儉獎勵委員、小學校保護者議員會幹事等の名譽職公職を擔つて日夜活動して居り、新に町會に當選して町治決議に非凡の材幹を露して居る、事業の方面でも淀橋警察署管内料理飲食店組合幹部會計にあげられて重きをなして居る。意氣湖達で熱實な質を惠まれた氏は、幾多の公務に少しの倦怠も見せない、本年四十六歳。

田丸金七

明治二十二年四月三日生
豊多摩郡澁谷町下澁谷一五八一

大東京の隣接町村の中で、最も大きい町は澁谷町である。その人口は二十萬に垂んとし、各地の都市よりも遙かに上位を占めてゐる。しかも年々歳々異常な發展ぶりを示してゐるのだから驚かされて終ふ。だからその施設も他町村とは數歩を先んじて、その模範を示してゐるのである。その一例を町營の水道に求めてみるならば、同町の水道は水源を多摩川の川底水に求めてゐるから、水質は優良で飲料に適し、而かも水量の豊富なため、どんな酷暑の旱天期でも断水や減水等の憂ひは決してない。特にその施設新式であつて、供給能力の大規模なことは他の追従を許さないところだと云ふ。その他道路の修築の如き、さては塵芥焼却の如きも、最新の學理を應用した施設で實に完備したものだ。これこそ同町の自治制が非常に發達してゐることの證據で、引いてはその自治體に參畫してゐる人達の、異常な盡瘁ぶりを物語つてゐるのだと云へる。現にわが田丸氏は、その一員として多忙な町會議員の公職に就き、澁谷町百年の大計に寄與してゐる人だ。氏は年齢まだ不惑に達せずして、今が働き盛りの年配で祖業を繼いで家運の興隆を圖り、一度公人として立つや町理事者を督勵監督してその完璧を期してゐる大奮闘家である。趣味としては釣を好み、餘閑を得ると一竿を手にして、海に河に、飄々乎として水邊に腰を下して今様大公望を氣取るのである。靜かに釣を垂れてゐる時こそ、心は天地の悠久に馳せ、身は世俗の毀譽褒貶に超越し、よく自然の大に親み得られるものだ。釣を愛する氏の人格のほどが察せられやう。



塚本閣治

明治二十九年一月十二日生
荏原郡下目黒大塚九四七
電話 事務所用銀座八四九
自宅用高輪三三三二

氏は京橋出雲町に生れた生粹の江戸ッ兒である。父君岩三郎氏は已に明治十二年頃小學校用掛物を創案し、之が印刷を業としてゐた可成りの資産家であつた。かうした父君の美術的情操を多分に惠まれた氏は、幼少の時から已に繪畫に對して特殊の興味と天才的閃めきを見せてゐたが、好きこそもの上手なれで、長ずるに及んで其技能は一段の進境を見るに至つた。氏の家が印刷業者である關係から、氏は將來の路を美術印刷にとり、美術學校に入學してこの道の研究に没頭した。生來明晰な頭腦を持ち、且つ多くこれが研究に興味を持つてゐた氏のことゝ成績も群を抜き、大正九年には優等で同校を卒業し、直ちに講師として母校に教鞭を執ることになつた。教ふるのは學ぶとか云ふ古訓もあるやうに、斯くして氏の研究は益々堂に入つて來た。後同校を退いて萬朝報社の圖案部長となり、蘊蓄を傾けて同社の爲めに盡してゐたが、父君の永眠せられるや同社を退き、令兄岩三郎氏を助けて家業に従ひ、益々家運の隆盛を圖つた。震災後小學校用掛物印刷の方は令兄の經營に一任して、氏は別に一般書籍印刷業を起し、現に職工七十有餘名を使用し頗る賑盛を極めてゐる。氏は未だ獨身で至つて快活な、而して竹を割つたやうな恬淡な性質の持主であり、暇さへあれば登山を企て旅行の計畫をしてゐる。都塵を離れて幽邃な山谷を跋渉し、自然の懷に抱かれて優美な情操を養ふことを忘れない所に氏の床しさがある當年三十一歳、氏の力量は今後益々深くなる一方で、實にその前途には輝々たる、光明が待つてゐるのである。

高藤太一郎

明治九年七月一日生
北豊島郡巢鴨町一三六番地

氏は岩手縣盛岡市に生れた。長ずるに及んで海軍に入らんと志し、海軍學校にあこがれた。その頃の氏は全く英雄崇拜者で、自身亦英雄たらんとしたのであつた。そして英雄となるべき第一の關門を、海軍軍人に發見したのである。併し氏をかく迄に熱狂せしめた希望の光は、無慘にも奪はれてしまつたので、詮方なく氏は、立派な人物を作る育英の事業に従事せんと志す事に依つて第二の希望を見出した。先づ東京高等師範學校文科に入り、明治三十三年卒業するや直に研究科に入り、明治三十四年遂に卒業の榮冠をかち得るに至つた。かくて卒業後直に熊本縣立熊本中學校に入り、教頭として任に在ること六星霜、後轉じて熊本師範學校の教頭となるや教育者の人格、能力が如何に學生に及ぼす事の重大なるかを痛感し、自ら其修養に力めて範を垂れ、其間舎監をも兼ねて校規の振肅に力め、能く一校を醇化して功績の大に見るべきものがあつた。留ること八ヶ年次いで水戸、和歌山等の師範學校に歴任して、後東京府立第二中學校長に榮轉した。氏の此處に入るや、第一に自治的精神、第二に他と協調するの精神、此の二つをモットーとして教育の歩を進め、別に校則を設けず而も立派な成績を上げてゐる點から見ても、氏の人格と教養の異常なるを知ることが出来る。氏は又晝夜勞働に従事する者の爲に校内に夜間學校を設け、其他職業紹介等の社會的事業にも盡す處が極めて多い。趣味は郊外散策、讀書、講演聽講。何處迄も眞面目な處に教育者としての面目さが躍如としてゐる家庭には夫人との間に二男二女がある。

平澤繁太郎

明治元年三月七日生
本郷區根津須賀町一〇
電話 小石川 二五一〇番

根津須賀町の町會長と云ふよりも寧ろ「イヒチオール」の發明者として知られたる平澤繁太郎氏は、平澤與五郎氏の二男として、長野縣上伊奈郡西春近村に生れた。氏は少年の頃より藥物學に興味を持ち、夙に上京して東京藥學校の前身たる上野藥學校に切磋の功を積み、卒業して後藥劑師免許狀を得たが、雄心勃勃たる氏は一藥劑師として店舗の中に終止することを屑としなかつた。仍で更に進んで東京帝國醫科大學藥學科の選科に入り、藥物學の蘊奥を究めるに至つた。併し向上の意氣發揚たる氏は猶之を以て満足せず、更に學術と相俟つて實力を養成せんが爲、東京高等工業學校の前身たる東京職業學校に一職工となつて實地の研鑽に身を委ねること多年、後技師として職を岡山縣衛生試驗所に奉じ、轉じて京都第三高等學校醫學科囑託技師となり、在職六年、後再び上京して東京高等工業學校に入り、在職七年、應用化學の講座を擔任して教鞭を執ると共に傍ら藥物學の研究に没頭し、苦心の結果「イヒチオール」の世界的大發見をなし、當時の學界を驚かしたものであつた。氏は後これが特許權を獲得此の時であつて、實に我が醫學界の誇である。氏は後これが特許權を獲得し、明治四十二年府下三河島村に工場を建設してこれが製造に着手したが、今日ではその眞價はあまねく認められて、外國に迄その販路を擴張するに至り、非常な盛況を呈してゐる。氏は又居を本郷區根津須賀町にかまへ、多忙な業務の傍ら同町の共存共榮の爲に不斷の努力を傾注して怠らないの樂に推されて町會長となり、信望益々篤きを加へてゐる。



花澤勘四郎

明治二十二年七月十八日生
下谷區金杉上町八十八番地
電話 下谷 二五九一番

三つ輪印の眞綿は市内呉服店の大部分は勿論、東京並びに近在の一般家庭に普く使用されて居る程行き互つてゐるが、同品は東京眞綿製造所の製産であつて、其經營者たるのが花澤勘四郎氏も、赤手空拳を以て獨立堅固今日の成功をかち得た奮闘の士である。氏は千葉縣山武郡豊瀬村畑屋敷に生れ、明治三十七年上京し始めて芝區内の櫻田八藏氏方に店員として同家へ寄寓する様になつたのは氏が十五歳の折であつた。以來主家の爲に忠勤を抽んずること六ヶ年、二十一歳の時獨立して神田今小路にさゝやかな工場を設けら眞綿製造業に従事した。氏が社會へ乗出した最初の一言はこうして開かれると共に成功の礎は此時築かれたのである。併し成功は一朝にして生れるものではない、創業當時に於ける氏の奮闘は實に涙ぐましい程で、朝は早くから夜は遅くまで兀々として新たな活動が續けられて行つた。勤勞は遂に酬ひられ今迄の工場に憚らずして金杉上町に新に工場を設けたのはそれから間もない後の事であつた。以來氏は専ら生産品の應用に心を砕き、各種の眞綿用品を創案して著しく業績を挙げたが、就中眞綿防禦具は、其の効果が著しい爲、大好評を博した、外に吹留眞綿、眞綿布圍等をも製造し、防水ゴム引マント等も頗る賣行がよい。かく多年の不屈奮闘の賜として年と共に發展して行く氏は、又中川テープ株式會社取締役としてもその經營上の手腕を見せて居る。氏は夙に公共に盡瘁する處多く、現に町會理事として信望が厚い。夫人を勝子と云ひ、三男と一女があり、團樂のホームを營んでゐる。

大塚菊雄

明治二十四年十一月生
芝區露月町二四
電話 銀座 四九一六番

大塚靴製造工場主として靴靴、背囊、其他革具製造に従ひ、先代岩次郎氏にも勝る活躍を續けてゐるが大塚菊雄氏は、芝區田村町の生れ、舊佐倉藩士大塚金之助氏の三男であつて、先代とは伯父甥の間柄で、養子に入つたのは大正四年十月のことだ。始め氏は明治三十九年に東京陸軍地方幼年學校に入學し、同中央幼年校より陸軍士官學校を終つてから少尉に任官し、まづ郷里佐倉歩兵第五十七聯隊に勤務し、次いで中尉に進んで第一師團司令部に奉職したが、伯父の家で養子になると共に、軍籍を退いて實業界に飛込むことになつた。現在では職工百三十餘名を使用し、年産額百萬圓を突破すると云ふ大盛況を呈し、主として陸軍、海軍及び各主要會社に納入し、東都靴製工場としては第一流の地歩を占めてゐる。抑も同工場は明治五年二月の創業に係るもので、今日あるは當然のことと云ふべきだが、その長い間に拂はれた先代岩次郎氏及びわが菊雄氏の努力の程はさこそであつたと云はれやう。氏は更にこれしきの成功では満足することなく大に西歐先進國の靴製造事業の狀勢を見聞し、以て他日の雄飛に備ふべく決意し、大正十五年遙々と洋行の途に就いた。歸朝後の氏の發展ぶりは刮目に値ひするであらう。氏の性格たるや非常にダイナミックであつて、一度かうと決意したならば飽迄も勇猛果斷、そのかみに軍隊で鍛え上げた軍人精神を以て美事に處するをモットウとしてゐる。家庭には夫人照代との間に長女和歌子嬢長男斌君があり、和歌子嬢は大正五年、斌君は大正十二年に生れ、共に潑刺と成長して、氏によるこびの的となつてゐる。



田村金三郎

明治十三年五月二十四日生
芝區愛宕町二の一四
電話 青山 四二五一番

帝郷の復興に伴ひ、各種の建築物や諸種の家具等に使用せらるゝ塗料の供給は、定めて莫大な量に達するであらう。氏はその塗料の供給と塗工請負を家業とし、着實さを以て知られてゐる。抑も氏は牛込の人であつて、田村朝直氏の三男に生れた純粹の江戸っ兒なのである。勇み肌で義侠に富む江戸っ兒としての氏に、現在の稼業は、最も相應しいものではあるまいか。僅か十五歳で芝區今入町の塗工師安田氏の徒弟に入り、刻苦してその技倆の練磨に努めること五箇年、ついに獨立して營業を開始したが、その間常に横濱より名古屋を経て、遠く關西地方にまで出かけ、その技術の練磨と修得とを忘れなかつた。かくて明治三十二年現在の場所到店舗を開いて、塗工請負業を營んでゐる。その誠實なる請負ぶりは日に月に顧客を呼び、四方の需たに應ずると共に次第に大建築の施工に信用を博し、帝國劇場、三越呉服店、銀行集會所、日本工業俱樂部、三井合名會社等の塗工に従ひ、その技能の優秀と工事の正確さは、大いに識者の賞讃を博し、いよいよ斯界に頭角を現すやうになつた譯である。ために東京ペンキ塗請負業組合が組織せらるゝや、その副會長に推されて同業者の福利に盡し、なほ愛宕町二丁目町會の創立には氏の力があつて其大であつたと云ふこの外に氏は青年愛友會の幹事として後進の指導に努め、また愛宕町自衛組合副組長として、常に東奔西走して隣保和平のため犠牲的な奉仕をしてゐる。氏年齢今や知命に近く、思慮正に圓熟の極に達してゐる。その熱意と超越した機才とは、今後一層聲價を放つに至るであらう。

吉田 藤 作

明治二十年六月生
芝區三田三丁目二五番地
電話 高輪 二七六四

氏は雪で名高い新潟縣高田の出身である。高田中學校在學當時より非常に明るい性格の持主であると共に、學業も優秀であつたから、クラスメイトから尊敬の的となつてゐたと云ふ。卒業後は敏才を抱きながら、家庭の都合上只管業に従つて父兄を扶け、土地で一旗擧げやうと畫策したが、何を云つても猫額の天地のこと、て、充分に驥足を伸ばすことが出来ないで大正元年、遂に意を決して上京し、まづ市内某所にさゝやかな工場を持ち、こつこつと時運の至るのを待ち受け、主に酸素製造の機械を製作してゐた。ところがあの歐洲大戦争が勃發すると共に、財界は日に日に好轉して行き、各種工場は異常な活況を示すやうになり、延いては氏の事業も豫想以上の大成功を齎し、貧窮な資本を仰つてゐた氏も、瞬く間に大資本の持主となつて縦横の奇才を揮ふことになつた。大正九年の財界没落當時も、氏はよくこの時あるを推察してゐて、毫も成算なき放漫な經營法をとらなかつたので、平穩無事にその難關を突破し、却つて大正十三年財界不振の時に、現在の芝區三田三丁目五二番地に移轉すると共に、組織を改革し規模を擴張して大々的に顧客の要求に應じ、今では内地は勿論のこと遠く朝鮮、滿洲、臺灣、樺太方面にまで販路を有するの好況を呈してゐる。これみな氏の不撓不屈の賜と云へる。氏はこの多忙な業の間に在つてすら、意を自治の進展に邁ぎ、幾多寄與するところが多かつたので、現在では三田三丁目町會幹事として不斷の貢獻を拂つてゐる。夫人との間に子息三人があつて、春のやうに和やかな家庭愛にひたつてゐる。



古田 茂 重 郎

明治二十三年八月十二日生
荏原郡品川町南品川九一三

古來の名工巨匠が、技を建築彫刻に揮つて其の工作の精妙を後世に遺すや、其の技に入神の妙を極めたるは素より論はないが、其の使用せる道具を見るに、必ず名匠は他に冠絶するものを用ひて居たものである。故に名工の技の一半の功は其の用具が擔つて居るともいふべく、工人は常に用具の利鈍を重視したのも無理がない。従つて其の技の優劣を左右する彫刻用具の製作に従事する人の使命亦重大であつたと共に、其の彫刻美術界に貢獻した所を認めねばならない。現時此の工具製作に名を馳せて居る人に我古田茂重郎氏がある。氏は栃木縣の人、明治三十八年上京して實業に従つたが、後木工用彫刻具の製作を開始するに至つて銳意業務に精勵し、幾多改良を加へて益々名聲を高からしめ、逐年發達の結果、現在では六ヶ所に製造所を所有し、何れも其の完備を以て鳴つて居る。中にも大工道具の製造工には左重、秀左、宗弘、左一廣、保久、重千代等の如き、古來筑前に名を馳せたその一族之に當り、墨つぼには名人の稱あるつげ清等の名工之に當つて居るを以て、聲價いよく加はり、其の供給先きの如きは東京府立工藝學校、同實科工業學校、大阪府立工藝學校、山口縣立工業試驗所、深川區手工教育會等があり、何れも好評噴々たるものがある。其の製品に對する絶對責任主義を嚴守して常に製品の信用に重きを置く所に氏の自信と製品の誇りが認められる。氏は常に神佛を崇敬し職工等の精神修養にも意を拂うてゐる。又町内有力者の筆頭に數ふべき人で、夙に安全會を興して其の會長に推されて居る。夫人は亦内助の功多く一男一女あり。

村 川 虎 雄

明治二年四月三日生
荏原郡 大崎町

府下大崎町の町會議員として、同志間の智慧袋として重きをなしてゐる氏は、山陰鳥取の人で池田侯の舊藩士の家柄に生れた。鳥取中學校を卒へて京都第三高等學校法學部に學んだ。明治二十七年の同校出身と云へば、元東京市長永田秀次郎氏や、内閣書記官長塚本靖治氏等と、同期生である。同校卒業後は官界の人となり、鳥取、山梨、兵庫の各縣に歴任してその手腕を認められ、内務省に入つて前後十三年の久しきに亘り、行政事務に熟練して精勵至直の人として評判がよかつたが、大正九年、遂に官吏生活とお別れて猪苗代水力電氣に入り、同社の幹部として活躍し、同社が東京電燈株式會社と合併することになつたので東電に轉じて、監理課に在つて大いに畫策するところがあると聞く。氏はその初對面の印象で見受ける如く、すこしもベダンテツクな術氣がなく、飽迄も寛容な襟度と圓滿な誠意を以つて、萬事に處してゆくをモットーとしてゐる。會て東京市助役に推されたが固辭して承けず、一意自己の信念に精進してゐる。一方氏はその居住地の町會議員としては、殆んど指導者の如き位置に立ち、議案の審議收支の決算等、氏の精査によつて決せられるところが尠くない。之を以ても氏の手腕の程が窺はれるが、一面に町民間の信望が如何に厚いかを察知せねばならぬ。世を擧げて結閣排他的な抗争にかられ、人を陥れ友を賣るをも敢てするの今日に、氏のやうな人格者は自治體の花だと云へやう。趣味としては讀書、そして先哲の言葉を學んで靜かに自己を内省しつゝある。夫人をとく子と云ひ一女人がある。

上 田 亥 子 藏

明治二十年八月二日生
本郷區臺町一五番地
電話 小石川 二二二六番

透徹した理智と、一步も他人に敗をとらぬ能辨と、そして飽迄も積極的な活動を好むのは長野縣人の通有性である。氏は長野縣西筑摩郡福島に生れた。やがて自然の雄大を誇る高原の國を後に上京し氏は、都文館中學を卒業して社會に飛び出し、まづ小石川陸軍砲兵工廠に入つて一守衛となり、そこで守衛長にまで進んだが、辭して鐵道省甲府鐵道管理局に入り、改札及車掌となつて、具に腰辨の悲哀を味つたものである。が後辭して現在の地に屋號金水館と云ふ下宿屋を開いたのは大正二年二月のことであつた。小官吏をして居ればこそ頭が上らぬと想ひ到つたのであらう。まことに取れば憂し取らねば悲しいのはサラリーマンの生活である。自由を愛する信州人が堪へ得られないのは當然だ。野の人になると氏の奔放な本然性は遺憾なく發揮せられ、家業は愈々繁昌すると共に、公人生活へも驥足を伸ばすこととなつた。震災後に有志と計つて臺町々會や青年團の組織に狂奔し、遂にその實現を見るに至つた。一方十四年度の國勢調査、市勢調査には委員に擧げられて、専心犠牲的の奉公を以てした。現在は百七十餘名の會員を抱擁する臺町々會の庶務として、最も多忙な會務に服し、些少の遺漏をも生ぜしめたことがないとは、頭腦の明敏さが想ひやられる。なほ青年團の幹事としては不斷の熱意を以て、若人の善導に没頭してゐること、聲望は日に日にあがり、來るべき青年團長の候補者に目されてゐると聞く。みな氏のダイナミックな努力を物語るものだ。ゆき子夫人は内助の功多く、その間に一男一女があ。

長谷川 保定

明治十八年五月十五日生
芝區芝浦町二丁目
電話 高輪(四〇四四)番
電話 高輪(五九〇四)番

多年内務省の衛生局長として、または濟世學舎の舎長として、醫界のた
めに力を盡し、野に下つては民間刀圭界のオウソリデーだとも畏敬せら
れ、明治年間に雄飛してゐた著名の醫師長谷川泰氏は、茲に記載するわが
長谷川保定氏の嚴父である。その長男に生れた氏は獨逸協會中學校を卒つ
てから更に進んで外國語學校で獨逸語を専攻し、語學に對しては多大な造
詣を持つてゐる。ところで氏は學生時代から大のカメラ愛好者であつたが
ため、段々と寫眞技術とその使用藥品の研究に意を凝らすやうになり、不斷
の研究を重ねてゐると、あの歐洲大戰亂が勃發し、各國共に寫眞材料の輸
出を制限し、特に夜間及び暗光寫眞にはなくてはならぬマグネシウム
の輸出が絶対に禁止されて終つた。だからわが國の寫眞業者はその購入に苦
しみ、はたと當惑してゐたので、氏は之を見て奮然としてその製造を試み
た結果鹽化マグネシウムの製法に成功したのである。で大々的にその販
賣に着手して寫眞業者の苦境を救ひ一躍して盛況を招いた。次で一般寫眞
材料商をも驚かすやうになつたのである。大正十三年に居を芝浦に移し、府
下吾嬭町小村井に工場を新築して諸種の寫眞材料の製造を開始し、更に寫
眞材料及藥品試驗所を新設して、製品の正確を期すると共に寫眞術の發達
に資した。ある意味に於てわが國の最近寫眞界の恩人だと云へる。加之氏
は芝浦二丁目町會理事として、町民の共榮に専念してゐる。趣味として寫
眞術は勿論のこと、繪畫・彫刻・文學の各方面に亘つて造詣が深く、常に藝
術即生活のエンタスターにひたつてゐる。

石田 豐造

明治二十四年生
芝區巴町十三番地

憲政有終の美は國民各目の自覺にまつ外はない。トルストイは其名著「戰
争と平和」の中に一平凡人としてのナポレオンを描き、如何なる英雄も時
代のつくり出した一副産物にしか過ぎないとの思想を描出してゐる。勿論
これは、あのカール流の英雄崇拜論を以つてすれば全々相容れない議
論だと云へるが、却て國民の智識があるレベルにまで上つて来て、そ
れぞれの一家言をなすやうになりつゝある現代では、如何なる英雄主義者
の力を以つてしても、民衆の力に及ばざること遠きであることを知らねばなら
ぬ。この意味からして今は政治の民衆化が叫ばれて来た。そして之に伴つ
て曰く青年團、曰く町會、曰く同業組合等の民衆を基調とする自治體が續
々として擡頭するやうになつたことは、定に喜ばしい現象だと云はねばな
らぬ。それはある意味に於ては國政の講場よりも重大な役割を演じ得るで
あらう。この立場から芝區巴町青年團及び巴町復興會の組織に盡瘁し、さ
ては町會自衛組合の役員として不斷の努力を拂ひ、自治體有終の美に寄與
してゐるわが石田豐造氏の存在は、燦として寶玉の如くに輝いてゐると云
へやう。氏の郷里は山梨縣で、父の代からの洋服商を繼いで今日に至つて
ゐる次第。が價格の安價であること、技術の優秀であることは、洋服萬能
の今日にあつて、めきめきとして家業の發展を招致し、今では多數の職工
を使用し堂々の店舗を經營するに至つたのは、金剛不壞な氏の精進の賜物
であらう。本年僅かに三十六歳、前途は洋々たる感がある。その熱そ
の意氣を以つて益々社會人としての部署に忠實であつてほしい。

八尾 三郎

明治十四年四月十五日生
本郷湯島天神町一丁目九四
電話 小石川二六一四番

優秀な技術と懇篤な扱ひとで、目下患家の間に好評を博して居る刀圭家
に、本郷湯島一丁目に住む八尾三郎氏がある。君は今を時めく天下の宰相若
槻さんを出した島根縣の出身で、此の地の中等學校に學んだ。後、東京
に負うて日本醫學專門學校の門を敲いた。醫界の將來に多大の希望を抱い
て居た氏は、専門學の討究に骨身を砕き、具さに學理をさぐつて卒業の榮を
擔ふや、斯界の一流先輩について再び實地研究と學理の探求に陣立てを構
へ、暫く技を練つた。かくて經驗と確信とを得て大正三年現在の地に獨立
開業したが、爾來逐年病者患者の療を乞ふ者多きを告げて、實力の存する
所を漸く認められ様として居る。君は仁俠義膽を備へた士で、醫は仁術な
りとの古人の箴言を現實に踐行して來てゐるが、先年大震災の砌り、不時
の天變として焦土の中を父子離散して右往左往すると云ふ有様で、各自己が
事丈でも持て餘して居る中に、君は家事を放擲して、急造の臨時診療所
に立て籠つて瘡出す傷病者の應急手當にあたり、疲勞を忘れて晝夜天幕
の中に療器を執つた。之は今も回顧して語り續ぐ挿話の一つになつて居る
又その世情に通じた材幹は、早く町民知友の間に認められて、外公共のた
めに第一線上の人として推し立てられ、湯島一丁目町會創立以來の幹部と
して奮闘されて居る。年齢まだ不惑を過ぐるに數年、才力益々老練の域
に達せんとしてゐる。今後の發展は期して望むべきを思ふ。趣味に觀世流
謡曲があり、多用の中、閑を得ては清吟して心氣の洗濯を試みると云ふ。
室たつ子と四男の家庭は、和氣堂に溢れるばかりの和合さを見せて居る。

小川 專助

明治二十二年二月生
日本橋區葺屋町八番地
電話 浪花 六六一番
電話 浪花 六六一番

氏は日本橋區堺町九、小川專之助氏の長男に生れたのだが、本家であつて
伯父に當る葺屋町の小川專助氏の養子になつたのである。そして伯父の逝
去と共に家督を相続して、伯父の專助を襲名して前名專太郎を改めた。生
家は小川屋と稱して、手廣く呉服商を營み、慈父專之助は東京染織株式
會社取締役として實業界に雄飛してゐると共に、氏の繼承した家もやはり
小川屋と稱して籠甲卸問屋を營み、尙雜貨輸入卸賣をも兼ねて斯界では一
流の大商舗であつた。特に四代に亘る古い暖簾の老舗であるから、その信
用程度はまた格別だと云へやう。氏は京華中學校を卒へてから京華商業に
學び、實業方面の學科を修め、秀才を唱へられた程の人とて、多端な商取
引に處するに、デリケートな商才を以てし、縦横の策を講じてつきないの
で、家業は前にもまして非常な殷盛を示してゐる。氏の天資の優英なのは
その端麗な容姿が示す通りで、レファインされた座談の應酬は對者の心を
捉へて離さないあたりは、恵まれた天分の所有者だと云へる。特にその製
品である籠甲加工品は、常に新趣好を加へた點で、内地はおろか遠く鮮滿
より海外に亘つて多くの販路を有してゐる。傍ら氏は常に町民自治の涵養
に意を注ぎ、葺屋町々會長に推されては只管町民の共存共榮に寄與し、な
ほ十地區及び第十三地區整理委員に擧げられては、之亦不斷の貢獻を拂ひ
更に東京籠甲問屋組合長として、同業界の重鎮に目されてゐる。三十八歳
の青壯にしてこの活動は氏の力量を裏書きしてゐるものだらう。趣味は撞
球で、玄人の境に達してゐること。自宅は在原郡駒澤町に在る。

高橋 甚也

明治十七年七月十日生
北豊島、板橋町稻荷臺三七四

氏は宮城縣志田郡三本木音無の出身であると云ふが、なるほど質朴の東北人のそれに相應しく咄々とした言葉と吐くところ、實に幽しい野趣を感じさせられる。が咄辨でこそあれ一絲亂れぬ侃々論陣を張るあたり、又明徹な頭腦のほどが想像せられる。それに何處までもローカル・カラーを出して、都會人ぶらないのは、以て氏の性格の一端を物語つてゐるのではあるまいか。明治三十七年に宮城縣立第三中學校を卒へた氏は、同四十二年に青葉城下の第二高等學校を修了し、直ちに京都帝國大學工學科土木科に入り、同四十五年には若い工學士として社會に旅立つたと共に、大正元年には臺灣總督府附技手を拜命して、遠く殖民地に赴任したものである。畫は青い芭蕉の葉に涼を迎へ、夕べにはバルコニーに立つて遙かに母國へのノスタルヂヤをおくる殖民地生活をなつかしむてゐたこと十二年の長きに亘つた。由來ともすると日本の官界では、殖民地職への官吏を蔑視しがちな傾向があるが、一步翻つて英米佛の諸國を見るならば、殖民地の空氣を知らないでは優秀な行政官としての價値がない有様である。これこそ島國根性をぬけきれぬ悲しい日本人の錯誤だと云へやうか。さてわが高橋氏はこの殖民地に在つて孜々として職務に精勵し、大正五年には總督府技師に進み、同八年には衛生工務係長に拔擢されたが、同十二年に官を辭して母國に歸還した。と同時に同年四月に早くも東京市技師に任ぜられ、道路局勤務を拜命すると共に、現在の位置を占めたのである。年齢今や働き盛りの四十代。今後市政に寄與するところ層一層であると期待される。



安田 善次

明治十一年六月十一日生
荏原郡上大崎町五七九
電話 高輪 四三三八番

伊安田家の懇請によつてその養嗣子となつた氏は、大崎町桐ヶ谷の舊家として十八代に亘る長い家系を誇る石井三九郎氏の次男である。青少年の際慶應大學理財科に學び卒業と共に明治二十六年より同三十二年五月まで村會の推薦によつて大崎村書記に就任した。三十二年十一月に大崎町郵便局長に就き、なほ三十四年十二月には目黒停車場前の電話所長をも兼ねて通信事務を督勵したものだ。大正三年八月にはその功によつて勳功章を授與せられ、更に翌四年には三級勳功章を重ねて授けられ、大いに面目を施した。一方大正九年七月には國勢調査委員に推され、翌十年には大崎町學務委員に推舉せられ、公民自治の一線に花々しい活動をしたものである。同十二年一月には郡民の衆望を負つて荏原郡病院組合々議員に當選し、之亦盡瘁大いに努めて現在に至つてゐる。十二年四月には國家よりその功績を讃でられて勳八等に叙せられ、更に十四年六月には大崎町學務委員に再選、家門の名譽を層一層ならしめた。十四年六月には大崎町學務委員に再選、外に安全組合副會長としては、あの大震災當時寢食を忘れて活動し、罹災民の救助は勿論、配給品の分配より町内の安寧秩序に粉骨砕心した。氏は非常に神佛の崇敬者であつて、毎年高野山と伊勢神宮には参拜を命ぜられた程である。以て氏の人格の如何なるかを察することが出来る。家業は書籍及食糧雜貨商で、麻布銀行監査役、明治生命代理店をも兼ねてゐる。夫人名み子との間には正番忠誠の二男、智恵子富美子比佐子の三女がある。



小野 新太郎

明治十五年 五月生
大久保町宇西大久保三〇七

都市の發展はその都市を環る隣接町村の發展を意味する。將來に於ける市内は單に營業地帯たるに止まり、生活上最も大切な住宅地帯は之を郊外町村に求めなければならぬ。靈魂の安息所であり、心の慰安所となるべき地帯は、麗しく美しく和やかでなければならぬ。だから隣接町村に於ける自治制の發展は、都會人にとつては看過し難い緊要問題と云へる。この大切な衝に當つて功勞の多い人に小野新太郎氏を見出すだらう。氏は京都市木尾町の生れ、二十七歳の時に上京し、京都人の獨尊舞臺とも云ふべき染物業を赤坂區福吉町に營み、その洗練された技術を以つて着々として業績を擧げて行つたものだ。やがて店舗の狹隘を告げて來たので、大正六年現在の地に轉住すると共に、婦人雜誌界の權威である婦女界社代理部の染物業を一手に引受けて、益々信用の度合を高め、今では東都府有数の染物業としての盛名をかち得てゐる。一方氏は社會人としての自覺から公共團體にも眞剣な理解を拂ひ、その完成に滿腔の後援を辭さない。現に大正十二年九月一日の大震災が起るや、氏は率先して親保會を組織し、同町の治安維持に力を盡し、避難民の救助や衛生的設備に寢食を忘れて奔走したと云ふ。その當時には自家の浴場を開放して、町民並に避難民の入浴に當てた等は美譚と云ふべきだ。氏は現に商友會副會長たるの外に、同町正交會庶務幹事をも兼ね、更に親保會をも牛耳つて町民の共榮に努めてゐる。趣味としては寶生流の謡曲や俳句をよくし、漫畫にも巧みであると藝術的氣品に富む氏の風格が察せられやう。

大出 多門一

明治十八年一月一日生
淺草區松葉町三十三番地
電話 淺草 二一五三番

柄木縣下都賀郡大谷村は氏の夢裡にだも忘れ難い故郷である。このなつかしい産土の地を後に上京して、神田區鍛冶町の梨瀬酒精開屋に丁稚奉公したのは、氏が幼い十五歳の時であつたと云ふ。約五六年の間を同店で激しい店務に従ひ、その間に全く商法を學び知つた氏は、あの日露戦争が勃發した頃、遂に獨立して本所區で酒精製造販賣業を營むやうになつた。茲に幼ないながらも自分の世界を創造しやうとする氏の不屈の面目が躍如としてゐるではないか。かくて拮据精勵日夜勉めた甲斐があつて業績は日に日にあがり、大正五年には現在の場所に移轉し、更に工場を松葉町七八番地に新設し、單に酒精製造の外に、ブランド・ウィスキー、ベルモット、焼酎類の醸造へと手を伸べ、なほ清涼飲料水の製造も行ひ、大々的に店舗を擴張するやうになつた。一方氏は自治體の完成に心を寄せ、大正八年に同志と謀つて町會期成同盟會を組織し、ついに大正十一年に松葉町々會の實現を見るに至つた。で會長には政界の名士安藤正純氏を推し、副會長には大山氏佐慶氏を擧げ、町民の共榮につとめると共に、自分は會計幹事の重任に當つて、その任を全ふしてゐる。其他氏は七軒町警察協議會員として警察署と民間との意思の疏通を計り、民衆警察の實をあげしめてゐる。あの大震災の時、氏の店では賣掛代金三萬餘圓の得意先があつたのに氏はこれを自由意志に任せて取立てを放棄したと云ふことは、なんとふと腹な美談ではないか。氏は又郷土の物産を廣く紹介するため、野州の名産乾瓢の一手賣捌をなし、非常な好評を受けてゐる。

今里情市

明治十三年一月五日生
府下北品川町小開
電話高輪三五三八番

明治五年に東京と横濱間の鐵道が開通してから、今日まで僅か半世紀しか過ぎないのに、今や鐵道は蜿蜒一萬哩を突破し、常に文化の魁となつてゐる。従つて鐵道關係の機械製作もそれに比例して異状な進歩をなしてゐることが知れやう。この特殊機械の製作に従つて斯界に聲價を擧げてゐる人にわが今里情市氏がある。氏は異國情緒を想はしめる長崎縣早岐町の出身で、青年期を専門學校で機械學を修めてから、九州鐵道株式會社技師に赴任し、十ヶ年間を銳意製作の指導監督の任に當つてゐた。が明治四十一年に上京して京橋月島三村工場に技師長として轉じ、敏腕を鳴らしたものが、サラリーマンの生活は男子の本領にあらずとし、遂に憤然離職して獨立の門出に立つたのは、大正十年のことであつた。そして工場を品川町小開に設けて鐵道諸機械用具の製作を開始したのである。が何を云つても、長い間を優秀な工場技師として重きをなしてゐたことだから、工場開始初々から鐵道省を始め各地の私設鐵道會社より注文殺到と云ふ繁昌ぶりであつた。そして今では製作の精密、經營の確實なことで、押しも押されぬ現地歩を築き上げるに至つたのだが、その裏面にひそむ氏の苦心の程を忘れてはなるまい。殊に我國の鐵道は今後益々進展しやうとしてゐるのだから、氏の前途も愈々多望である云へる。飽迄もデモクラツトであつて、勤しも高ぶることのない謙讓な氏は、使用人を遇するによくその人格を認め、常に愛撫の襟度を忘れないから、皆和合して事に勵んでゐる。その將來は刮目すべしといはれてゐる。

菅沼廣助

明治十九年六月十二日生
小石川區大塚坂下町
電話小石川六一三六番

君は山形縣の人、明治十九年土山町に生れた。幼にして穎悟、霸氣に富みて不撓の氣象を有し、家郷に逸樂するを屑とせず、十六歳の折、郷關を辭して、遙々上京したといふから、その氣魄の壯なること既に擧げたるものがあつたらしい。果せる哉上京後の君は、苦學し乍ら中學から高校へと順次に進み、遂に赤門に通ふ身となつた。そこで英法科を専攻した君は、大正三年優秀な成績を以つて卒業し、間もなく大阪住友家に聘せられ、手腕を揮ひて大いに前途を囑望されてゐた。しかし少成に安んぜぬ君は、それより北米にわたり、居ること一ヶ年、廣い亞米利加をすみから隅まで詳しく踏査して歸朝し、こゝに故馬場博士の知遇を得て、しばし法學の研究に没頭した即ち君の今日ある所以である。しばらくして、法界に名乗りをあげたが、その博學多才は、馬場博士の後ろ楯と相俟つて忽ち多士儕々たる東都の法界に圭角をあらはし、衆目の驚異する所となつた。そして絶えず弱者に味方して、護法の精神にもとらぬ所は、流石に馬場博士の寵を一身に蒐めただけであつて、眞摯の氣質の躍如たるものがある。さきに故山に鹿を逐ふて、中央政界に飛躍せんとしたが、時機未だ到らずして志を得なかつた。然し郷黨の信望次第に重きを加へてゐるから近い將來に於て必ずその目的を達するに違ひない。君今や區會議員たるの外又阪神土地會社取締役として實業界に狼臂をのべ、前途ますます洋々たるものがある、百合子夫人、亦幼にして米國にあり、歸朝して東京女子大學に學べる才媛にして、子弟の陶黨に任じ、内助のはまれが高い。



中村彌三郎

明治元年九月九日生
芝區新櫻田町四番地
電話銀座四三三二番

家計甚だ潤澤でない折りに出生した氏は、両親の膝下に飽食暖衣の生活を續ける事は許されなかつた。かくて織手可憐にも父兄の重荷を少しでも擔つて手傳はうと、十三歳の年には印刷屋に奉公する身となつたが、爾來主家の命に服して凡ての願使に従つたのであつた。弱年ながら凝つと艱苦に堪えて同輩の酷使に甘んじ、あらゆる苦難を尊い試練として受け、十有餘年の間を主家を想つて勤しみ、父兄を想つて忍び、よく獨立の機會を待つたのであつた。當時の明治初年頃は、維新文化の黎明期で、印刷出版業も稀に見る時であつたが、出版物印刷物は科學の發達につれ、諸多の事業の進歩に促されてにわかに發達して行つた。氏は其の發達の最初の時代にあつてよく百年の後を洞察し、心ひそかに此の事業の恃むに足るを思つて北叟笑んだのであつた。やがて待ちこがれた獨立の日は來て、現在の地に開業するに至り、常に新しい試を以て印刷界に異彩を示し、顧客の數を加へて行つた。かくて創業の早かつた氏の事業は、堅實な歩調をたどつて次第に發展して行つた。近時同業者簇出して世の求めに應じやうとして居るが、舊い經驗と長い經營から與へられた手腕は、成果の上にてはるかに異なるものがあり、依然として關係方面の信用をつないで居る。氏は又新櫻田町有志の一人として、時事の問題には常に參畫して裨益する所が多かつた。今次は衆望の歸する所となつて、新櫻田町會長に推されて居るが、其奉公的態度は等しく賞讃を博してゐると云ふ。立志傳中の人と推すに足る。

黒田熊吉

明治二十三年十一月廿九日生
荏原郡品川町小關五二五番地

氏は山水秀麗な大自然を誇る靜岡縣賀茂郡南端村の出身である。幼少の頃から獨立的の霸氣に富み、鶏口となるとも牛後となる勿れとの古賢の言は、その常に口誦んでゐたところである。かくて年齢僅か二十三歳で、府下巢鴨に鐵工場を設けて之を經營し、他日實業界に飛躍する地盤とし、銳意その業績の刷新に努めたのであつた。ところが晩近わが國の防火建築である、鐵骨鐵筋コンクリート建築は日を逐ふて盛んになつて行き、それに使用するスチール・サツシュの需用もまた自然と激増し、毎年輸入額三百萬圓以上に達し、なほ年々増加の傾向を示してゐる折柄とて、氏の經營するサツシュ製造は、順風に帆を上げたと同様に非常な好成績を告げて來たのである。これこそ氏の時勢を察知するの明があつたからだと云へやう。それに國産獎勵の折柄とて、氏の事業は國家經濟の上から見ても有意義なものだ。氏はまた伸縮自在の机及び椅子を發明して、教育家や需用當路者の批評を求め、何れも非常な稱讃を得てゐる。抑も氏はその工場を經營するには、よく職工達の生活の安全を保證し、その家庭内の吉凶禍福なども、自ら共に憂ひ共に樂しむと云ふほどに慈愛に充ちた親切をとつてゐる。なほ氏はこの外に東北土地株式會社に取締役とし、中外建材社に専務取締役として、また朝日自動車株式會社に監査役として、その機を見るに敏俊な秀才を縱横に振つてゐる。氏は性來科學的な機械の物理的研究を好み、餘閑の時には常にその方面の智識の吸收に盡してゐるとは、驚くべき精力家であると共に、其心事のほども想察し得らるゝのである。



藏野源之助

明治十七年三月七日生
芝區二本榎町一ノ二二
電話 高輪 一九五六番

氏は温雅な容貌と落付きのある舉措でいつも親しみを以て人を引きつけるの徳がある。併しそのおだやかな外容の内には、鋼の様に剛毅な意志と、黄金の様な卓犖な性格とを包んで居る。常に外隣保扶助の事に身を委ねて、二本榎に町會の成立後は引き続き幹部で働いて来て居り、現に會長にあげられてゐる。氏は父祖以來現住所に質屋業者として古い歴史を持つて居り、その温厚な徳風と能材とに推服する同業者は、同業組合の取締として推して来て居る。氏も亦よく指導誘掖して斯界の發達と改良とに盡瘁して来たのであつた。君の公共心と不斷につゞく愛の誠意とは、嘗ては氏をして區會議員として區政のために奔命させた事もあり、信任依然として舊の如くさかんなものがある。實業界方面に相當な地歩を持ち、日本電氣工業株式會社事務取締役として、又東洋工業株式會社監査役としてきびくした腕前を見せて居る。夙に隣保親善扶助の實行機關の設置を思ひ、有志と計つて大正三年二本榎町會なる町會の設立を見るに至つたが、爾來衛生上の諸設備、街燈問題等の實行に盡興して各その遂行を完全ならしめるに力あつた。大正十二年の大震災には日夜寢食を忘れて罹災者救護配給品分與の任に當り、殊に此の非常事變に際會して會の基本金を擲つて救護にあつたが、東西奔走日夜席の温まるを知らなかつた氏等の奮闘振り後日の話柄として残つて居る。又氏は區内實業同志會の中堅人物であり、同志と共に區政のために計る所が多い。尙幾多抱負を藏する氏のことであるから今後も相當自治のために活躍する人物と目されて居る。夫人をつる子といふ。

石井孝

明治十七年六月二十二日生
在郡大崎町谷山一三〇
電話 高輪 三六四四番

氏の先代は奥州會津の生れで、上京して家を起した立志傳中の人であると聞く。由來會津の人は、質朴敦厚、その屈せざる意氣と奔逸な熱情を合せ得てゐることに於て知られてゐる。環境が人をつくるに至言とするならば、この故里の人情風致が、氏の人格を形造つたことを否定し得られぬだろう。氏が家を繼いだのは二十五歳の時で、其時獨力吳服商を大井町に開き、次で大崎町谷山一三〇の現住所に移轉した。その商業道にかけての鋭い技術と、それでゐる飽運も誠實を旨としての商法は、日に月に歳に、家運を盛大ならしめ、今や大崎町の中樞に當る市區改正道路の一角に、三層樓の大建築を完成し、大崎町の三越とまで云はれるやうになつた。建坪數百六十坪を超へた町内の一偉觀であるばかりか、店員三十有餘名を使用し町内屈指の大商店としての地歩を築いてゐる。一方氏は町政自治の發展に力を注ぎ、町會議員に推されるや至誠至廉他の範とするに足ると、同志の間に畏敬せられてゐる。其他吳服商在郡組合の主腦部として、同業者の啓蒙並に親睦に努め、又安全組合聯合會々長として、隣保共睦を計つて倦むところを知らない。氏の性格は如上の事實が充分に物語つてゐるのであるが、特に業の模範とする點は、人を率ゐるに當つて、先づ自己の奉ずべきを率先して行ひ、飽迄も辭を低うして諍しも驕漫なところが無い。そして功を人に譲り取て自ら誇らないことである。これこそ潤澤した現代の思潮にあつて、後人の深く意を留めて學ぶべき美談であらう。年齒僅に不惑を過ぎたばかり、今後の發展と活躍とは蓋し目覺ましいものがあらう。



青山新之助

明治十三年十月七日生
本所區柳原町一の一六
電話 墨田 三七七〇番

ニイチニと云ふ超人の福音を説いた哲學者は、人間の持つもので最も尊いものを意思の力であるとした。わが國では熊澤蕃山と云ふ大儒學者は、憂き事のなほこの上に積れかし、と詠じて意思の力を試さんことをこひ願つた。根強ひ意思の力の働きかける時に、如何なる苦境をも突破し得る。吾人はこの好適な例をわが青山新之助氏に見出すだらう。抑も氏の父君は千葉縣行徳在押切村では相當の農家であつたが、大水害のために傳來の田畑が悉く荒廢に歸した爲、思ひ出き故郷を後にして上京し、本所區林町で茶及雜貨商を營み、只管家運の挽回を計つた。長男に生れた氏は早くから深川區の染物屋に丁稚奉公にやられて具に苦辛を嘗め、居ること數年、明治四十四年遂に其技を修得するに及び獨立して、毛絲染色業を開始するに至つた。然し何を云ふにも毛絲専門のこととて當時其販路も極めて狭く、尠からず經營に悩まされたが、鐵の如き意志を有する氏は、毫も之に屈することなく、苦心の結果、翌々年には遂に完全なる靴下染色工場を新設するまでに成功した。靴下染色は東京に於て氏を嚆矢とすると云ふ。かくて二十有餘年、銳意之が發展に努力し、今日では職工百餘名を便役し、毎日六百打以上の製品を市場に出すに至つた。まことに氏の如きは立志傳中の人として現代青年の範とするに足りる。氏は又夙に有志と共に柳原町會を組織して現に之が會長に推され、衛生保健其他日常の共存共榮に盡してゐる。氏は深く日蓮宗に歸依し、その心を心として意志の鍛錬を積んでゐる。夫人かね子との間に二男がゐり、よく和樂してゐる。



齋藤與吉

明治十九年十二月廿八日生
下谷區上根岸町七番地
電話 淺草 五九九六番

自らの力を力とし得る人ほど幸福なものはない。更に自らの力によつて運命を開拓した人ほど尊い者はない。齋藤與吉氏はその典型的な人物だ。氏が生れ故郷の埼玉縣北足郡馬實村を後に上京したのは十六歳の折で、最初陸軍砲兵工廠機械部に入つて機械製作の技術を修得し、滿四ヶ年の間を格闘精勵したのであつた。そこで早くも二十歳にしてその力量を認められ、大崎町電社に招聘せられ、同工場長の要職に就いた。自らを知つてくれる人のために働くのは男子の本懐に違ひない。意氣に感じた氏は只管同社のために盡瘁し、寢食を忘れて業績の發展並に製品の優秀なるにつとめた。同社が今日の殷盛を示せるのも氏の努力に負ふ所が多い。かくて十有二年の間に勤の後に、獨立して麻布區田島町に一小工場を設け、電氣發動機の製作に従つたのは大正六年のことであつた。その頃は世界大戰亂のためにわが國の經濟界は前古未會有の好況を告げてゐたこととて、氏の事業も亦旭日昇天の勢で業績をあげ、同九年には現在の地に新工場を建築して斯界に雄飛するまでになつた。現に同工場は従業員七十餘名を使用し、電氣機械、同發動機は勿論のこと、ラヂオ受話機をまで製作し、飽迄も時勢の要求を旨とし、その年産額今や五十萬圓を突破するに至つてゐる。ここで極東電氣機械同業組合副組長の要職に推され、また協和會々長等の公共の職に就いて、公人として申分のない活動をも續け、近隣及び氏を環る人々よりは徳望愈々熾烈の度を加へてゐると聞く。夫人みささは貞淑温雅な良妻として内助の功につとめ、長男市太郎氏は日本大學に在學中である。

古谷豊三朗

明治二年三月生
浅草區榮久町二番地

實に偉きは人の子の努力である。過去三百年間人智と膏血とを以つて築き上げた文化も、大自然の猛威の前には一朝にして灰燼に歸し、满目荒涼たる焦土に立つて目のあたりこの感を深うした日を吾等は忘れ得ないのである。所が震災後僅三ヶ年、意外に早く復興するに至るを見るに至つては吾等は再び實に偉なるものまた人の子の努力であると讃嘆せざるを得ない。併し何といつても百億の損害は到底一朝一夕には醫し難い瘡痍である。之に處せんには吾等は只之を轉機として根本的に永遠の復興策を立て、秩序的にして創造的ならんことを要望するのみである。しかも已に約三千萬の復興費を費して今日なほその進歩不振を非難するの聲を聞くのは甚だ遺憾である。實に復興事業の基本問題は區劃整理であつて、市民の基礎建築は之に依つて決せられるものであるから、我等は當路者の重責を稿ふと共に一層の奮勵を希望して已まない。吾が古谷豊三朗氏は第三十三地區々劃整理委員として、且つ委員會議長の席に就いて善處算なきを期し、公平至正その職責を遂行してゐる。元來此の種の仕事には紛淆係争絶えず、兎角事務の圓滑を缺く虞れがあるが、同地區整理の成績は頗る優秀で着々豫定の進行を見てゐる事は、氏が如何に職務に忠實で責任觀念の熾烈なるかを物語つてゐる。氏はまた榮久町々會長、方面委員等の公務に任じ、朝日衛器製作所取締役として實業界にも雄飛してゐる。岐阜の人森初三郎の長男として生れ、先代七之助氏の養子となつて古谷姓を冒したのである。夫人をはる子と云ひ、子女何れも前途を矚目されてゐる。



相田義明

明治十四年四月十四日生
大崎町桐ヶ谷六二番地
電話高輪三二七〇番

酒な、そして繊細なセンセーションに投ずべく、常に新奇から新奇への趨向を見脱してはならぬのが都會の商人である。この點に着眼した氏は安全剃刀・ヘイヤライオン・安全剃刀用革砥製造を以つて重きをなしてゐる。この文化人に投ずる氏の營業は、不斷に拂はれる製品の改良と相俟つて、日に月に今日の繁昌を招致した次第と云へやう。氏は斬新で精巧な製造機械の設置と、製造上に於ける化學の應用に苦心し、手腕のある技術員を招聘して、從來舶來品のみが勸迎されてゐた需要市場を、自分の勢力圈内のものとしやうとしたのである。かくて國産獎勵の實を擧げて和製品の世界を實現したことは、偉大な功績だと云ひ得られやう。現に職工は四十名を超え、製品の七割は海外に輸出されて、遠く異國の市場でその優秀を誇つてゐる。氏の故郷は千葉縣市原郡で、明治二十一年に本所區柳原二丁目に住居して刀劍類製造に従つてゐたが、同所に市電車庫が建設せられ手染めてゐた西洋剃刀の製造を本業とするやうになつた。製造及び萬端の指導には、氏の同郷人であり共同出資者である相原義明氏が主に當つてゐるが、同氏は工業學校機械科在學當時に、外人フランチス氏に就いて、親しくその製造方を修得し更に、高等工藝學校鍍金科にも學び、明治三十九年には理科大學助手に招かれた程の敏腕な技術家である。この兩氏相提携して畫策するところ、同店の今後は刮目して見るべきものがあらうといはれてゐる。

三輪徳助

安政元年七月二日生
浅草區新旅籠町二番地
電話浅草二〇五五番

十九世紀より二十世紀に亘つて最も自覺ましい現象の一つは、商取引の國際化であると云へやう。かくして日本の對外貿易も日を追ふて隆盛の度を加へて來たが、悲しいかな昨今では歳々入超を以つて終始しやうとしてゐる。がその悲しい現實の中におかれて、唯メリヤス製品のみは漸く國産品を以て充たされてゐるのは悦ばしい次第であつて、技術の進歩と品質の優良とが、外國品を凌駕してゐることの實證と云へる。茲にメリヤス卸問屋として市内に好評ある三輪徳助氏は、岐阜縣の出身で明治初年に上京し、早くもメリヤス製造事業の有望なるを觀取し、明治二十三年遂に本業に着手したのであつた。かくて考案の洗練、經驗の反覆等によりて製品の改良を進め、やがては日を遂ふて業態の繁榮をまねぐやうになつた。そして瞬く間に同輩の業者より抜んじてしまつたのである。氏は又一方町政自治のため奔走し、その殉教的な精神は、常に多忙な家事を捨てて公共事業に率仕して其功勞を惜しまなかつた。先般は國勢調査委員、市勢調査委員としてその任を果たし、その他公職についたことも一再でなく、あの新旅籠町々會創設以前にあつては、盛んにその設立を唱へ、設置以後は十ヶ年の長い歲月を引續いて會長の椅子につき、町民の共榮共存の上に盡すところが多かつた。その經理の才に合はせて具備する徳望の大いさを窺ふことが出来るだらう。長い人生の坵場を通つて來た氏は、苦勞人であるだけに非常に快氣に富んでおり、老境に入ると共に益々圓熟し、その鏗鏘たる健康と相俟つて、一意公共事業のために盡瘁してゐる。

本井健吉

明治十一年三月七日生
麻布區新廣尾三ノ九一
電話浅草六五六一

古來新潟縣は幾多の人傑を輩出してゐるが、中でも本邦實業界の重鎮として朝野に敬仰されてゐる大倉喜八郎男を産んでゐることは同縣の強味と云ふべきであらう。吾が本井健吉氏も亦同縣の生んだ傑物の一人であり、その慧眼なる點から堅實なる性質、その經歷まで大倉男のそれを髣髴たらしめるものがあるのも面白いではないか。氏は西滿原郡津生村に呱呱の聲を擧げ、大倉男が大鵬の志を懐いて搖籃の地を去つたのと殆んど同年輩の十九歳の折、氏も亦青雲の志を懐いて上京したのであつた。裸一貫で東京へ飛出して來た氏の生活が當時如何に波瀾曲折を以て充たされてゐたかは之を想像するに難くないが、鐵の如き強固な意志を有する氏は幾多の艱難に遭遇して更に屈する色なく刻苦精勵遂に奥田合名會社龜戶製鉛會社に入つて之が支店長となり、更に明治三十四年十一月同社を譲り受け、此處に多年の經驗と天賦の慧才とを以て専ら製鉛業の經營に精進することになり、以來孜孜として業務の刷新に力めた結果、信用益々加はり、遂に擴張に次々に擴張を以てし、現在では支店及製造工場八ヶ所に及び、工場總坪數三千餘坪、職工三百餘名を役し、年産額實に三百五十萬圓に達するの盛況を呈するに至つた。就中製鉛業の如き氏は本邦に於ける先驅者である。此外氏は長野縣上田の飯島水飴製酸合名會社擔當社員として手腕を揮つてゐる。蓋し氏の如きは稀に見る立志傳の人物として又將來ある實業家として推稱するに足る。夫人靜子との間に長男功君を始めとし、四男二女があり、何れも氏に似て明晰なる頭腦の持主である。



安藤市兵衛

明治八年八月生
上目黒駒場郵便局内

電氣時計の發明は時計製作界のニボツク・メーキングを告げたものであつた。従来の機械構造の時計は、徒らに多くの勞力と高價な生産費を要し、しかも非常に破損し易いものである。それに反して電流應用の電氣時計は、時間が正確であつて破損の程度が少い。この點に留意したのはわが安藤市兵衛氏である。然し電氣時計はまだ完全なものでなく、秒間を示すだけの精巧なものは發明されてゐないだけに、努力の如何によつてはまだまだ改善の餘地がある。で着眼のしやうでは將來有望な事業である。氏は這がに鋭敏な頭腦の持主だけに、この未完成なところに希望を繋ぎ、知友荒井氏外同志を糾合して資本金一百万圓の合資會社を創設し、盛んに電氣時計の製作に従つたところ、機械時計に比し時間が正確なために、官廳會社、銀行等から大歓迎を受け、業績は日に月に擧がって行くばかりであつた。抑も氏は徹頭徹尾事業家肌の人物で、出生地は山形市である。明治四十年には同市の市會議員とし、また商業會議所議員として、同市内有数の徳望家だつたのだか、明治四十二年に拓殖事業の有望であることに想倒し遠く北海道に翼を伸べ、上川郡美瑛の地に大農場を經營したのである。かくて大正七年まで同地に滞留して興業に努める傍ら、農會副議長として寄與したものであつたがその後上京して、今日に至つたのである。息子市之助氏は幼年學校より陸軍士官學校を卒へて軍籍に身を置いてゐたが、目下駒場郵便局長として公職に就き、次弟文助氏は郷里山形市で洋服商を營んでゐる。兩氏とも謹嚴な紳士として好評がある。

秋山文次

明治十二年九月生
府下千駄ヶ谷町八五六
電話四谷一七六七

裸一貫から今日の成功を贏ち得た秋山文次氏が、過去二十有餘年の奮闘は寔に目覚ましいもので、艱難汝を玉にするとは獨り氏の爲に作られた言葉のやうに思はれる。自然は人を玉成する。君は山梨縣北巨摩郡龍岡村の人だが、まるで播鉢の底のやうに狭苦しい山の中に押込まれてゐる甲州人が郷土にて發展の餘地なく、偉大な自然の感化を受けて精神的に發達してゐることは何人も否定されない事實である。従つて放膽で、機械で敗けず嫌ひで、そして進取の氣象に富んでゐる。今日甲州人が實業界に大なる勢力を占めてゐるのも、その通有性が然らしめたものであらう。かうした界團氣に育まれた氏が、幼にして鬱勃たる霸氣を蔵してゐたことは云ふ迄もない。氏の家は代々地方の豪族として四隣に聞えてゐたが、先代千代藏氏の代になつて四百年來續いた由緒ある家運が日に増し傾くとき、血の氣の多い氏がどうしてこれを黙視することが出来やう。かくて氏は十九歳の朝、大膽にも僅か三十金を懐にしてなつし揺籃の地を後に上京して商賣を營んだが、後日露の風雲急をつぐるに及んで、君も亦徵兵に合格し、續いて滿洲に出征し、戦功によつて勳八等に叙せられた。後歸國するや、再度上京して實業商を營み、家運漸く隆昌なるに共に、轉業して専ら土地の賣買に關係して今に及んだもので、先頃の町議改選に際しては輿望を擔つて當選し、今や町會に於ける一方の重鎮となり、町政發展のため、その他公事に盡瘁する所極めて多い。本年四十八歳の分別盛り、今後千駄ヶ谷町の發展は氏の手腕に俟つものが多いだらう。

松下房次郎

文久元年生
本郷區千駄木町二一〇番地
電話 小石川 一〇七三番

水道口金製造松下工場主たるわが松下房次郎氏は、深川區冬木町の出身だ。年少の頃から既に事業家肌の氣魄と商才とを具備してゐて、二十四歳の時には既に獨立して深川で貴金屬製造を營んでゐた。それから大阪に轉じて日本時計株式會社を創立し、自ら技術長兼常務取締役となつて新進氣鋭ぶりを發揮したものである。かくて衆望の歸する處推されて大阪東區々會議員となり、前後九年の久しきに亘り區政の刷新に力めて大に盡す處があつたが、大正六年遂に歸京し、現在の場所である水道口金製造に従事して今日に至つたのである。氏は非常に發明家的なタレントの持主で、何んな精巧な機械でも、一度見ると必ず製作し得る自信を持つてゐることだ。従つて今日迄氏の發明に係る特許品は尠くない。恐らく氏の血管には嚴父宮浦松五郎氏の才能が遺傳されてゐるのであらう。抑も松五郎氏は幕末當時に於ける著明な砲術家で、且つ英佛獨等の兵術に通じ、榎本武揚、大隈重信、桂小五郎、大島圭介等の諸名士は皆氏から砲術や兵學を教授されたものだ。又その頃から寫眞術をも修得してゐたといふことだ。後廣島藩主に招かれたが、餘りに重用せられた結果、其權勢を妬みて暗殺を企つるものがあるに至つた。然し幸ひ氏の部下の爲に刺減せられて事無きを得たが、責任觀念の強い松五郎氏は、遂に自刃して終つた。後人氏を惜んで某寺に祭り、今なほ參拜者が絶えないといふ。この父の子なる氏が科學的な才能多きは當然なことだ。夫人はな子との間は五男三女があり、次男保次郎君は早大機械科出身で目下凸版會社第一工場長とし働いてゐる。

松下潜八

明治十六年二月十日生
小石川區白山御殿町四六

氏は九州は佐賀の人で、家は代々鍋島侯に仕へた由緒ある名門であつたが、廢藩置縣の後氏の父君は不幸にして各方面に手を出して失敗した閨々の情を抱いて遂に鬼籍の人となつた爲、爾來氏は繊細の母の手に抱かれて成長したが、十三歳の時更にこの慈母をも喪ひ、天涯寄る邊なき孤兒となつた。然し不遇であつただけに氏の烈々たる意氣は却つて燃えさかつて行つた。而して十七歳の時に斷然志を決して上京し苦學を初めたのである。ところが性來蒲柳の質であつた氏は、無理な勞働に従ふことを不利として苦學を放棄した。茲に至つて氏が決心したのは、自分は體質的關係上初志の貫徹が出来ないから、せめて強壯なる體軀を持つて苦學力行する人達のため、その人々に従事するに相應しい仕事と、同時に色々な世話をし遣りたいといふことであつた。で氏は本所區で納豆の製造を開始し、多くの苦學青年を集めて低廉な原價で之を卸し、邪道に陥らないやう扶掖鞭達して倦むところがなかつたので、苦學生よりは救世主のやうに尊敬せられ、かつ慈父のやうになつたかしたものだ。現に小石川白山御殿町に移轉しても、納豆製造を業として無産青年の向學心に資してゐる。一方氏は又御殿町會幹事として自治參畫の功を積んでゐると共に、同町青年團顧問として後進のために訓育至らざるなしと云ふ調子である。その殉教徒的な態度には敬虔の念を拂はせられる。なほ同町死活の大問題であつた千川改修工事の期成運動には、常に急先鋒として目的の達成に努めた等は特筆すべき事柄である。夫人うめ子との間には二男二女がある。

松崎 文次

明治十二年六月十一日生
淺草區千束町二の三七〇
電話 淺草 二四五四番

氏の風采は、一見して佛心慈腸を想はしむるやうに温雅である。そしてそれにもまして麗はしいものはその水の如くに淡々とした高潔な性格である。俗事に對して拘泥するところなく、それでゐるその不得要領のところを得要領、將に將たる大器の佛は益々衆望を擔ふに至つたのだ。のみか氏の家は淺草區内有數の舊家で、江戸幕府創立以前に既に此地に居を有し、紫匂ふ武藏野の開拓につとめ、氏に至るまで實に二十代とのことである。父君は名を文吾と稱へ、氏はその長男に生れた京華中學校を卒へて明治法律専門學校を修了したのであつた。かくて明治四十四年以來引續いて淺草區會議員に選舉せられ、不斷の貢獻を區政上に拂ふこと實に十二年の長い歳月に及んでゐる。大正十三年府會議員の改選に際し、區民の懇請もだし難く、鹿を中原に争つて見事に月桂冠を占め、次いで翌十四年には府參事會議員となり、瞬く間に同輩にぬきんじて重きをなすに至つた。氏はまたあの震災前までは天に沖して聳へてゐた十二階劇場の社長としてその經營一切の任に當り、土地の繁榮に寄與したものであつた。なほ氏は東京音響製造株式會社の取締役として業績をあげてゐる上に、自己の居住地たる千束町のために寢食を忘れて奔走を辭せない。彼の大震災當時の如き、氏は身を挺して極度の不安と災害とに悩める區民の救済に當り、現に相互扶助を目的とする千束町々會を組織し、自分はその顧問として萬般の世話を一身に引受けてゐる。夫人みよ子は埼玉縣人栗原重平氏の愛娘で、氏との間に六男七女あり、その家庭の圓滿さは附近での羨望的となつてゐる。



佐藤 壽五郎

明治九年四月十八日生
下谷區西黒門町二番地
電話 下谷 三九三九番

下谷區内に於ける自治の功勞者を數へてみると、その中に篤志家が決して尠くないが、常にその筆頭に數へられるものは佐藤壽五郎氏だと云へやう。氏は茨城の出身である。常陸國と云へば水戸黄門御を出し、さては徳川齊昭公を生み、藤田東湖等多くの人傑が輩出したものである。この惠まれた地方氣質を承けた氏も、少年期に於て既に凡庸の器でなかつた。十四歳の時に上京し、見込まれて佐藤家の養嗣子となつたが、佐藤家は西黒門町附近の草分けとして名望ある舊家であつた。この由緒ある家を繼いだ氏は、決して家門をばつかしむることなく、常に町政自治の發達に倦むところがなく、日露戰爭勃發の際に、舉國一致し戦場の勇士をして後顧の憂ひなからしめんが爲、同志と語つて西黒門交誼會を組織し、互に相寄り相扶けて共存共榮の實を發揮したものであつた。これが今日の西黒門々會の前身なのである。かくて氏は衆望の歸する處、連續八ヶ年の間町會長の重職に推され、常に政黨政派に超越して自治の伸展に貢獻したのであつた。なほ氏は數回に亘つて區會議員となり、下谷區政刷新のため侃々論陣を張り寄與するところが極めて多い。その他西黒青年團を創立して團長となつたが、先般後進に途を譲り、今ではその顧問として青年の指導に力めてゐる。一方兒童教育向上のため、保護者會を創立して幹事長に推されてゐるの外、曩に國勢調査委員として、また現在第三十地區々劃整理委員の職に在つて、公共のため不斷の精進をつとめてゐる。夫人かよ子との間に一男一女がある。

村上 嘉七

明治十一年十月十日生
本郷區根津西須賀町一五
電話 小石川 三九六二番

氏は三重縣一志郡垣内村の産、若くして血の氣多い驍童であつた。稍長じて後、世間の實相がはつきりと心に映す頃となつた氏は、成功慾はいやが上に燃え、青雲の志を抱いては何の變哲もない閑寂な邊村に朽ち果てることは出来なかつた。そこで赤手空拳郷關を辭して完全に立志青年の最初の階梯は踏み出された、で憧憬の東方の空に向つて幾日幾夜は旅枕の憂き目を累ねたのであつた。惟ふに世の青年子弟の希望に驅られ空想を趁ふて鋤鋤を棄て、或は慈母の膝下を辭して卒然徒手を以つて所期の達成を期して他郷に學ぶ例決して少なくない。而も一度來つて現實の艱難障礙に前途を塞塞されて見ると、挫折惘惘して中道に志を抛つと云ふ所がきまりである。加之肝心な前途を踏み迷つて慘憺たる人生を辿る例も少なくない。斯かる中にもかゝらず、氏は獨り奮闘刻苦して着々基礎を築き上げ、二十二年の後に立派に有産階級の位置を占め、飯田町の一角に堂々と家居を構へたのであるから、何れ不撓不屈の賜として贏ち得たものとして受取つて差し支へあるまい。随つて亦成功立志傳中の人の列に加へても敢て阿諛でも溢美でもあるまいと信ずる。大正九年來現在の地に移り、町會設置の必要を唱導して有志と共に奔走し、一般公共事業には擯んで盡した。震災の折應急救護處置等の活動などは目覚ましいものであつた。同町會が毎週一回町内消毒を行ふ等の衛生方法の完備に至るまでには、氏等の功が與つて力がある。本年四十九歳、家業の旅館も亦日に盛況を呈して居る。妻女をフユ子と云ひ、兩人の間には五男三女がある。

内山 竹次郎

安政四年四月四日生
淺草區田島町一〇四

凌雲閣を以て知られた淺草六區、その六區に接する田島町松竹館の前のアーケ燈の灯の街、繰るやうな行人の雜沓、丁度表現派の芝居を見るやうに、光と、雜音と、叫喚と、車馬の響音の入亂れた情景は大都市東京の心臓だと云へる。そして文明人の享有する總ゆる調度品や嗜好物は、美しい魅力を以て行人の歩みをとどめてゐる。其中でも小間物化粧品商内山竹次郎氏の店先までくると、一般婦人は云はずもがな、美男を氣取る青年達を一齊にその店先に吸ひ寄せられる。事程左様に内山氏の店は完備した魅力を發揮してゐると云へる。氏は埼玉縣北葛飾郡早稲田村の生れ、今を距る五十餘年前(年齢十五の少年だつた)に慕はしい故里を捨て、淺草區仲町の某質店に雇はれ、孜々として主家に奉じてゐた。かくて明治十八年の頃獨立して古物商を營み、爾來日夜稼業の繁榮に専心し、着々として發展し隆盛の業績を擧げてゐたが、あの震災に遭つて不幸家財を擧げて灰燼に歸した。が氏は、此時家業を一變し、現田島町一〇四の地を卜して、嗣子をして小間物商を営ましめ、氏は之を監督の傍、田島町東部會長に就任し、一意自治の成果に努めてゐる。更に敬神崇祖の念に篤い氏は、同地八幡神社修造の工事に關しても、參畫寄與するところが甚大であつたのみか、數年來氏子總代として祭事執行員の公職にある。其他七軒町警察協議會委員をも兼ねてゐる。何分にも既に七十を越えた老齡であるから多くを望む譯にはゆくまいが、その熱誠は町民の感謝する所である。家庭には次男與兵衛氏同夫人晴子との間に二孫あり、一家團樂の實をあげてゐる。

岡田菊次郎

明治十四年十二月一日生
本所區元町二十九番地
電話 墨田 三三一八番

颯んで流れる隅田川の流れを俯瞰し、虹のやうに架せられた兩國橋の橋畔、東の一角に、輪奐の美を誇つてゐる煉瓦造の建物こそ、東部に於て古銅鐵商界に重きをなしてゐる岡田菊次郎氏經營の岡田商店である。氏は岐阜縣八百津町の出身である。上京したのは明治四十一年のことである。直ちに本所區相生町で古銅鐵商を営んだのである。業務に當つて熱誠忠實な氏の努力は、事毎に酬ひられて日一日と隆盛を招いて行つた。特にこの種の業者で尤も大切である相場の変動を洞察することに敏なる氏の叡智が、今日の大をなすに至つた主なる原因である。かくて發展して現在の場所に堂々の店舗を構へ、古銅鐵を商ふの外に、一般鐵材・銅・鉛・錫、其他工業用藥品及びカーバイトの卸賣を營んでゐる。大正三四年の日獨戰役の際の如きは、一舉に巨萬の利得を占め、商機をキヤツチするの達觀に同業者を驚かしたとのこと。その上同店の販賣するカーバイトは、新潟縣長岡市の産出であるが、毎月三十車の貨物を賣捌くと云ふ盛況ぶりである。だから今では店員三十有餘名を使用しても、なほ手不足を告げてゐる有様であつて、同店に關係した人夫は實に數百名に達してゐると云ふ。氏は非常に事業家肌の人物であつて、その決斷力の鮮かさは萬事に處して流るゝやうな裁決を與へ、自己の所信を貫徹せしめるに充分である。この積極的な性格の持主なればこそ、今日の成功が收め得られたのだ。氏はまたよく後進の指導につとめ、現に郷里の人達で氏のお陰で名をなした者が尠くない相だ。夫人はま子は同郷の人で、精進の妻としての令名が高い。

近藤 駿 介

明治二十三年十二月十七日生
下澁谷常盤松二八〇官舎
電話 青山 六三〇六番

義務教育年限延長やら、教職者の生活保障問題やら、學徒の素質、教育施設の改善等、教育界は正に改造時代に當面して居り、剩へ震災の被害未だ舊に復せず、其の施設は不完全極まるものであれば、當局が苦慮しつゝ、鋭意改善の實をあくべく奮闘して居るのは敬服に堪えないものがある。同時にそれだけ府學務課長の席にある氏の多忙さも思はれるが、抱負の多い氏は其の實力を發揮して着々計畫の實現に努めて居る、先づ震災被災學校の復興に力を盡き、時代に適應すべく學則の變更に頭を悩まして居る。尚私設學校の増設を資け、郡廢止以來其の管轄諸學校の組織變更に或は學校新設に意を用ふる等、學徒の修養及向上のためには心身を砕いて居る。氏は長崎縣平戸町の出身で、夙に東京帝國大學法學科に學び、大正五年卒業してより直ちに警視廳に入り、保安部課長から堀留三田西平野署等の各署に歴任して赤門出の腕の冴えを見せ、若くして實力を發揮したものである。三田署長時代には、同地が工場地だけにストライキの工場關係の紛争がたへず、常に難事件に悩ませられながらも其の解決には偉功を貽したもので、有志關係者等のひとしく敬稱する所となり、又西平野署時代の總選舉取締にも名を賣つて居る。大正十年には轉じて高知縣理事官として赴任し、大正十二年四月再び東京に戻り現在の職を承つたのである。氏は本年三十七歳と云ふ實力發揮の壯年であるから、多事なる府の學務方として一瞥目立つた施設をするのも近からうと期待されて居る。夫人歿後の家庭は二男と共に閑寂である。今後の活動と共に清福多からんことを祈る。

吉田 相吉

明治五年五月生
府下矢口村小林四番地
電話 池上 三三三番

矢口村に十八代に渡る舊家がある。祖父の代に火災の爲歴代の家系記録を焼失した事は、當家にとつて惜むべき事ではあるが、連絡として續いた舊家の譽は、なほ現主の人となりに見る事が出来る。父君を利一氏と言ひ氏はその長男として此の地に生れた。父君存命中は農業に重きを置いてゐたが、父君逝去の後は農を廢して、雜貨商に精進し、後砂礫採掘販賣業を本業とする様になつた。同業は實に大正二年の創始に係るもので、現今では年産額三千坪(略九萬圓)の多きに達し、販路は重に京濱方面に亘り、此方面での權威である。氏は又公事に對して盡力する所多く、明治三十八年矢口村収入役となつたのを始めとして、その翌年から大正九年の長期間に亘る學務委員、大正九年より十三年に亘る村長と云ふ様に、引き続き公事に盡して來た。又氏が村長に推されるに至つた理由の如きは、氏が如何に村民の信望を一身に集めてゐたかを窺ふ事が出来る。即ち矢口小学校學倒潰の爲、學校移轉問題分裂問題が、村民の間に渦の様に巻き起され、氏の出馬を見ずんば當底それが解決はおぼつかなくかつた爲、遂に村民より推されて村長となり、英斷の斧を振つて、安方、下丸子の兩校を建てた。後大正十一年矢口村信用購買組合設立にも盡力し、推されてこれが組合長となつて現在に及んだのである。又同村耕地整理組合設立と同時に推されて組合長となり、これ又今日に及んでゐる。玉川蒲田間の電車が早く完成した事も亦氏の功績である。他に池上郵便局長、荏原郡病院組合役場委員となつてゐる。夫人との間に養子三郎君を養育しよく團樂してゐる。

福森 虎次郎

明治十一年十月十五日生
本郷區眞砂町四番地



萬物は人類の爲に造られたものに非ず、相對的關係、相互扶助の規約の下に造られたものであるから、人類は其の存続の目的を達せんが爲に、その取捨選擇に心せなければならぬ。人の糧は穀であつて砂ではない。然るに人は精神上の糧に於ては穀と砂とを撰ぶ事を忘れてゐる。こゝに於てか現代の如き精神的頹廢期は出現したのである。かうした現世にあつて、恰も泥中の白蓮の如く、その清き輝きを見せてゐる人に、東京市地理課所掛長たる福森虎次郎氏がある。氏は明治十一年十月十五日を以つて、三重縣の名賀郡に生を受け、郷費を卒へて後も暫く郷里にあつて家業を勤んでゐたが、遂に雄圖を抱いて上京し、明治三十九年宮内省の命符局に職を奉じ、精勵事に當りてよく職責を全ふし、次第に昇級して來たが、明治四十五年東京市に聘されて事務員となり、大正元年には榮轉して庶務課に勤務する事となり、同年五月施療病院勤務を命ぜられ、次第に敏腕を發揮して累進し、大正十年水道局に轉ずるに及びて六級の書記に上げられ、大正十二年地理課に入るや、更に天才的手腕を見せて忠勤を勤み、模範的事務家として謳はれ、同課に貢獻する所は尠なくなつた。かくて大正十五年遂に上げられて地理課所掛長となり、益々職務に勉勵し、功績の顯著なるに依り、大正十五年六月東京市長より、金百七十五圓を賜はつた。氏は今や地所掛の大黒柱として、又地理課の重鎮として東京市にとつて重要な人物となつてゐる。資性濃厚篤實にして人格者を以つて稱へられ、常に精神生活を重んじて一家のを見を養つてゐるといふ。

青木信光

明治二年九月生
牛込區河田町一
電話牛込五番

貴族院議員として穩健なる主義を以つて政界に臨み、あらゆる方面に亘つて無限の蘊蓄を披瀝し、議政壇上に立役者を以つて譁はれてゐる人に子爵青木信光氏がある。氏は明治維新の大業も既に終りを告げ、世は全く大平に歸した明治二年九月、常州松岡藩主として英名を天下に轟かした中山信徴氏の第四男として此の世に生を享けた人であるが、明治九年氏が未だ母乳の香も失せやらぬ八歳の時、既に父母の膝下を去り先代青木重義氏の養子となり、明治十七年家督を相続すると共に、子爵をも授けられたのであつた。氏の養家は攝州麻田の城主にして、其の遠き祖先は多治比古王に出で、後徳川氏に從ひて麻田の城主となり、累世十四代にして先代青木重義氏に至り、明治維新の大業に幾多の武功功績を立て、業成りて政權の朝廷に歸するや、その功勞に依りて子爵を給はり、次いで氏に至つたのである。氏は始め學習院に學び、優秀な成績を以つて卒業し、後志を政界に立つるに及んで、東京法學院（現中央大學の前身）に入り、法律政治學の研鑽蘊奥を極め、明治二十三年卒業するや、政界の實際的方面に向つて研究の歩を進め、他日に備へる所があつた。かくて明治三十年貴族院議員に擧げられ、少壯有爲の政治家として大いに囑望される所あり、爾來累選せられて研究會幹部の重鎮として内外朝野の信望厚く、終始穩健主義を以つて政界に臨み、國家に貢獻する所頗る多く、曩には多年の勳功に依つて正三位勳三等に叙せられた。尙日本銀行の監事としても敏腕を振つてゐる。夫人楠枝子は川口武知男爵の令妹で、その間に三男一女がある。



柴田傳三郎

明治九年三月三十日生
品川町北品川宿二二番地

智育偏重の弊が、二十世紀に於ける文明の禍根を爲したことは争へないことで、それに目覚めて體育尊重の聲が漸く近時旺盛になつたことは喜ばしい現象である。教育者としてのわが品川小學校校長柴田傳三郎氏が、夙に兒童身體の完全なる調和的發達を養護促進するため、毎月一回定期に體育デーを實行し、積極的にには體操遊戯遠足を實行して身心育成の助長を期すると共に、消極的には生理解剖衛生、營養體操遊戯に關する講話を行ひて理解を與へ、同時に身體検査を施行して其の發達状況を調査發表し、以つてその自覺向上を促してゐるのであるが、而して更に之を學校と家庭との兩方面に頒ち、學校方面をば更に全校的、學年的、學級的、個人的等のものに細別して精細な研究と周到な注意を拂つて一々實施し、家庭方面に對しては營養衛生服裝家庭體操運動遊戯等に涉つて委しい注意を要求し、學校との連絡を取つて所期の貫徹を期して居る。氏は品川町の人、明治二十八年青山師範學校を卒業し、爾後品川城南小學校に教鞭をとり、次いで大井町品川小學校校長となつた。當時二十一歳の青年教師であつたといふ。後京橋文海小學校訓導を経て世田ヶ谷第二在原有小學校長に轉り越えて再び品川小學校長に就任して居る。現品川小學校長に補せられたのは大正四年で、此の間に日本大學法科に籍を置いて研究し大正九年卒業して目下は該校長たるの外、品川商業實務學校校長、荏原郡聯合會々長等の職に擧げられて居り、なほ前記體育中心教育と共に兒童の自學自習を尊んじ、個性の完全な發達を期して個別的指導に重きを置く事に努めてゐる。

西尾亥三郎

明治三年十月一日生
府下荏原郡玉川村瀬田
電話玉川一六番

其の昔、日本六十餘州を一門の太刀風に靡びかせ、權門榮達正に一世を掩へる源家右馬督義朝股肱の臣として、勇猛狼虎だも恐れしめた稀代の武將で、其主義朝敵討して最後の時來ると知るや、雲霞と寄せくる敵を物ともせず、衆敵を迎へて只一騎の中に馳せ向ひ、花々しい最後を遂げて永く歴史にうたはれたる鎌田兵衛正清こそ、實に君の遠い祖先であつて、統々連綿今日に至る由緒深い名門の出である。其の祖先早く玉川の地に土着するや、子孫相繼いで、地方に覇をと見え、豪族として、四隣に名をなしたものである。こゝに君は明治三年呱呱の聲をあげたが、長ずるに及んで、土木事業の日に盛んなるを見、明治三十八年自ら身を投じて土木請負業に従事したが、宛かも泥水からぬき出でた白蓮の様に、流石に名門だけあつて、その活躍は目覚ましいものがあつた。貴公子の只一騎、駒を陣頭に進めて向ふ所敵なき如く、君のなす所一つとして可ならざるはなく、幾多の大事は何れも好評噴々、世人の驚異を購つたものである。誠に三十有餘歳の青年の仕事としては、餘りにも切れものだつた。今や君、齡いよゝ多きを加ふるとともに、地方住民の信望、ますます篤く、つねに率先して村治につくす所が多い。思想亦豊富にして練達、その經驗にとむ所は長く村會議員に推舉せられ、現に玉川整理組合創立委員として、八方奔走してよくその實を擧げ、又同村名譽助役として實行機關に參與する等功績甚だ多い。君の如き敏腕達識の士が熱心自治に當るからは、同地の盛榮は期して待つべきものがあらう。

桑原虎治

萬延元年八月十四日生
芝區君塚町十九番地
電話高輪二六八四番

溪山天下に無しと山陽を激稱せしめたあの耶馬溪の近くにある、大分縣中津町は、氏の故郷なのである。中津と云へばこれも亦山紫水明の地で、裏九州で知られた靜謐な町だ。この自然から大いに陶冶を受けた氏が、聰明であり、人情深く、潤達とした氣象の所有者であるのに不思議はない。氏が同郷の先輩で偉人として知られた福澤諭吉翁が設立した慶應義塾を卒へたのは明治十七年のことであつた。當時の同義塾はわが國文運の中心をなし、所謂迷妄な封建思想打破の先驅をなしたものだ。この訓育を受けた氏は、翌十八年には米國に渡つて具さに先進國の經濟状態を視察し、他日に備へるところがあり、歸朝後は日本郵船會社に入り、更に三井銀行に轉じて敏腕を鳴らした。日清戦役が勃發すると、重要な任務を帯びて再び米國に航し、國家的使命の下に奔走するところがあつたと云ふ。かくて今日に至るまで、母校慶應義塾商業學校主任として育英事業に掌りつゝ、實業界にも活躍し、藤本ビルブローカー銀行監査役、日本ビル鑛泉株式會社取締役、上海人造絹絲株式會社副社長、東京ゴム工業株式會社監査役として、重きをなしてゐる。そればかりか氏は町民自治觀念の養成に意を注ぎ、常にその指導の位置に立ち、大正九年君塚町々會が組織されると、町會長となつて、長い歳月を町民の共榮にさして福利増進に献替してゐる。夫人や子は同縣人藤田氏の女であつて、賢妻としての譽れ高く、その間に長男健之助、長女とし子、次女さく子、三女すゞ子、四女きく子、があつて清福多き子福長者として知られてゐる。

村越長次郎

明治十二年五月生
本所區向島請地一二四番
電話 墨田 一〇一九番

電力の應用愈々盛んとなりて生活の電化は日に急務とされてゐる。この
状態に直面し、目下東都工業界に懐中電燈製作業を以て起つ人に村越長次
郎氏がある。氏は府下南葛飾郡の出身で、電氣工業の前途あるを洞察して、
電氣用品の製作に志す事多年、久しく電池の製法に苦心し、成功して後
懐中電燈製作に志を抱き、明治三十年の頃始めて大木町に工場を開設して
此の製造に着手した。由來我が國に於ては夜間の照明用として特有の提燈
があるが、携帯上からも、風雨中其の他使用上からも支障の多いものであ
つたが、この缺點を補ふものとしては懐中電燈に越えるものは無かつた。
氏は鋭意完成に没頭して遂に所期の製作に成功するや、忽ち世上の好評を
博し、販路も次第に擴張し世を益する所甚だ多かつた。かくして工場を擴
張を要するに至つて、大正三年現在の地の向島請地に移り、設備を完成し
て尚品質改良と大量生産に心掛けて居るが、近來更に海外支那方面に販路
ひらけ、遠く南洋、シンガポール方面にまでも需用を加へ、今や一の國産
品の誇りとして中外にまで威を示すに至つた事は、ひとり氏のためのみな
らず、大にして國産の發達上同慶にたへない、尙同品は各國共に需用多い
ものであるから、今後廉價優良に心掛けたり、海外同種のものも驅逐して
世界市場に獨壇場を占める事も決して夢想ではない。亦有望と謂ふべきで
ある。氏の工場は現使用職工七十餘名、年産額十萬圓に上ると云ふ。性格
濃厚で精勵な氏は、専ら趣味と努力を以て事業に精進して居る。夫人初子
一男一女の家庭は至極和合して居る。



中野全吉

明治九年七月十二日生
芝區白金三光町四〇〇
電話 高輪 四八八番

氏は福岡縣嘉穂郡出身である。鎮西男子の持つ南國的な熱情は、氏の體
内に靜かに波うつてゐるとも云へやうか。幼少にして志を立て上京し、日
本橋區本町の藥品問屋島久商店に小僧として入り、陰日向なく業務に従ふ
こと十六年にして、藥品業者としての商法を悉く會得し、遂に大正六年
獨立して芝區白金三光町に中野商店を創立し、藥品の卸小賣業に従ふこ
とになつたのである。けに十六年の長い歳月を、倦むところなく店員とし
て働いた氏の偉大なる精根には、移り氣な現代の青少年は驚かされて終ふ
だらう。獨立後も氏の不退轉な活躍が奏功し、瞬く間に同業者間に重きを
なすに至つたのは、宜なる哉と云ひたい。東京市内鍍金材料業者の組合長
として斯業の發達に貢献し、更に氏はこれと共に、附近の風紀がやもす
れば面白くない事柄を發生し易いので、その矯正を志し、少數有志者と共
に、種々の迫害を排して遂に町協和會を創立し、自ら會長として指導の任
に當つたのである。しかもこの會の基金は、氏が曩に遺失した金二百圓が
警察署より下附されたので、之を充當したのであると傳へられてゐる。氏
の公人としての慈徳心を窺ふことが出来やう。なほ氏はあの大震災當時に
は、自警團々長としてよく保安の任務を完ふし、震災者救護のため計ると
ころが大であつた。氏が曩に町會を組織せんとするや、二三の者が極力之
を妨害したけれど、氏は敢然として自己の所信を顧みず、斃れて後にやむ
の志士の氣概を以て今日の成果を収めたのである。以て氏の性格の片鱗を
察知し得られる。家庭には夫人なつ子との間に子女五人がある。

吉澤家久

明治十年十月十日生
府下羽田町栲谷一六七

吉澤家は代々此地に庄屋を勤め且又素封家として近郷に聞えてゐた。世
々祖多く豪放磊落な政治家肌の性格を享け來つたが、殊に先代彌五郎氏が
政治運動に熱狂してより流石の大身代をも悉く蕩盡し、なほ二萬五千圓の
負債を残して逝去されたので一家は全く窮迫に陥つた。乃て親族會議は先
代の弟に當る吾が家久氏の跡目相続を議決し、茲に氏は養子先の中村家よ
り出で、吉澤家を繼ぎ、その難關に當る事になつたのは、氏が實に二十五
歳の時である。爾來氏は先代の遺子八人を擁して再興の大業に勉んだが、
恰も三十七年、日露の開戦に際し、氏も亦國家の干城として滿洲の野に轉
戦して頭部並びに右腕上膊に名譽の負傷を蒙り、遂に生れも附かぬ不具者
となつて歸省した併し吉澤家再興の大業は一日も忽に出来ないので、爾來
殆んど十ヶ年實に血と汗の努力奮闘を續け、漸く負債を償還し家運挽回の
曙光を見るに至つた。其頃羽田町は穴守海岸を中心に非常な紛糾を續けて
ゐたので、東京府は三名の官選理事を任命して其解決の任に當らしめたが
氏は其一人として盡力し、栲谷浦漁業組合設立の功を立て、重望を收むる
に至つた。かくて町民より一層の信頼を繋ぎ、大正五年には町會議員とな
り、大正九年遂に町長の重任に就くに至つた。かの穴守海岸一帯の模範的
堤防が築造され、栲谷一圓治水の便等皆氏の町長としての努力であつて、
翌十年には第三地區耕地整理組合長を兼ねた。本年四月職を辭し、目下尙
町會議員として貢献してゐる。はな子夫人亦内助の功が多く、氏の事績は
夫人に負ふ所が多いと。



橋詰富太郎

明治十三年九月十五日生

氏は水戸藩士の次男として水戸市に産聲をあげて居る。祖先是書院番組
の役を承り威公に仕へて二百石を食んで居たが、世々嗣子なく、漸次微祿
して維新の際には所謂水戸の諸生天狗の争議に當り、諸生黨即佐幕黨に與
して一時藩地を脱して奔走したこともあつた。かゝる事より家政豊かなら
ず、茨城縣立中學在學中の氏も中途退學の己むなきに至り、明治二十八年
十二月日本鐵道株式會社に入り、水戸の建築課に勤務して課長々谷川謹介
氏の愛顧を受け、常磐線新設工事に従事し、轉じて鐵道作業局に入り奥羽
南線の鐵道工事に従ひ、後更に日本鐵道株式會社に復歸して書記に任用さ
れ、鐵道國有となると共に鐵道作業局水戸營業事務所勤務し、明治四十
年鐵道廳書記に任じ、更に後東京鐵道管理局工務課を歴て上野保線事務所
に轉じた。鐵道院工務局在勤中は局長杉浦野野氏等の許に働いて恩顧を受
け、大正十一年四月鐵道省事務官に任ぜられ、功に依つて從七位に叙せら
れたが、家事の都合から一時退職して前後二十六年鐵道生活を去つて歸郷
したのであつた。後大正十二年二月上京して東京市に入り、道路書記から
事務員にあげられ、工務課道路課第一道路課等を経て、昨十四年十一月道
路局工務課工事掛長事務取扱を命ぜられ、現に其の職に在る。震災後市は
あけて災害應急復興に傾注するに際し、怪徳の間克く職を全うし、道路局
主管の道路維持路面改良の事務に執掌し、御成婚奉祝祭の折は警衛掛とし
て其の精勵實な性格は普く僚友に認められ、循吏の範と稱せられてゐ
る。夫人とみ子との間に正義君、春雄君がある。

有澤 貞信

明治十八年五月十七日生
芝區宇田川町十三番地
電話 高輪 五二八五番

人生行路の難きは何人も日常経験する所であるが、わが有澤貞信氏が過去二十年間奮闘をつづけて、よくこの難澁なる行路を踏破し得たのは、取つて以つて他山の石たるのみならず實に人生の記録として涙なしには見られない。氏は富山縣の片田舎に生れ有難なる家庭の裡に育まれ來つたが偶々父君信太郎氏が政治問題に携つて全財産を蕩盡するに及び、氏は決然志を立て、住み馴れし故郷を後に東都へと上つた。併し別に頼る人ともないの奮闘を續けたが閉店の止むなきに至つたので、茲に氏は一文の時へなくして其跡を引継ぎ、尙薪炭業をも兼ねて爾來奮闘する所あつたが、無經驗なる上に土地にも不案内なりしを以つて、忽ち又七千餘圓の缺損を生じた併し不屈の氏は益努力して業務に精勵する間に漸次回復の緒を作り、經營五年の後は見事全借財の整理をつけて生活の基礎を築くに至つた。併し天の試練は尙氏を襲うた。即ち氏が三十五歳の時過去幾年氏と苦勞を共にした夫人が三人の幼兒を残して黄泉の客となつたのである。某悲嘆やる方なく行李を纏めて歸國せんと思つたが、友人の忠言に隨ひ止まつて醫養すること一年、此間自己の不幸に鑑みて結婚紹介の業を以つて廣く衆人の幸福に資せんと思ひ、茲に現在の求縁社を生むに至つた、かくて誠意を以つて業に當り、開業以來既に六百組以上の縁組を纏めてゐると。氏は又公共にも厚く青年團の幹事として盡瘁し、特に震災當時の大活動には、町會より感謝状さへ受けた程である。眞に至誠努力の人と云へやう。



青山 泰晴

府下高田町雜司ヶ谷金山三七五

都市計畫事業の街路築造の大工事に當つて、非凡なる技術を見せてゐる人に、技師青山泰晴氏がある。氏は明治四十二年私立明論中學校を卒へ、名古屋高等工業學校に土木科を撰んで入學し、大正二年卒業するや、直ちに林務技師として職を廣島の大林区署に奉じ、後幾何もなく同署の廢止と共に大阪大林区署に轉じ、山林技師として敏腕を振ひ、大正四年二月同所を辭したが、此の間林道の設計、工事、監督等に從事して非常に功勞があつた。次いで同年十一月久原礦山株式會社の日立鑛山に聘されて、輕便鐵道、索道の設計、工事監督其他一般土木工事に從事し、大いに會社の爲に盡す所があつたが、大正九年十一月再び官廳の人となり、技師として東京府土木課に勤務し、大正十一年七月榮轉して、山口縣道路技師兼土木技師となり、土木課に勤務し、主として府縣道改良の經理事業に干與し、設計工事監督に從事して非凡なる技術を見せた。後大正十三年九月轉じて東京市技師となり、庶務課技術係に勤務を命ぜられ、同年十二月職制變更に依り復興總務部に轉任し、山の手都市計畫事業及び復興事業の連絡統一事務に執掌し、就中目下着々實施せられつゝある内外濠池水改良計畫及び本所深川兩區の地上計畫を樹立して、功績の大に見るべきものがあつた。かくて大正十五年四月には河港課兼務、同年六月道路局より、十五年十二月の職制變更に依り土木局道路課技師第二道路課兼第一道路課勤務となつたのである。目下は第二期其他路面改良計畫事業に從事し、優秀なる技術を以つて僚友に囑せられてゐる。園藝論曲等に趣味を抱く。

足達 丑六

明治十年二月二十四日生
麻布區霞町二十一番地

市教育界のために全力を捧げて重要な使命を全うして居る現市視學足達丑六氏は、市の教育及び教員指導の上に最も緊切な關係をもつ人物の一人であらう。氏は視學としての教育の實際監督に任じて居るのみならず、東京市教員講習所講師として教育方針の研究發表、教員指導等のために常に多大の努力を拂はれて居る。十二年東京市視學に就任するまでは久しく淺野物産株式會社に總務部長として實業方面に活躍して居つたもので、いさゝか變つた畑の人の如き感があるが、氏もなほ純然たる教育界鍛への士である。其の郷土は南國高知縣で、高岡郡下に生れ、明治三十一年縣立高知師範學校卒業後、上京して翌三十二年東京高等商業學校附屬商業教員養成所に入學し、茲に二ヶ年を實業教育學の涵養に費し、三十三年優秀な成績を以て同校を了へて居る。かくて三十四年文部省附屬實業事務局に勤務し爾來長日月に亘つて實業教育上の要務の掌理に當り、斯界のために盡瘁して來たのであつた。其の後明治四十年に至つて、轉じて滋賀縣立商業學校教諭として赴任し、壇上に教鞭を乗つて生徒指導の實際にあたり、同縣下教育界の生活を後にして實業界の人となつた。併し氏が本當の天分を發揮する天地は矢張り此の方面でなかつた。そして淺野物産の總務部長の椅子も易々と抛つて東京市の教育事業のために傾注し、爾來未だ日は淺いが其の抱負は可成りに實現されて居る。謙抑且端正な性格の持ち主で、斯界の師表たるにふさはしい人格者である。今後尙竭す所餘くはあらず。

宮本 秀政

明治五年六月十六日生
淺草區北清島町一二五

天下に聲名を馳せたる英主水戸光圀の城下たる水戸は氏が産土の土地である。氏の家は其地に於いて屈指の財産家として知られたもので、早く氏は水戸農學校を卒業して以來家業を扶けてゐたが、性來進取の氣豪に富むた氏は、二十七歳の時上京して、取手運送株式會社を創立して、取締役となり、先づ運送業界に乗り出した。そして又當時隅田川の運送業の不備にして且つ運賃の高價なるに鑑み、友人某と圖りて府下南千住に丸取運送店を設け、沿岸一帯の引船をも業とした。所が業務蹉跌し、いつか帳簿に四萬圓の決損を生じ、爲に家産傾きて借ては米鹽にも追はるゝやうな窮狀に陥つたので、氏は餘儀なく資本を郷里より仰ぎ靜かに英氣を養つて後精米商を營むこととした。併し頭腦明晰にして事業慾の旺盛な氏はかうした事業に親しむには餘りに血の氣が多つた。そこで出で、小石川ランギ商會の取締役にたり、東京建物會社の取締役を兼任して斯界に覇を唱ふるに至り、益々才識を發揮して行つた。氏は一方公共の事にも盡瘁し、大正四年青年團の創立するや、其の團長に推されて青年の指導に努め、又町會の新設さるや業に擁せられて町會長となつた。かくて氏の自治的手腕は大いに擧がり、遂に第三十六地區區劃整理委員に推され、東京市方面委員をも兼任し、町の重鎮として益その聲望を得るに至つたのである氏は温厚なる性格の持ち主で、趣味として謡曲を良くし、時に興懷を遺るといふ。夫人の間に五男二女があり、長男は、電氣局に勤務し、二男は法政、三男は早稻田に四男は東京中學に在り、何れも俊才を以て稱せられてゐる。